心の庭園から

最期の息

オスマン・ヌーリ・トプバシュ

エルカム出版社

主よ！現世にふけり、自らをいっぱいの水で
滅ぼしてしまった者たちの結末から私たちを
救ってください。慈悲深い中でも最も慈悲深
いお方、アッラーよ！私たちの生、私たちの死
を、あなたが誠実なしもべたちに与えられた
豊かさ、恵み、崇高な美しさ、そしてあなたと
の出会いによって飾り、
誉れあるものとしてください。
主よ、この世界を神の愛情という目で見つ
め、それを意識、感情、良心の恐れと共に眺
め、目から流れる悲しみの涙によって許しの
状態へと到達すること、輝く顔と心の安らぎと
共にあなたの御前に至ることを私たち皆にお
恵み下さい！

心の庭園から

最期の息

オスマン・ヌーリ・トプバシュ

オリジナルタイトル: Son Nefes
著者: オスマン・ヌーリ・トプバシュ
翻訳者: ヌールッラー・サット
チェッカー: サット・佐紀
グラフィックデザイン: ラーシム・シャーキルオール
ISBN: 978-605-302-458-3
住所: Ikitelli Organize Sanayi Bölgesi Mah.
Atatürk Bulvarı, Haseyad
1. Kısım No: 60/3-C
Başakşehir, Istanbul, Turkey
電話番号: (+90-212) 671-0700 pbx
ファックス: (+90-212) 671-0748
メール: info@islamicpublishing.org
ウェブサイト: www.islamicpublishing.org
印刷者: エルカム印刷所
Language: Japanese

エルカム出版社

心の庭園から

最期の息

オスマン・ヌーリ・トプバシュ

エルカム出版社

前書き

私たち無力なしもべを、信仰の魅惑する素晴らしさと安らぎによって幸福にしてくださるアッラーに感謝と称賛を。

人間が、抑圧された状態から光へと出ることのできた要因となられたこの世界の王に祝福と平安がありますように。

「アルトゥンオルック」誌に発表された文章を、アッラーの恵みにより、一冊の本として出版することとなりました。この本の内容を、簡潔に以下のように示しましょう。

人間は、試練の為にやってきたこの望郷の地から去った後は、永遠の世界の扉から、中に入っていきます。ただしその世界には二つの扉があります。一つは失望に、もう一つは喜びへと続いています。しもべがどちらの扉から入るのかということは、彼の全生涯を濃縮した最期の息で決まります。この観点から、生涯のあらゆる瞬間は、最期の息についての不安や興奮の中で成熟した善良さと共に過ごされるべきなのです。その瞬間に、幸福へと続く扉から、永遠の世界へと羽ばたくことができるように。だからこのはかない世界での暮らしにおいては覚醒し、最期の息について注意深く、繊細に、目覚めた状態であることが必要なのです。

実際、来世での状態がどのようなものになるかということについての最初の、そして明白なしるしは、最期の息の時の状態で示されます。良いしもべとしてこのはかない世界に別れを告げることができるように、限られた数である私たちの息を、最期の息の為に備えていくことが必要で

す。つまり、幸福な来世の為には、善行を伴い、素晴らしい、豊かな、安定した、そして正しい方向性における現世での生き方が必須となるのです。人生は、コップを満たすしずくのようなものです。コップの水の透明さは、しずくの透明さにかかっています。コップの水をあふれさせる最後のしずくは、ちょうど最期の息のようです。ハディースでは次のように語られています。

「人は生きてきたように死ぬ。そして死んだ状態に応じて復活する」(ムナーウィー、ファイズルカディール「シェルフルジャーミッサギール」V, 663)

最期の息、つまり人生という舞台の最期のカーテンは、皆のそれぞれの結末を映し出す、曇りのない透き通った鏡のようです。人間は自らを、最も正確な形で、最期の息において知るのです。ネジップ・ファーズィが語っているように。

「その瞬間、カーテンが上がり、カーテンが降りる。

アズラーイールにようこそと言えれば、それが成功」

その瞬間、生涯の会計表が心と目の前に示されます。だから人間にとって死の瞬間以上に教訓を含んだ光景はないのです。

現世での暮らしで私たちが実行する行為、振る舞い、道徳と、吸って吐く全ての息は、最期の息の為の一種のコンパスなのです。同時に来世での状態についての、この世界での通訳のようでもあります。

最期の審判の日まで続く墓場での状態は、現世でのあり方や行動によって形成されます。死を、失望であることから救い、一つの勝利と変えること、悲嘆ではなく宴の夜のような状態にすることは、死後に求める行き先の為に備えてから死ぬことのできた人の益なのです。

このようなしもべたちは、「世界全てがアッラーを唱えることと、暁」という点において、その生涯を最も恵み豊かな形で過ごします。つまり、万物がアッラーをズィクル（唱念）する中に自らも加わり、特にズィクルの為に最も豊かな時である、暁の時を有効に活用します。暁の時が昼間の時間の縮小モデルであること、そして暁の時を眠りのうちに過ごす者は、砂漠に、海に、そして険しい岩場に降る、4月の恵みの雨が無駄になってしまうように、この恵みを得ることができないことを彼らは知っています。この純粋なしもべたちは、こう言った不注意さに陥らないよう、クルアーンと熟考という場から遠ざかることはありません。その場から、彼らは次のことを学びます。アッラーの神の特性は、この世界で、完璧な意味での三つの権限の場を持っています。人間、クルアーン、そしてこの世界です。この三つの権限のうち、世界とは、魅力的な言葉で満たされた顕示と神秘の書物です。アッラーの美名の実際の顕現であり、あたかも静かなクルアーンのようです。クルアーンは、言葉に包まれた一つの世界です。人間は、この二つの交差点に存在する智の中心点であり、顕示の記念碑です。この意識を持って生きる知性ある人は、クルアーンと熟考の場において次のことを認識してきました。すなわち、クルアーンは常に前にあり、知識がその後を追っているということです。なぜならクルアーンは、無力な人間の知識ではなく、この世界でのあらゆる知識の条件を説かれ、人間に恵まれたアッラーの知識であるからです。同時に、知識の発見の要因となる認識を創造されるのもまた、アッラーです。この観点から、クルアーンと熟考について次のことが言えるでしょう。微粒子ほどの小さなプラタナスの種が肥沃な大地を要因として、巨大な木となり、獲得する大きな栄光のように、私たちにある熟考や感覚の力も、クルアーンによって養われ、力を与えられた結果とし

て到達することのできる真実は、いかに荘厳なものであることでしょうか。従ってクルアーンの、無尽蔵の恵みと崇高な導きがなければ、熟考や感覚といった能力は、肥沃な土壌を得られないまま乾いてしまった種のようになったでしょう。だから、私たちしもべにとって、クルアーンのおかげで実現した神の恵みの崇高さ、無限の偉大さを理解すること以上に、より大きな恵みはないのです。

このような崇高な真実を、熟考によって混練する人々は、試練の為にあたかも過ちの場のようであるこのはかない世界で、内面、外面と悔悟と涙で洗い流します。この純粋なしもべたちのことを、詩人はとても素晴らしく表現しています。

その優れた人々は、心の宇宙にいる

地面を転がりつつも

星を、タスビーフ（数珠）のように数えるが

礼拝では後ろの列にいる

あらゆる瞬間に日を満たし、あらゆる瞬間に始まる、

無限の契約にサインをしている

一瞬でも、その目が他のものにそれれば、

一生涯、涙の罰の中にいる

つまり、この真実に達した人々は常にドゥアーの状態にあります。つまり、アッラーの

قُلْ مَا يَعْبَأُ بِكُمْ رَبِّى لَوْ لاَ دُعَاؤُكُمْ

預言者ムハンマドは言われた。「あなたがたがわたしの主に祈らないなら、かれはあなたがたを、構って下さらな

いであろう」（識別章第77節）という宣告を理解しているのです。

そう、このような崇高な認識の結果として、最もよいウンマになるという熱意のうちに彼らは生きるのです。その為に、全ての良い状態、熱意を、真実や善へと導くという宝飾で飾ります。なぜなら、最もよいウンマとなる為の手段は、ここにあるからです。

クルアーンでは次のように語られています。

كُنْتُمْ خَيْرَ أُمَّةٍ أُخْرِجَتْ لِلنَّاسِ تَأْمُرُونَ بِالْمَعْرُوفِ وَتَنْهَوْنَ عَنِ الْمُنْكَرِ

「あなたがたは、人類に遣された最良の共同体である。あなたがたは正しいことを命じ、邪悪なことを禁じ」（イムラーン家章第110節）

この崇高な役割を、ふさわしい形で実行する為、誠実な努力を続ける人々は、心の世界をイスラームの気品、礼儀正しさ、そしてその素晴らしさで飾ります。そしてその状態、言葉、振る舞いによって、実際の模範として、真の布教や善への導きにおいて見本となります。彼らは真実と善への導きを、

اُدْعُ إِلِى سَبِيلِ رَبّكَ بِالْحِكْمَةِ وَالْمَوْعِظَةِ الْحَسَنَةِ وَجَادِلْهُمْ بِالَّتِى هِىَ أَحْسَنُ

(預言者ムハンマドよ)「英知と良い話し方で、（凡ての者を）あなたの主の道に招け。最善の態度でかれらと議論

しなさい」（蜜蜂章第125節）という言葉の神秘に従って実行します。

この素晴らしさが信者の心や生き方に反映された時には、その人の状態や行動は、ただただ素晴らしいものでのみ成り立つようになります。その信者は、もはや**献身**の人となります。つまり、物質的にも精神的にも、気前の良さの頂点に達するのです。崇高な、足るを知るその心によって、終わりのない豊かさの中にいるのです。その人が持つ、**取引上の道徳心**は、預言者ムハンマドが行った取引の恵みによって満たされます。利子といった悪性な疾患は、彼の合法な利益には紛れ込むことはありません。彼の財産は、アッラーへ差しだされた**良い貸し**です。この観点から、**社会的な関係における借金、お金を借りること**といった点においてもこの上なく注意深く、神の基準を尊重します。なぜならその人は、アッラーや預言者ムハンマドの**親友**となったからです。預言者たちと親友となったからです。この友情を、誠実さによって強固なものとしているのです。この崇高な親友たちは、決して「**ああ､誠実さは…**」と言わせるような、苦しめるようなことはありません。これにより、あらゆる状態、あり方においても、**模範的な信者である**という位階に達します。この位階では、**運命と神秘**が彼に生じ、神の定めの全ては、彼に喜びを与えます。

読者の皆さん

「**最期の息**」という題名で書いてきたこの作品で、皆さんに紹介しようとした項目は以上のようなものです。さらに、最期の息の為にまばゆいほどの崇高さで備えをし、アッラーの御前に輝く顔で向かわれた偉大なアッラーの友についても、私たちの模範になって下さったと言うことで、「信仰からイフサーンへムーサー師」というタイトルのも

と、語っています。また一方で、この偉大な人が歩いた、崇高なタサッヴフの道についても言及し、その素晴らしさ、完全さを示す為に書いた「信仰からイフサーンに神秘主義」という書物についてアルトゥンオルック誌が行ったルポタージュも、巻末に加えています。子これ触れたかったことは、真の神秘主義とは、啓典とスンナの感情の深みの中で、その神秘と叡智から何かを得て、それが実践されることです。啓典とスンナに含まれるもの以外のあらゆる言葉、状態、振る舞いは逸脱したものです。この真実を示す為に、「羅針盤の固定された足は、シャーリアである」と言われているのです。要約として語ったことは、神秘主義のないイスラームは存在し得るが、これはイフサーンという状態を獲得していないムスリムであるということです。つまり精神的な教育である神秘主義から切り離されたイスラームの生き方は、人を「アッラーを見ているかのようにしもべとして仕える」という状態には、人を導かないのです。

この状態に至ることができない人々は、最期の息で、苦痛や困難さを感じます。つまり、最期の息で幸福の扉から永遠の世界へと移ることができる為のしもべとしてのあり方とは、アッラーを見ているかのようにイバーダを行うことで可能となるものなのです。

忘れてはいけないことがあります。

人間はそもそも、毎晩、毎日、気が付いていようといまいと、無数の死の要因と直面しています。死は、人をあらゆる瞬間に待ち伏せしています。メヴラーナは次のように語っています。

「そもそもあらゆる瞬間が、生命の部分的な死という状態にある。あらゆる瞬間が、死の時であり、あらゆる瞬間にあなたの寿命が費やされる」

実際に、毎日このはかない生から少しずつ遠ざかり、墓へとまた一歩近づいているのではないでしょうか？毎日、死の日めくりを1ページ、破り取っているのではないでしょうか？

死の静寂に包まれた墓石は、その状態によって語る、熱い警告者です。後が町の中に、街道沿いに、モスクの中庭に造られるのは、一種の死の熟考、つまり死を思い、現世をそれによって改善する為です。死の恐ろしい重さを、言葉はその弱い肩に負うことはできないのです。死の前には全ての力が尽き、消え去ってしまいます。

死は、人にとってその人固有の「世界の終焉」です。世界の終焉の前に、目覚めておくべきです。悔しい思いをする人とならないように。なぜならはかないもの全てが、予想のできないある瞬間、そして場所で、アズラーイールと出会うと言うことは確実であるからです。死から逃れられる場所はどこにもありません。だから人は、時間を無駄にすることなく、«فَفِرُّوا إِلَى اللّٰهِ»

「それであなたがたは、アッラーの庇護の下に赴け」（撒き散らす者章第50節）という呼びかけから何かを得て、アッラーの慈悲を唯一の避難場所と認めるべきなのです。

預言者たち以外のどのしもべも、信仰という点において足を滑らせてしまう危険から絶対的に守られてはいません。だからどの信者も、自らに与えられた人生という恵みを、それにふさわしい形で活かすべく努力するべきです。死の冷たい恐怖から逃れる唯一の方法はただ、誠実な人生を過ごすべく努力することなのです。なぜなら死に備えて

いる人は、死に恐れを感じるのではなく、それを永遠の出会いの為の媒介と認識するからです。彼らは、「死を素晴らしいものとする」ことによる安らぎに達した、幸運なしもべたちです。しかし不注意な人生を送り、来世を台無しにする人々は、死の恐ろしい、闇の渦を前にして、冷たい恐怖を感じることから逃れることはできません。メヴラーナは非常に美しく表現しています。

「それぞれの死は、それぞれの色を持つ。人をアッラーに出会わせるのだと考えることなく、死を憎悪する者、死を敵視する者には、死は恐ろしい敵のように見える。死を親友と見なす者には、それは親友のように現れる」

実際、最期の息は、曇りもしみもない鏡のようです。どの人もこの鏡で、良いことも悪いことも含め、その生涯全てをはっきりとみるのです。その瞬間、目や耳にはどのような反論や不注意の覆いもおりてはきません。逆に全ての覆いがあげられ、あらゆる種類の告白が、理性と良心を後悔という場に引き入れます。従って、人生を後悔と共に流れる鏡が、最期の息となるべきではないのです。この鏡は、クルアーンとスンナという形で、また生きているうちに私たちの人生に取り入れられるべきなのです。なぜなら、真に幸福な人は、死と出会う前に自らを知ることのできる人であるからです。

この作品の出版に尽力してくださったM・アリ・エシュメリとM・アーキフ・ギュナイの両氏に感謝し、その奉仕が永遠に残るサダカとしてアッラーに認められることを願っております。

アッラーが私たちの最期の息を、永遠の世界での報償を眺めることのできる窓としてくださいますように。

アーミーン。

オスマン・ヌーリ・トプバシュ

ウシュクダル/**2003**

最期の息

-1-

人は生きている間じゅう、数えきれないくらい、死に直面します。病気にかかったり、予想外のことが起こったり、災害が起こったりといった、人生のあらゆる瞬間に存在し、しかし人間が不注意さと無力さの為に多くの場合、知らないままである多くの危険は、死と人間の間にいかに薄い覆いしかないか、ということを示しているでしょう。

最期の息－1－

アッラーは、不滅という特性を、この世界ではただご自身のみが持たれるものとされました。だから、アッラーの崇高な主性を除いた全ての存在は、はかないものです。クルアーンでは

كُلُّ مَنْ عَلَيْهَا فَانٍ

「地上にある万物は消滅する」（慈愛あまねくお方章第26節）と記されています。

その顕現は、

كُلُّ نَفْسٍ ذَائِقَةُ الْمَوْتِ

「人はすべて死を味わう」（預言者章第35節）と示されている通り、死によるものとなります。

従って、特に人間はこの真実を熟考していることが必要です。このことについて他の節では次のように述べられています。

وَجَاءَتْ سَكْرَةُ الْمَوْتِ بِالْحَقِّ ذَلِكَ مَا كُنْتَ مِنْهُ تَحِيدُ

「そして実際に死の昏睡が訪れる。これはあなたが避けてきたもの。」（カーフ章第19節）

人は、このはかない世界に試練の為に送られてきました。だから、人間の最大の目的は、アッラーのご満悦を得て、平安の場、つまり平安と幸福の家である天国にふさわしい人となるよう努力することであるべきです。その手段は、

يَوْمَ لاَ يَنْفَعُ مَالٌ وَلاَ بَنُونَ إِلاَّ مَنْ أَتَى اللهَ بِقَلْبٍ سَلِيمٍ

「その日には、財宝も息子たちも、役立ちません。ただ汚れのない心を、アッラーに捧げる者だけは別ですが」（詩人たち章第88－89節）という真実を把握することです。

これは、我欲の鍛錬によって可能となります。我欲の鍛錬の本質とは、預言者ムハンマド（彼の上に祝福と平安がありますように）への完全な服従、結びつき、従順さです。つまり、23年の預言者としての生涯、より正確に言うなら、預言者ムハンマドの心のあり方から何かを得ることです。アッラーはクルアーンを、ジブラーイールを通して預言者ムハンマドの心に下されたからです。従って預言者ムハンマドの全てのイバーダ、心、行動、振る舞いは、クルアーンの解釈という本質を持ちます。この真実から考えるなら、預言者ムハンマドの心の世界から、ふさわしい形で何かを得る為には、彼を命よりも生命よりも、家族よりも、要するにあらゆるものよりもなお、愛することが必須条件となります。この愛情に満ちたしもべは、アッラーの愛情によってさらに深められます。つまり、彼への愛情はアッラーへの愛情であり、アッラーへの愛情は、彼への愛情なのです。愛するお方のお目にかかる為には、心がこの状態に達することが不可欠なのです。

これらすべては、最期の息の為の備えのうち、最も素晴らしい一歩になります。コップに落ちた最後の一滴が、そ

れまでの他のしずくとは別の役割を持ち、コップの水があふれる要因となるように、私たちのそれまでの呼吸も同様です。つまり、私たちの最期の息は、それまでの呼吸の仕方によって、それにふさわしい結果として現れます。だから、最期の息の為の備えは、今私たちが吸っている息をどのように用いるかにかかっています。生涯をアッラーと預言者ムハンマドへの愛情のうちに過ごし、この方向性でよい行いをした純粋なしもべたちは、最期の瞬間にも信仰告白の言葉を唱え、安らかに死んでいきます。つまり、預言者ムハンマドの次の吉報の対象となるのです。

「誰であれ、最期の息で（純粋な心で）タウヒードの言葉を述べるなら、天国に行くだろう」（ハキーム、ムステドゥレク1.503）

つまり、生涯を通してタウヒードの言葉のもたらす空気の中で生きる者は、最期の瞬間にそれと共にアッラーへと旅立つのです。なぜなら彼らは、それにふさわしい時に、タウヒードの言葉の「ラー」によって全てのはかない、一過性の、我欲によるこだわりや偶像を心から消し去り、投げ捨て、「イッラー」という言葉で、心をただアッラーへの愛情で満たしてきたからです。

この世界は、力の手によって創造され、無数の刺繍で飾られた、はかない住処です。この世界では何も、目的もなく創造されてはいません。人間にとって現世での生の目的は、来世での幸福を手にすることです。だからアッラーは私たちしもべに、次のような警告をされています。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا اتَّقُوا اللّٰهَ حَقَّ تُقَاتِهِ وَلاَ تَمُوتُنَّ إِلاَّ وَأَنْتُمْ مُسْلِمُونَ

「あなたがた信仰する者よ、十分な畏敬の念でアッラーを畏れなさい。あなたがたはムスリムにならずに死んではならない。」（アリ・イムラーン家章第102節）

生命を持つ者全ての身に起こるであろう死は、はかない生への偉大なる別れの時であり、生命体それ自身が生きる、固有の「世界の終わり」です。

忘れてはいけないことは、人間はそもそも、毎晩、毎日、気づいているいないに関わらず、無数の死の要因に直面しています。死は、人をあらゆる瞬間に待ち伏せしています。メヴラーナは次のように語っています。

「そもそもあらゆる瞬間が、生命の部分的な死という状態にある。あらゆる瞬間が、死の時であり、あらゆる瞬間にあなたの寿命が費やされる」

実際に、毎日このはかない生から少しずつ遠ざかり、墓へとまた一歩近づいているのではないでしょうか？毎日、死の日めくりを1ページ、破り取っているのではないでしょうか？

人生の、川のような流れに対して、人が不注意とならない為に、メヴラーナは次のように警告しています。

「人間よ！鏡の中の、最後の刺繍を見なさい。美しい人の、年老いた状態を、そして建物がいつかは崩壊することを考えなさい。鏡の中の嘘にだまされてはいけない」

私たちの最期の息は、アッラーの無数の英知により、秘められています。つまり私たちが自分の将来について知っている中でも最も絶対的な真実である死が、いつ現実となるのかは、アッラーの定めによるものです。実際、人間は生きている間じゅう、数えきれないくらい、死に直面しています。かかる病気、予想外のサプライズ、災害、人生の

あらゆる瞬間に存在し、しかし人間が不注意さや無力さの為に多くの場合知らないでいる、無数の危険は、死と人間の間にいかに薄い覆いしかないのかを示してはいないでしょうか。

だから人間は、先述のクルアーンの言葉の示すものに毎日数えきれないほど遭遇し、ある意味で来世では与えられない猶予や機会を、この世界では何度も何度も得ているのです。それにもかかわらず人は、覚醒しているべきであるのに、残念ながら大きな不注意さの中で寿命という日めくりが1枚、2枚と落ちているのを、ほとんど何も感じないまま、眺めているのです。上を流れる雨のしずくから何も得ることのできない岩のように。

本来私たちは、生まれた日以来、毎日一部、死んでいるのです。気が付かないうちに、毎日死へと進んでいるのです。時の流れから落ちるあらゆる瞬間が、私たちを真の朝へと近づけている、ということを、クルアーンはとても素晴らしく表現しています。

وَمَنْ نُعَمِّرْهُ نُنَكِّسْهُ فِى الْخَلْقِ أَفَلاَ يَعْقِلُونَ

「誰でも長寿させるさいには、われは創造を逆に戻らせよう。かれらは、それでも悟らないのか。」（ヤー・スィーン章第68節）

預言者ムハンマド以前に生き、彼の登場を告げていたクス・ビン・サーイダという誠実なしもべは、この節を説き明かすかのように、ウカス市場で行ったある演説で、人の力の流れ、このはかない生命の冒険とその光景を素晴らしく示しています。

「人々よ。来てください、聞いてください、語ってください、そして教訓を得てください。生きている者は死を、

死者ははかなさを見出します。雨が降り、草が茂ります。子供たちが生まれ、両親と入れ替わります。そして皆、全て死に、去って行きます。このような出来事が終わらず、続いて行きます」

私たちも、アッラーが与えられた限られた数の呼吸を費やし、最期の息を吐く日に、この世界と、そこにある全ての関係のあるものに別れを告げ、あるいは別れを告げることもなく死と出会います。しかし、アッラーの誠実で愛に満ちたしもべにとって、この出会いはむしろ死ではなく、幸福な復活となります。婚礼の夜のようなものとなるのです。だから、

「死ぬ前に、死になさい」という言葉の神秘に到達することが必要なのです。

この神秘をメヴラーナは

「復活する為に、死になさい」という言葉で表現しています。

実際、アリーが語っているように、

「人々は眠っている。死によって、目覚める」のです。

だから、我欲からの感情、現世的な欲求に負けることなく、真の生き方とは動物的な魂によってではなく、アッラーが私たちに吹き込まれた神聖な魂と共にあるものである、ということを知るべきなのです。

従って、最も悲劇的な死とは、アッラーに対して関心を持たず、そのご満悦を失うことです。だから信者は、いかに生き、以下に死ぬべきかを認識し、信仰からイフサーンに至る為の鍛錬を行うべきです。なぜなら、預言者たちを除いて、どのような状態で死に、どのような形で復活する

のかという点で何らかの保証がある人は誰もいないからです。だから、聖ユースフがアッラーに、

تَوَفَّنِى مُسْلِمًا وَأَلْحِقْنِى بِالصَّالِحِينَ

「あなたは、わたしをムスリムとして死なせ、正義の徒の中に加えて下さい」（ユースフ章第101節）として庇護を求めたことは、私たちにとって非常に深い意味を持つのです。

この観点からすべてのしもべは、恐れと希望の間の、ある心の状態を手に入れるべきなのです。従って魂のこの状態をもたらす覚醒した状態と魂の繊細さにより、その生涯を常に、最期の息を信仰と共に吐くことができるだろうかという不安のうちに送ることが必要です。

来世での状態がどのようなものであるかという点での最初の、そして明確なしるしは、最期の息の際の状態で現われます。最期の息で、永遠の救いに至ろうと努力した信仰の勇者たちと、彼らが得る報償は、導きの為のガイドであるクルアーンで、それぞれが教訓を与える碑文として私たちに示されています。

実際、フィルアウンの魔術師たちは、ムーサーの明白な奇蹟を前に、

「諸世界の主を、ムーサーとハールーンの主を信仰します」といい、すぐにサジュダを行い、信仰という恵みによって誉れを得たのです。

しかし愚かなフィルアウンは怒り、彼が持っている権限と力で彼らの心までも支配できるかのように、彼らを威嚇しました。

「私があなた方に許可を与えていないのに、あなた方は彼を信仰した。わたしはあなたがたの手と足を、必ず互違いに切

断し、それから皆を十字架にかけるであろう」と言ったのでした。

魔術師たちは大きな信仰の喜びのうちに、

「あなたの迫害は我々に害を与えることはない。あなたの害は、この世界でのものだ。来世での幸福こそが永遠のものだ」と言い、信仰のもたらす勇敢さで反発を示しました。

激しい迫害を前にしてすら、彼らはその迫害から逃れようと必死になるのではなく、最期の息でも信仰の弱さを見せることなくムスリムとして死ねるかどうか、という点で不安を感じ、アッラーに庇護を求めています。

رَبَّنَا أَفْرِغْ عَلَيْنَا صَبْرًا وَتَوَفَّنَا مُسْلِمِينَ

「主よ、わたしたちに忍耐を与え、ムスリムとして死なせて下さい」（高壁章第126節）

結果として、彼らは導きを得たことの対価を、手足を互い違いに切断されると言う形で支払い、殉教者かつ聖人となるという誉れと共にアッラーのもとに至ったのでした。

迫害者たちは、「塹壕の友たち」を、彼らがアッラーを信仰していることを罪と見なし、火で満たされた塹壕に投げ入れました。この誠実な信者たちは、この迫害にもかかわらず、信仰を捨てることはありませんでした。そしてその教えの為に恐れることなく死に向かい、その信仰の対価をアッラーへの崇高な信仰の喜びの中で支払ったのです。なぜならアッラーを、ふさわしい形で恐れる者は、アッラー以外の何ものに対しても恐れを感じないからです。

「町の仲間」の物語に出てくるハビーブ・ナッジャールは信仰と、正しい道への導きの為に石を投げられ、殺されました。しかし、この世界のシャッターが下ろされる最

期の息の際には、これから行こうとしている世界の窓が開き、彼が受けることになるアッラーの恵みが示されました。彼はその民の不注意さを嘆き、

「わが主の御赦しが与えられ、栄誉ある者の中に、加えられたことを人びとに知ってもらえたら」（ヤー・スィーン章第36・26節）と言ったのでした。なぜなら彼には、このはかない世界で投石を受けることの対価として、永遠の幸福が与えられたからです。

キリスト教が広まり始めたばかりの頃、ローマ人たちはギリシア人や偶像崇拝者と一緒になり、当時の信仰者たちを競技場でライオンと戦わせ、バラバラにさせていました。その信者たちはライオンの歯を受けて、生き残る為ではなく、信仰を守る為の努力を示しました。なぜなら彼らは、この恐ろしい迫害に耐え、アッラーの位階において崇高な報償を得ることを選択したからです。

疑いの余地もなく、これらの素晴らしい状況は、生涯をアッラーと共にいるという意識で生きたことの、恵み深い結果なのです。この観点から、アッラーと共にいられることは、しもべであることの最も崇高な頂点であり、また不可欠なものなのです。

伝承によると、ある伝道師が、最後の審判の時の状態を説明していました。それを聞いていた人々の中に、シャイフ・シブリーもいました。伝道師は説話の最期の法で、アッラーが墓場で尋ねられるであろう質問について、

「知識をどこで使ったのかと尋ねられる。財産をどこで使ったのかと尋ねられる。イバーダはどのような状態であったかと尋ねられる。ハラームとハラールに注意を払ったのかと尋ねられる。これらが尋ねられる、これらも尋ねられる…」と、長々と多くの点を取り上げました。

これほど詳細に語っているのに、この問題の本質に注意がひかれていないことに対し、シブリ—師は次のように呼びかけました。

「伝道師よ、アッラーはそれほど多くの質問はされない。彼はこう問われる。しもべよ、私はあなたといた。あなたは誰といたのか」

だから、最も偉大な原則とは、アッラーと共にいられることであり、息を無駄にしないことなのです。次の言葉で、このことはすばらしい形で表現されています。

「損失となってしまったことがわかった
あなたなしで過ごした時間は」

この原則への招きと同様に、預言者ムハンマドは、イブニ・ウマルの両肩をつかみ、次のように言われました。

「この世界では、異端者もしくは旅人のようでありなさい」（ブハーリー・リカーク、3）

この感覚と共に、イブニ・ウマルもその説話の際には常に、次のような忠言を行いました。

「夜になった時には、朝を待つな。朝になった時には、夜を待つな。健康な時には病んだ時の為に、生涯を通して死の為に用心していなさい」（ブハーリー・リカーク、3）

人生が夏の雨のように流れることを表現するこの文章は、私たちを真の生へと方向づけるものです。実際、預言者ムハンマドはあるドゥアーで次のように示されています。

「アッラーよ、真の生とはただ、来世での生です」（ブハーリー・リカーク、1）

この神秘を最も素晴らしい形で認識していたサハーバたちの生涯は、無数の徳、英知、そして教訓で満たされています。

　多神教徒の捕虜となり、殺されることとなったフバイブには、殉死する前に唯一の願いがありました。預言者ムハンマド（彼の上に祝福と平安あれ）に、愛情を込めた挨拶を送ることでした。悲しげに目を天に向け、

　「アッラーよ、ここには私の挨拶を預言者ムハンマドに伝える人が誰もいません。あなたが、あのお方に伝えてください！」と庇護を求めました。

　その時、サハーバたちとマディーナにいた預言者ムハンマドは、

　「彼の上にも平安がありますように」という意味になる、「ワアライヒッサラーム」という言葉を発したのでした。それを聞いたサハーバたちは驚いて、

　「アッラーの使徒よ、誰の挨拶に応えておられるのですか」と尋ねました。預言者ムハンマドは、

　「あなた方の兄弟である、フバイブの挨拶に」と答えました。[1]

　さらに預言者ムハンマドは、聖フバイブを「殉教者の中でも尊い者」と表現され、「彼は天国で私の隣人となる」と言われたのでした。

　この愛情、熱意についてもう一つ例をあげましょう。

1.　参照：ブハーリー、メガーズィー、10、ワークディ・マガーズィー p 280 – 281.

ウフドの戦いの終りに、預言者ムハンマドは殉死者とけが人を確認するよう命じられました。特に、気にかけておられるサハーバがいました。サアド・ビン・ラビでした。

預言者ムハンマドは、彼を見つけ、どういう状態かを調べる為に、サハーバの一人を戦いの中心であった場所に送りました。サハーバは、サアドをどれほど探しても、見つけることができませんでした。どれほど呼びかけても、返事もありませんでした。ついに、最後の希望として、

「サアドよ、アッラーの使徒が私を遣わされた。あなたが生きているのか、殉死したのかを、彼に教えるよう命じられたのだ」と、けが人や殉死者たちがいる方向に向かって呼びかけました。

その時、まさに最期の瞬間を生きており、返事をする力もなかったサアドは、自分のことを預言者ムハンマドが心配していると聞き、全力を振り絞り、それでもようやく出すことのできたかすかな声で、

「私はもはや、死者の方に含まれる」と言いました。もはや彼方を見ていることは明らかでした。

サハーバはサアドのもとに走りました。彼の体が剣による攻撃で穴だらけになっているのを見ました。そしてかすかなささやき声で、次の荘厳な言葉を語るのを聞きました。

「誓って言うが、あなた方の目が動いている限り、アッラーの使徒を敵から守らず、彼に災いが降るかかるのを許すのであれば、あなたがたにとってアッラーの御前で主張できる弁解などはない」[2]

---

2. 参照：イブニ・アブディベル、イスティアーフ11, p. 590.

サアド・ビン・ラビの、ウンマへの遺言のようなこの言葉は同時に、彼のはかない生との別れの言葉となったのでした。

聖フザイファが語っている次のハディースも、サハーバが最期の息の際にすら示した崇高な徳が反映されていると言う点で、非常に注意をひくものです。

－私たちはヤルムークの戦いにいました。衝突は激しいものとなりました。矢や槍の攻撃で傷ついたムスリムたちは、倒れ込んだ熱い砂の上で息絶え始めていました。その時私も、何とか力を振り絞り、伯父の息子を探し始めました。最期の瞬間を過ごしているけが人たちの間を探し回った後、やっと、探していた人を見つけることができました。しかし、血の海の中に倒れていた伯父の息子は、目の動きですらほとんど話ができないほどでした。前もって用意していた水の器を見せて、

「水を飲むか」と言いました。彼が水を求めていることは明らかでした。唇は熱の為にあたかも焼かれているようでした。しかし返事をする力もありませんでした。目の動きで、その苦しみを訴えているかのようでした。私は器のふたをあけ、水を彼に飲ませようとしている時、少し向こうで、負傷者の中からイクリマの声がしました。

「水を、水を…どうか、一滴でもいいから、水を」

叔父の息子のハーリスは、このうめき声を聞くや否や、自分のことはあきらめ、眉と目の動きで、水をすぐにイクリマに持って行くよう求めました。

焼けた砂の上に横たわる殉教者たちの間を走り、イクリマのもとに行き、すぐに水の器を彼に差し出しました。彼がちょうど器に手を伸ばした時、イヤシュのうめき声が聞こえました。

「どうか、一滴の水を。アッラーの御喜びの為に、一滴の水を」

この声を聴いたイクリマはすぐに手をひっこめ、水をイヤシュに持って行くように求めました。ハーリスと同様、彼も水を飲みませんでした。

私は器を持って、殉教者の間を通り抜け、イヤシュのもとに駆け寄った時、彼の最期の言葉を聞きました。彼は、

「神よ！信仰の為に命をささげることを決して躊躇しませんでした。私たちを殉教者としてください。私たちの過ちをお許しください」

イヤシュがもはや、殉教という甘露を飲んでいることは明らかでした。彼は私が持ってきた水を見ました。しかしもう、時間がありませんでした。何とか、シャハーダの言葉を言い終わらせることができたという状態でした。

私はすぐに戻り、イクリマのそばに来ました。器を彼に差し出そうとして、彼も殉教者となっているのを見ました。私はせめて、伯父の息子ハーリスには間に合いたいと思いました。走って彼のもとに戻りました。しかし彼も、火のような砂の上で焼かれながら、息絶えていたのでした。残念なことにこの器は、いっぱいに満たされたまま、3人の殉教者の間に残されたのでした。[3]

フザイファは、その瞬間の魂の状態を、次のように語っています。

「私の人生では多くの出来事があったが、どれもこれほどに私を感動させ、興奮させるものはなかった。間に親戚関係といった結びつきもないのに、彼らが互いをこれほどに優先させ、自らを犠牲にし、慈悲深く振る舞ったこと（

3. .ハーキム、ムスタドルレク3,p270

つまり、最期の息をも、その人生と同じく美徳のうちに行ったこと、『ただムスリムとして死になさい』というクルアーンの言葉の意識を持ち、その生に別れを告げたこと）を、羨望のまなざしで見つめ、驚嘆した偉大な信仰の勇敢さとして私の記憶に深い痕跡を残しました。」

アッラーが、私たち皆の最期の息を、良い終焉という形で終わらせてくださいますように。このはかない世界での最期の息を、永遠の出会いにおける最初の息としてくださいますように。

アーミーン。

最期の息

-2-

人生の目的は、良いしもべとなって生きること、そして良いしもべとして死ぬことです。なぜなら目標は、アッラーが人間に贈り物とされた、預言者ムハンマド（彼の上に祝福と平安あれ）の繊細で感性豊かな生き方から何かを得て、深く、細やかで立派なしもべとなることであるからです。

最期の息－2－

よいしもべとしてこのはかない世界に別れを告げることができるよう、限られた呼吸を最期の息の為に備えることが不可欠です。幸福な来世の為には、善行を伴い、、素晴らしい、豊かな、安定した、そして正しい方向性における現世での生き方が必須となるのです。ハディースでは次のように語られています。

「人は生きてきたように死ぬ。そして死んだ状態に応じて復活する」（ムナーウィー，フェユズル・カディル・シャルフル・ジャーミー・サギル5、663）

このことには無数の例があります。教訓と叡智にとんだこれらの例のうち、一つを紹介しましょう。

アダパザルのあるムアッズィンが、親愛なる父ムーサー師の訪問による説話の為、昼の礼拝での義務を果たした後でやってこようとしていた時のことでした。自転車に乗り、信号が青になったので、道の反対側に向かっていました。その時、高速で接近し、赤信号にも止まらなかった別の車が、スピードを出したままでムアッズィンにぶつかってしまいました。衝突の勢いの為ムアッズィンは空中に投げ出され、地面に落ちる際に最期の息で、この世界での最後の言葉として、ぶつかった運転手にも、道の周囲にいた人たちにも聞こえた次の言葉を、大声で、熱意のこもった様子で叫んだのでした。

「アッラーよ､あなたのもとに参ります!」

そう、大事なことは、人生を、最期の瞬間に喜びと平安のうちにアッラーへと至らせることができること、つまり皆にとっての悪夢であるその瞬間に、喜びを感じつつ「アッラーよ、あなたのもとに参ります」と言えることなのです。アッラーが私たち皆にこの幸運を与えてくださいますように。アーミーン。

先人たちの言葉を借りるなら、この状態は

「**水を入れるつぼは、水の為に割れる**」ということわざの、非常に意味深い顕現です。つまり心は、生きている間に最も関わっていたものが何であれ、死の際にもそれに関わっているのです。

もちろん、それには例外もあります。つまりしもべは、最期の息を信仰のうちにはくことができるようにと、いかに誠実な行いで満たされた人生を送っていようと、それを過信してアッラーの慈悲を受けることが確定だと見なしてはいけないのです。その逆もしかりで、しもべは自分が堕ちた罪や低俗な生涯を見て、アッラーの慈悲に絶望してもいけないのです。なぜなら、最期の息がどのようなものとなるかは、神によって秘められたものであるからです。

崇高なる書物クルアーンでは、最期の息でその信仰を守ろうと努力した誠実なしもべたちが、それぞれ模範的な人物として取り上げられていると同様に、その反対で、誠実な生涯を送っていたのに、我欲に負けてしまい、後から教えへの憎悪に堕ちてしまった者として死んだ人々の悲しい結末も、それぞれが教訓を与える銘板として示されています。

実際、自らが手にしている知識や英知で自らをただすことができず、我欲を清めることができなかったイブリース、カールン、ベラム・ビン・バウラ、そしてサハーバで

あったのにも関わらず、世俗的な欲求にだ混ざれてしまったサーラバなどが、その最も明白な例です。

ご存じの通りイブリースは、もともとはアッラーの位階において崇高な地位を持っていました。しかし、うぬぼれの結果としてアッラーのご命令の強さ、偉大さ、荘厳さを見ることができず、自分が預言者アーダムよりも優れているという主張をしたのでした。自らを特別に誉れのある存在だと彼が錯覚したことは、彼を、アッラーの命令に逆らうというところまで引きずって行きました。結果として、うぬぼれと頑迷さに負けたものとして、永遠に迷うこととなったのです。

カールンも、もともとは貧しく誠実な人物でした。タウラートを、ムーサーに次いで最もよく解釈しました。ムーサーのドゥアーの恵みにより、彼には錬金術の知識が与えられていました。しかし後に、我欲とシャイターンの欲望に負け、心を現世へと傾けました。その宝庫の数多い鍵を、力の強い集団が何とか運べるほどでした。彼はこれに欺かれ、思い上がった豊かさの渦に溺れてしまったのでした。ムーサーが彼にザカートを支払うように命じると、彼は

「私の財産に目を付けたのか？これらは私自身が稼いだものだ」というほどの傲慢さ、尊大さに陥ってしまったのでした。彼の財産は彼をつけあがらせ、滅亡の要因となりました。

そのうちにカールンは、ムーサーやハールーンの精神的な位階に嫉妬するようになりました。嫉妬のあまりムーサーの高潔さについて中傷を行うまでになり、その結果として、誇っていた財宝と共に地の底に沈み、滅亡しました。

財産の所有者であるアッラーのことを忘れ、財産や富、地位といった罠のあるこの現世に固執することは、不注意さの中でも最も痛ましいものです。

ベラム・ビン・バウラは、アッラーが崇高な美名を教えられた、奇蹟の持ち主である誠実なしもべでした。この人物は、ユダヤ人の中で学者かつ聖人として知られていました。しかし後に、欲望や我欲からの欲求に傾き、その結果としてこの精神状態を失い、さらには信仰のない者として死んだのでした。この出来事はクルアーンで次のように示されています。

「（ムハンマドよ）われが下した印を授かりながら、それを脱ぎ捨て、それで悪魔が憑いて、邪道に導く者の仲間となった者の話をかれらに告げなさい。もしそれがわが意志であったならば、われはそれ（印）によってかれを引きたてたであろう。だがかれは地上の事に執着して、自分の虚しい私欲に従った。それでかれを譬えてみれば犬のようなもので、もしあなたがそれを叱り付けても、舌を垂れている。また放って置いても、舌を垂れている。」（高壁章第175節—176節）

立派なしもべとしての生き方をしてきたにもかかわらず、現世に欺かれて永遠の幸福を永遠の惨めさに変えてしまうという不運に陥ってしまった人についての、幸福な時代におけるもう一つの例は、サーラバの状態です。サーラバはもともと、モスクや預言者ムハンマドの説話から離れることのない人でした。しかし、財産を手にし、世界への愛情が心に芽生えると共に、次第に信者集団から離れ、義務であるザカートすら支払わず、悲惨な結末へと至ったのでした。後に預言者ムハンマドの言葉に従わなかったことに後悔をしたものの、効果のないもがきの中で死んでいく時に、その耳には預言者ムハンマドの、

「サーラバよ、あなたが感謝を示したわずかな財産は、感謝を示さない豊かな財産よりも尊いのだ」という言葉が響いていました。[4]

イスラーム神秘主義の歴史の中の偉大な人物であるスフヤーニ・サウリ師の次の状態も、教訓を含むものです。

スフヤーニ・サウリ師は、若いころから腰が曲がっていました。その理由を訊ねた人に、彼はこう答えました。

「私が知識を得た、ある師がいた。彼の死の際に、私の勧めにも関わらず、彼は信仰告白の言葉を唱えることができなかった。この有様を見ることは、私の腰を曲げてしまった」

❁

このように、結末は誰にもわかりません。フィルアウンの魔術師たちのように、逸脱の中を生きていても、生涯の最後に導きを得る者たちがいるように、カールンやベラム・ビン・バウラのように、導きをうけ歩んでいても、最後にそのノートを不遇のうちに閉じることになった者もいます。従ってしもべがどのような精神的な立場、位階、優秀さを得ていたとしても、我欲とシャイターンは常に待ち伏せをしているのです。そして機会を得るや否や、その足を正しい道から滑らそうとしているのです。なぜならシャイターンは、クルアーンで示されているように、アッラーに

「わたしはあなたの正しい道の上で、人々を待ち伏せるであろう」（高壁章第16節）

と言い、復活の日までの猶予を求めたのです。そして試練の為、この猶予は彼に与えられました。

4.　参照: タベリー・解釈 XIV, 370 – 372; イブニ・カシール・解釈 II. 388.

この害から、イフラースを備えたしもべのみが例外とされることも、シャイターンは次のように語っています。

「かれらの中の、あなたの謙虚なしもべを除いては」（サード章第79－83節）

預言者たちを除きどのしもべも、信仰という点で足を滑らせると言う危険から完全に守られてはいません。だから信者はそれぞれ、自分に与えられた寿命という恵みを、それにふさわしい形で活かすべく努力すべきなのです。死の冷たい恐怖から救われる為の唯一の手段はただ、誠実な生涯を送るべく努力することです。なぜなら死への備えができている人は、死を恐れる代わりに、それを永遠の出会いの為の要因と見なすからです。彼らは、「死を素晴らしいものとする」ことによる安らぎに達した、幸運なしもべたちです。しかし不注意な人生を送り、来世を台無しにする人々は、死の恐ろしい、闇の渦を前にして、冷たい恐怖を感じることから逃れることはできません。メヴラーナは非常に美しく表現しています。

「それぞれの死は、それぞれの色を持つ。人をアッラーに出会わせるのだと考えることなく、死を憎悪する者、死を敵視する者には、死は恐ろしい敵のように見える。死を親友と見なす者には、それは親友のように現れる」

「死を恐れて逃げる者よ！物事の本髄、言葉の正確なところを求めるなら、あなたはそもそも、死を恐れてはいない。あなたはあなた自身を恐れているのだ」

「なぜなら、死の鏡にあなたが見出し、あなたが恐れおののいているのは、死の顔ではなく、あなた自身の醜い顔である。あなたの魂は木に似ている。死は、その木の葉である。葉は全て、その木の種類によったものになる」

そう、しもべは、この世界での生で自らを乗り越え、その魂に秘められていた天使のような特性という方向性のもとで多くの位階を超えれば、つまり「死ぬ前に、死ぬこと」という神秘に至ることができれば、死は生命を超越した、崇高で気高いアッラーへの出会いの為の必要不可欠な最初の一歩として見なします。これにより、大多数の人々にとって激しい恐怖の原因となる死は、彼らの心では最も崇高な友との出会いの喜びに変わるのです。

アッラーの使徒（彼の上に祝福と平安あれ）の最期の瞬間は、この喜びの頂点において実現した、出会いの瞬間となりました。彼は生涯を通し、あらゆる場合においてアッラーの命令に従い、アッラーを愛していた為、死の前に死に、その死を宴の夜としたのです。実際、聖アーイシャと聖アリーから伝承されているところによるなら、預言者ムハンマドの死の三日前、アッラーは毎日ジブラーイールを遣わされ、預言者ムハンマドの様子を訊ねていました。最期の日にはジブラーイールは死の天使アズラーイールと共に訪れました。ジブラーイールは、

「アッラーの使徒よ。死の天使があなたのそばに寄る為に許しを求めています。しかし彼は、あなた以前には、どの人間のそばに行く時でも許可を求めたことはありませんでした。あなた以降にも、誰かのそばに行く為に許可を求めることはないでしょう。彼に許可を与えてください」と言いました。

死の天使は中に入り、預言者ムハンマドの前に来て、

「アッラーの使徒よ。崇高なるアッラーが私をあなたに遣わされました。そしてあなたの全ての命令に従うよう、私に命じられました。あなたが求めれば、私はあなたの魂を取ります。あなたがそう求めれば、あなたに魂を残したままにします」と言いました。

預言者ムハンマドは、

「死の天使よ。あなたは本当にそのようにするのか」と言われました。

アズラーイールは

「私はあなたが命じたことに従うよう、命じられました」と答えました。

ジブラーイールは、

「アフメドよ、崇高なるアッラーがあなたに慕情を抱いておられる」と言いました。

預言者ムハンマドは、

「アッラーの位階にあるものは、より尊く、より永続的である。死の天使よ、さあ、命じられたことを実行しなさい。私の魂を、命を取りなさい」と言われたのでした。

預言者ムハンマドは、そばにあった水の容器に両手を入れられ、濡れた手で顔をこすられ、

「ラーイラーハイッラッラー。死には、知性を頭から取り除くほどの苦しみと激しさがある」と言われた後、両手をかかげられ、目を天井に向けられ、

「アッラーよ。崇高な友よ、崇高な友よ」

と言われながら、アッラーへの愛情と熱情の現われであった多くの尊い思い出で満たされた生涯を後に遺し、このはかない世界から真の世界へと移られたのでした。[5]

豊かなしもべとしての生涯を送り、最期の息でアッラーとの出会いの喜びを味わった偉大な神秘主義者メヴラーナ

5. 参照：イブニ・サアド:タバーカートゥII. 229, 259; ベラーズーリー・アンサーブル・アシュラフ I, 565; アフマド・ビン・ハンバルVI, 89.

の、この世界との別れの瞬間を、その弟子のフサマッディン・チェレビが次のように伝えています。

-ある時、シャイフ・サドレッディンは修道僧のうちの有力者たちと共に、メヴラーナの病床を訪問してきました。メヴラーナの状態を見て、彼らは悲しみました。シャイフ・サドレッディンは、

「アッラーがすぐに治癒を与えられますように。完全な健康を取り戻されることを願います」と言いました。

それに対しメヴラーナは、

「もはや治癒はあなた方の為の祝福となりますように。愛する者と愛される者との間に、毛ほどの距離が残っています。それも取り除かれ、光が光に重なることをあなたは望まないのですか」と言いました。[6]

メヴラーナは、人間にとって大きな恐れと不安の原因である死を、苦しみとは見ていませんでした。逆に、死を異邦にあることからの救い、永遠の美の持ち主であられるアッラーとの出会いであると見なしていました。彼自身はその死で、死への思いを次のように表現しています。

「私が死んだ時、私のことを死んだとは言わないでほしい。私は死んでいた、死によってよみがえったのだ。私の親友が、私を連れて行ったのだ」

この為にメヴラーナは、この世界に別れを告げる時のことを「宴の夜」と呼んだのでした。

❀

6. 参照: Eアブール・ハサン・アンーナダウィー「イスラームの先達の歴史」1,p449,

疑いの余地もなく、メヴラーナ、ユヌス・エムレ、アジズ・マフムード・フダインのような多くのアッラーの親友たちのこの世界での安らぎに満ちた生涯は墓の世界でも続くものです。下の詩は、まさにこのような安らぎを表現しています。

死は、静かな春の国である
心はあらゆる場所で香炉のように何年も香る
ひんやりとしたヒノキの下で眠る墓場で
毎朝、バラが咲く、バラが咲く、毎晩、ナイチンゲールがさえずる

ヤフヤ・ケマル

死を、この素晴らしい形で迎えることができるよう、我執や野心から逃れ、神の命令に従った一生を過ごすこと、そして最期の息に備えることが必要です。アッラーはクルアーンで次のように語られています。

وَاعْبُدْ رَبَّكَ حَتَّى يَأْتِيَكَ الْيَقِينُ

「定めの時が訪れるまで、あなたの主に仕えなさい」（アル・ヒジュル章第99節）

そう、全てのアッラーの友の生涯から抽出された原則なのです。

知性を備え、愛に満ちた心は、アッラーが彼自身に託された人生を、常に正しい道で、しもべとしての行動やイバーダで飾りつつ、アッラーのしもべとなることの対価である「穏やかな心」で過ごす為に努力しました。つまり預言者ムハンマドが最期の息で「崇高なる友へ、崇高なる友へ」という形で示されたしもべであることの顕現を、彼の後に続く学者たちも顕示し続けたのでした。

実際、このアッラーの友たちのうち、生涯の全てを預言者ムハンマドのスンナに従って生きようと努力したサーミ師の、最期の息の際の状況も、私たちにとって素晴らしい例です。サーミ師は、心が預言者ムハンマドへの愛情で満たされた、アッラーの友でした。雪の中を歩いた人が足音を残し、その後から来た人がそこに道を見出すように、サーミ師もまた、預言者ムハンマドの後をそのように辿って生きていました。その顕現として、最期の息を、生涯を通してその後を辿る喜びを感じ続けた預言者ムハンマドが付近で、タハッジュドの礼拝のアザーンを読み上げている瞬間に行うことがかなったのでした。最期の瞬間にそばにいた人は、彼の口から出る言葉がただ、

「アッラー、アッラー、アッラー」

であることを聞いていました。

そもそも、ただ舌だけではなく、全ての細胞と共にその体も魂も、常に「アッラー」と言っていたのでした。

つまり、肝心なことは、良いしもべとして生きること、そして良いしもべとして死ねることです。アッラーが望まれたことは、預言者ムハンマドの生涯から何かを得た、細やかで深く、繊細なしもべとなることだからです。アッラーの「なんとすばらしいしもべであることか」という賛辞をいただくことはただ、アッラーに心から結びつくという愛情に没頭することの結果なのです。この神への愛情により、精神世界が勝る状態となること、心がその汚れから清められることで可能となるのです。その心で、アッラーという太陽の光が輝くのです。この状態の結果として、-インシャッラー-私たちの全ての息が、最期の息の為の備えとなるのです。

また一方で、あらゆる精神的な損失や害は、アッラーを忘れることの結果です。クルアーンでは次のように語られています。

وَلاَ تَكُونُوا كَالَّذِينَ نَسُوا اللهَ فَأَنْسَاهُمْ أَنْفُسَهُمْ أُوْلَئِكَ هُمُ الْفَاسِقُونَ

「あなたがたは、アッラーを忘れた者のようであってはならない。かれは、かれら自身の魂を忘れさせたのである。これらの者はアッラーの掟に背く者たちである。」（集合章第19節）

実際、全ての罪は、アッラーを忘れた時に起こり始めます。なぜならしもべが「アッラー」と言い、死の真実を認識している時には、イバーダや行為に注意を払い、人を傷つけない細やかさの中で生きるからです。つまり、決して誰にも、言葉や行動でとげを刺すことはないのです。この細やかさをユヌス・エムレはとても素晴らしく表現しています。

心は神の玉座
神は心をご覧になった
二つの世界は悲嘆にくれる
その心を壊したのであれば

アッラーは、私たちの生涯が悲惨な結末を迎えることのないよう、私たちの呼吸や鼓動がどのようであるべきかを、クルアーンで何度も警告されています。この観点から、肝心なのは、

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا اتَّقُوا اللهَ حَقَّ تُقَاتِهِ
وَلاَ تَمُوتُنَّ إِلاَّ وَأَنْتُمْ مُسْلِمُونَ

「あなたがた信仰する者よ、十分な畏敬の念でアッラーを畏れなさい。あなたがたはムスリムにならずに死んではならない」（イムラーン家章第１０２節）

という言葉に従って生きることです。そうでなければ、このはかない世界での寿命が長かろうと短かろうと、何も示すことはないのです。結果として、全ての生涯は、

كَأَنَّهُمْ يَوْمَ يَرَوْنَهَا لَمْ يَلْبَثُوا إِلاَّ عَشِيَّةً أَوْ ضُحَاهَا

「かれらがそれを見る日、（墓の中に）滞留していたのは、一夕か一朝に過ぎなかったように思うであろう。」（引き離す者章第４６節）

という神の宣言の顕現の適用を受けるからです。

従って、私たちがやるべきことは、マグレブの礼拝、もしくは午前の礼拝まで、しもべとして振る舞うこと、イバーダを行うこと、従うこと…この点についてジュナイド・バグダーディのこの忠言は、大きな警告となっています。

「この世界での１時間は、最期の審判での千年よりもなお尊い。なぜならそこでは、救いを得る為の善行をおこなうことはできないからである」

そう、今目の前にあるそれぞれの季節、日々、時間は、しもべとして振る舞い、イバーダを行い、従う為の大きなチャンスなのです。特にこの時期に行われる巡礼[7]は、それ自体が最期の息の為の鍛錬です。巡礼の光景は、マフシャル（死後の集合の場）のシーンのようです。そこで身に着けるイフラームは、墓場での布のようです。アラファトは

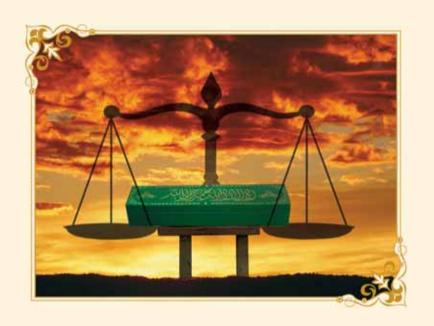
7. この文章は巡礼の行われる月に発表された為、この表現が用いられている。

悔悟と秘儀を求める為の場所です。シャイターンへの投石は、世俗的、我欲的な固執を離れ、私たちの内面にある我欲に、いかに石を投げる必要があるのかという意識に到達させるものです。そして生まれたばかりの赤ん坊のように罪のない状態となり、アッラーと出会うということを思い起こすこと。要するに、最期の息の為にどのように歩むべきかを知る為の小さなリハーサルです。アッラーがこのような巡礼を皆に与えられますように。

アッラーよ、最期の息を、アッラーの美しさを目にするという愛情、喜びと共に行うことができるよう、豊かな生涯を送ることを、皆にお恵み下さい。

アーミーン。

最期の息

-3-

最期の息は、曇りもしみもない鏡のようです。どの人もこの鏡で、良いことも悪いことも含め、その生涯全てをはっきりとみるのです。その瞬間、目や耳にはどのような反論や不注意の覆いもおりてはきません。逆に全ての覆いがあげられ、あらゆる種類の告白が、理性と良心を後悔という場に引き入れます。従って、人生を後悔と共に流れる鏡が、最期の息となるべきではないのです。

最期の息ー3ー

最期の息は、曇りのない透き通った鏡のようです。人間は自らを、最も正確な形で、最期の息において知るのです。生涯の会計表が心と目の前に示されます。だから人間にとって死の瞬間以上に教訓を含んだ光景はないのです。

クルアーンで示されているように、その生涯がアッラーへの反発の中で過ぎたフィルアウンは、紅海でアッラーからの罰を受けた時にようやく、自分自身と無駄にしてしまった生涯を、真の意味で知ったのです。この世界での我執に満ちた支配の内面が、実際にはいかに大きな悲惨さと不満で形成されているのかを最期の息で認識し、大きな後悔を感じました。クルアーンではこのことが次のように語られています。

「溺れ死にそうになった時、かれ（フィルアウン）は言った。「わたしは信仰いたします。イスラエルの子孫が信仰するかれの外に、神はありません。わたしは服従、帰依する者です。」（ユーヌス章第９０節）

しかし既に、それは手遅れだったのです。紅海の渦に溺れそうになり、自らも信仰者の輪に加わる必要性を感じたフィルアウンに、アッラーはこう仰せられました。

「何と、今（信仰するのか）。ちょっと前まであなたは反抗していた。結局あなたは犯罪者の仲間であった。」

災いが身に降りかかると悪事をやめ、それが落ち着いた状態になるとまた以前のような態度に戻る人たちの、最期の息における覚醒、後悔、信仰への傾きは、この悲惨さで

成り立つものとなります。この観点から、悔悟や後悔を最期の息に残すことは、大きな欺瞞の要因です。従って、人生での予想外の出来事、上昇や下降にゆすぶられながら、死の深く静かな叫びに耳を傾けないこと、いつか自分もその扉を通過することを考えずに生きることは、実に悲惨な不注意さとなるのです。

アッラーは多くの章で、現世での生を試練という目的で創造されたことを告げられています。不注意さのあまり、本来の目的を忘れると言う可能性に対し、それぞれが神による教訓であるこれらのクルアーンの言葉で、次のように語られています。

「人はすべて死を味わう。われは試練のために、凶事と吉事であなたがたを試みる。そして（最後は）われに帰されるのである。」（預言者章第３５節）

「（かれは）死と生を創られた方である。それは、あなたがたの中誰の行いが優れているのかを試みられるためで」（大権章第２節）

だから、この世界での生において行なったイバーダ、振る舞い、道徳と、私たちのすべえての息は、最期の息の為の一種のコンパスなのです。同時に、来世での状態の、現世における通訳のようです。

イマーム・ガッザーリは言われました。

「この世界で、アッラーを知るという喜びに到達できなかった人は、来世での出会いの喜びを味わうことができない。人は現世で獲得し、もしくは対価を払ってはいないものを、来世で得ることはできない。ここで何を植えたにしろ、来世でそれを刈り取るのである。皆、生きてきたとおりに死に、死んだとおりに蘇る。この世界でアッラーを知り、善行を

行うという喜びをいかに得ることができたのであれ、来世ではその恵みをそれに応じて得るのだ。」

従って皆、全ての息で、自分をアッラーの懲罰もしくは報償の為に用意しているのです。アッラーはクルアーンで、この点について次のように警告されています。

「あなたがた信仰する者よ、人間と石を燃料とする火獄からあなたがた自身とあなたがたの家族を守れ。」（禁止章第６節）

「獄火が炎を上げさせられる時、楽園が近付く時、（その時）凡ての魂は、先に行った（善悪）の所業を知るであろう。」（包み隠す章第１２－１４節）

「それなのにあなたがたは（それらのことを信用せず）何処へ行くのか。」（包み隠す章第２６節）

この観点から、人がそれぞれの進み方と、どこに行くべく備えているのかを注意する必要があります。これも、最期の息まで待つのではなく、生涯を通してその注意深さで生きるべきなのです。なぜなら、利益と損失、得るものと失うものの恣意性はこの世界だけのものだからです。墓場では、得るものも失うものもはやないのです。

土の上のはかなく外見だけの、我執による支配や魅惑の欺瞞にひっかかり、それによって魂を弱いものとする人が、土の下では悲しみと恐怖に陥ることは確実です。さらに、土の下、すなわち墓での生が現世での生の何倍の長さのものになるかもわからないのです。この観点から、冷静な知性を持つ人が果たすべき本来のつとめは、長い墓場での生と、その後の終わりのない世界の為に、準備をすることです。

また一方で、信者の心において信仰の光で明るく照らされる死の闇が、恐ろしい恐怖であることから脱し、永遠の

復活の吉報となるのです。配偶者や友の住所で満たされた墓地は、信仰を持つ人にとって闇の世界ではなく、静かな警告と導きの場です。意識を持った信者にとって人生は、死と入れ子状にある自然の真実なのです。この観点から真の信者とは、死となじんでいる人です。なぜならその為に備えをして生きている為、心が安らいでいるからです。要するに、最期の息が最良の瞬間となることは、アッラーへの愛情で満たされた心を持っているかどうかにかかっています。逆に「現世への愛と死への憎悪」で終わる人生は、悲しい結末を迎えるのです。

完全な来世への備えは、アッラーがクルアーンで示されている「愛される特性」を持つこと、すなわち、篤信、禁欲主義、イフサーンの結果、慈悲、いたわり、奉仕、許すこと、自己犠牲、忍耐といった素晴らしい特性で飾られ、アッラーが愛されるしもべになると言う形でまとめることができるでしょう。その為、信者は、アッラーの気前の良さから何かを得て、気前の良い、イフサーンの持ち主となるべきです。篤信と誠実さを自分の特性とすべきです。また一方で、アッラーが愛されないもの、うぬぼれ、自尊心、浪費、迫害、扇動、陰口、悪口、中傷、嘘と言った地獄をもたらす特性からは遠ざかることも、最期の息の為の備えにおいて重要な位置を占めます。

しもべは、最期の息を良い結末、つまり信仰と共に行うことができるよう、特に心を覚醒させること、つまり醜い執着から清められ、崇高な慕情によって改良させることが必要です。なぜならこの形で心が篤信に至ることは、人生という旅路の最も重要な導きであるからです。メヴラーナ師の次の表現も、この状態を描いたものです。

「墓を作るとは、石や岩、布で行うものではない。けがれのない心で、自らの清められた内面で、自分の為に墓を

掘らなければならない。その為に、アッラーの崇高な存在の前で、自分の主張や自我を消し去らなければならないのだ」

覚醒が完全な意味で実現し、心が一定の状態に達する為には、アッラーへの愛情の念で満たされることが必要です。アッラーへの愛情の最大のしるしはアッラーへの服従です。アッラーに逆らっているのに、アッラーを愛していると主張することは、自らをあざむくことです。

クルアーンでは次のように語られています。

「預言者ムハンマドよ！言ってやるがいい。「あなたがたの父、子、兄弟、あなたがたの妻、近親、あなたがたの手に入れた財産、あなたがたが不景気になることを恐れる商売、意にかなった住まいが、アッラーと使徒とかれの道のために奮闘努力するよりもあなたがたにとり好ましいならば、アッラーが命令を下されるまで待て。アッラーは掟に背いた民を導かれない。」（悔悟章第２４節）

だから、アッラーとアッラーの使徒への神聖な愛情は全てのものよりも優先させるべきであり、最期の息までそれを続けると言う望みの中にいるべきです。心が、アッラーと預言者ムハンマドへの愛情において一定の状態に達していることは、イバーダや善行の実行という形で現われます。世俗的な愛着に固執し、神への愛から遠ざかっているしもべが示す、しもべとしての振る舞いと、神への愛に満ちた人が示す振る舞いとの間には、大きなレベルの違いがあります。

なぜなら、アッラーとアッラーの使徒に真の愛情で結びついている信者の状態、行為は、人間的な愛情、イバーダ、そしてしもべとしての態度を獲得させるからです。信者が、最期の息の為に備える際に最も気を付けるべき点

は、イバーダを熱意を持って実行するということです。クルアーンでアッラーは、救われることになる信者たちの特性を挙げられ、

قَدْ أَفْلَحَ الْمُؤْمِنُونَ الَّذِينَ هُمْ فِى صَلاَتِهِمْ خَاشِعُونَ

「信者たちは、確かに勝利を勝ちとる。かれらは、礼拝に敬虔であり」（信者たち章第１－２節）と仰せられているのです。

この逆で、礼拝を不注意に行う人については、

فَوَيْلٌ لِلْمُصَلِّينَ الَّذِينَ هُمْ عَنْ صَلاَتِهِمْ سَاهُونَ

「災いなるかな、礼拝する者でありながら、自分の礼拝を忽せにする者。」（慈善章第４－５節）と仰せられています。

このようにアッラーはしもべたちが、心と肉体の均衡の中で、出会いの段階に達することのできるイバーダ生活を送ることを求めておられます。アッラーのこの求めは、疑いもなく、単に礼拝に特定されず、断食、巡礼、施しのようなすべてのイバーダの基盤を形成するものです。

ある意味で断食というイバーダは、恵みの真の尺度を知ること、私たちの心を悲しんでいる人のそばに近づけること、困窮の中で苦しむ人の前で、感情の深みを身に着けることを可能とします。同時に断食は、私たちを一定の時間に、ハラールであるものすら遠ざけさせるものである為に、疑わしいもの、ハラームであるものからどれほど遠ざかっているべきかをまた別の形で示唆するものです。巡礼においては、アッラーの偉大さの前でしもべガムであることを思い出させる、まさに死者にまかれる布をまとっているという熟考と意識の中で、しもべとして過ごすべきです。施しを行う信者は、その財産が実際にはアッラーのも

のであるという思い、自分は預かっているという地位にあるのだという意識を持ているべきです。さらに、施しを行うという意識の中にある信者が、他人の財産を悪い目で見ることがあり得るでしょうか？ただ、イバーダの根底にあるしもべとしての意識は、心にある愛情の深さに応じたものとなります。心がその汚れや曇りから清められるに従い、イバーダがあるべき状態に達し、そこでアッラーという太陽の光が輝きます。

イバーダを敬虔さのうちにどのように行うことができるのかを、最も素晴らしい形で預言者ムハンマドとサハーバの模範的な生き方から知ることができます。人生のどのシーンも、来世の真実と異なるものとはされなかった預言者ムハンマドは、イバーダにおいても、最期の息の際の精神状態に包まれていることが必要であると指摘されました。

実際あるサハーバが預言者ムハンマドのもとを訪れ、

「アッラーの使徒よ、私に訓戒を与えてください。短く、本質的なものにしてください」と言いました。そこで預言者ムハンマドは

「礼拝を、（人生に）別れを告げる者の礼拝のように行いなさい。許しを請わなければいけなくなるようなことを口にするのはやめなさい。人が手にしているものに対しては希望を捨てなさい」と言われました。

この観点から、死への備えの努力をしている信者として、イバーダ生活と同様に、私たちの振る舞い、人間的な態度も、預言者ムハンマドの人生から恵みを得て、改善していくことが必要なのです。その手や言葉から、ウンマが益を得ているようなしもべであるべきであり、自分たちの為に求めたものを信者の兄弟たちのためにも求める、利他主義に到達するべきです。結果として、アッラーと預言者

ムハンマドに対し感じた愛情は、私たちの心から、あらゆる被造物を包括する形であふれ、それらをアッラーのまなざしで見ることを可能とすべきなのです。

最期の息への備えにおいて重要なもう一つの点は、イフサーンの感情を心に定着させることです。つまり、アッラーと常に心が共にあることを可能とすること、自らを常にそのまなざしのもとにあると感じることです。しもべの最大の幸福は、アッラーと共にいられることです。しかし我欲に負け、心に従わない理性は、このことを認識する力がありません。つまり、最大の幸福について不注意でいるのです。

また信者は、アッラーを信頼し、忍耐深くあるべきです。人生の嵐の前でも、その冷静さと節度を失ってはいけません。預言者ムハンマドが直面した重い試練について考え、6人の子供のうち5人を、自分が生きているうちになくしたにも関わらず、その精神状態にわずかな揺らぎすら無く示していたその素晴らしい「甘受」の状態を思い出すべきです。叔父のハムザと、とても愛していたムスアブが殉教した際の忍耐と冷静さを忘れてはいけないのです。

真実の道を行く旅人は、このはかない世界での試練や災いを忍耐で、忘れっぽさをズィクルで、恩知らずであることを感謝で、反発を服従で、けちであることを気前の良さで、利己主義を利他主義で、疑いを熟知することで、偽善をイフラースと謙虚さで、反抗を悔悟で、不注意さをズィクルと熟考で乗り越え、あるべき状態に達することが必要なのです。

さらに、神聖な日、夜、特にアッラーをズィクルすることで活かすことのできる暁の時間は、アッラーに近づく為のこの世界における輝かしい瞬間なのです。来世の幸福の太陽は、暁の時間の暁光に秘められているのです。人生と

死をあたかも一体として生きた全てのアッラーの友は、アッラーへの愛情と畏怖の念の中で、夜明け前の闇の中でズィクルと熟考を行い、アッラーのご満悦を求めたのです。なぜならアッラーを愛する者にとって、ズィクルと熟考から遠ざかっている暁は、悲しみの時間となったからです。

もう一つの重要な点は、アッラーの道における施しです。クルアーンでは

وَأَنْفِقُوا فِى سَبِيلِ اللّٰهِ وَلاَ تُلْقُوا بِأَيْدِيكُمْ إِلَى التَّهْلُكَةِ

「またアッラーの道のために（あなたがたの授けられたものを）施しなさい。だが、自分の手で自らを破滅に陥れてはならない」（雌牛章第195節）と命じられています。

解釈者は、この節で語られている危険が、「貧困への恐れもしくは世界への愛情の為に、教えの為の奉仕すること、もしくはアッラーの声を高める為の道における努力や献身、施しから遠ざかること」であると説いています。それによるなら、信者はいかなる場合でも、アッラーの道において財産や声明で施しをする努力をしているべきです。なぜならこの生命と同様、私たちが所有する現世的なものも、それぞれが預かりものです。この信託を正しい場所で用いることは永遠の利益となる一方、けちであること、自分の快楽に固執することといった理由の為にこれらを集め、我欲にため込むことは、来世での悲しみの要因となるのです。

信者は、施しについて次の教訓を、常に頭にとどめておくべきです。

死体が、葬儀の後、墓に入れられた後、蛆虫がその体にたかるまでに、親戚一同もその悔みの言葉を言い終えているでしょう。その後、遺産相続者たちが財産の分配の為

に話し合いを始めるころには、土は肉体をバラバラにし、無にし始めるのです。この二つの動きは、ある意味で同時に行われ、終わります。一方で肉体が消えていく時、一方では財産が分配されます。この状況を驚いて眺める魂は、その多くの行いを悔やみ、手で膝を打ちたいと思うでしょう。しかしその時には手も、ひざもないのです。ただ、行為の身が例外です。この世界で得ていた篤信とよい行為は、来世の生の為の最も尊い資本となります。

預言者ムハンマドは次のように言われました。

「墓は、（その行為により）天国の庭園の中の一つ、もしくは地獄の穴の一つトナル」（ティルミズィー、クヤーマ26）

つまり、最期の審判の日まで続く墓場での生は、この世界でのあり方、行為によって形作られるのです。

そう、死が悲しいものであることから救われ、一つの勝利と変えられること、それを喪失ではなく、宴の夜とすることは死の備えをしてから死ぬことのできた人の利益です。この方向性を持って生きた豊かな生の後で、アッラーと出会うことのできた幸福な人々は私たちの誉れある歴史に、比類のない思い出を贈り物として与えた模範的な人物の一人が、**ザービト・ムザッフェル**という名の兵士です。

チャナッカレでの戦いで示された特別な努力によって大きな効果をもたらし、その顔が信仰で満たされていたこの若者は、チャナッカレの戦いの後もとどまることなく、祖国の防衛の為に今度は東部戦線へと向かいました。多くの血が流された衝突の際、深い傷を負いました。彼に続く世代に、第二の、そして尊い思い出を残し、殉死しました。それはこのようなものでした。

火器の中で戦い、その任務の最中に殉死したザービト・ムザッフェル氏は、最期の息で、もはや声が出ず、目でも

何も訴えることのできないその時に、ポケットから封筒を出しました。そして地面からごみのかけらを拾い、傷から流れる血に浸して文字を書き始めました。

「兵士よ､キブラはどちらだ?」

周囲の人々は、アッラーの家の方角に向かい、アッラーに魂を委ねたいと望んでいるムザッフェル氏をキブラの方に向け、彼のこの願いに応えました。顔が出会いの喜びに満たされていたザービトは、その崇高な魂を殉教者としてアッラーに委ねたのでした。

そう、しもべは、生涯をとしてどのような仕事につき、いかに忙しかったとしても、キブラの方角から離れずにいたのであれば、最後の瞬間にアッラーも何らかの媒介を通し、彼がキブラを見出すことができるようにされるのです。仕事の中でも、家庭でも、人間関係の中でも、しもべとして生きる中でタウヒードの言葉に従ってキブラを見出している人は、多くの場合、最後の息においてもキブラの安らいだ空気の中にいるのです。ここでキブラによって意図されるものとは、クルアーンとスンナの方向性に従い、タウヒードの言葉に従って生きられた人生のことです。重要なのは、私たちの生涯、このはかない呼吸を、“اِهْدِنَا الصِّرَاطَ الْمُسْتَقِيمَ” 正しい道において実行することです。そうでなければ、どの岩で粉砕されたのかも定かではない、航路を見失った船のように悲しみに満ちた結末を迎える可能性が非常に高いのです。アッラーが私たち皆を守られますように。

生涯をあたかも死の胸の中で生きるかのように過ごし、「死ぬ前に､死になさい」という神秘に到達したものは、アッラーの友である、理性のあるしもべです。このようなしもべたちが最後の審判で恐れや悲しみから救われることは、アッラーの約束です。その背後に永遠の世界を隠す神

秘の多いである死は、人間の尊厳を守って生き、アッラーの恵みによって最期の息の為の備えのできたこのようなしもべたちの為の、大きな幸福です。真の智とは、アッラーが恵まれたこの命という信託を、最期の息において同じ純粋さ、完全さの特性のままで返すことです。詩人が語っているように。

その瞬間、覆いが上がり、覆いが降ろされる
アズラーイールに「ようこそ！」ということも、一つの智である

（N・ファーズィル・クサキュレック）

実際、最期の息は、曇りもしみもない鏡のようです。どの人もこの鏡で、良いことも悪いことも含め、その生涯全てをはっきりとみるのです。その瞬間、目や耳にはどのような反論や不注意の覆いもおりてはきません。逆に全ての覆いがあげられ、あらゆる種類の告白が、理性と良心を後悔という場に引き入れます。従って、人生を後悔と共に流れる鏡が、最期の息となるべきではないのです。この鏡は、クルアーンとスンナという形で、また生きているうちに私たちの人生に取り入れられるべきなのです。なぜなら、真に幸福な人は、死と出会う前に自らを知ることのできる人であるからです。

アッラーが最期の息を、永遠の世界での報償を眺めることのできる窓としてくださいますように。

アーミーン。

万物において

アッラーをズィクルすること、そして暁の時

　ズィクルの為の最も恵み豊かな時間は、暁の時です。アッラーは夜のこの時刻に行われるズィクルに、他の時間で行われるものよりもなお、価値をおかれています。暁の時間帯を生かすことは、しもべのアッラーに対する純粋な愛情と敬意の現れです。夜の礼拝とタスビーフは、あたかも崇高な友に出会い、語り合うような本質を持っています。暁の時間帯は、豊かさと精神性をその日一日中もたらす心の高まりの中で生かすべきです。

万物において
アッラーをズィクルすること、そして暁の時

アッラーは、「アル・ハーイ」（生命を与えるお方）という崇高な美名の顕示として、創造されたあらゆる存在に生命を与えられました。この世界には本来、「生命を持たないもの」といえるものは何もありません。植物や動物、人間のような生命体に注目し、生命を持つということはただそれらに特有のものであるかのように見えたとしても原子の中の物質の力強いアッラーへの愛情を視野に入れるなら、生命を持たないと考えられる物質が実際には持っているその力強さに驚き、恐れを感じるでしょう。この恐れとは、ミクロの被造物からマクロの被造物へと次第に強く生じてきます。

アッラーは、創造された生命体、非生命体全ての被造物にご自身を知らしめられ、それらに常にズィクルをするよう、任命されました。その為に全ての被造物は、そのあり方に応じた特有の形式でアッラーを知り、アッラーをズィクルするのです。

非生命体、植物、動物たちは同時に、預言者ムハンマドやその他の預言者の子とも知っています。この状態は、預言者の奇蹟において常に見られます。彼らは必要となれば、石、つえ、その他同様の非生命体に、アッラーの恵みにより、あたかも魂を与えるかのようです。この為に、アブー・ジャフルが手にしていた石が、預言者ムハンマ

ドの奇蹟として語り、その正しさを評価し、アッラーをズィクルしたのです。ムーサーの手にしていたつえは、アッラーの恵みにより、ドラゴンに変わり、フィルアウンを恐れさせせました。またある時には紅海が、アッラーの命令に従い、ムーサーとその仲間の為の道となりました。それに対し、フィルアウンやその仲間がそこを通ろうとした時には、彼らのことを認識し、滅亡させたのでした。預言者モスクのナツメヤシの切り株は、預言者ムハンマドへの別離と慕情の為に呻き、泣きました。さらに多くの動物も、彼らを迫害した持ち主たちを、被造物の光りであるお方（彼の上に祝福と平安あれ）に訴えたのでした。

メヴラーナは次の短く意味深い言葉で、非生命体がアッラーの命令に従っていることを素晴らしく表現しています。

「あなた方は見ないのか。雲、太陽、月、星は皆、ある秩序に基づいて動いている。この無数の星のそれぞれが、定められた時刻に生まれる。生まれる時間は遅れることも、早まることもない。

こう言った素晴らしいことを、なぜ我々は預言者たちの奇蹟だと知り、理解できなかったのか。彼らは石やつえに理性を持たせた。それらを見て、他の非生命体をつえや石と比べてみなさい。

石のかけらが崇高な預言者ムハンマドに、つえがムーサーに従ったことは、その他の非生命体と思っているあらゆる被造物も、アッラーの命令にいかに従うかということを教えるものである。

それらはこう言う。『私たちはアッラーを知っているし、アッラーに従っている。私たちは適当に創造された、無意味なものではない。私たちは皆、紅海に似ている。そ

れは海であるのに、鎮めることになるフィルアウンとイスラエルの民を認識し、区別した』

どこに木や石があろうと、ムーサーを見るとはっきりと挨拶を送っていた。あなたが非生命体と思い込んでいる全てのものにも命があることを、ここから理解しなさい」

つまり、ただ人間やジンたちだけではなく、動物たち、そして非生命体に至るまで全ての被造物は、自分たちの創造の要因であるお方（彼の上に祝福と平安がありますように）を、秘められた形で認識しています。彼への無限の愛情により、無条件で彼に従うのです。しかし現世の生での試練という神秘の為、人間の目に降ろされている目に見えない世界という覆いは、このことへの気付きを多くの場合、妨げます。預言者ムハンマドの、私たちを不注意さから目覚めさせる次のハディースは、非常に深い教訓を含むものです。

「ジンたち、人間たちのうちの反抗をするものを除いて、天と地に存在する全ての被造物は、私がアッラーの使徒であることをしている」（アフマド・ビン・ハンベル, Müsned, III, 310）

このことは、次のことを示します。アッラーと預言者ムハンマドを知り従うという特性は、人間に特有のものでないと言うことです。逆にこの点において他の被造物は、無意識のうちにより進んだ状態にあると言うことすらできるでしょう。

クルアーンでアッラーはこの真実が他の被造物にも現われることを次のように示されています。

「またわれはダーウードに山々や鳥たちを従わせて（主を）共に讃えさせた。それは（皆）われの仕業であった。」（預言者章第79節）

アッラーはこの言葉で、不注意な人々を目覚めさせています。創造された全てのものがアッラーを知り、私たちの認識していない、その態度による言葉で創造主アッラーをズィクルしていると知らされています。被造物のズィクルを聞くことは、イバーダやズィクル、タスビーフ、そして誠実なしもべとしての生き方の結果として、心が純粋な状態になり、不注意さという覆いが取り除かれ、真実の世界に開かれることによって可能となります。ユヌス・エムレ師の黄色い花との会話も、この力によるものです。偉大なアッラーの友である**アジーズ・マフムード・フダイ**師の次の物語は、植物の世界もアッラーのズィクルを行っていることを示すものです。

ある時、ウフターデ師は、その弟子たちと共に田舎での説話に出かけました。その命令に従い、修行僧たちはその田舎の素晴らしい場所を歩き、彼らの師に花束を一つずつ持ってきました。ただ、カドゥ・マフムード師の手には、茎が乾き、色あせた花がありました。他の人々がその手にした花を元気よく師に紹介した後、カドゥ・マフムード師は頭を垂れ、乾き、色あせた花をウフターデ師に紹介しました。ウフターデ師は、他の修行僧が興味深く見守る中で、こう尋ねました。

「マフムードよ、皆、束にした花を持ってきたのに、あなたはなぜ、茎が折れ、色あせた花を持ってきたのだ？」

カドゥ・マフムード師はその徳から、頭を深く垂れて答えました。

「師よ、あなたをいかに評価しても、十分ではありません。ただ、どの花を折ろうとして手を伸ばしても、その花がアッラー、アッラーと言いつつ、アッラーをズィクルしているのが見えました。私の心は、彼らのズィクルの妨げとなることをよしとしませんでした。仕方なく、この手に

しているズィクルを続けることのできないこの花を持って来ることになったのです。」

メヴラーナは次のように語っています。

「鳥たちの王はコウノトリである。その鳥がレク、レクと鳴くのはどういう意味か、しっているか。それは、

賞賛はあなたへ（レク）、感謝はあなたへ、富はあなたのものです、ムステアン（ご自身から救いが求められるお方）という意味なのだ」

ムヒイッディン・アラビーは、このことについて次のように語っています。

「全ての被造物は、彼ら自身の特有の形でアッラーをズィクルしている。しかしこの点において被造物はそれぞれ異なる段階にある」

被造物の中で、不注意さから最も遠いのは、非生命体です。なぜならそれらは、食べたり飲んだり空気を吸ったりと言ったニーズを持たないからです。

非生命体に次いで、植物が挙げられます。しかしそれらにはニーズがあります。なぜなら、土、水、太陽から得ている糧を、アッラーの割り当てによって合成し、色とりどりの花々、葉、そして果実を生じさせるからです。

それについで、動物が挙げられます。これらの生命機能は動物よりも発達しています。その為、ニーズも多いのです。我欲が増しているのです。

人のニーズは、尽きることもないものです。エゴ、空想、現世への強い愛着が、彼を常に不注意さへと追いやるのです。

クルアーンでは次のように語られています。

يَا أَيُّهَا الْإِنْسَانُ مَا غَرَّكَ بِرَبِّكَ الْكَرِيمِ الَّذِى خَلَقَكَ فَسَوَّاكَ فَعَدَلَكَ
فِى أَيِّ صُورَةٍ مَا شَاءَ رَكَّبَكَ

「人間よ、何があなたを恵み深い主から惑わせ（背かせ）たのか。かれはあなたを創造し、形を与え、（均整のとれた体に）整え、かれの御心の儘に、形態をあなたに与えられた御方である。」（裂ける章第82章第6－8節）

この世界というページの神秘と英知を真の意味で理解することは、ただ心の世界で深みを増すことに結びついているものです。心の目で地上や天を見る信者は、心が全く異なる感情で満たされるのを感じます。クルアーンは、天と地の、微粒子から天球に至る全てのものが創造主アッラーをズィクルし、賛美していることを告げています。天、地、山々、木々、草、太陽、月、星たち、動物たち、転がる石、さらには地面に落ちる影までもが、朝晩サジュダを行っていることを次のように示しています。

「天と地上で凡てのものは、好むと好まないとに拘らず、またかれらの影も、朝夕、アッラーにサジダする」（雷電章、第13章、第15節）

「あなたがたは、アッラーの創造なされる凡てのものにおいて、その影が、右から左に回って、アッラーに敬虔にサジダするのを見る」（蜜蜂章、第16章、第48節）

クルアーンの言葉は、私たちの前にこの上なく雄大な景色を広げます。この光景においてサジュダは、陰もそこに加わった二重の状態となります。つまり一つは存在、もう一つはその存在の陰という形で、同時に二重のサジュダです。万物の全ての細胞は、信じつつ、あるいは信じないままに同時にアッラーにイバーダの為にサジュダを行い、自らを創造主アッラーの御前における務めの為に捧げたので

す。万物がサジュダを行っている時、さらに無神論者や不注意な人々の存在ですら、無意識にアッラーの意志に従っているのに、その不注意な者たちの心は、否定と反抗という不注意さや混迷の中にあると言うことは非常に残念なことなのです。

アッラー以外の神を持つ不注意な者たちは、彼らが偶像化させた物の陰に至るまで、全ての被造物が本当は、彼らが否定しているアッラーに向かっており、アッラーが万物に与えられた秩序に従っているのだということを知りません。これは実に大きな欺瞞であり、損失です。

またこれらの章句で、陰、部室、生命体、そして天使で構成される一つのシーンが描かれています。全てがイバーダの喜び、敬虔さの中でその務めを果たしています。アッラーにイバーダを行うことを避け、その命令に従わない不幸は、ただ人間の混迷した不注意さ特有の状態となっているのです。クルアーンは、全ての被造物、さらにはその陰すらもアッラーに頭を垂れているということを、この不注意な者たちにあたかも嘲笑するかのようにその顔にぶつけています。

実際に、私たちの周囲を教訓を含んだまなざしで見渡すならば、地平線の深みにまで伸びる天が地の上に伏せられていること、山並みが続いていることは非常に特別なサジュダの形です。木々、花、草、動物、そして人間、左右から地面に伸びる影は、その興奮に満ちたサジュダの状態を実にすばらしく示しています。あたかも土は、全ての存在の陰の礼拝用絨毯のようです。雨という事象も、あたかも天が泣いているかのようであり、稲光とその後に続く雷鳴は、天の顔から出る隠しようもない叫び声のようです。

地と天における被造物の状態は、感受性を備えた心によって非常に素晴らしい導きです。最も小さい虫の、針の先

ほどの心における願いから、大きく威厳のある動物の方向に至るまで、全てがアッラーの力への流れの、それぞれに異なる顕現なのです。

ナイチンゲールのごく小さな心からこぼれ出た嘆きの言葉、鳩たちから広がる「フ・フ」、コウノトリの「レク、レク」は、それを受け取ることのできる心にとってはどれほど心のこもった賛美であることでしょう。

クルアーンでは次のように語られています。

「あなたは見ないのか、天にある凡てのものが、アッラーに、サジダするのを。また地にある凡てのものも、太陽も月も、群星も山々も、木々も獣類も、また人間の多くの者がサジダするのを見ないのか。だが多くは懲罰を受けるのが当然な者たちである。」（巡礼章、第22章、第18節）

このように被造物、さらに非生命体は、常に賛美を行っています。残念なことに、人間の一部がアッラーをズィクルすることに不注意であるという理由で、罰を受けることになるのです。実際、この世界の微粒子から天球まで全てのものは、創造主アッラーを知っており、鳥たちですらイバーダと懇願を知っており、山々や渓谷はズィクルとタスビーフを続けているのです。従って世界のこの雄大なズィクル、タスビーフ、そしてイバーダのプログラムを前にしてすら、人間が覚醒しようとしないこと、この教訓に満ちた光景から何かを得ることもできず、散漫で無愛想な態度で、アッラーへのズィクルから遠ざかっていることは、人間の尊厳にふさわしくない、非常に痛ましい損失です。

疑いの余地もなく、アッラーと近くなるための方法は、しもべがアッラーを忘れないことです。洞察力を備えた信者は、どの方角を見ても、アッラーのズィクルの光を見、何に耳を傾けても、アッラーの賛美の言葉を聞きます。私

たちもこの世界の生において、アッラーをどれほど念じたのであれ、それに応じた来世での出会いがかなうのです。

清らかな良心を持って生きること、信仰を持って死に、永遠のやすらぎや安泰を得ることの為の道は、アッラーを忘れないことです。なぜならアッラーを忘れた者の生涯は、不注意さの渦の中で損なわれ、失われるからです。その不注意さからは、ただ死によって目覚めます。しかしその時には全てが終わっており、大きな悲しみの中に落されるのです。

クルアーンでは次のように仰せられています。

「あなたがたは、アッラーを忘れた者のようであってはならない。かれは、かれら自身の魂を忘れさせたのである。これらの者はアッラーの掟に背く者たちである。」（集合章、第59章、第19節）

サハーバの一人が、

「アッラーの使徒よ！イスラームの法が増えてきました。私に、アッラーのご満悦と来世での幸福を簡単に手に入れられるものを教えてください、私はそれを実行しましょう」と言った時、預言者ムハンマドは彼に、

「あなたの舌をアッラーのズィクルと賛美で常に忙しくしておきなさい」（ティルミズィー, ダーワートゥ4; イブニ・マジェ・アダブ,53）と言われたのでした。

アッラーをズィクルすることは、アッラーという言葉を、ただ単語として繰り返すことで成り立つものではありません。ズィクルはただ感覚、感情という力の中心である心に至った時に、意志と実行が一定の段階に達することの要因となります。そう、この特性でのズィクルは、アッラーが魂を創造された時にしもべが「そうです、あなたは私たちのアッラーです」という形でアッラーと行った誓いに

忠実さを示すことであり、その誠実さでアッラーを決して忘れないことです。

アッラーのズィクルにおいて不注意であることの大きな危険の為に、アッラーは私たちしもべに、この点で多くの警告を与えられました。さらには預言者ムーサーとハールーンはそれぞれが預言者であるにもかかわらず、アッラーは彼らをフィルアウンのもとに遣わされる際に、

「あなたと兄弟は、われの印を携えて行け。そしてわれを念ずることを怠ってはならない」（ター・ハー章、第20章、第42節）と命じられ、彼らですら、警告の対象外とはされなかったのです。この形で、おそらくは私たちの為の模範と教訓となることを望まれたのです。

信者の心が不注意さからのかたくなさから救われ、アッラーのご満悦を得ることのできる細やかさへと至る為の道は、継続的なズィクルです。これも、一時的もしくはある季節だけではなく、生涯を通して全ての呼吸の際にズィクルの意識を持っていることで可能となります。ただこれによって、精神的な覚醒が実現するのです。

アッラーはクルアーンで、

أَلَمْ يَأْنِ لِلَّذِينَ آمَنُوا أَن تَخْشَعَ قُلُوبُهُمْ لِذِكْرِ اللّٰهِ
وَمَا نَزَلَ مِنَ الْحَقِّ

「（本当に）信仰するならば、アッラーの教訓に、また、啓示された真理に、心を虚しくして順奉する時がまだやって来ないのか」（鉄章、第57章、第16節）と言われました。この節は、マッカで苦しみや困難さの中で生きていたのにもかかわらず、ヒジュラの後で豊かな糧や恵みを得たことで気が緩んだ一部のサハーバへの警告として下されました。従って、

私たちもアッラーへの無限の愛情という環境の中に蛾入り、世俗的な野心やはかない利益が揺さぶりをかけることのないような精神的な強さを得る為の努力をしていなければいけないのです。

なぜなら、愛する者は、愛しているその相手を常に心に抱いており、決して忘れることはありません。愛情のない心は、ただの土のようです。アッラーを知ることは、愛することにあります。なぜなら存在の理由は愛情であるからです。アッラーはご自身への愛情によって知られることを求められ、この世界を創造されたのです。愛情の大きさは、愛される対象の為に行われる献身が基準となります。暁の時間邸に目覚め、アッラーに庇護を求めることも、この状態の最も明白な例の一つなのです。

信者は常にアッラーをズィクルするという意識を持っていなければいけないと同時に、また一方で、ズィクルの為の最も恵み豊かな時間は、暁、夜明け前です。アッラー

は夜のこの時間に行われたズィクルに、他の時間に行われるものよりもなお、価値をおかれています。なぜなら、暁の時間帯にズィクルやイバーダをして過ごすことは、他の時間よりもより困難であるからです。この為に、暁の時間帯を活用することは、しもべがアッラーに対して感じている純粋な愛情と敬意の現われなのです。

アッラーは、ご自身が満足されている幸福な信者たちについて次のように語られました。

「だが主を畏れ(敬虔であっ)た者は、楽園と泉に(住み)、主がかれらに授けられる物を授かる。本当にかれらは、以前善行に勤しんでいた。かれらは、夜間でも少しだけ眠り、また黎明

には、御赦しを祈っていた」（撒き散らす者章、第51章、第15－18節）

またアッラーは仰せられました。

「あなたが（礼拝に）立つのを見ておられる方に、またサジダする者たちの間での、あなたの諸動作を（も見ておられる方に）」（詩人たち章、第26章、第218－219節）

預言者ムハンマドは、この節が啓示されたことで、ある晩サハーバたちの家々の間を歩き、その家々がクルアーンの読誦、ズィクル、賛美の声によって蜂の巣のように常に鳴動しているのを聞かれました。

そう、その心にある熱意とアッラーへの愛情の強さがどれほどのものであれ、確実に、夜の礼拝や賛美に、それに比例する形で現われます。この観点から、夜の礼拝とタスビーフは、あたかも崇高な友と出会い、会話するという内面を持つのです。

クルアーンでは次のように語られています。

「そして夜の一部をかれにサジダし、長夜のしじまに、かれを讃えなさい。本当にこれらの者は、束の間の生活を愛し、重大な日を背後に捨て去る」（人間章、第76章、第26－27節）

「かれらの体が臥床を離れると、畏れと希望とを抱いて主に祈り、われが授けたものを施しにさし出す」（アッ・サジダ章、第32章、第16節）

実際、完全さに到達した信者たちにとって夜とは、心の平穏さと発展という点で、特別な戦利品なのです。この戦利品の尊さをそれにふさわしい形で知る者、特に夜中以降、つまり世界が深い静けさに包まれた時に、ドゥアー、イバーダ、そしてアッラーへの燃えるような懇願が受け入れられるよう、アッラーへと向かうことの豊かな土壌を見

出します。日中が肉体的な糧を得る為の労働の時間であるように、彼らにとっては夜もまた、魂に糧を与え、心をはみの恵みによって輝かせる為のチャンスの時なのです。

アッラーの友である人にその弟子たちが、英知を理解できずにいるある問題を尋ねました。

「師よ、周囲を見渡せば、次のことが目に入ります。犬は、他の動物のようにその肉の為にほふられることはなく、寿命を迎えてから死にます。特に他の動物に比べ、多くの子を産んでいるにも関わらず、なかなか増えません。

しかし、人間はイバーダを意図して、多くの場合羊を犠牲として捧げ、その肉から糧を得ます。羊たちはこれほど消費されているのにも関わらず、多くの場合一頭だけ子を産みます。しかしそれでも、その数は全く減らないし、逆に増えていっています。羊たちのこの恵みにおける英知とは何でしょうか？」

その人物は、微笑みながらその質問を聞いた後、次のような英知に満ちた返事をしたのでした。

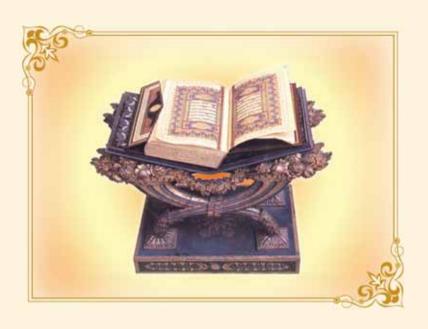
「動物たちの中であなたが見出したこの状態は、教訓を含むものであり、暁の時刻の豊かさについての明白なしるしです。なぜなら暁の時刻は、慈悲と豊かさが雨のように降り注ぐ、恵みの時であるからです。犬は、夜通し吠え続けています。しかし暁の時刻には眠ってしまいます。羊たちは、夜明け前には起きています。その為に、暁の時刻の豊かさから、自分たちの取り分を得ているのです」

このように、暁の時刻を眠りに費やしてしまう者は、砂漠、海、そして険しい岩に降る恵み深い4月の雨が無駄になってしまうように、この豊かさと恵みを得ることができないのです。

アッラーよ！私たちあなたのしもべを、一つの呼吸によってあなたに対し不注意である者とはなさらないでください。私たちの昼と夜をアッラーのズィクルの恵みによって輝かせてください。暁の時刻の恵みの雨で、私たちの心を生き返らせてください。アッラーをズィクルすることの壮大な事実から何かを得ることを、私たち皆に可能としてください。あなたの神性の偉大さを理解することができない者たちを導いてください。暁の時間にあなたをずぃふるする者たちへの敬意によって、祖国と国を災いをもたらす者の害からお守りください。

　アーミーン。

クルアーンと熟考

-1-

天が、最期の審判の日まで、荘厳な力と偉大さの顕示であり続けるように、クルアーンも人間の幸福と未来の天のように、「言葉」という星と共に輝き、最期の審判の日まで生き続けます。従ってこの世界で最も尊く幸福な人々とは、クルアーンの陰のもとに集まり、その生命の光りによって育まれる人々なのです。

クルアーンと熟考－１－

アッラーの、神性という特性には、この世界で完全な意味で三つの顕現の場があります。

人間､クルアーン､そして万物です。

人間はあらゆる美名の顕示からそれぞれ何かを得た存在として、この世界の真髄を形成しています。同じ美名の顕現が言葉という形で示されているものが、クルアーンです。クルアーンは人と比較するとより詳細です。しかしその本髄における等しさにより、

「人間とクルアーンは双子のようである」と言われているのです。

アッラーの美名の三つめの顕現であるこの世界の万物は、クルアーンの一種の解釈本です。この世界は静かなクルアーンであり、光の中で完全さを見出す、顕示の王といえるものです。この観点から、「人間､クルアーン､そしてこの世界の万物」は、完全なタウヒードの系統なのです。

天が、最期の審判の日まで、荘厳な力と偉大さの顕示であり続けるように、クルアーンも人間の幸福と未来の天のように、「言葉」という星と共に輝き、最期の審判の日まで生き続けます。従ってこの世界で最も尊く幸福な人々とは、クルアーンの陰のもとに集まり、その生命の光りによって育まれる人々なのです。

あらゆる神秘、英知、そしてその真実はクルアーンに秘められており、あらゆる幸福は信仰に見受けられます。こ

の広大な世界は、アッラーが望まれれば微粒子に大海を、また望まれれば大海を微粒子に隠され、あるいは明白に見えるようにされるのだと言うことを示します。

この真実ゆえにメヴラーナは次のように語っています。

「ある時私に、アッラーの光を人間に見出したいという希望が生じた。あたかも海をしずくの中に、太陽を微粒子の中に見ることを望んでいたのだ」

ある意味で、真実に到達する望みや熱意、真実における深さを表現するこの言葉が示している真実とは、人間を頂点に導く最大の要因が、真実についての熟考であるということです。なぜなら、真実に至る為の唯一の要因、ある意味で大動脈とは、熟考と学びであるからです。

この世界の万物を熟考することの細やかな意図は、細やかな英知を見出すことです。この世界が、試練の為の信仰の学び舎であることは明らかです。神の指導や統治が実行されているこの世界で、異質さや否定を示す人間は、自我の、そして個人的な価値を、アッラーのご満悦に含まれない生き方によって損ない、必須である永遠の資本を確保できないという、大きな悲惨さの渦の中にいるのです。

人間が、アッラーのしもべでいられることの尊厳とほまれによって生き、未来の為の宴、すなわち死の不可解さを解きほぐしていくべきです。それを啓示に基づいて熟考し、真実に結びつけるべきです。なぜなら、全ての人を人生という課題において火の渦のように包み込む死は、例外なく人々の身に起こる最も厳しい未来の現実であり、それについて熟考し、それに基づいて生き、安らぎを得ることは、人間的な目的よりも優先されるべきものだからです。

従って人間はこの世界を知り、そこにおける神秘や神の英知を見出すと言う方向において学びや熟考を正しく行うために、ただクルアーンの導きを必要とします。

なぜならクルアーンなしで人間の熟考が、完全な形で知性、理解力、認識を示すことができるのであれば、アッラーはしもべたちに追加の援助として預言者たちを遣わされることも、啓典を下されることもなかったでしょう。つまり人間は、その天性のものとしてもっている学びや熟考の能力をあるべき形で発揮する為には、このような神の助けを必要としています。もし人がクルアーンを得ていなければ、アッラーの「アハディーヤ」「サマディーヤ」という特性を知ることができたでしょうか？つまりクルアーンは、人間が、熟考や学びの基盤となるあらゆる真実の海に漕ぎ出すことができるよう、無数の導きや警告によって、その天性の資本を最も正しく最も素晴らしい形で方向づけているのです。

クルアーンが私たちに開いている熟考の扉がなければ、多くの真実の認識や表現ができないままだったでしょう。この為、クルアーンの無限の内容に関して頭を働かせることは不可欠なのです。もちろんこれは、一定の基準、範疇の中でなされるべきです。なぜならクルアーンは、「どのようなものであれあらゆるものを」その中に存在させているという宣言を行っているのであり、そこにおける真実の韻律詩は、この世界の万物と同様、終わりに到達することが不可能なものであるからです。

これは、次のことを意味します。熟考と学びをどのように用いるべきかという点で、クルアーンが無限の導きと警告により線引きをしている水平線があります。この点を十分に理解し、それがどの点まで存在するのかということを認識するべきです。なぜなら私たちに与えられた知性は、

小さな秤のようなものであるからです。しかし計られるべき真実は、カーフ山ほどのものであるからです。その為、理性を啓示のつぼの中で溶かすこと、それを従順によって飾ることが不可欠です。

この観点から、自分の無力さを認識し、分をわきまえた解釈学者たちは、何らかのクルアーンの言葉が持っている意味をその価値に応じた形で説き明かした後、

「最も正しいことは、アッラーがご存じである」と言い、アッラーの位階における真実が何であるにしろ、層であると信じることが必要であると告げているのです。

なぜなら、どこかの家の台所のどれかの器に入っている水と、大洋の水の間には、成分としての差はなかったとしても、量と体積の差は無限であるからです。

また一方で、生まれつき目が見えない人に色について説明すれば、その心に必ず何らかの痕跡は残すでしょう。しかしこの痕跡と入りの間には、どれほど大きな本質の差があるでしょうか。これははかり知れないものです。

従ってクルアーンが含んでいる全ての意義を、この論理の窓から見ること、そこから人間としての条件で把握できる意味が、完全な意味であると主張することを避けることが必要です。

要するにこれらすべての状態は、真実に到達する為の熟考と学びの、人の認識によって把握できる境界に注意をひいているのです。ここでは、この方向で必要な知性について、クルアーンの警告や導きについていくつか紹介しましょう。

比類なき導きと幸福の為のガイドであるクルアーンは、その多くの節で、人の創造における英知、万物における驚くべき秩序、そしてクルアーンがその話法においても奇蹟

であることを考えることへと招きます。人間の尊厳にふさわしい形で生きることを望む人々は、クルアーンが方向づけているこの熟考の世界に入るべきなのです。

万物の事象について熟考する人の意識：

「この世界は何であるのか。私はなぜ創造されたのか。はかない日々の真実、本質とは何か？幸福の道とはどれなのか」あるいは、「私は誰の何なのか？どのように生きるべきなのか？どう考えるべきなのか？このはかない世界との別離の為にどのような備えをするべきなのか」といった問いへの答えを求めます。

万物が、細やかな力の流れ、緻密な計算の中で動いているのに、万物の中で最も優れた存在であり、その飾りでもある人間が、何の計算もなく、適当に、我欲に従うままに行動することはあり得るでしょうか？

クルアーンでは次のように語られています。

أَفَحَسِبْتُمْ أَنَّمَا خَلَقْنَاكُمْ عَبَثًا وَأَنَّكُمْ إِلَيْنَا لاَ تُرْجَعُونَ

「あなたがたは、われが戯れにあなたがたを創ったとでも考えていたのか。またあなたがたは、われに帰されないと考えていたのか。」（信者たち章、第23章、第115節）

أَيَحْسَبُ الْإِنْسَانُ أَنْ يُتْرَكَ سُدًى

「人間は、（目的もなく）その儘で放任されると思うのか」（復活章、第75章、第36節）

人間が純粋無垢である時代は、思春期に入ることによって終わります。しもべとしての生き方をあるべき形で実践する努力にある信者たちには、この段階で新たな責任の時

代が始まります。この成長期においては、知識に加え、心の目で熟考することが必要です。アッラーの神秘、神聖なる英知の真の色は、信仰を持つ心にのみ開かれます。クルアーンでは次のように示されています。

「かれらは頭上の天を見ないのか。われが如何にそれを創造し、如何にそれを飾ったか。そしてそれには、少しの傷もないと言うのに。また、われは大地をうち広げ、その上に山々を据え、様々の種類の美しい(草木)を、生い茂らせる。(それらは)悔悟して(主の御許に)返る凡てのしもべが、よく観察すべきことであり、教訓である」（カーフ章、第50章、第6－8節）

柱もない形で天に位置する太陽が沈むこと、昇ること、夜と昼に開いては閉じる星、三日月、満月を備えた、荘厳なこの天空のしたに、あらゆる種類の恵みと喜びの中で快適に過ごしつつ、この世界を創造した芸術家、この恵みの真の持ち主を探すことを億劫に感じる恩知らずな者、そして目を閉ざしたまま生涯を損なってしまう者についての節は、いかに厳しい警告であり、導きであることでしょうか。

「われは天と地、そしてその間にあるものを、戯らに創らなかった」（サード章、第38章、第27節）

「われは天と地、そしてその間にある凡てのものを、戯れに創ったのではない。われは、天地とその間の凡てのものを、只真理のために創った。だが、かれらの多くは理解しない」（煙霧章、第44章、第38－39節）

この世界は、アッラーの崇高な顕示の芸術的な奇蹟の展示場です。この美しい場で、意識を持って行動する信仰を持つ人々は、思想における覚醒やこの世界での力の流れを前にしての驚嘆、そして強い精神的な喜びを得るのです。

クルアーンでは次のように語られています。

「見ないのか、アッラーが天から雨を降らせられ、それを地中に入らせて泉となされ、それから色とりどりの、植物を生えさせ、やがてそれらが枯れて黄色になるのを。それから、それを乾かして、ぼろぼろの屑になされる。本当にこの中には、思慮ある者への教訓がある」（集団章、第39章、第21節）

「本当に天と地の創造、昼夜の交替、人を益するものを運んで海原をゆく船の中に、またアッラーが天から降らせて死んだ大地を甦らせ、生きとし生けるものを地上に広く散らばせる雨の中に、また風向きの変換、果ては天地の間にあって奉仕する雲の中に、理解ある者への（アッラーの）印がある」（雌牛章、第2章、第164節）

実際、ものを見ることのできる目にとって、天空からは愛情の光りが降り注いでおり、地面からはエメラルドの愛情が噴出しているのです。天や地という二つの愛情の円によって包まれた深い熟考を持つ人は誰でも、明白で深いその感覚をいやおうなくアッラーの愛情と共にまとめ、精神的に完成していくことを自らの任務とします。アッラーは仰せられています。

「かれこそは大地を広げ、その上に山々や河川を配置された方である。またかれはそこで、凡ての果実を２つ（雌雄）の対になされた。また夜でもって昼を覆わされる。本当にこの中には、反省する人びとへの印がある」（雷電章、第13章、第3節）

アッラーのしもべでいられること、預言者ムハンマドのウンマでいられることが幸福であると知っている人々は、この愛情の結びつきにおいて列をなします。この崇高な戦列の名が、信仰です。信仰は、心でアッラーの光が輝くことで、愛情が心を満たし、あふれることから生じる、神聖な勘定です。恵み豊かな心で万物を見る者は、実にすばらしい感情を抱き、そのまなざしにおいてはあたかも彼の上にある天空が素晴らしいクリスタルのシャンデリアであ

るかのように、アッラーの神秘から目もくらむような深みを与えているのです。地上は全ての木が、その葉と共に懇願の手をかかげ、心地よい畏怖と共にアッラーに懇願しているのです。草は、あたかも預言者ムハンマドの信者集団の為の礼拝用の絨毯であり、その上で花々が素晴らしいウンマとして波打っているのです。力の勲章である山々は、アッラーの御前でクィヤームの状態です。雲は、豊かさと恵みの動く泉として天空で動く海のようです。風は、アッラーのもたらす智の、目に見えない使者です。稲光は恐れと希望の火花であり、轟きと稲妻はカッハール（征服するお方）であるアッラーの統治の宣言であり、不注意さに対して警告する爆発です。昼間はその光の顕現であり、夜は神秘と英知が息づくのです。要するに世界とは、魅力的な言葉で満たされた顕示と神秘の書物です。アッラーの美名の実際の顕現であり、あたかも静かなクルアーンのようです。クルアーンは、言葉に包まれた一つの世界です。人間は、この二つの交差点に存在する智の中心点であり、顕示の記念碑です。

聖アーイシャは、アッラーの使徒の心の細やかさに関する光景を、次のように示しています。

「ある晩、アッラーの使徒は私に、

『アーイシャよ、許可を出してくれるなら、今晩私の主にイバーダをしながら過ごそう』と言われました。

『アッラーに誓って、あなたと共にあることを私はとても好みます。しかしあなたを喜ばせるものをさらに好みます』と言いました。

それから彼は立ち上がって、丁寧にウドゥーをし、礼拝をしました。彼は泣いていました。あまりにも泣いた為に服やその神聖なひげ、さらにはサジュダを行った場所まで

がぬれていました。彼がその状態でいる時に、ビラールが礼拝に呼びに来ました。彼が泣いているのを見て、

『アッラーの使徒よ、アッラーがあなたの過去と未来の罪を許されているのに、なぜ泣いておられるのですか』と言いました。それに対し預言者ムハンマドは、

『アッラーに感謝するしもべであってはいけないかね？今晩私にこのような章句が啓示された。それを読み、熟考しない人々は残念だ』と言われ、この章句を読まれました。

『本当に天と地の創造、また夜と昼の交替の中には、思慮ある者への印がある。または立ち、または座り、または横たわって（不断に）アッラーを唱念し、天と地の創造に就いて考える者は言う。「主よ、あなたは徒らに、これを御創りになったのではないのです。あなたの栄光を讃えます。火の懲罰からわたしたちを救って下さい」』（イムラーン家章、第3章、第190－191節）（イブニ・ヒッバーン, II, 386）

この章句が啓示された夜、アッラーの使徒は天の星たちがうらやむほどの涙を流し、朝まで泣いていました。アッラーの恵みにより信者の涙も、確実にはかない夜の装飾となり、墓場の闇の灯りであり、来世の天国の庭園の結露のしずくなのです。

アッラーの恵まれたいくつかの月、昼、夜は、出会いが適うチャンスの瞬間です。アッラーが創られた天のカレンダーにおいて、12の月のうちいくつかをより尊いものとされました。アッラーの月とも呼ばれる「ラジャブ月」はその一つです。[8]

8.　この文章は3つの聖なる月の始まりであるラジャブ月に向けられたものであり、その為この点に言及されている。

ジャージリーヤの時代にすら、この月には剣は鞘に納められ、血を流す野心に、平穏という覆いが引かれていました。イスラームがもたらされても、ラジャブ月に示されたこの尊敬の念は続きました。この神聖な月は、最初の金曜日の夜が-天使たちの言葉により-ラガイブ、第27日目の夜がミラージュとして、二つのカンディル（灯明祭）によって誉れを与えられています。

これらの夜をアッラーの使徒の恵みと愛情によって飾ることは私たちの最も重要な任務の一つであるはずです。なぜならアッラーの使徒の愛情は、私たちの心の幸福な資本であるからです。そのお方に愛情を持って従い、彼に心から結びつく幸運な人とは、アッラーの恵みを受けた預言者たち、忠実な信者たち、殉教者たち、そして誠実な者たちの隊列に加わる、永遠の旅人なのです。

アッラーが私たちの心を、そこに至ることで誉れを与えられているこの神聖な日、夜、そして月を豊かさと恵みで満たしてくださいますように。アッラーの使徒の光で輝かせてくださいますように。その愛情で備えをさせてくださいますように。私たちを、最後の審判での集合の場で、預言者ムハンマドの旗のもとで復活させてくださいますように。そのとりなしを受けることを可能としてくださいますように。

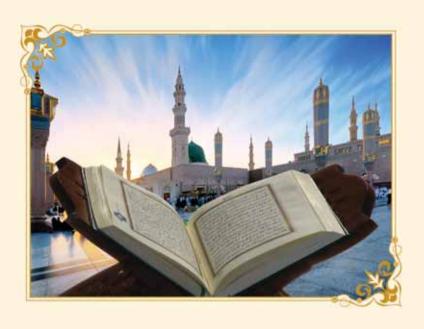
私たちの国と全てのイスラーム世界を善や勝利、恵みへと至らせてくださいますように。

アッラーよ！長い望郷と深い孤独の地に流されていきます。そこで私たちの太陽が信仰と、親友が預言者と誠実な信者たち、幸福の庭園が誠実な行為となりますように。

アッラーよ！私たちを、万物と事象を心の目で眺めることのできる、真の認識を持ったしもべとしてください。「読め」という威厳ある命令が内包するものから、私たちの心が得るものがありますように。

　アーミーン。

クルアーンと熟考

-2-

　私たちの心は、クルアーンの真実や預言者ムハンマド（彼の上に祝福と平安あれ）のスンナへの熱意や愛情で満たされるべきです。なぜなら、クルアーンと預言者ムハンマドは、私たちを終わりのない幸福と導きの道へと招いているからです。啓典と書物とは、ただそれを守りながら、実践しながら手にすることのできる、預言者からの信託であることを忘れてはいけません。

クルアーンと熟考－2－

人間は、ただ肉と骨でできている存在ではありません。それは一つの芸術的な奇蹟であり、アッラーはご自身との出会いという力を、被造物の中から人間に与えられたのです。創造によって与えられている名誉と尊厳を守りつつ、完成に達した人間は、アッラーの恵みを得て、万物、知識に関する顕示の源であり、善への導管であり、崇高な価値ある存在です。なぜならアッラーは人間を最も美しい被造物という特性に至らせられたからです。

このような恵みを与えられた人間が、はかなく、預けられたものであるその存在を疑いや無知の渦の中で損なうこと、もっとはっきりと表現するなら、自分の為に懲罰のカフン（死者を包む白布）を織り上げることは、いかに悲しいことでしょうか。

人間は、我執という弓矢の前に並べられた試練の標的です。だから、水を一口飲むたびに溺れる可能性、あらゆるものを口にする為にのどに詰まる可能性を見過ごさず、その生涯を心と共に覚醒の中で送ることが必要です。なぜなら寿命は、はかない人生の限られた日々を含んだ、チャンスのカレンダーのようなものだからです。目に見えない手が、毎日1枚のページを破り、死の風に飛ばしているのです。

過ぎた日々は私たちの承認であり、未来の日々は私たちの客です。客である日々の為に、慎重な備えをすることが必要です。生涯は、永遠の書類です。記録の天使たちは行

われたことを決して違えることなく記録しています。その書類はいつの日か私たちの前に広げられ、私たちは

اِقْرَأْ كِتَابَكَ كَفَى بِنَفْسِكَ الْيَوْمَ عَلَيْكَ حَسِيبًا

「あなたがたの記録を読みなさい。今日こそは、あなた自身が自分の清算者である」（夜の旅章、第17章、第14節）と告げられるのです。

私たちの帳面、つまり行動が記された行動の他に、私たちが生きているこの地上も、私たちが行ったことの証人となり、アッラーの御前で語るでしょう。クルアーンでは次のように語られています。

يَوْمَئِذٍ تُحَدِّثُ أَخْبَارَهَا

「その日（大地は）凡ての消息を語ろう」（地震章、第99章、第4節）

インシャッラー、その日には信者として私たちすべての顔が輝くでしょう。このことについてクルアーンは、私たちを次のように方向づけています。

「かれらの体が臥床を離れると、畏れと希望とを抱いて主に祈り、われが授けたものを施しにさし出す」（アッ・サジダ章、第32章、第16節）

「わたしたちは、主の苦渋に満ちた御怒りの日を恐れます」（人間章、第76章、第10節）

「またかれらの主の懲罰を恐れる者も。本当に主の懲罰から、安全であると考えるべきではない」（階段章、第70章、第27－28節）

クルアーンは、自分たちがアッラーの懲罰を受けることはないと安心している人々が、ただ悲嘆にくれる集団となることを告げています。

「かれらはアッラーの計画に対して安心出来るのであろうか。アッラーの計画に対し安心出来るというのは、失敗する（運命にある）者だけである」（高壁章、第7章、第99節）

アッラーの慈悲や援助について失望するのは、ただ不信仰者であることも告げています。

「アッラーの情け深い御恵みに決して絶望してはならない。不信心な者の外は、アッラーの情け深い御恵みに絶望しない」（ユースフ章、第12章、第87節）

信者たちの心は、恐れと希望という両極の間を、しもべであるという喜びのうちに揺れ動きます。恐れと希望の感情の間のこの均衡は、「恐れと希望の間」の地位、として表現されるものであり、信者は常にドゥアー、非力さ、そして懇願という状態であり、死が来るまでこの均衡、バランスの確保の為に注意深く振る舞うべきなのです。クルアーンでは次のように語られています。

「恐れと熱情をもってかれに祈れ。本当にアッラーの慈悲は、（常に）善行をなす者の近くにある」（高壁章、第7章、第56節）

従って信者は、「かれらが祈っているものたちでさえ、かれの慈悲を待望し、懲罰を恐れている。本当に主の懲罰こそ、用心すべきである」（夜の旅章、第17章、第57節）

という節での表現にふさわしい熟考の中で生きることが必要なのです。

預言者たちと彼らが教えた者たちの他は誰も、永遠の救いの保証うぇてはいません。アッラーはこの状態の確認の為に

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا اتَّقُوا اللّٰهَ حَقَّ تُقَاتِهِ
وَلاَ تَمُوتُنَّ إِلاَّ وَأَنْتُمْ مُسْلِمُونَ

「あなたがた信仰する者よ、十分な畏敬の念でアッラーを畏れなさい。あなたがたはムスリムにならずに死んではならない」（イムラーン家章、第3章、第102節）と命じられています。

アッラーへの畏怖は、心の幸福の光です。クルアーンはたくさんの懲罰についての言葉や、地獄についての知らせで満たされています。それにもかかわらず、不注意な人々が、

「アッラーは許されるお方である。愛されるお方であり、恐れるべきお方ではない」と表現していることに対し、クルアーンは次のように警告しています。

「人びとよ、あなたがたの主を畏れなさい。また父がその子のために役立たず、子も自分の父のために少しも役立たない日を恐れなさい。本当にアッラーの約束は真実である。あなたがたは現世の生活に欺かれてはならない。アッラーのことに就いて欺く者に、あなたがたは欺かれてはならない」（ルクマーン章、第31章、第33節）

また一部の不注意な人々が

「あなたの罪を私のものにしよう」といったような、怖いもの知らずな態度を取り、愚かにも罪を背負おうとすることは何と悲惨なことでしょうか。

不注意な者たちは、この世界では快適に過ごします。世俗的な恵みによって喜び、楽しみにふけています。誠実で熟考する者は、この世界での生を戦利品であると知り精神的な位階に到達する為の努力と活気の中で生きます。不注意な人々は運命、すなわちアッラーが定められたことにぶ

つかり、反発しています。「どうして」「何のために」という問いの袋小路の中で行き詰ってしまいます。誠実で熟考する人は、英知を見、その真実と共に深みを増していく為に努力をし、真の安らぎを手にするべく努め、また出来事を甘受している状態です。

一部の人々が、あたかも自らに特別の神秘主義的な深みがあるかのように振る舞うこと、もっと正確に言うなら、心やその状態の点から到達できていない頂点という位階のそのあり方や神秘を知りもしないのに、全く無駄に知っているかのように話すこと、メヴラーナやユヌスといった人々の位階には達していないのに、

「私は天国も求めないし、地獄を恐れることもない。私はただアッラーを愛する、ただ、そのお方を愛する」といった崇高な覆いに包まれた言葉を語ること、作り物の修道僧のように振る舞うことは、決して認められることではありません。

アッラーの中に溶け込み消えていくような人の心では、創造主以外のあらゆる道は閉ざされています。ただアッラーへと向かう道が開かれているのです。アッラーへの愛情と敬意の完成した状態に達しています。アブドゥルカディル・ゲイラーニの表現を借りるなら、この状態に達している愛に満ちたしもべにとってアッラーはまさに愛する存在であり、天から地の底に至るまで全ての被造物への愛着は、彼の心から取り除かれます。それによって、現世のことも来世の子とも考えなくなるのです。自らについてすら恐れを感じ、ただアッラーとの親しみを求めます。ちょうど、レイラとメジュヌンのような状態になります。

レイラへの愛情に夢中になり我を忘れてしまった若者は、人々と離れ、一人で暮らすようになります。活気づいている町を離れ、砂漠で猛獣たちの中に紛れていました。

人々の賞賛や罵倒を脇にどかし、それらを聞かなくなります。彼らが話しているのか黙っているのかの区別もつかなくなります。ある時彼自身に、人々が尋ねます。

「あなたは誰ですか」

「レイラです」

また質問がなされます。

「あなたはどこから来たのですか」

「レイラからです」

また質問がなされます。

「どこに行くのですか」

「レイラに」

メジュヌンの目と心は、レイラへの愛の強さの為、全世界に対し閉じられてしまったのです。その耳も、レイラ以外の言葉すら聞かなくなったのです。（アブドゥルカディル・ゲイラーニ, フェトゥフルーラッバーニp. 284）

信者は、アッラーを愛と共に知り、そこに自らを埋没させた時、心は全ての被造物から離れます。ただ、アッラーにって満たされます。現世的、人間的欲求はそこで尽きてしまいます。愛情の満ちた心は、孤独である時も群衆の中にいる時も、ただアッラーと結びついているのです。「それであなたと、またあなたと共に悔悟した者が命じられたように、（正しい道を）堅く守れ。法を越えてはならない。」（フード章、第11章、第112節）の威厳ある命令の中、つまりその方向性の中で幸福を見出します。アッラーはこのようなしもべを、深い真実を知る者とされます。

アッラーは、預言者ムハンマドを人間たちに、「模範的な人格」として贈られました。人間的な発展のあらゆる点

において信者の為の模範は、預言者ムハンマド（彼の上に祝福と平安がありますように）です。

伝承によると、預言者ムハンマドは人間としてのあり方が要するところとして、孫のハサンとフサインに対しその心で、あるべき以上の愛情を感じていました。それに対してジブラーイールは預言者ムハンマドに訊ねました。

「彼らをとても愛しているのですか」

預言者ムハンマドは

「はい、愛しています」

と答えられました。その時ジブラーイールは次の知らせを伝えたのでした。

「彼らの一人は毒を飲まされ、もう1人は殉教することになります」

この出来事の後、預言者ムハンマドは心の目の光である孫たちへの愛情を、バランスのとれたものとしたのでした。（アブドゥルカディル・ゲイラーニ, Fethu'r – Rabbānî, s. 314）

これは、次のことを示すものです。愛情を、アッラー以外のものに対しあるべき以上の形で向けることはアッラーの位階において認められることではないのです。預言者ムハンマドは諸世界の創造の理由であるのに、この例でのようにアッラーの警告と導きの対象とならなかったとすれば、ごくわずかでも過ちを犯したことになっていたでしょう。従って、愛情において行き過ぎると言うことがいかに重要であるかをこの例から理解すべきなのです。そして私たちが好むあらゆるものに対する愛着をバランスのとれたものとし、それを一種の偶像としてしまうことを避けるべく努力するべきです。なぜなら私たちは、預言者ムハンマドのように保護されてはいないからです。

愛情において限度を気にしないことは、それはアッラーに向けられたものでる場合にのみ、認められます。アッラーに対する恐れや希望の感情がこの均衡の中で続いて行けば、心は信仰という天空の慈悲の雲となります。なぜなら、愛する者は常に、愛の対象である者を傷つけるという恐れと、その相手の愛情を失うと言う不安の中で生きるからです。

クルアーンでは次のように語られています。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا إِن تَنْصُرُوا اللهَ يَنْصُرْكُمْ وَيُثَبِّتْ أَقْدَامَكُمْ

「信仰する者よ、あなたがたがアッラーに助力すれば、かれはあなたがたを助けられ、その足場を堅固にされる」（ムハンマド章、第47章、第7節）

だから、これらのチャンスの瞬間に私たちの信仰の素晴らしいその外見と共に、行動が記録される帳面を、それぞれに素晴らしい善行の展示といった状態にするべく、努力するべきです。忘れてはいけないことは、私たち信者は、アッラーの恵みとして天使がサジュダを命じられたよげんしゃアーダムの子孫であり、神の美名の学び舎と預言者ムハンマドの真実の教室の生徒であるということです。クルアーンによって生命を見出し、正しい道にいるのです。

従って私たちの心は、クルアーンの真実と預言者ムハンマドのスンナへの熱意や愛情で満たされるべきなのです。なぜなら、クルアーンと預言者ムハンマドは、私たちを終わりのない幸福と導きの道へと招いているからです。アッラーはただ、正しい心がその要因となり得ることを伝えられました。だから、彼らの招きに対し何も感じず、熟考もしないということは、ただ鍵をかけられてしまった心の不注意さであり、悲しい状態なのです。

クルアーンでは次のように語られています。

أَفَلاَ يَتَدَبَّرُونَ الْقُرْآنَ أَمْ عَلَى قُلُوبٍ أَقْفَالُهَا

「かれらはクルアーンを熟読玩味しないのか。それとも心に鍵をかけたのか」（ムハンマド章、第47章、第24節）

クルアーンはこの熟考を、それ自身の崇高さと比類のなさという点についても向けさせます。

أَفَلاَ يَتَدَبَّرُونَ الْقُرْآنَ وَلَوْ كَانَ مِنْ عِنْدِ غَيْرِ اللهِ لَوَجَدُوا فِيهِ اخْتِلاَفًا كَثِيرًا

「かれらはクルアーンを、よく考えてみないのであろうか。もしそれがアッラー以外のものから出たとすれば、かれらはその中にきっと多くの矛盾を見出すであろう」（婦人章、第4章、第82節）

14世紀前から存在しているクルアーンの知識に、科学にそぐわないもので構成された節を見出すことは不可能です。逆に、それぞれの世紀で行われる発見や発明は、クルアーンの力を強めてきました。クルアーンは、1400年前の遊牧民に彼が探し求めていたものを与え満足させ、その生き方を最良の形でただしてきました。今日においても、最も優れたレベルにある学者たちをも包括する知識がその時がくるごとに明らかになるという形で、皆を驚嘆と恐れの中に残し、屈服させているのです。なぜならそれは、最後の審判の日まで起こり、怒ってくる全ての学問上の発展を導く、最も完全な知識で満たされているからです。

さらに、クルアーンにおける奇蹟的な知識に、学問上の発見によってより近づいて行けるということも、クルア

ーンの言葉で示されている奇蹟としてアッラーが誓われたことです。クルアーンのこの驚異の状態は、崇高な真実がアッラーの約束に基づき、その時が来れば実際に生じる、ということなのです。アッラーは次のように語られています。

「われは、わが印が真理であることが、かれらに明白になるまで、(遠い)空の彼方において、またかれら自身の中において(示す)。本当にあなたがたの主は、凡てのことの立証者であられる。そのことだけでも十分ではないか」（フッスィラ章、第41章、第53節）

この神の宣言の方向性における例はたくさんあります。その一部が以下の通りです。

「人びとよ、あなたがたは復活に就いて疑うのか。われがあなたがたを創るさいには先ず土から始め、次いで精液の一滴、次いで血の固まりとし、更に形をなした。また形をなさない肉塊から(あなたがたを創った)。あなたがたに(わが偉力を)明示するためである。われは欲する者を、定めた時期まで胎内に置き、それから赤ん坊としてあなたがたを出生させ、それから成年に到達させる。あなたがたの中或る者は(若くして)死なせる者もあり、また或る者は何がしかを知った後、凡て忘れ去る程に弱まる老齢に返される者もある。またあなたは大地が枯れて荒れ果てるのを見よう。だがわれが一度それに雨を降らせると、(生気が)躍動し膨らんで、凡ての植物が雌雄で美しく萌え出る」（巡礼章、第22章、第5節）

「われは泥の精髄から人間を創った。次に、われはかれを精液の一滴として、堅固な住みかに納めた。それからわれは、その精滴を一つの血の塊に創り、次にその塊から肉塊を創り、次いでその肉塊から骨を創り、次に肉でその骨を覆い、それからかれを外の生命体に創り上げた。ああ、何と素晴しいアッラー、

最も優れた創造者であられる」（信者たち章、第23章、第12－14節）

カナダ人のキース・L・ムーア教授は、発生学の分野で書いた作品の中で、子宮内での諸段階を説明した後、その知識をクルアーンを比較し、知識がクルアーンと一致していること、さらにはクルアーンが与えている例や説明が、医学的知識よりも進んだ元であることを認めています。

キースは、クルアーンにおけるしずく、血の塊、噛まれた肉片という表現、すなわりこの三つの段階の特性の全てが科学的な真実と一致していること、さらに医学の世界に大きな光を灯すものであることを語っています。しずくの状態として表現されている状態は、科学的な研究の内容の全てを含むものです。血の塊という段階は垂れた、動きの鈍い血液という状態です。胎児の生命の特性の全てが、この塊の状態である血に蓄えられています。噛まれた肉片については、その形状を見ると、あたかも噛まれた肉片であるかのようです。あたかもそこに歯形がついているように見えます。これらの研究の結果キースは、クルアーンと預言者ムハンマドについて大きな驚きを感じ、クルアーンの1400年前の奇蹟を、大きな確信と共に評価し、イスラームによって誉れを与えられたのです。

このような評価について、クルアーンは奇蹟的に次のように語っています。

「知識を授かった者なら、主があなたに下されたものは真理であって、それが偉力ある方、讃美すべき方の道に導くものであることが分るであろう。」（サバア章、第34章、第6節）

指紋を研究する学問分野においても、指紋が生涯変わらないこと、誰の指紋も、他の人の指紋と同じではないことを明らかにしています。この為、警察や法において最も信

頼できる同一性の証明は、指紋によてなされます。この真実は、19世紀の終盤に発見され、活用されるようになりました。しかしクルアーンでは、

「人間は、われがかれの骨を集められないと考えるのか。いや、われはかれの指先（の骨）まで揃えることが出来るのである」（復活章、第75章、第3－4節）と語られ、指紋の繊細さを何世紀も前に指摘していたのです。

つまりクルアーンが前に立ち、学問がその後に続いているのです。クルアーンでは次のように語られています。

「言ってやるがいい。『仮令人間とジンが一緒になって、このクルアーンと同じようなものを齎そうと協力しても、（到底）このようなものを齎すことは出来ない』」（夜の旅章、第17章、第88節）

なぜならクルアーンは、無力な人間の知識ではなく、この世界のあらゆる知識の基盤を用意され、人間たちに恵まれたアッラーの知識であるからです。同時に知識の発見の要因となる認識を創造されるのもまた、気前の良いアッラーなのです。

全ての預言者や聖人たちは、その知識をクルアーンの真実から得ています。従って以前の啓典に含まれているものもまた、クルアーンの方向性に従ったものです。人が宇宙の小さな模型であるように、クルアーンも全世界を包括する神の書です。従ってそれが含んでいる知識は、時や場所の制限がなく、永続的なものです。あらゆる時代を包括するのです。

この認識により、アッラーの友である人々はその全ての言葉、さらには全ての文字における様々な神秘の顕示を見ることができました。またアッラーの友たちは、全ての学

問や彼らが記した全ての作品は、クルアーンの光からの顕現であることを語っています。

ここで、この機会にこのことをも指摘したいと思います。今私たちが迎えている月は、インシャッラー、その到来によって私たちが恵みを得る、ミラージュのような尊い夜を含んでいます。[9]

ヒジュラの1年半前、ラジャブ月の27番目の夜に起こった「夜の旅」、すなわち預言者ムハンマドのマッカのハラム・モスクから、エルサレムのアルアクサ・モスクまでの旅と「ミラージュ」すなわち無限の天への上昇は、時間と空間の条件の外で実現した、大きな神の顕示です。

クルアーンでは、この神聖な旅いついて次のように語られています。

「そのしもべを、(マッカの)聖なるマスジドから、われが周囲を祝福した至遠の(エルサレムの)マスジドに、夜間、旅をさせた。わが種々の印をかれ(ムハンマド)に示すためである。本当にかれこそは全聴にして全視であられる」（夜の旅章、第17章、第1節）

別の章句では、この神聖な旅の英知を伴う権限について次のように語られています。

「覆うものがスィドラ木[10]をこんもりと覆う時。(かれの)視線は吸い寄せられ、また(不躾に)度を過ごすこともない。[11]か

---

9. この文章が発表されたのはラジャブ月のカンディル（灯明祭）の夜であった為、この点にも言及がなされている。
10. スィドラを覆うのは、天使たちやアッラーの光であるという伝承も存在する。
11. クルアーンにおけるこの表現は、「預言者ムハンマドはアッラーに

れは確かに、主の最大の印を見たのである」（星章、第53章、第16－18節）

ミラージュの出来事は、その壮大さと共に熟考がなされれば、次のことが明白に理解されます。夜のある一瞬に起こったこの神の天元は、アッラーの使徒がアッラーの無限の力を目撃する為に実行された、「**愛する者と愛される者**」の面会です。この神聖な招きと承諾の深い英知、特別な細やかさと美しさは、理性の限界や人間の論理の境界線の内側で把握されるものではありません。この形で、この壮大な旅の内なる英知は、教えられた限られた知識を除いて、**愛する者と愛される者**の間の秘密とされたのです。

この神聖な夜に、人差し指のように天に伸ばされたミナーレで輝く灯明は、その夜の神聖な記憶を今日に反映させる輝かしい恵みであり、神の贈り物であることを忘れないようにしましょう。

ミラージュの夜の、ウンマにとっての最も崇高な記念品は、疑いもなく礼拝でしょう。礼拝は教えの柱であり、目の光であり、心の喜びであり、創造主との面会であり、つまり信者の心のミラージュであるのです。あっらーのしもべ、預言者ムハンマドのウンマであることに比例して、私たち皆は個人のミラージュを実行する力を持っています。しもべとしての生のミラージュが、特に礼拝によって生じることについては、明白なしるしがあります。従って、礼拝のあり方もミラージュのレベルの基準です。このミラージュ、すなわち崇高な出会いの旅に、私たちは日に5回、招かれているのです。

この上なく集中しており、天で目にした無数の美は彼を引きつけなかった」という形で解釈されている。

アッラーがこの神聖な夜を全てのムスリムの為の幸福の源とされますように。

アッラーよ!私たちに、慈悲を降り注がせる正しい方向性を与えてください。私たちを、我欲的な現世の海でおぼれることからお守りください。気前の良いお方、アッラーよ。私たちに真実を理解できる認識と理解力を与えてください。私たちの心を、あなたへの愛情で満たしてください。

アッラーよ!私たちをクルアーンの知識で賢明な者としてください。その終わりのない熟考の中で、そして預言者ムハンマドのバラ園で、心を活気づかせてください。あなたの崇高な御前に、正しい心で参上することができるように…

アーミーン。

クルアーンと熟考

-3-

微粒子ほどの小さなプラタナスの種が肥沃な大地を要因として、巨大な木となり、獲得する大きな栄光のように、私たちにある熟考や感覚の力も、クルアーンによって養われ、力を与えられた結果として到達することのできる真実は、いかに荘厳なものであることでしょうか。従ってクルアーンの、無尽蔵の恵みと崇高な導きがなければ、熟考や感覚といった能力は、肥沃な土壌を得られないまま乾いてしまった種のようになったでしょう。

クルアーンと熟考－3－

人にしもべとして振る舞うことを責務として与えられたアッラーは、、天や地に何があろうと全てを人の為に奉仕するのに備えのできている状態とされ、[12]意識の深みと共にしもべとして生きることができるよう、熟考する力といった心の細やかさを与えられました。また人が信仰において完成に至り、アッラーの御目にかかることができるように、「最も素晴らしい模範と導きの為の人格」として預言者たちを派遣するという恵みをくだされたのです。

預言者たちの媒介によって実現するアッラーの支援は、末世の預言者ムハンマドと、その媒介によって全人類に与えられたクルアーンによって頂点に達しました。

この為に、私たちに与えられているこれほどの恵みに加え、私たちがムハンマドのウンマであること、クルアーンを与えられていることによって、アッラーへの感謝はどれほど行っても足りないのです。なぜなら、微粒子ほどの小さなプラタナスの種が肥沃な大地を要因として、巨大な木となり、獲得する大きな栄光のように、私たちにある熟考や感覚の力も、クルアーンによって養われ、力を与えられた結果として到達することのできる真実は、いかに荘厳なものであることでしょうか。従ってクルアーンの、無尽蔵の恵みと崇高な導きがなければ、熟考や感覚といった能力は、肥沃な土壌を得られないまま乾いてしまった種のようになったでしょう。だから私たちしもべにとってクルア

12.　参照：跪く時章第13節

ーンのおかげで実現したアッラーの恵みの崇高さと無辺の偉大さを認識すること以上に、大きな恵みはないのです。この真実は、宇宙の時代であるこの21世紀においてアッラーの布教を得ることのできていない人々の熟考や学びにおいて示しているレベルの低さを、より明白な形で示しています。いまだに、変容させられてしまった宗教を信じる何百万人もの人々、さらには石でできた仏像を崇拝する仏教徒、無力な動物である牛を神聖なものとするヒンズー教徒、同様に無力なものを神格化している何十億もの人々の存在は、私たちに与えられている預言者ムハンマドの恵みの偉大さを把握する為の警告に満ちた光景となります。しかし、それよりも悲しいものは、信仰の恵みを受けていながら、我欲や世俗的な理由の為に、真実の大声での呼びかけに対し、驚くべき有様で耳をふさいでいることです。あらゆる時代に存在するこのような人々に対し、クルアーンは、

「聾唖で盲人なので、かれらは引き返すことも出来ないであろう」（雌牛章、第2章、第18節）と語っています。

従ってアッラーは、これらの言葉に対し信者たちが覚醒し、理解力を持ち、感情の深みを持つことを求められます。クルアーンでは次のように語られています。

وَالَّذِينَ إِذَا ذُكِّرُوا بِآيَاتِ رَبِّهِمْ لَمْ يَخِرُّوا عَلَيْهَا صُمًّا وَعُمْيَانًا

「また話題が主の印に及べば聾唖者か盲人であるかのように、戯らに知らないふりをしない者」（識別章、第25章、第73節）

このような時代には、ムスリムにとって二つの重要な役割があります。

その一つは、岩の隙間の間から芽を出すチャンスを得たナディアの花のように、私たちに示されている恵みの価値を認識し、感謝の気持ちの中で生きることです。二つめは、この神の恵み、もてなしを自然な形で産むことになる、真実や事実を得られなかった人々への慈悲の気持ちと共に、その真実を伝える努力をすることです。

クルアーンでは次のように語られています。

「また、あなたがたは一団となり、（人びとを）善いことに招き、公正なことを命じ、邪悪なことを禁じるようにしなさい。これらは成功する者である」（イムラーン家章、第3章、第104節）

「人びとをアッラーの許に呼び、善行をなし、「本当にわたしは、ムスリムです。」と言う者程美しい言葉を語る者があろうか」（フッスィラ章、第41章、第33節）

布教の努力が、望まれたように実りあるものとなる為には、広いクルアーンの内容において、他の時よりもない、心や頭を使い、クルアーンによって方向づけを行い、クルアーンの道徳によって徳を身に着けることが条件となります。つまり、クルアーンの広い精神性やそこに含まれるものにおいて、自然科学者が物質的な世界を研究する際の洞察力や努力以上の努力や心の洞察力を身に着けることが必要なのです。

物質主義の発展が人間を低俗にさせ、不幸を用意するよりほかの結果を生じさせないということは明らかです。この悲惨な結果の理由は、人が真実をただ理性によって捕えることから生じます。クルアーンは、啓示の中で、価値を得ている理性を示して16回、

«يَآ اُو۬لِى الْاَلْبَابِ»「理性を持つ者よ」という呼びかけを行う一方、何度も「あなた方は理性を用いないのか、あなた方は

考えないのか、認識しないのか」という形での警告を含んでいます。

あらゆる学問の前を行くクルアーンは、人間の熟考や学びへの傾向を満たすという点で、最後の審判まで毎日、新しい発見によりいかに尊い源であり、いかに恵み豊か泉であるかという真実を示し続けるでしょう。

私たちムスリムは、クルアーンの完全さを人々に時、彼らに警告するという点で不十分であること、そして模範と成れていないことの責任を考え、恐れを感じるべきです。特に、何世紀にもわたって実現化されてきた学問上の発見により、何百万回もクルアーンの正しさが確認されたのに、この真実が信仰を求めるものであるという真実を、この世紀の様々な要因や可能性にもかかわらず、伝えることができずにいることについて、世界各地で生きる不注意な人々は、アッラーの御前において私たちへの原告となるでしょう。これも私たちの責任を増やすものです。なぜなら、多くが形而上学的である真実を説き明かし、証明することにおいて、現代では学問上の発見は過去の世紀に比べて格段に容易となっているからです。

この世界におけるいくつかの真実は、科学のレベルがそれに適したものになった時に把握され得る形でクルアーンに含まれています。つまりクルアーンは、最後の審判まで全ての世紀の科学レベル、人々の認識に応じて真実を示しています。当然この性質も、アッラーの慈悲が要するものなのです。

なぜなら人間の創造における奇蹟的な特徴、大きな医学の発展、天の地図や地上における理性を驚嘆へと導く秩序やプログラムといったさらに多くの真実が、もし学問上で発見される前にクルアーンで明白に記されていたとすれば、人々が当時の理性や科学のレベルに応じてこれらを受

け入れ、認め、結果として信仰によって誉れを与えられることは決してなかったでしょう。

この点からもクルアーンは、あたかも風が吹くごとに埋められていたものが出てくる地面のようです。その広い内容に対し、必要な形で心や頭を使うことができれば十分なのです。

この世界を示す書によって感情の深みに到達し、この世界の英知と神秘を目撃することは、心を持つ人々の熟考のおかげなのです。アッラーは次の章句で、全ての人をこの熟考へと招かれています。

「かれらは心に悟りが開けるよう、またその耳が聞くように、地上を旅しなかった。本当に盲人となったのは、かれらの視覚ではなく、寧ろ胸の中の心なのである」（巡礼章第22章、第46節）

「また地上には、隣り合う（が相異った）地域がある。ブドウの園、穀物の畑、一つの根から出た、またはそうでないナツメヤシの木、同じ水で灌漑されても、食物としてあるものを外のものよりも優れたものになさる。本当にこの中には、理性ある人びとにとって印がある」（雷電章、第13章、第4節）

真の信者になることは、心が動くこと、その心の熟考と愛情への欲求を目覚めさせることで始まります。

人を人にするものは、脳と心の機能です。ただ脳に積み上げられ、心の世界が忘れられていた時には、人はこの世界の為の人間となるでしょう。逆に細やかで繊細な信者となる為には、心も生地のようにやわらかに、薄くなり、思いの深さに包まれることが必須なのです。心がこの状態で機能している人にとっては、あらゆるものは「その状態という言葉」で語っています。人そのもの、顔、目、その頭は展示台です。あらゆる存在には「その状態という言葉」と呼

ばれる言葉があり、全てがこれらにとって語っているのです。

生まれつき目が見えない人の目が突然見えるようになれば、その人はどれほど驚くことでしょうか。海や木、飛ぶ鳥を見ればどれほど驚くでしょうか。なぜなら全く見たことのないものだからです。「アッラーは何と美しく創造されたのか」と言い、感嘆するでしょう。毎日何千ものこの美しさと出会う人間は、多くの場合、それに気が付かず、深い熟考や細やかな学びという道を見出すこともなく、あたかも恵み豊かな4月の雨がその上を流れていくのに、そこから何も得ることができない硬い岩のように、不注意さの中でそこを通り過ぎて行きます。

クルアーンは、私たちを非常に素晴らしい覚醒へと招きます。

「昼と夜との交替、またアッラーが天から下された糧、それによって死んでいる大地が甦ること、また風向きの変化にも、知性ある者への種々の印がある」（躓く時章、第45章第5節）

「またかれらへの印には、夜がある。われがそれから昼を退かせると、見よ、真っ暗になる。また太陽は、規則正しく運行する。これも全能全知な御方の摂理である。また月には、天宮を振り分けた。（それを通って）ナツメヤシの老いた葉柄のように（細くなって）戻ってくる。太陽が月に追い付くことはならず、夜は昼と先を争うことは出来ない。それらは、それぞれの軌道を泳ぐ」（ヤー・スィーン章、第36章、第37－40節）

「これらは、われが人間のために提示する譬えである。だが知識ある者の外は、これを理解しない」（蜘蛛章、第29章、第43節）

人は障害を通して、どれほど熟考を行い、思いの深みに到達し、洞察力を得たのであれ、アッラーとの愛情の場か

らそれに応じただけのものを得ることができ、死の向こうの幸福もそれに比例して増します。歴史を通して預言者たち、聖人、そして熟考を行った誠実な者たちは、この世界の把握での洞察力の生きた例です。人の本質と良心の深みにあるアッラーを心で知る力は、正しい思い、強い信仰と結びつきへのニーズに秘められています。

理性が狭められてしまった不注意な人々、人生の苦悩を味わった否定者たちは、庇護を受けることなく陥ってしまった恐ろしい孤独の中で、本質的に持っている性質の導きによりアッラーへと戻ること、アッラーの力に助けを求める必要を感じることは、人の創造の目的が要するものです。しかしこの力を枯らしてしまった者、この世界でのアッラーの力の流れから、そして芸術の奇蹟から遠ざかり無関心のままでいる者、この警告に満ちた世界で愚かなままで生きるものは、この世界で彼らが戯れていた目隠し遊びを来世でも続けるでしょう。クルアーンでは次のように語られています。

「かれらは心に悟りが開けるよう、またその耳が聞くように、地上を旅しなかった。本当に盲人となったのは、かれらの視覚ではなく、寧ろ胸の中の心なのである」（巡礼章、第26章、第46節）

「しかし現世でこれを見られなかった者は、来世でも見られないであろう。そしてますます道から迷い去る」（夜の旅章、第17章、第72節）

クルアーンは、心がアッラーへの愛情で満たされた誠実で善良な学者から学ぶ必要があります。その豊かな心から何かを羽いさせ、それを聞く人を思いの深みと熟考へと導くように。

実際、

「クルアーンの読誦の為にどの声や読み方がより美しいか」と尋ねた人に預言者ムハンマドは、

「クルアーンを読んでいるのを聞いた時に、アッラーから恐れていることをあなたが感じた人の声、かつ読み方である」と答えられています。(ダーリミー、ファダイルルクルアーン、34)

逆に、のどから心に降りていない読み方が、人をクルアーンの無限の熟考の地平線や思いの深みに導かないことは明らかです。

この点で、次のような預言者さまの警告に耳を傾けることが必要です。預言者ムハンマドは言われました。

「あなた方の中から、次のような一団が生じる。あなた方の礼拝を彼らの礼拝と比べて、あなた方の断食を彼らの断食と比べて、そしてその他の善行についても彼らの善行と比べて少ないと感じるだろう。彼らはクルアーンを読むが、しかし読んだものはのどから下には降りて行かない。彼らは矢が弓から離れるように、教えを離れるだろう」(ブハーリー、ファダイルルクルアーン、36)

この災いに引き込まれない為にも、クルアーンに関わる時にはより注意深く振る舞い、その章句の熟考の世界に入り、それらの意味を心で消化し、クルアーンの道徳に包まれるよう、努力するべきなのです。なぜならクルアーンは、あらゆる機会に、ムスリムを常に考え、心を動かされるよう招いているのです。クルアーンでは次のように語られています。

「われは明瞭な印と啓典とを、授け(てかれらを遣わし)た」(蜜蜂章第44節)

実際アッラーはクルアーンで、私たちしもべを、崇高なその存在の証拠、そして与えられた恵みの深い英知について熟考するよう招かれています。それらの中で、人々が様々な言葉や色を持つことにも注意をひいています。クルアーンでは次のように語られています。

「またかれが、諸天と大地を創造なされ、あなたがたの言語と、肌色を様々異なったものとされているのは、かれの印の一つである。本当にその中には、知識ある者への印がある」（ビザンチン章、第30章、第22節）

実際、人々の話す言葉は、その言葉を話す民族による委員会が設けられてそこで形成されたものではありません。文法も単語も、共同作業の産物ではありません。一部の言葉では文章は動詞で始まり、また一部の言葉では文章はその動作者で始まり、動詞で終わります。これらは意識を持った選択ではなく、アッラーが下さったものです。この神の恵みと並んで、人間の肌の色の多様性や、様々に異なる民族として創造されたことも、また別の英知による作品です。肌の色は地理的条件がもたらす結果であり、民族は創造の顕示です。この状態は、人々がより容易に知り合い、理解し合う為のものです。どれかが優れていて、どれかが劣っている民族、というようなものではありません。どの民族にも、清らかな人もいれば、災いをもたらす人もいます。重要なのは篤信が優れているかどうかです。この真実をアッラーは次のように語っておられます。

「人びとよ、われは一人の男と一人の女からあなたがたを創り、種族と部族に分けた。これはあなたがたを、互いに知り合うようにさせるためである。アッラーの御許で最も貴い者は、あなたがたの中最も主を畏れる者である。本当にアッラーは、全知にして凡ゆることに通暁なされる」（部屋章、第49章、第13節）

また一方でアッラーは唯一性をご自身に特有のものとされ、あらゆる被造物を雌雄として互いに補完しあう形で創造されました。天国での聖アーダムと聖ハッヴァから始まった夫婦生活は、アッラーが設けられた婚姻の法に基づいて私たち人間にも移行され、イスラームによって永遠のものとされました。

アッラーは仰せられます。

「またかれがあなたがた自身から、あなたがたのために配偶を創られたのは、かれの印の一つである。あなたがたはかの女らによって安らぎを得るよう（取り計らわれ）、あなたがたの間に愛と情けの念を植え付けられる。本当にその中には、考え深い者への印がある」（ビザンチン章、第30章、第21節）

アッラーは婚姻を預言者ムハンマドのウンマの為の恵みとされ、啓典やスンナに基づいた婚姻を、現世での生における一つの幸福の天国とされました。

結婚において二人の他人が驚くほどの形でなじむことにも、知性を驚かせるような細やかな教訓や英知が秘められています。両親のもとから離れた他人同士である2人の若者が、アッラーが彼らの間に恵みとして与えられた愛情や慈悲によって互いの心を結びつけ、離れてきた親元の家を陰に残すほどに誠実で魅力的な環境で生きることは非常に崇高な権限であり、そのことについて深く深く熟考すべき、神聖な教訓なのです。

人間は神の試練の要するものとして、努力し、真実を受け入れるにおいてはなかなか決意ができないという本質を持っている為、クルアーンの章句は様々な宗派や学派の人々の為の様々な例を備えています。皆が自分の状態に応じてそこから何かを得られる為にです。この真実はクルアーンでは次のように語られています。

「本当にこのクルアーンの中で、われは凡ての例を引いて人間のために詳しく述べた。しかし人間は、論争に明け暮れる」（洞窟章、第18章、第54節）

クルアーンは人を、その性質の細やかさに注意をひきつつ、熟考へと招きます。人に、人生について熟考するべきという点で次のように語っています。

وَمَنْ نُعَمِّرْهُ نُنَكِّسْهُ فِى الْخَلْقِ أَفَلاَ يَعْقِلُونَ

「誰でも長寿させるさいには、われは創造を逆に戻らせよう。かれらは、それでも悟らないのか」（ヤー・スィーン章、第36章、第68節）

また別の章句では、人のあり方における罪と篤信への傾向の真実を次のように指摘しています。

وَنَفْسٍ وَمَا سَوَّاهَا فَأَلْهَمَهَا فُجُورَهَا وَتَقْوَاهَا قَدْ أَفْلَحَ مَن
زَكَّاهَا وَقَدْ خَابَ مَن دَسَّاهَا

「.魂と、それを釣合い秩序付けた御方において、邪悪と信心に就いて、それ（魂）に示唆した御方において（誓う）。本当にそれ（魂）を清める者は成功し、それを汚す者は滅びる。」（太陽章、第91章、第7－10節）

再び復活によりアッラーの崇高な力とそれに対する人間の無力さ、そしてその将来で彼を待つ神の真実を示します。

「人間は考えないのか。われは一精滴からかれを創ったではないか。それなのに見よ、かれは公然と歯向っている。またかれは、われに準えるものを引合いに出して、自分の創造を忘れ、言う。「誰が、朽ち果てた骨を生き返らせましょうか。」言って

やるがいい。「最初に御創りになった方が、かれらを生き返らせる。かれは凡ての被造物を知り尽くしておられる」（ヤー・スィーン章、第36節、第77－79節）

時間に追い立てられる人間に、時間が観念的なものでることを示します。

كَأَنَّهُمْ يَوْمَ يَرَوْنَهَا لَمْ يَلْبَثُوا إلاَّ عَشِيَّةً أَوْ ضُحَاهَا

「かれらがそれを見る日、（墓の中に）滞留していたのは、一夕か一朝に過ぎなかったように思うであろう」（引き離す者章、第79章、第46節）

人を常に熟考へと招くこれらの言葉は、次のことを示します。このような理性や心の活動が、アッラーが命じられた一つの義務であるということです。預言者ムハンマドは1400年前に、

「熟考にかなうイバーダはない」という意味のハディースで、熟考とその結果として心が恵みを与えられることが、イバーダのレベルのものであると見なしていることを示されました。さらには、それがイバーダよりも前に存在する、必須事項であることを指摘されたということもできるでしょう。なぜなら、イバーダと同様、他の善行の重要性と本質を把握することも、熟考によって可能となるからです。

1400年前にその重要性が無数のクルアーンの章句とハディースで指摘されていた熟考は、この世紀においては-前述によるなら-その重要性がさらに増していることが確実でしょう。この点における責任を正しく果たす為に、真実を伝え、善を勧めることにおいてどれほど努力すべきかということについては、語っても語りつくせない程です。

❁

インシャッラー、その到来にとって私たちが誉れを与えられるシャーバン月の第14日を15日に結びつけるベラートの夜は、毎年誠実な信者によって、大きな信仰の喜びのうちに活用されています。[13]

この夜は、定めと識別の夜です。なぜならこの夜には、1年の間に生まれる者、死ぬものが記され、恵みが下され、善行がアッラーの位階に高められるからです。

ハディースでは次のように語られています。

「シャーバン月のなかばの夜には礼拝をし、日中には断食をしなさい。なぜならアッラーは日没と共にこの地上の天に慈悲の光と共に顕れ、夜明けまでしもべたちに次のように呼びかけをなされるからである。

『私に許しを求める者はいないか。彼の罪を許そう。私に糧を求める者はいないか。彼に糧を与えよう。災いの中にいる者はいないか。ドゥアーしなさい、彼に癒しを与えよう。このような者はいないか、あのような者はいないか』」(イブニ・マジャ、イカーマトゥ・サラートゥ、191)

つまりアッラーは、この夜の為に特別な慈悲、恵み、受け入れの扉を朝になるまでいっぱいに開かれているのです。

ベラートの夜を礼拝で、日中を断食で活用することが、信者に特別な価値を獲得させるということは、預言者ムハンマドの素晴らしい約束であり、吉報です。この夜を礼拝に加えてクルアーン、ズィクル、祝福祈願や精神的な説話などによって活用すべく、努力するべきなのです。

---

13. この文章の掲載はラマザーン月の前の月であるシャーバン月にあたっていた為、この月の特徴に簡単に触れられている。

ベラートの夜に続く日々や夜についても注意を払うことが必要です。それらは光の源であるラマダーン月の神聖な招待状であるからです。ラマダーン月の喜びで私たちの興奮が精神的なものとなるべきであり、善行が増やされ、信仰上の愛情たアッラーへの誠実さが強められるべきです。

特に礼拝は、心と体のバランスの中で、喜びの空気の中で実行すべきです。なぜなら礼拝は、アッラーとしもべの崇高な対話だからです。

ある人が、預言者ムハンマドを訪ね、

「アッラーの使徒よ、私に有益で本質的な言葉を教えてください」と言いました。預言者ムハンマドは次のように応えられました。

「礼拝に立った時に、この世界に別れを告げる人のようでありなさい。言い訳を必要とするようなことを話すのはやめなさい。他人が手にしている現世的なものから希望を絶つことを決意し、それに辛抱しなさい」（イブン・マジャ、ズフド, 15）

信者は、行った礼拝の全ての得と報償を得る努力をすべきです。この神の恵みを損なわないようにするべきなのです。なぜならアッラーの使徒は、ハディースで次のように語られています。

「しもべが礼拝を行い、しかしその礼拝の半分、*3*分の*1*、*4*分の*1*、*5*分の*1*、*6*分の*1*、*7*分の*1*、*8*分の*1*、*9*分の１、さらには*10*分の*1*のみが彼の為に記録される」(アブー・ダーウード、サラート、123、124)

要するに、慈悲と恵みの陰を私たちにかけるラマダーン月により、次のことを延べるべきでしょう。ラマダーン月で啓示されたクルアーンは、信者たちに最後の審判の日まで、長い、あるラマダーンを生きさせる為に下されたので

す。ラマダーンとクルアーンは、行動においても生き方においても、生涯を鍛錬する存在なのです。

クルアーンでは次のように語られています。

「ラマダーンの月こそは、人類の導きとして、また導きと（正邪の）識別の明証としてクルアーンが下された月である。それであなたがたの中、この月（家に）いる者は、この月中、斎戒しなければならない」（雌牛章、第2章、第185節）

アッラーは、クルアーンが導きの為の証書であり、英知の基準で満たされた輝かしいガイドであることを告げられた後、この神聖な月に至ることのできた人が、クルアーンの導きのもとに断食を行う責任を負うことを明らかにされています。

忘れてはいけないことは、クルアーンについて、

ただその呼びかけを聞くこと、真実の地図を一瞥することは十分ではありません。永遠の、すなわち来世での生を救う為の道を示している神聖な命令に対し、心の喜びと共に従うことを必要とするのです。なぜなら信者とは、我欲の攻撃に対し、クルアーンの精神性と共に厳しい戦いを行う人であるからです。

アッラーよ！この神聖なる月に、思いの深さと共にクルアーンと天国の生を生きることを可能としてください。信仰とクルアーンを証書と、断食を慈悲と、サフール（断食前の食事）を豊かなものと、イフタールを出会いの時としてください。

アーミーン。

悔悟と涙

後悔の炎で満たされた心と濡れた目で、ドゥアーと悔悟を行いなさい。なぜなら花々は、太陽があり、濡れた場所で咲くからである。

メヴラーナ

悔悟と涙

仕立て屋が、誠実な信者である一人に、

「アッラーの使徒の、『アッラーはしもべの悔悟を、死ぬ寸前に至るまでは受け入れられる』（ティルミズィー）というハディースについて、あなたはどのように考えますか」と尋ねました。

その人も、彼に訊ねました。

「そう、その通りである。しかしあなたの職業は何かな？」

「私は仕立て屋です。服を塗っています」

「仕立てにおいて最も簡単な仕事な何か」

「ハサミを持って布を切ることです」

「あなたは何年、その仕事についているのか」

「30年になります」

「死が迫った時に、布を切ることはできるか」

「いいえ、できません」

「仕立て屋よ、苦労して学び、30年間も簡単に行っていたその仕事を、その瞬間にできないのであれば、その人生で一度も行ったことがない悔悟を、その瞬間にどうやって行うことができようか。今日、あなたの力がまだあるうちに、悔悟をしなさい。最期の息の下で悔悟すること、良い形で終えることはできないかもしれないのだ。あなたは一

度も、『死が訪れる前に、悔悟を行うことに急ぎなさい』という言葉を聞いたことはないのかね」

それに対し、仕立て屋はイフラースのうちに悔悟を行い、自らも誠実なしもべとなったのでした。

この物語で見られるように、しもべの前には何種類もの現世の、そして我欲の落とし穴がありあす。これらのうち最も危険なものが、心からの悔悟をいつでも後回しにすることです。悔悟を行うことは、この生涯全ての為の命綱です。実際、預言者ムハンマドは、サハーバたちに「最も大きな悩みとは罪の悩みであり、その薬は夜の闇の中での悔悟[14]である」ことを告げておられます。

なぜならアッラーへと向かい、心が崇高なレベルを得る為に重要な位置にある悔悟は、精神的な穢れから清められるための唯一の媒介なのです。受け入れられる悔悟は、しもべとアッラーの間の妨げや覆いを取り除きます。誠実な行いの為にこの状態はこの上なく重要です。なぜなら、目的に達する為の妨げとなるものが取り除かれること、それによって心が真の目的に適した状態になることが必要であるからです。その為に、精神的な完成の為に、あらゆる神秘主義の道において、暁の時刻の悔悟が始点となるのです。

最初の悔悟は、最初の預言者アーデムによって始まりました。彼はその悔悟で、

قَالاَ رَبَّنَا ظَلَمْنَا أَنْفُسَنَا وَإِنْ لَمْ تَغْفِرْ لَنَا
وَتَرْحَمْنَا لَنَكُونَنَّ مِنَ الْخَاسِرِينَ

14.　参照：デイレーミ、ムスナド、1,136

「かれら両人は言った。『主よ、わたしたちは誤ちを犯しました。もしあなたの御赦しと慈悲を御受け出来ないならば、わたしたちは必ず失敗者の仲間になってしまいます』」（高壁章、第7章、第23節）と懇願しました。このドゥアーは、彼の時代以降、最後の審判の日まで訪れるその子孫への、悔悟の模範です。

アッラーに従う聖人たちは、悔悟を三つに分類しています。

1．一般の人々の悔悟：彼らはその罪の為に悔悟します。

2．選ばれたしもべたちの悔悟：彼らは不注意であることの為に悔悟します。

3．最も選び抜かれた、純粋なしもべたちの悔悟：彼らはアッラーにより近しくなれるよう、悔悟します。

ただし、善行の全てにおいてそうであるように、悔悟にも、誠実さとイフラースという条件があります。多くの、アッラーに従う聖人たちは自分が行った悔悟についてすら悔悟を行いました。つまり、悔悟を必要とする悔悟からアッラーに庇護を求め、クルアーンで語られている

「謙虚に悔悟してアッラーに帰れ」（禁止章第8節）の神秘に達することが必要です。なぜなら、我欲とシャイターンは、心を逸脱させることができなければ、正しい道から現われます。そして素晴らしいもの、よいものを提案する師のように近づきます。それによってしもべを罠に陥れ、悔悟を台無しにするのです。悔悟したことをまた行うことは、来世での生を汚す災いです。アッラーは次のように語られています。

عَسَى رَبُّكُمْ أَنْ يَرْحَمَكُمْ وَإِنْ عُدْتُمْ عُدْنَا

「或るいは主もあなたがたに情けを与えるであろう。だがあなたがたが（罪を）繰り返すならば、われも（懲罰を）繰り返すであろう」（夜の旅章、第17章、第8節）

なぜなら、悔悟したことをまた繰り返す人は、もはやシャイターンの道化師になっているということだからです。もはや、いつ悔悟をしたとしても、シャイターンやシャイターン化した不注意な者が一度「ああ、君には気の毒なことだ」というと即座にまた同じ過ちを犯すからです。その為にクルアーンでは次のように語られています。

يَا اَيُّهاَ الَّذِينَ آمَنوُا تُوبوُا اِلَى اللهِ تَوْبَةً نَصُوحاً

「あなたがた信仰する者よ、謙虚に悔悟してアッラーに帰れ」（禁止章、第66章、第8節）

この真実を示唆するものとして、詩人は悔悟に向かう人の心を次のように警告しています。

「いくつかの言葉で介護を行う時、
心が不注意なのであれば、我欲は無数のトンネルに潜っていく

（ラフメティ）

悔悟に関して、この点も注意をひくものです。

「ジャミウッ・サウル」というハディースの本で、人々の行いを記録する天使のうち、罪を記録する天使は、罪が行われてから6時間度に記すこと、その間に悔悟をするかもしれない、と待っていることが記されています。だから「私は悔悟したことを守ることができない。また罪を犯してしまう。だから悔悟はしない」とは言ってはいけないのです。常に、悔悟しているべきなのです。なぜならアッラーが恵みを下され、二度とそれを繰り返さないかもしれない

からです。ただ知っておくべきことは、悔悟とは許しを乞うことであり、心からの後悔がなされること、許しを求めている罪を二度と起こさないという点での強い意志を必要とするのです。このことについてアッラーは次のように警告されています。

「アッラーのことに就いて欺く者に、あなたがたは欺かれてはならない」（ルクマーン章、第31章、第33節）

そもそも、

「罪についての悔悟は、後悔と懺悔から成り立る」(アフマド・ビン・ハンバル、VI、264)というハディースで、再び罪へと陥ることのない悔悟を示しています。

同時にこのハディースは、悔悟が後悔と共に始められるべきであることを告げています。これも、罪の穢れが心からの涙によって清められることを意味します。

次のように伝承されています。

悔悟と後悔の中にあったある罪人に、覚醒した状態の時にその罪のリストが渡され、「これらを読め」と言われました。これに対し罪人は非常に泣き、涙でそのリストの罪が見えない程になりました。そしてこの心からの涙はその罪の全てを洗い流し、清めました。こうしてその罪人は許されました。

従って時には一つの罪は、許しの為に千の涙を必要とします。時には一滴の涙が、千の罪を清めます。

なぜなら涙は、アッラーの愛情の結びつきに入った者の為の悔悟の泉であるからです。罪を洗い、清めます。アッラーへの感謝の表明なのです。涙は、アッラーの希望の修道場です。全ての希望が失われた時に、この修道場の敷居で泣くことができる者は、真に幸福な者なのです。

心からの涙によって世界を眺める者にとって、そのしずくのそれぞれは、そこに無数の大洋を映す鏡のようです。あらゆる微粒子にアッラーの神秘が明白に、はっきりと映されているのです。読めなかった多くの英知のページが、それによって読めるようになります。なぜなら、涙は言葉が運ぶことのできない意味を持ち、表現することのできる言語であり、しもべはそれによって、自分すら想像のできなかったことを、アッラーから求めるのです。だから、愛情は涙の泉のほとりで顕れるのです。哀れな人々はその岸で休むのです。

アッラーの為に目からこぼれた一滴の涙の価値を、次の物語は非常に素晴らしく表現しています。

ジュナイディ・バーダディはある時道を歩いている時、天から天使たちが降りてきたこと、何かを取ったことを目にしました。そのうちの一人の天使に

「あなた方が取ったのは何ですか」と尋ねました。

天使は応えて言いました。

「アッラーの親友がここを通る時、心から『ああ』と嘆き、数敵の涙をこぼしました。その為にアッラーの慈悲と許しを得ようと、その涙を取りに来たのです」

ハディースでは次のように語られています。

「二つの目があり、それらには地獄の炎は触れることがない。アッラーの為に泣く目と、アッラーの道において見張りに立ち、寝ずに朝を迎える目である（ティルミズィー）」

罪人が悔悟と涙でどのように清められるかということの例としてメヴラーナは汚れてから蒸発し、そして地上に

再び透き通った恵みとして戻る水について言及されています。

「清らかさと透明さがなくなると、つまり泥と混ざって濁ってしまうと、水も私たちのように地上で穢れたことに不安を感じ、驚く。叫び、アッラーに庇護を求め始める。この叫び声と懇願に対し、アッラーはそれを蒸発させ、天に戻される。そこで様々な経過をたどらせ、清められる。そして時には雨、時には雪、時にはみぞれとなって地上に降らせられる。最後には、岸のない広い海に到達させられる」

疑いもなく、この象徴はアッラーの救いに到達することを望む罪を犯したしもべたちに対して示される慈悲と愛情を示すものです。実際、罪の穢れにより心が泥まみれになった人に、悔悟の水と後悔の太陽が集まれば、アッラーはその心を天にあげられます。埃、土、そしてあらゆる我欲の汚れから清められます。再び、被造物の中で最も誉れあるものとして、つまり一つの慈悲として、地上に戻されます。この状態の、最も広い顕現は、礼拝において実現します。この観点から、正しく行われた礼拝を「信者のミラージュ」と呼ぶのです。

しかし人間はこの真実を多くの場合理解せず、この世界に夢中になり、泣く代わりに笑いすぎてむせているのです。アッラーは、

وَتَضْحَكُونَ وَلاَ تَبْكُونَ وَأَنْتُمْ سَامِدُونَ

「嘲笑はしても、泣かないのか。あなたがたは、自惚の中で時を過ごすのか」（星章、第53章、第60－61節）

فَلْيَضْحَكُواْ قَلِيلاً وَلْيَبْكُوا كَثِيرًا جَزَاءً بِمَا كَانُوا يَكْسِبُونَ

「それでかれらを少し笑わせ、多く泣かせてやりなさい。これは、かれらが行ったことに対する応報である」（悔悟章、第9章、第82節）

つまりアッラーは、しもべに、悔悟と涙でその罪を清めることを求めておられるのです。このことにおいてメヴラーナは、涙の重要性を次のように語っています。

「ろうそくは、泣いて涙を流すと、より明るくなる。木の枝も、泣く雲の恵みと太陽の熱で芽吹き、生き生きとする。つまり、果実の成長の為に熱と水が必要なのだ」

「同様に、悔悟が受け入れられる為にも、雲、稲光、つまり涙と心が焼かれることが必要である。」

「もし心の稲妻が光らず、目の雲が雨を降らさなければ、我欲の怒りの火と罪の炎がどうやって消えるだろうか。出会いの恵み、すなわち神の顕現の光の輝きがどうやって心に生じようか。意義の泉がどうやって沸き立ち、流れようか。雨が降らなければバラの庭園はその木々にどうやって神秘を語ろうか。スミレはジャスミンとどうやって和解できるだろうか」

「この世界は、そのまま、泣かせておきなさい。この土は水から離れれば乾いてしまう。川や谷から遠い、遠ざかった水は黄変し、悪臭を放ち、濁り、真っ黒になる」

「天国のように緑あふれる庭、庭園は水から離れてしまうと黄ばみ、枯れ、葉が乾き、散ってしまい、病気の巣となる。（人もまた、同様である）」

この状態から守られる為に、シュアイブの目は泣く余りに見えなくなったのです。預言者ムハンマドも、

「私が知ったことをあなた方が知れば、わずかに笑い、たくさん泣くだろう。飲み食いする気にもならなかっただ

ろう」(スユーティ、ジャーミウル・サギールII、p. 10)と言われました。

なぜなら、心の中の罪でできているこの傷を、一生涙で洗って清める人は、天国に入ることのできる愛に満ちた人であるからです。その為、預言者ムハンマドを始めとして全ての聖人たち、誠実な信者たち、忠実な信者たちは困難な時も豊かな時も、悲しみにおいても喜びにおいても、常にアッラーに庇護を求め、懇願していたのです。なぜなら預言者たちにおいてすら、無意識に生じてしまうかもしれない過ちとして表現される「過ち」がある為に、悔悟や懺悔において十分だと言えるしもべは考えられないのです。悔悟と懺悔は、その本質が繊細な後悔と庇護であることから、アッラーに近づく為の最も効果的な媒介なのです。

また一方でアッラーがしもべに与えられる苦しみ、苦難と共に、しもべたちに求められた悔悟や涙は、永遠にかかわる取引なのです。これは非常に益のある取引であり、そのことに気付いた人はどのような災難にも不満を言わず、無限の利益を手にするのです。そのような人々の一人として、メヴラーナは何と素晴らしく語っていることでしょう。

「アッラーは、この世界であなたから、数敵の涙を取られる。しかしその対価として天国の無数の豊かさを与えられる。アッラーはあなたから、愛情や苦しみで満たされた嘆き、叫びを受けられる。嘆きや叫びそれぞれの対価として、何百もの精神的な高い地位、到達することのできない位階を与えられる」

しかし知っておくべきことは、泣くということはどれも同じではないということです。それらの間には大きな差があります。実際、冷たく、嘘っぽい、偽りである多くの嘆

きがあり、これらは不注意さと欺瞞で成り立っているのです。スフヤーン・サウリが次のように語っています。

「泣くことは、10に分かれる。そのうちの9は偽善である。そのうちのただ１つが、アッラーの為である。アッラーの為に泣くことは、一年に一度であったとしても－しもべが地獄から救われる要因に、インシャッラー、なるであろう」

伝承によれば、夫と喧嘩をした女性が泣きながらシュレイフを訪れました。その時、そこにいたシャービは彼にこう言いました。

「ウマイヤ！この女性は虐げられたように思える。いかに泣いているのか、見ないのか」

それに対しシュレイフはこう言いました。

「シャービ―よ、ユースフの兄弟たちも、無慈悲であるのにも関わらず泣いて父親のそばにやってきた。泣いていることだけを見て判断を下すのは正しくない！」

このような涙は、当然受け入れられない。もう一つの拒まれる涙は、怠惰や不服を示す涙である。これらは額に汗することもなく、欲求不満に陥っている人々の、空疎で空しい涙です。このような人々について故アーキフは次のような警告をしています。

「悲しむこと、嘆くことをやめなさい

泣くことに益があるのなら、父が起きてきていただろう

涙から何が出るというのか、なぜ汗を流さなかったのか」

私たちがここで言及しているのは、アッラーが求められる「泣き」であり、親友や敵の前で自分を見下させるよう

な涙ではありません。逆に、天に上昇し、心にミラージュをさせるような「泣き」です。広い海がそこに多くのゴミを浮かべ、それらを沈まないように守っているように、私たちの涙も、私たちが沈んでしまわないように守り、自分の上に載せ、目的の場所に到達させる水のようであるべきなのです。これらは目ではなく、心から流れ、人ではなくアッラーに示されるしずくでできているのです。

涙についてのもう一つの重要な問題は、この「泣き」が、不満の「泣き」ではあってはならないということです。なぜなら不満には、受け入れないという状態があるのであり、これは決して認められないからです。なぜなら不満は人を反発にまで導き、その手にある全ての資本を無にするからです。これはアッラーの懲罰を引き寄せるものです。私たちがここで意図している「泣き」は、懲罰を引き寄せるものではなく、親友を満足させられたかどうかという不安であり、罪の穢れから清められる為の要因となるものです。

つまり、死が訪れた時には、眠っている者は全て目覚めます。目を開き、真実を見るのです。しかし最期の息で真実を見ることは、もはや何の役にも立ちません。ちょうど、フィルアウンにおいて役に立たなかったように。メヴラーナは大変素晴らしく語っています。

「利口な者は先に泣く。何も知らないものは最後に息詰まり、嘆く。あなたは仕事の始めのうちに、その最後を見なさい。最後の審判の日に後悔しないように」

「この点で、次の鳥の状態があなたの為の教訓となるように。それは猟師の罠の麦を見て、我を忘れ、頭を使わなくなる。こうして意識しないうちに麦を食べ、しかし罠にはまって閉じ込められる。今度はそこから救われる為に何度もヤー・スィーン章を読み、家畜章を読むが、何の役

にも立たない。災難が身に起こってから泣くこと、叫ぶこと、しくしくと泣き続けることは何の役に立とうか。この嘆きや叫びは、罠に落ちる前に必要だったのだ」

実際、ルート族は神の報復を引き寄せる怒りの為に滅亡させられることを知り、イブラヒームは彼らがどれだけ反発しているかを完全に知らない為に、彼らの為に慈悲と共にドゥアーすることを望みました。その時天使たちは、

「もう、ドゥアーの時間は過ぎてしまった」と言ったのでした。

アッラーの御望みによって、死が私たちにどこで、いつ、どのように訪れるかを私たちは知りません。その為、心が「死ぬ前に、死になさい」という神秘によって鍛錬されること、あらゆる瞬間にアッラーと出会うことに備えて行くことが必須なのです。そうでなければ、最期の息は「ああ、こうしてどこに行くのか」という嘆きに満ちた悲しみの瞬間になります。クルアーンでは次のように語られています。

وَجَاءَتْ سَكْرَةُ الْمَوْتِ بِالْحَقِّ ذَلِكَ مَا كُنْتَ مِنْهُ تَحِيدُ

「そして実際に死の昏睡が訪れる。これはあなたが避けてきたもの」（カーフ章、第50章、第19節）

従ってしもべにとって最も重要な問題は、我欲の覚醒と、心の清めです。ここまで説明してきた悔悟や涙は、この状態に至る為の扉のようなものです。この扉から中に入った後、行うべき誠実な行為の全ての実行も、もちろん必須となります。ファルド、ワージブ、そしてスンナを作法に従って実行した後、特にしもべの権利、両親の権利、アッラーの為の施し、全ての被造物に対する慈悲、いたわり、そして許しといった美点を備えることが必要です。例

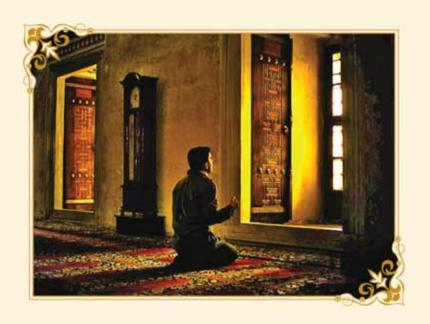
えば、この美点のうち、許すことができるという状態に至ることのできた者は、アッラーの許しによりふさわしい状態となります。なぜなら、「私たちを哀れんでください」という叫びに心を寄せることのない、慈悲と愛情を持たない人は、人生に迷い、悲嘆にくれる旅人であるからです。

その為に、心は悔悟と涙の中で、あらゆる行為の美点を手にし、アッラーへと向かわなければならないのです。この方向付けは疑いもなく、人生のあらゆる瞬間を内に含むべきです。同時に一部の特別な時間は、しもべの為の特別な利益の時期です。ちょうど、春の季節の、他の季節の中での価値や美しさのように、しもべに与えられる精神的な春が存在し、それらのうち最も尊いものは千の月よりもなお尊い夜、つまりクルアーンが「秘められた銘板」から世界の天空に下され、この世界と人間が光を得た「みいつの夜」を含む、ラマダーン月です。[15]この神聖な、そして特別な月は、夜のように暗くなってしまった心をその光で照らす、輝かしい満月なのです。天から地へと、ミラージュの為に開かれた覆いです。この観点から、心が覚醒している信者に必要なものは、生涯を通してこのような特別な時に得ることのできる豊かさと恵みと共に、つまりラマダーンの繊細さと共に過ごすことです。なぜならこのような生き方に飾られた誠実な心にとって、最後の審判は悲しみの日ではなく、イードの朝のようであるからです。

アッラーが私たち皆にこのようなイードの朝を迎えさせてくださいますように。愛と希望、そして誠実な涙によって神の慈悲と許しへと至らせてくださいますように。

アーミーン。

15.　この文章はラマダーン月に発表されたものである。

ドゥアー

　ドゥアーは、繰り返すごとに内なる感情として信者の魂に縫い付けられ、人格と混ざり合って一つの個性となります。この為に、崇高なる魂を持つ人々は常にドゥアーをして生きるのです。

ドゥアー

人類への慈悲としてつかわされた全ての預言者とアッラーの友たちは、困難な時でも豊かな時でも、苦しい時でも喜んでいる時でも、心を常にアッラーに向け、懇願の空気の中で生きていました。彼らはどのような場合でもアッラーに懇願することの必要性をその態度や振る舞いで示した永遠のガイドなのです。

アッラーに庇護を求めることは、創造における法則としもべであることが要するものです。地と天に何があろうとも、アッラーの定められたことに従っており、その無限の力の主に、その状態という言語でズィクルを行い、アッラーに懇願しているのです。真の宗教上のしつけも、信者が常にドゥアーをするようになることを目標とします。なぜならドゥアーは、心においてアッラーに開かれる、最も崇高な扉のドアであるからです。

ドゥアーは、繰り返すごとに内なる感情として信者の魂に縫い付けられ、人格と混ざり合って一つの個性となります。この為に、崇高なる魂を持つ人々は常にドゥアーをして生きるのです。なぜなら彼らの心は、ドゥアーに包まれることの重要性に関する、クルアーンの次の警告に恐れおののいているからです。

アッラーは次のように語られています。

قُلْ مَا يَعْبَأُ بِكُمْ رَبِّى لَوْلاَ دُعَاؤُكُمْ

「預言者よ。(不信者に)言ってやるがいい。『あなたがたがわたしの主に祈らないなら、かれはあなたがたを、構って下さらないであろう』」（識別章、第25章、第77節）

そう、信者の魂において、アッラーへのドゥアーと懇願の気持ちが常在することは、アッラーとしもべの間に精神的な結びつきを形成します。魂が高まった状態でのドゥアーは、心がアッラーの慈悲と抱き合った瞬間なのです。

ドゥアーで求められるものは、アッラーの慈悲、慈しみです。従って、ドゥアーでは、心からアッラーの御前へと高められる最初の表現は、アッラーに従っていないこと、罪深いこと、無力であること、弱いことの訴えであるべきです。ドゥアーは、無限の力の主であるアッラーに、無力さを自覚した上で向かい、その御前において服従し、静かに頭を垂れることです。事実、ドゥアーを無力さや欠点を訴える形で始めることは、アッラーの慈悲を招き、ドゥアーが受け入れられるものとなることに大きな影響を及ぼします。実際、アーダムとハッヴァは、クルアーンの言葉で示されているように、ドゥアーにおいて次のようにアッラーに告白しました。

「かれら両人は言った。『主よ、わたしたちは誤ちを犯しました。もしあなたの御赦しと慈悲を御受け出来ないならば、わたしたちは必ず失敗者の仲間になってしまいます』」（高壁章、第7章、第23節）

別の章句では、預言者ユーヌスのアッラーへの懇願が次のように示されています。

「またズン・ヌーンである。かれが激怒して出かけた時を思いなさい。かれは、われが自分を難儀させるようなことはないと思いながらも、暗闇の中で、『あなたの外に神はありません。あな

たの栄光を讃えます。本当にわたしは不義な者でした。』と叫んだ」（預言者章、第21章、第87節）

征服者スルタン・ムラッド・ハン1世のコソボを前にしての子のドゥアーは、無力さの告白によって行われるドゥアーの素晴らしい例です。

「アッラーよ、富も、このしもべもあなたのものです。私は無力なしもべです。私の意志と秘めたことをあなたが最もよくご存じです。財産や富は私の目的ではありません。ただ、あなたのご満悦を求めています。

神よ、この信者の兵士たちを不信心者の手で倒され、滅亡させないでください。彼らに、全てのムスリムがそれを祝日とできるような勝利をお恵み下さい。あなたがお望みなら、その祝日の日に、このムラッドというしもべをあなたの道で犠牲としてほふってください」

実際、この心からのドゥアーの後、その瞬間まで次々と起こっていた嵐が静まり、2・3倍人数が多い軍隊に対し、8時間続いた流血の戦いの後、ついに勝利をおさめたのです。

スルタン・ムラッド・ハンは、戦いの後に戦士たちを訪問し、そのニーズに応えている際、負傷したサラエボ人の兵に卑怯にも刺され、殉教しました。これにより、そのドゥアーは完全に受け入れられたのです。

崇高な魂の言語や言葉のうち最も美しいものである誠実なドゥアーは、光から、そして愛情から生まれます。失望している者に生命を与え、傷ついた心を慰めます。イフラースのうちに、誠実に涙と共に行われたドゥアーは、アッ

ラーの慈悲の顕現への招待状となります。ドゥアーには、心にやすらぎを与える、アッラーへの服従の神秘が秘められているのです。

私たちにドゥアーを、その生き方によって最も素晴らしい形で教えられたのは預言者ムハンマドです。彼は涙の中で、足が腫れるまで続けた礼拝に加えて行っていたドゥアーの中でしばしば、

「アッラーよ！あなたのお怒りからご満悦へと、懲罰から許しへと、そしてあなたからやはりあなたに、庇護を求めます。あなたをあなたにふさわしい形で賞賛し、褒めたたえることが私にはできません。あなたはご自身についてどのように賞賛されているのであれ、その通りの御方です」と言い、無力であるという気持ちの中でアッラーに庇護を求めていました。さらに、ドゥアーの重要性を次のように説明されました。

「ドゥアーは、イバーダである。イバーダの本髄であり、本質である。アッラーの位階において、アッラーにドゥアーすることよりもなお尊いことはない。アッラーはご自身から何かを求めない者を（ドゥアーすることを自分に受け入れさせられない者を）罰せられる。苦しく困難な状態にある時にそのドゥアーが受け入れられるよう求める人は、豊かで安楽である時にも十分にドゥアーをするべきである。アッラーは命を与えられるお方であり、気前のよいお方である。しもべが手を掲げれば、彼をそのままで放っておくことはない。ドゥアーは慈悲の扉の鍵であり、信者の武器であり、教えの柱であり、地上の光である」(るーだーに、ジャミーウル・ファヴァーイドゥ9219-20-21-22-25)

人々を迫害し、弱いものを蔑視し苦しめ、不注意な生活を送っている者よりも、失望の中で泣いている孤児の顔を微笑ませ、苦しんでいる人々に安心を与えられる人が行ったドゥアーの方が受け入れられるというのは一つの真実です。実際、自らを何の罪もないと見なすうぬぼれた人のドゥアーではなく、その罪の許しの為に目や心から常に涙を流すアッラーを愛する人々のドゥアーが、受け入れられるのです。

メヴラーナはドゥアーの受け入れを得ることについて次のように語っています。

「後悔の炎で満たされた心と、濡れた目と共にドゥアーと悔悟を行いなさい。なぜなら、花は太陽と水があるところで咲くのである」

従ってドゥアーの受け入れの為には、要求事項をただ言葉で表現することは十分ではありません。ドゥアーは、恐れと希望の間で行うよう努力すべきです。心は、ドゥアーが請け負ったその意義についての希望で震えるべきです。同時に、ドゥアーが罪の許しの方向で行われるのであれば、その罪が二度と行われないという点で絶対的な決意と意志表示を行うべきです。

伝承によると、預言者ムーサーは困難な状態の中でドゥアーをしているある人に出会い、その外見を見て、彼のドゥアーが受け入れられることを心から望んでいました。その時、アッラーからムーサーに次のような啓示がもたらされたのです。

「私はそのしもべに対し、あなたよりもなお慈悲深い。彼はその舌では私にドゥアーをしているが、その心は、自分が所有する羊の群れのことを考えている」

預言者ムーサーがこのことを伝えると、その人は即座に注意を取り戻し、純粋な心でアッラーに向かったのでした。

また一方で、教えの上での兄弟の為に彼がいないところで行われるドゥアーも、すぐに応えられます。預言者ムハンマドは、

「信者が他の信者の為に行うドゥアーほどに、より早く受け入れられるドゥアーはない」

と語られました。

人々は、そのドゥアーが受け入れられると考えた人に、自分の為にドゥアーするよう求めます。しかしドゥアーの受け入れを確かなものとする真の要因は、イフラースと誠実さです。これは次のことを意味します。罪人のものであれ、信者である兄弟の為に誠実に、心から行うドゥアーは、アッラーの位階においては、地位が他の人よりも上であると思われている別の人の心を伴わないドゥアーよりも、もっと尊いのです。

実際、メヴラーナの、慈悲といたわりの大洋である心から湧き上がるこの叫びは非常に意味深いものです。

「アッラーよ！もしあなたの慈悲に、誠実な者のみが望みをかけるべきであるなら、罪人は誰のもとに行って庇護を求めるべきなのでしょう！」

「崇高なアッラーよ！もしあなたが、純粋なしもべのみを受け入れられるなら、つび美とは誰に向かい、懇願すべきなのでしょうか」

実際、一人のしもべが罪人であったとしても、そのことはアッラーが彼を放棄するという意味にはなりません。だ

から人が、誰のドゥアーのおかげで望みをかなえるかはただアッラーのみがご存じです。従って誰であろうと、アッラーのしもべのうちの誰かの心からのドゥアーを得られるということの価値を理解するべきです。

ある時マールフ・ケルヒー師が市場である水売りと出会いました。水売りは

「アッラーのご満悦の為に私の水を飲んでください」と呼びかけました。

マールフ・ケルヒー師は「アッラーのご満悦の為」というこの水売りのドゥアーを得る為に、義務ではない断食をしていたのにも関わらず、その水を買って飲みました。

マールフ・ケルヒーの死後、聖人の一人が夢で、彼が良い地位にあるのを見ました。

「アッラーはどの行為ゆえにあなたにこのようなものを与えられたのですか」と尋ねました。彼は、

「水売りがアッラーのご満悦を求めて行ったドゥアーによって」と答えました。

苦しめられ、心が傷ついている人のドゥアーを得ることと同様、彼らの呪いを避けることも、同じ位重要な事柄です。

セルジューク朝のスルタン・アラッディン・ケイクバードが、町の城を完成させたときメヴラーナの父であるバハエッディン・ワラドに、験担ぎとして城を見ること、城について意見を出すことを求めました。バハエッディン・ワラド師は出かけていってその造られたものを見、こう言いました。

「あなたの城は、洪水の害や敵の攻撃を防ぐ為にはこの上なく素晴らしく、強いもののように見える。しかしあな

たは、統治下で虐げられている人々の呪いの矢を防ぐ為にどのような予防策を取っているのですか。彼らの呪いの矢は、あなたの城のような城だけでなく、何十万もの要塞を突き抜け、世界を戦いの場に変えるのです。

一番よいのは、あなたは公正さと善という要塞を作りなさい。そして誠実な人々の中から、効果的なドゥアーの兵を形成するようにしなさい。これはあなたの城壁よりもより安全である。なぜなら人々の、そして世界の安全や安定はそのドゥアーの兵と共に注がれるからである」

実際、信者のあらゆる成就、成功、勝利は、そこで示された努力と奮闘と並び、イフラースを伴うドゥアーの恵みでもあるのです。

実践し、感じることができるものに比例して、私たちの為の永遠の幸福へのガイドであるクルアーンは、ドゥアーについての最大の教えを含みます。崇高なるアッラーはドゥアーについて次のように語られています。

「言ってやるがいい。『あなたがた自身考えてみなさい。もしアッラーの懲罰があなたがたに下り、または(死の)時があなたがたに訪れたならば、アッラー以外のものを呼ぶのか。あなたがたが本当のことを言っているとすれば。』『いや、あなたがたは、かれだけを呼ぶであろう。もしかれの御心があれば、あなたがたがかれに祈ったことによって、(その災厄を)除かれよう。その時あなたがたは、信仰していた邪なものを忘れるであろう。』（家畜章、第6章、第40－41節）

「謙虚にまた目立たない隠れたところで、あなたがたの主に祈れ。かれは教えに背く者を御好みになられない」（高壁章、第7章、第55節）

来世を救うための唯一の資本であるこのはかない世界で忘れてはいけない最も重要なドゥアーの一つが、良い形で

死ぬことを求めるものです。クルアーンでは次のように語られています。

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا اتَّقُوا اللّٰهَ حَقَّ تُقَاتِهِ
وَلاَ تَمُوتُنَّ إِلاَّ وَأَنْتُم مُّسْلِمُونَ

「あなたがた信仰する者よ、十分な畏敬の念でアッラーを畏れなさい。あなたがたはムスリムにならずに死んではならない」（イムラーン家章、第3章、第102節）

どの信者も、生涯を通して示す努力は、最期の息を良い形で行うという幸運を得る為です。なぜなら、預言者たち以外に誰も保証されてはいないのです。聖人たちですら、常に最期の息について不安を持っていたのです。

誰がどの状態で死ぬのかはわからないとはいえ、一般的に人が生きてきたとおりに死ぬということも、一つの真実です。従って、最期の息を信仰のうちに行うことができるよう、正しい道にいて、常にアッラーにドゥアーと悔悟をしつつ生きることが必要なのです。クルアーンで示されているように、預言者ユースフは次のようにドゥアーをしました。

تَوَفَّنِى مُسْلِمًا وَأَلْحِقْنِي بِالصَّالِحِينَ

「あなたは、わたしをムスリムとして死なせ、正義の徒の中に加えて下さい。」（ユースフ章、第12章、第101節）

アッラーが、正しい理性の持ち主として賞賛された誠実なしもべたちのドゥアーは、クルアーンで次のように示されています。

رَبَّنَا فَاغْفِرْ لَنَا ذُنُوبَنَا وَكَفِّرْ عَنَّا سَيِّئَاتِنَا وَتَوَفَّنَا مَعَ الأبْرَارِ

「主よ、わたしたちの罪を赦されて、凡ての罪業をわたしたちから抹消して、信仰の達成者たちと一緒にあなたに召してください。」（イムラーン家章、第3章、第193節）

預言者ムーサーの奇蹟を前にして、信仰を得たばかりの魔術師たちがフィルアウンに拷問にかけて殺すという脅しにもひるまず、アッラーにその悲痛なドゥアーで、拷問から救われることではなく、信仰が弱まることなくムスリムとしてアッラーに召されることを願ったということは、私たちにとっていかに大きな警告であり、教訓でしょうか。

また一方で、ドゥアーによってアッラーの恵みに出会うのは、ひたすら大声で、見せかけの行為によって語られた、偽善の、つくりものの、心が伴わない輝かしい文章、内臓を破るかのような叫び声、見かけだけの言葉ではありません。もしそうであったなら、これらの逆である、うめき声以上の声をあげられない、血の涙と共に懇願する哀れな病人や、自分の我欲に言うことを聞かせられない程に弱い、無力な人々のドゥアーが認められなかったでしょう。このような考えを持つことは、心とその状態という言語を知らないこと、それを無であると見なすことなのです。

ドゥアーにおいてこのような行き過ぎた行為を行うことは、ドゥアーの本質、精神性、神聖さを損ないます。預言者ムハンマドはこのようなドゥアーをする者について、

「集団に来て、ドゥアーにおいて過度な行為をする」とされ、このような状態に陥らないよう警告されました。

またあるハディースでは次のように語られています。

「あなたは、耳の聞こえない人にドゥアーしているのではない。聞かれ、あなた方に非常に近いアッラーに懇願しているのだ」(ブハーリー、ジハード131)

アッラーは、誠実なドゥアーを拒まれません。しかし誠実さにも関わらず、絶対的な定め、運命にふさわしくないいくつかの要求をも、認められません。従ってドゥアーをする人は、決して疲れを感じることなく、ドゥアーを続けるべきです。なぜなら、そのような場合、ドゥアーの対価は来世に送られたということなのです。

ドゥアーの興奮に浸っている心は、最も崇高な扉に庇護を求めたのだということを認識するべきです。ドゥアーの扉で良い結果を願って待っている心は、その慈悲の前で一生待つことになっても、それにうんざりしたりするべきではありません。なぜなら彼らの世界ではドゥアーと涙はアッラーの慈悲により生じるものであり、悲しんでいる心に慰めと安らぎを与える幸福の為の万能薬であり、アッラーへの熱情に燃える心が、飲むごとに楽になれる甘美な泉のようであるからです。

忘れてはいけないことは、人間であることの真の名誉と尊厳に、罪を許され、到達することです。死と共に永遠の許しの神秘に到達し、アッラーの無限の恵みを味わうことを望む者はまず、心の庭園のバラの、心の高まりの状態にあるドゥアーと懇願により許しの芳香を得る為の努力の中にいるべきであるということです。私たちも、無限の力と慈悲の主であるアッラーが私たちを哀れみ、許しという恵みを降り注いでくださることを願います。

アッラーよ!愛、心の高まり、そして誠実な涙と共に、アッラーの慈悲と許しから何かを得ることができますように。アッラーのご満悦に到達することを希望し、あなたが創造されたものへの慈悲を、私たちの心の無尽蔵の宝庫としてください。イフラー

スを備えたしもべの、恵み豊かなドゥアーを通してわが神聖な祖国に幸福と活気を、わが民族にも正しさと善における一体化を与えてください。

アーミーン。

真実と善への招き

-1-

　ウンマであるという名誉と幸福を得ている預言者ムハンマドが、永遠への救いへの導きを人々に伝えようと懸命に示された努力を忘れることなく、彼のこのスンナをウンマとしてどれほど実践できるか、そして「アッラーの、地上における証人」という特性にどれほどふさわしい状態であるかを、頻繁に確認すべきです。

真実と善への招き－1－

知性、認識、洞察力と言った天性の資本が損なわれていない人にとって、そこで暮らしている世界、万物を心の目で眺め、それが無駄に何の目的もなく、英知も伴わずに創造されたのではないと理解することは困難なことではありません。深い英知と重大な目的で創造された人間が、このはかない世界で勝手に放っておかれているのではないことは、明白です。なぜならクルアーンでは、

أَيَحْسَبُ ٱلإِنْسَانُ أَن يُتْرَكَ سُدًى

「人間は、(目的もなく)その儘で放任されると思うのか。」（復活章、第75章、第36節）

أَفَحَسِبْتُمْ أَنَّمَا خَلَقْنَاكُمْ عَبَثًا وَأَنَّكُمْ إِلَيْنَا لاَ تُرْجَعُونَ

「あなたがたは、われが戯れにあなたがたを創ったとでも考えていたのか。またあなたがたは、われに帰されないと考えていたのか」（信者たち章、第23章、第115節）

と仰せられているからです。

人はそれぞれ、「寿命」という名でその取り分に合致している人生の流れ、つまり人と世界の間の結びつきと、ゆりかごと棺の間のつながりを理解する必要がります。

この世界を統治するアッラーの秩序と力の流れは、理性と良心を備えた人を、英知を持つ創造主の受け入れへ、つ

まり信仰へと導きます。しかしアッラーは、人々の信仰を完全な意味で実現させるため、彼らに導きの為のガイドとして預言者たちを遣わされるという形で、さらなる恵みを下さったのです。

この恵みにより得ることのできた「信仰」という恵みが人間に獲得させる最も重要な性質の一つは、疑いもなく「慈悲」でしょう。慈悲は人間を利己主義から利他主義へと導く信仰の果実です。なぜなら信仰の恵みが心で完成に至るにつれて、信仰を得られていない人を哀れむ気持ちが増し、彼らの為の努力も極められていくからです。この為、完成された信者の魂は、周囲に導きを必要としている人々がいるのであれば、自分だけが信仰を持っているからと言って慰められることはないのです。

疑いもなく人は、来世への旅に出たはかない旅人です。これを否定することは、目を閉じて太陽を否定することと同じ位、知性や論理、良心にそぐわないことです。だから、人生をこの方向で改良していくことは、知性や論理、良心の観点から必要なことです。この人生というたびで、信者が持っている恵みを望むことなく、それを必要としている人への導きの為に努力することは、その人の宗教と良心に関わる務めのうち、最も重要な者の一つです。なぜなら人々を真実に、善に、徳に、信仰に、誠実な行いに、従って永遠の幸福へと招くこと、彼らが悪事から遠ざかるのを助けること、道徳的な弱さゆえに恥辱の穴や憎悪の闇に陥らないよう努力することは、現世と来世において最も尊い、報償の大きい務めであるからです。実際、預言者ムハンマドはハディースで次のように語られています。

「正しい道へと導く人は、彼に従った人たちの報償ほどの報償を得る。これは、彼に従った人たちの報償を減らすものではない」

「悪い道に導いた人は、彼に従った人たちの罪ほどの罪を受ける。これは、彼に従った人たちの罪を減らすものではない」

このようにハディースでは、真実と善を伝えるというに務めの徳と恵みについて、大きな預言者の吉報があります。一方で悪へと招く人々についても、雪の玉が転がって雪崩になるように、どんどんと重なって増えていく責任と罪へと引きずられることを教えるものです。この状態は、真実と善への導きと、悪事から遠ざけさせるという務めと責任の重要性を示すのに十分なものです。

また一方で、教えを伝える任務にある信者それぞれが、まず自分の人格を完成させることが必要です。なぜなら人々を真実や善に招く為に最も効果的な媒介は、真実、善、徳、正しさの生きた、具体的な例となることだからです。それによれば、導きへと招く人がまず自分自身が「正しい道」にいることが必須です。布教が完全な意味で影響のあるものになることは、「確信に至った心」によって可能となります。なぜならこの精神的レベルに達した人々は、永遠のもたらす心の高まりの中で生きている為、彼らのまなざしのなかではかない喜びや快感はその魅力を失っているからです。この為に布教の任務を、はかないものからの何らかの利益を期待したり、我欲を満たしたりする為ではなく、ただアッラーのご満悦の為、つまりイフラースで実行するのです。この状態は同時に、預言者たちの道徳の特徴でもあります。クルアーンは布教に関連して、

「わたしはあなたがたにこのことで報酬を求めない。わたしへの報酬は、唯々万有の主から（いただく）だけです」（詩人たち章、第26章、第180節）

という言葉のように、この預言者の徳を示す多くのアッラーの言葉が存在します。

イスラームでは、善へと招き、悪事から遠ざけることを「善を命じ悪を禁じる」と呼びます。この点におけるアッラーの命令は、クルアーンで次のように示されています。

وَلْتَكُنْ مِنْكُمْ أُمَّةٌ يَدْعُونَ إِلَى الْخَيْرِ وَيَأْمُرُونَ بِالْمَعْرُوفِ
وَيَنْهَوْنَ عَنِ الْمُنْكَرِ وَأُولَئِكَ هُمُ الْمُفْلِحُونَ

「また、あなたがたは一団となり、(人びとを)善いことに招き、公正なことを命じ、邪悪なことを禁じるようにしなさい。これらは成功する者である」(イムラーン家章、第3章、第104節)

真実を迷信から、善を悪から、徳を不名誉から、成熟を未熟から識別する為の唯一の基準は、イスラームの声、つまりアッラーと預言者ムハンマドの命令と奨励です。この声を高めることが、信者それぞれの優先的な務めなのです。

アッラーはクルアーンで、布教の任務が「大きな聖戦」であることを次のように語っておられます。

「だから不信者に従ってはならない。かれらに対しこの(クルアーン)をもって大いに奮闘努力しなさい」(識別章、第25章、第52節)

実際、この「大きな戦い」の命令が、まだ信者が多神教徒と戦うだけの力を持っていなかったマッカ時代に、つまり無知がはびこり、逸脱で沸き返り、悪事や混乱が再び起こり、教えへの憎悪や無神論が支配的であった時代にもたらされたものであることは、聖戦の最も重要な意義の一つを示しています。これは、クルアーンを広めることです。なぜなら当時ムスリムたちは、迫害者や敵たちに対し戦うだけの力はなく、またその為の装備も備えてはいませんでした。アッラーのお言葉以外、彼らの手には何もなかった

のです。だから、クルアーンで示されたこの大きな戦いと努力の唯一の道は、クルアーンを広めることだったのです。

アッラーの使徒は、ハディースで次のように語られています。

「ただ、次の二人の人がうらやましく感じられる。*1*人は、アッラーが彼自身にクルアーンを与えられ、夜も昼もそれで忙しくしている（クルアーンと共に生き、それを伝えている）人、もう*1*人が、アッラーが財産を与えられ、その財産を夜も昼もアッラーの道において施している人である」(ブハーリー、イリム、15、ムスリム、ムサーフィリーン、266)

クルアーンで忙しくしていることの最も徳のある状態は、それを学ぶこと、教えること、その道徳によって徳を身に着けること、命令や禁止事項に従った生涯を送ること、信仰を優雅で柔らかな言葉で説くことです。クルアーンと布教が、求められるだけの素晴らしい影響を及ぼすことはただ、クルアーンで忙しくしていることで、この感情の深みに達した細やかな信者の益なのです。

実際、預言者ムハンマドを殺害するという、凶悪な意志を持って出発した聖ウマルが導きを得る為の媒介となったのは、預言者ムハンマドのドゥアーの恵みに加え、その妹が家で、心の深みと共に読み、体現したクルアーンの伝達でした。

アッラーの使徒とサハーバたちは、クルアーンと、アッラーの教えを伝えるという道であらゆる力と努力を発揮し、その為に財産や生命、あらゆる可能性と力を差し出したのです。預言者ムハンマドの、導きへと招く手紙を、死刑執行人の前で恐れることなく皇帝に読み上げ、差し出したサハーバは、その務めの為に命すら差し出すことに躊躇しませんでし

た。預言者ムハンマドの有名な最後の説教を聞いた約12万人のサハーバのうち、約2万人のみがマッカとマディーナで埋葬されたことを考えるなら、布教の招きがいかにサハーバによって国境を超える興奮の火花として実践されたかということがよりよく理解できるでしょう。実際、中国からイスタンブールに、アフリカからコーカサスまで行ったサハーバたちは、行った先々で導きと慈悲を植え付け、イスラームの運命において誉れある地位を獲得することができたのでした。このようにいてマッカから始まった導きへの招きを、あらゆる時代と場所へと届けたのです

特に預言者ムハンマドの、人類を導きへと招くアッラーのメッセージを伝えるという点での超人的な努力や奮闘は、一方で布教の任務や責任の大きさや重要性を示し、また一方で信者がこの点でどのような信仰の高まりの中で生きるべきかを示しています。

アッラーが、私たちしもべに最も完成された例として遣わされた預言者ムハンマドは、その人生を布教の任務に捧げられました。多神教徒の、現世や我欲の観点からは非常に魅力的である提案を拒否したことでさらに強まった迫害、からかい、侮辱、そして不正を受けながらも、彼をその布教の道での努力から遠ざけることはありませんでした。その道における最も小さな揺らぎすら受け入れないほどに固い決意と、信仰による心の高まりの中にいました。布教の任務を始めたばかりの、最も無力であった時期ですら、その布教を断念させる為に多神教徒が行った魅力的な提案に対し答えたこの歴史的な返事も、そのことを示しています。

「誓って言うが、アッラーの教えを伝えることを断念するようにと、太陽を右手に、月を左手に載せたとしても、わたしはやはりこの布教を断念しない。崇高なるアッラー

がそれを世界に広げられ、それで私の任務が終わるか、あるいは私がこの道で死ぬか、である」[16]

実際、預言者ムハンマドはイスラームの布教の為、人間にはとてもできないような苦労や迫害に耐え、あらゆる機会を活用されました。人々の心に導きの種をまくことができるよう、あらゆる手段を実行し、ウンマに最良の模範となったのです。

実際、預言者としての最初の時期、多神教徒たちが巡礼の為にマッカに来ていた時に、自ら全ての部族を訪問し、彼らに何度もイスラームを説きました。人々が集まっている場所、しゃべっている場所を常に動き、そこに居合わせた人全て、自由民、奴隷、弱い人、強い人、豊かな人、貧しい人の区別をすることなく、まずアッラーの唯一性を信じるよう招いたのです。

ジャービルは次のように語っています。

「預言者ムハンマドは無明時代のある巡礼の時期に、ワクファの場所で巡礼者たちに教えを伝え、

『私をその一族のもとに連れて行ってくれる人は誰もいないのか。クライシュ族はアッラーの言葉を伝えることを妨害するのだ』と言われた」(アブー・ダーウード、スンネット、19-20)

さらにマッカに設けられたウカーズ、マジャンナ、ズルマジャズのような大きな市場での部族の宿泊場所にまで出向き、彼らに自分を紹介させ、彼らをアッラーの唯一性を認めること、ただアッラーにのみ崇拝行為を行うことへと招きました。

16.　参照：イブヌル・エシル「アル・カーミルフィッ・ターリヒ」II, 64

特にターイフで受けた侮辱と迫害にも関わらず、彼はやはりアッラーに彼らの救いを願いました。広大なターイフでただアッダースという名のしもべのみが導きを得たことですら、その悲しい心に癒しをもたらすには十分でした。自分が受けた迫害や侮辱にも関わらず、怒りを感じることなく、その心において許しと慈悲がより強くあったことから、彼らの導きの為にドゥアーをすることができたのです。

預言者ムハンマドの心は、ターイフの人々が彼に行った迫害を悲しむ一方で、彼を悩ませていた本来の問題は、布教の任務と責任において不足だったり、無力だったりすることへの恐れでした。実際、その条件の中ですら、アッラーに次のように庇護を求めています。

「アッラーよ！私の力が及ばないこと、無策となってしまったこと、人々のまなざしにおいて侮辱され、軽視されることをあなたにお示しします。慈悲深い中でも慈悲深いお方よ。もし私に対して怒っておられるのでなければ、私は自分が受けた迫害や災難を苦にはしません。アッラーよ、私の民に導きをお与えください。彼らは知らないのです。アッラーよ、あなたがご満足してくださるまで、あなたの許しを求めます」(イブニ・ヒシャム、II、30)

このはかない生で無限の喜びを味わうことは、預言者ムハンマドのように許しと慈悲の芳香を感じることで可能となります。慈悲を、あらゆる熱情の上に高めることが必要です。私たちは慈悲深く振る舞い、アッラーの慈悲深さにふさわしい状態になるのです。そしてアッラーの「ラフマーン」の特性が私たちの上に顕示されるのです。

アッラーの慈悲は大海のようであり、心が満たされる為にはそこからのひとしずくで十分なのです。このしずくが心に落ち、海の味わいを感じさせた瞬間に、その心は大海に出会います。それぞれが慈悲の海となった心は、懇願、ドゥアー、布教によってあるべき状態に達します。このような心はもはや、状態という言語によって「私たちを哀れみください」と嘆く、創造の意図を知らないまま不注意に生きる人々の無言の嘆きを聞き取れるようになります。悲嘆にくれる人々の周囲にいるのです。ターイフは、この状態の最も明白な例です。太陽にとって暖めないこと、照らさないことが不可能であるように、完全な魂にとっても憐みを感じないこと、それゆえに真実と善の布教に無関心でいることは同様に不可能なのです。

アッラーの使徒は疑いもなく、諸世界への慈悲として遣わされました。一部の人々がその尊さをかつて理解せず否定し、あらゆる種類の侮辱にふさわしいと見なしていたのにも関わらず、彼らのこの種の熱狂や粗暴な態度すら、預言者ムハンマドにおいて慈悲が怒りに勝つことを妨げることはありませんでした。逆に、彼らをより深く憐れまれるという結果を生じさせました。このようにして、自分たちが陥った悲惨さを幸福だと思い込んでいる多くの苦悩する魂が、広い慈悲、寛容、許しと慈しみの海のようである預言者の心の空気の中で、信仰という誉れに至ったのです。

実際預言者ムハンマドの次の表現は、彼の布教任務における魂の状態を明らかにするものです。

「私とあなた方の状態は、次のものに似ている。ある人が火をつけ、その火が周囲を照らすと、蛾たち、そして明るさを好む動物がその火に飛び込もうとする。その人は、それを防ごうとする。しかし動物たちの方が勝ち、その多くが火に飛び込んでしまう。私はあなた方が火に飛び込まないよ

う、あなた方の腰をつかんでいる。しかしあなた方は火に飛び込む為に走って行くのだ」(ブハーリー、リカーク、26)

アッラーはクルアーンで次のように語られています。

كُنْتُمْ خَيْرَ أُمَّةٍ أُخْرِجَتْ لِلنَّاسِ تَأْمُرُونَ بِالْمَعْرُوفِ وَتَنْهَوْنَ عَنِ الْمُنْكَرِ

「あなたがたは、人類に遣された最良の共同体である。あなたがたは正しいことを命じ、邪悪なことを禁じ、アッラーを信奉する」（イムラーン家章、第3章、第110節）

そう、私たちがこの章句で語られている「最良の共同体」という表現が含むものに加わることができる為には、預言者ムハンマドのように善、徳、価値あることを実践し、命じ、悪事や災いから遠ざかり、それを禁ずることが必要なのです。

アッラーは別の章句で、

「人びとをアッラーの許に呼び、善行をなし、「本当にわたしは、ムスリムです。」と言う者程美しい言葉を語る者があろうか」（フッスィラ章、第41章、第33節）と語られ、この崇高な任務の、生涯における重要性を示しておられます。

ウンマとなる名誉と幸運に至ることのできた預言者ムハンマドが、永遠の救いへの招きを人々に伝える為になされた超人的な努力を忘れず、彼の一つ一つのスンナを、そのウンマとしてどれだけ実践できているのかという点をしばしば点検しなければなりません。なぜなら預言者ムハンマドは生涯を通して実践したこの任務が、ウンマによってもどういう形であれ継続されることを望んでおられたから

です。彼はあらゆる機会にウンマに布教の任務と責任を思い出させ、それを奨励されていました。実際、あるハディースでは、

「一つの節でも私が伝えれば、それを人々に届けなさい」と言われました。(ブハーリ―、エンビヤー、50) また別のハディースでは、

「私たちから何かを聞き、それを聞いた通りに他の者に伝える者の顔を、アッラーが明るくしてくださるように。なぜなら、彼自身に知識が伝えられた人々のうち、その知識を伝えた者よりもよりよく理解し、実行する人々が多くいるのだ」(ティルミズィー、イリム、7)と言われ、ウンマに布教の任務を奨励されました。

さらに人間を悪事や災いから、良いこと、善行へと招く全てのこの布教と警告の任務は、私たちの信仰の一種の試金石という地位にあることを警告している、次のような預言者の宣告は、大きな教訓を含むものです。

預言者ムハンマドは次のように語られています。

「あなた方のうち誰かが悪事を目にしたのであれば、それを手で正しなさい。それができる力がなければ、舌で正しなさい。それにも力が足りなければ、心でそれを憎みなさい。これは信仰の最も弱い状態である」(ムスリム、イーマーン、78)

また別のハディースでは預言者ムハンマドは次のように語られています。

「私に生命を下さったアッラーに誓って言うが、あなた方が善行を命じ、悪事を禁じるか、もしそれをしないのであればアッラーがその位階からあなた方に懲罰を与えられ、あなた方が行うドゥアーも受け入れられないか、である」(ティルミズィー、フィテン、9)

アッラーよ!善行を命じ、悪事を禁ずる任務を軽視することから生じる、悲惨な結末からあなたに庇護を求めます。

アッラーよ、人間への最も素晴らしい模範的人格の例として贈られた預言者ムハンマドの素晴らしい徳から得るべきものを得て、真実と善行への呼びかけという任務を、それにふさわしい形で実行できること、預言者ムハンマドの崇高なとりなしを受けることを私たち無力なしもべにお恵み下さい。

アーミーン!

真実と善への招き

-2-

人間のうち最も幸福であるのは、心をクルアーンとスンナの空気の中で精神的な作業台として、被造物をそこに入れることのできる者です。人の本質的な価値と尊厳は、心を豊かさで満たして生きること、その心の状態で布教を行うことにあるからです。心が精神的な意味でとげで満たされているのに布教を行おうとすることは、無駄に疲弊することであり、大きな損失となります。

真実と善への招き –2–

アッラーの啓典と預言者ムハンマドのスンナを人生において実践する為には、真実を伝えること、人々に奉仕することという任務を、自分の心で熱情という状態にすることは不可欠です。なぜなら信者の人生は奉仕と布教の一生であるべきなのです。

疑う余地もないことですが、真の信者を他の人々から区別する最も重要な特徴の一つが、彼がより慈悲深いということです。布教は、同時に一つの慈悲の産物です。慈悲の最も明白な形である真実への招きと善の奨励は、まずその人自身の自我において実現していることが条件となります。

真実への招きと善行への奨励の為には、まずは真実と善行のあり方について正しく知っていることが必要です。なぜなら、無知な者の布教はただ形式という点にとどまらず、そこに含まれるものという点においても誤りとなってしまうことを避けられないからです。だからこの道において最初に必要なものは、**知識と心における資本**です。なぜなら、信仰としもべとしての生を知性と心の均衡のうちに生きる為に、この二つの資本が必要であるからです。

また一方で、宗教的な諸問題を「**教えが要するもの**」として知ることは、学問上全てのムスリムの義務であることから、全ての信者は少なくともこの基本的な事柄を知っていることが必要です。知らない者は、「眉を整える際に目を取り出す」恐れで、知識上及び心における不十分さを迅速に取り除く努力をし、学んだ事柄をその生涯において実

践し、知識を「真実へと至らせる認識」とするべく努めるべきです。なぜなら、真実と善への招きへの影響は、私たちの心の地平線の深遠さによるものであり、それは内面世界を豊かさと精神的で満たしていることで可能となるのです。

メヴラーナが言っているように、

「袋をいっぱいに満たそうとするのであれば、下に開いた穴からこぼれないようにしなければならない」のです。

実践することなく、知識も伴わず、後先を考えず、熱情や活気、心の高まりもなく、粗野な表現、低俗な方法で行われる布教について、あるべき効果をもたらすことを期待することは、悲しみの原因となるだけでなく、同時に重い責任の要因ともなります。

だから信者は、心の世界をイスラームの優美さ、細やかさ、そして美しさで飾るべきです。その状態、言葉、態度によって模範となりつつ、真実の布教と善の奨励においても例を示すべきです。なぜなら真実への招きという任務の真実は、アッラーへの愛情、アッラーに向かうことの中に秘められているからです。実際、ヒラーで最初の啓示を受けた預言者ムハンマドにおけるこの崇高な情熱は、彼の魂を布教の恵みと興奮によって満たし、彼をミラージュにおいてアッラーの御前まで高めたのです。

クルアーンでは、アッラーは次のように語られています。

「男の信者も女の信者も、互いに仲間である。かれらは正しいことをすすめ、邪悪を禁じる。また礼拝の務めを守り、定めの喜捨をなし、アッラーとその使徒に従う。これらの者に、アッラーは慈悲を与える。本当にアッラーは偉力ならびなく英明であられる。アッラーは、男の信者にも女の信者にも、川が永遠に下

を流れる楽園に住むことを約束された。また永遠〔アドン〕の園の中の、立派な館をも。だが最も偉大なものは、アッラーの御満悦である。それを得ることは、至上の幸福の成就である」（悔悟章、第9章、第71-72節）

人間のうち最も幸福であるのは、心をクルアーンとスンナの空気の中で精神的な作業台として、被造物をそこに入れることのできる者です。また彼らは、クルアーンの深みから得るべきものを得て、真の信仰生活を送り、その心を最期の息まで我欲に従った理性のもたらす疑惑から守ることのできる人でもあります。なぜなら人の基本的な価値と尊厳は、心を豊かさで満たして生きること、その心の状態で布教を行うことにあるからです。が精神的な意味でとげで満たされているのに布教を行おうとすることは、無駄に疲弊することであり、大きな損失となります。イスラームは人間の魂にとっての癌である「主張や非難」を拒否し、心に謙虚さ、愛情、そして慈悲を勧めます。信者の心の庭園は花畑のようであるべきであり、そこでは散漫でゆがんだ顔、落ち込んだ心が安らぎを得て微笑むのです。だから、心と体のちょうどとげのようである感情、思い、振る舞いを清め、布教を行える状態となることが必要です。

歴史上有名なハッジャージュ・ザーリムはその迫害を名声としていた人であったとはいえ、哲学的性質を持った人でした。ある時金曜礼拝で彼を見かけた導師が「アッラーの最も愛される行為は、迫害を行う統治者にその不正を訴えることである」という命令を取り上げ、非常に厳しい言葉を用いて語りました。ハッジャージュ・ザーリムは静かにそれを聞いていました。

礼拝の後、導師を呼び、彼に尋ねました。

「あなたは説話で何を語ったのだ」

導師は、どちらにしても首を切られることになると考え、引きさがることなく、説話での話をもう少し厳しい表現で繰り返しました。ハッジャージュは

「奇妙なことだ」と言いました。「あなたは知識のある人のように見える。しかしイスラームへの招きのやり方を知らない。あなたはクルアーンを全く読まないのか？確実にあなたよりもずっと徳を備えているムーサーが、私よりも過ちが多く、さらには教えを否定する者であったことが確実なフィルアウンに手紙を送る時に、アッラーは彼に水の流れのように柔らかい言葉を用いるように命じられたのではなかったか？」

導師は過ちを理解し、許しを乞い、ハッジャージュの許しと寛容のおかげで首を切られずに済んだのでした。

預言者ムーサーに対し起こり、私たちに一つの方法を示しているものは、この出来事でのアッラーの宣言[17]のみではありません。クルアーンの多くの章句でも、布教を柔らかく英知に満ちた言葉で、相手を傷つけることなく行うべきであることが示されています。

アッラーは別のクルアーンの章句で、

اُدْعُ اِلَى سَبِيلِ رَبِّكَ بِالْحِكْمَةِ وَالْمَوْعِظَةِ الْحَسَنَةِ
وَجَادِلْهُمْ بِالَّتِى هِىَ أَحْسَنُ

「英知と良い話し方で、(凡ての者を)あなたの主の道に招け。最善の態度でかれらと議論しなさい」（蜜蜂章、第16章、第125節）と仰せられ、布教の作法を示されています。だから、その生涯が生きたクルアーンのようであった預言者ムハン

17.　参照：ター・ハー章第43－44節

マドの模範的な人格から得るべきものを得て、彼が示している方法や作法を尊重することが必要です。

従って信者は、まず自分の内面、外面の世界をイスラームの美点によって飾り、良い徳や振る舞いによって周囲に信頼を持たせる人格と性格を備えるべきです。実際、預言者ムハンマドは、

「あなたの近親者に警告しなさい」（詩人たち章、第26章、第214節）という章句が啓示された時には、クライシュ族をサファーの丘に呼び、高い岩の上から彼らに呼びかけました。

「クライシュの人々よ！私があなた方に、この山のふもともしくはその谷に敵の騎馬がいる、すぐにあなた方を攻撃し、財産を奪うだろうと言えば、私を信じますか」

彼らは全くためらうことなく、

「はい、信じます。あなたのことを今まで正しい人と見なしてきました。あなたが嘘をついたのを聞いたことがありません」と言いました。

預言者ムハンマドはこのように、布教以前に彼らに、自分が決して嘘をつかないこと、信頼できる誠実な人であるということについて評価を受けていました。つまり、成熟した誠実な人格を備えていることを、周囲の人に認めさせていたのです。イスラームの否定を死守していたアブー・ジャフルですら、預言者ムハンマドのことを嘘つきだとは言わず、ただ次のような言葉で彼を批判していたのです。

「ムハンマドよ、私たちはあなたが嘘つきだと言っているのではない。あなたの「信頼できる」という称号はこのマッカの民、つまり私たちが与えた。あなたは嘘をつかない。この任務をあなたに与えた天使があなたを誤らせているのだろう」

アッラーはこの性質について、クルアーンで次のように語られています。

「われはかれらの言葉が、あなたを如何に悲しませるかを知っている。かれらが虚言の徒とするのは、あなたではない。不義者たちは、専らアッラーの印を否定しているだけ」（家畜章、第6章、第33節）

このように、アッラーの使徒の最大の敵であるアブー・ジャフルですら、彼が特別な人であることを評価していました。さらに、預言者ムハンマドに会うや否や、彼のそのあり方という言葉の影響を受け、「この顔は嘘をつかない」と言い、信仰によって誉れを得た者に加わったのです。そう、心をつかむうえでも、この性質が非常に必要であることは否定ができないことなのです。

私たちの歴史において特別な人物である征服王メフメッド・ハーンは、イスタンブールの征服の10年後にボスニアを制服しました。しかし真の征服、つまり人々の心の制服は、外見上の鍵を開いた剣がしまわれてから実現しました。なぜなら、そこにアナトリアの大地で育った心の兵士たちで構成された清らかな信者の家族が居住するという形で、「立派な道徳と状態による布教」の行軍が始まったからです。その結果としてボスニア人はそれほど時間が経過しないうちに、イスラームによって誉れを得たのです。

実際、武器は迫害を取り除く為に用いられます。しかし本来実現するべき真の征服は、心の征服なのです。これはイスラームの道徳と細やかさを実際に体現し、模範的な人格という状態になることで可能となります。なぜなら、布教と招きの影響は、招いている人の生き方と精神生活に非常に結びついているからです。したがって真の布教者にとって、アッラーの均衡の英知を把握できないこと、被造物の状態による言葉を理解できないことは、心の状態が不十

分でないことから生じています。中に細やかな心が入っていない乾いた衣装は、周囲にどのような形であれ、安らぎや喜び、素晴らしさを広めることはできないのです。

だから優先的に勝利することが必要である戦いとは、人間の内面世界での戦いです。アッラーはこの戦いをクルアーンで、人の内面世界における「罪と篤信」として伝えておられます。心が罪から救われ、篤信によって飾られることは、人間の真の幸福と永遠の救いの資本です。心に影響を与え、永遠の幸福を植え付けることができる人とは、その内部での戦いに勝利し、アッラーに真の意味の服従によって従う者のみです。

また一方で、布教で注意されるべきもう一つの点は、相手を尊重することです。なぜなら、布教の相手が人間である故に、その人がアッラーが創造された誉れある存在であるということを常に頭に入れておくべきです。布教においてもし信仰から始めなければならないのであれば、相手にそれが不足していたとしても、その創造における真の価値ゆえに、相手に注意を払うべきです。その意味は、怒りや暴力の代わりに希望、寛容、慈悲を持って振る舞うということです。そもそもこのように振る舞うことは、人の見方におけるこの基本的見解によりかなったものです。詩人はこの点を表現する為に、

「地に落ちることで」（N.ケマル）と書いたのです。

クルアーンは人に敬意を示す全ての章句で、それをこの真のあり方と結びつけています。クルアーンでは次のように語られています。

وَلَقَدْ كَرَّمْنَا بَنِي آدَمَ

「またわれが創造した多くの優れたものの上に、かれらを優越させたのである」（夜の旅章、第17章、第70節）

実際それはただ人間であるという尊厳により、クルアーンではアッラーの代理者と評価されているのです。

信仰とその後にもたらされる誠実な行為は、この本質的な誉れが要するものです。信仰と誠実な行いの欠乏は、この本質的な誉れ、すなわち人間であることの尊厳が要することを実現できないことは、その本質に恐怖を与える欠乏であり、屈辱です。行動の観点から不足がある者は、信仰が欠乏している者ほどではなかったとはしても、憐れまれるにふさわしいのです。このような欠乏に至ってしまっている者には、普通の人であれば立腹するかもしれません。しかし信仰の興奮、喜び、完全性に到達した者であるなら、憐れむべきなのです。なぜならその価値から期待されるものはそれであるからです。この憐みの感情は、支援を必要であると見なします。支援の最も大きなものは、永遠の幸福への招きである布教によって、実現するのです。

真の布教者は、魂に均衡と生命を植え付けることのできる、道案内者としての人格です。あらゆる場面で布教を、愛着、愛情、慈悲と共に行うべきであることを知り、信仰の源となる人々です。言葉、文章、そして模範的な品のある行動によって、人々に幸福と平安への道を示すこの道案内者は、あらゆる悲しみの周囲、身寄りのない人のそば、苦しんでいる人の枕元にいるのです。彼らは、その周囲の不幸な人々の苦しみと、それに関する自分たちの責任を心で感じている為に、導きの光を待つ人々の援助に駆けつけるのです。

また彼らは、人々をアッラーからの信託として認識します。全ての被造物に愛情と慈悲を持って接する魂を獲得します。慈悲の種から芽生えた責任感がこのような形で彼らを普通の人であることから離れさせ、永遠の出会いの為の旅人とちます。出会いの努力の為の苦労を受け入れ、奉仕や導きの為に自らを捧げる者は、それによってこの真実のキャラバンに加わり、人々の心を永遠へと運びます。フダーイー、ユヌスのようなアッラーの友である人々の真の兄弟という位階に達するのです。

❀

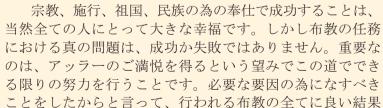
アッラーがその光を最後の審判まで完成させる、つまりイスラームが最後の審判まで続いていくことは、アッラーの約束です。しかし布教の任務は教えの継続の為の媒介であり、要因であるという性質を持っているということも、忘れてはいけないことです。その教えは、アッラーがその真実に適った形で知られること、イバーダによって崇拝されることです。なぜなら、万物の存在の理由がこれであるからです。

ある時期、あるいはある地域で宗教的生き方が弱まり、人々が誤った道に滑っていることが見られるのであれば、そこでは布教活動が信仰に次いで最初に、そして最も重要な任務として現れます。真実と善を伝える上で成功がなされないのであれば、多くの合法な事柄においてもその合法性が失われます。例えば、母が授乳期の子供に授乳することは、非常に尊く神聖なことです。しかし家が燃えていることを目撃した母が、子供への授乳を続けていれば、それは問題となります。なぜなら火事に対して何かをすることが、その瞬間には子供に授乳することよりもずっと重要であり、緊急性があるからです。このように、教えを体現するということにおいて成功できていない時代には、真実を

善を勧め、布教を行う人々がいない限り、他のことに従事することは、それ以外の時代と比べてより重い責任を生じさせます。

次のことも忘れてはいけません。このイスラームの奉仕は1400年前から私たちに、無数の困難や苦しみと共に伝えられたものです。私たちがなすべきことは、この信託を私たち以降の世代にも同じ細やかさのうちに伝えることです。この点で今の時代は、真実と善の勝利の為に献身的な努力をすることを必要とする時代です。これはそもそも、論理的な事実です。なぜなら、車のタイヤが泥にはまった時、それを押す人の苦労は、車が平地にある時にそれを押そうとする人の苦労とは比較できないからです。ここにはもう一つの細やかな点があります。それは、押されている車のタイヤが泥から出る為には、ただ子供の手頸の力ほどの力を出すことが必要とされているその重要な瞬間に、その小さな協力がさらに大きな重要性を持つのです。それに対し、その重要な瞬間に脇にいて眺めているだけの人、務めを果たさない人の罪はより重くなります。信仰が弱くなり、若者が多くのネガティブな流れに影響を受け、人々の多くが力に従い、我欲に支配されて生きるこの時代には、わずかな努力で大きな報償が、小さな軽視で大きな責任が生じることを考慮し、この時代の細やかさに応じた振る舞いをするべきなのです。

❁

宗教、施行、祖国、民族の為の奉仕で成功することは、当然全ての人にとって大きな幸福です。しかし布教の任務における真の問題は、成功か失敗ではありません。重要なのは、アッラーのご満悦を得るという望みでこの道でできる限りの努力を行うことです。必要な要因の為になすべきことをしたからと言って、行われる布教の全てに良い結果

を期待すること、それが実現しなかった場合に失望や悲しみに沈み、自らを疲弊させることも正しくないのです。なぜなら、導きを与えられるのはアッラーであられるからです。しもべがやるべきことは、倦むことなく、あきらめることなく、失望したりひるんだりすることもなく布教を続けること、結果をアッラーに委ね、信頼していることです。実際、諸世界への慈悲として遣わされた預言者ムハンマドが「人をもう一人でも、炎から救う」という希望で自らをあまりにも疲弊させた時には、次のアッラーの警告が下されました。

「かれらが信者になろうとしないため、あなたは多分、死ぬ程苦悩していることであろう。もしわれがそのつもりとなり、天から印を下せば、かれらはそれに恐れ入って謙虚になるであろう」（詩人たち章、第26章、第3-4節）

「本当にあなたは、自分の好む者（の凡て）を導くことは出来ない。だがアッラーは御心のままに導き下される。かれは導かれた者を熟知なされる」（物語章、第28章、代位56節）

その為、行った布教が受け入れられなかったとしても、少なくとも災いの速度を遅め、おそらくは長い期間でその成果を示し、改善の要因になるかもしれないということもわすれてはいけないのです。さらに布教者は、何らかの結果を得ることができなくても、この義務の責任からは救われます。なぜなら、アッラーの道において加わり、勝利できなかった戦いよりも、加わることができたのに加わらなかった、努力を示さなかった戦いにおいて責任を問われることは確実であるからです。アッラーのはかりで評価されるのは、この点において自分のなすべきことをやったかどうかなのです。

実際、そう言った時代はあり、一人の預言者が来て、多くの人が彼に従い導きを得たことも、また預言者が来て、

その導きの顕現がわずかな信者の上にのみ見られたこともありました。つまり導きはアッラーによるものなのです。しかし預言者を始めとして、全てのウンマは、イスラームを実践し、伝える責任を負うのです。

布教を子供や家族から始め、ムスリムの本来の性質という状態にすることが必要です。信者それぞれがあらゆる状態で布教がなる道を探し、持っている力、知識、文化レベル、心の成熟さ、その地位に応じて、自分がやるべき形でその任務を果たすこと、人々に意識を持たせる為に務める責任を負います。なぜならクルアーンで述べられているように、アッラーはしもべたちに、その力以上のものは求められないからです。しかし、その力に応じてその務めを果たすことを義務付けられたのです。

真実と善への招きという点で最も崇高で特別な模範は、疑いもなく預言者ムハンマドであり、次いでその崇高な存在の相続者であるアッラーの友である人々です。彼らのあらゆる状態にはそれぞれ固有の素晴らしさ、細やかさ、深さ、そして崇高さが含まれます。事実、この純粋なしもべたちのうち、その導きを得ている**ムーサー**師の模範的な性質で満たされた生涯は、あらゆる要因を通して私たちを真実と善に方向づけるしるしや導きを示しています。

ムーサー師は、死という結果につながった病気の際にも、「私に力があれば、町々を、国々を訪ね歩き、兄弟たちの物質的、精神的な苦しみの為の薬となる為に努力をするのだが」と強く願っていたのでした。

なぜなら彼は生涯において、肉体的、経済的、そして心という点でしもべという意識の中で生きることを最大の原則としていたからです。その力に応じ、手が、もしくは心

が届くあらゆる傷ついた心を、さらには全ての被造物を抱きしめていました。中央アジアに扉が最初に開かれた時には、その老齢からは想像できないような活力、気力、興奮と共にそこに走りました。また一方で南アフリカやヨーロッパに行き、そこでも精神的、社会的、そして心の美しさを運ぶことに努めたのです。

要するに、彼はその生涯全てを、«نِعْمَ الْعَبْدُ»「何と素晴らしいしもべであるか」[18]とクルアーンで賞賛されている、良い性質を備えたしもべとなる為の努力のうちに生きたのです。それにより、このはかないドームで、永遠に続くであろう素晴らしい声が残ったのです。素晴らしい誠実さ、素晴らしい救い、素晴らしい心、素晴らしい呼びかけ、素晴らしい道徳、全てが素晴らしいもので満たされた、模範的な生涯が残されたのです。

アッラーが彼の心の崇高な豊かさから、私たちにも益を与えてくださいますように。

アッラーが、この時代の重要さゆえに、真実と善への招きを私たちがなすべき形に応じて実行し、アッラーの御前において許されることを、私たち皆にかなえさせてくださいますように。

アッラーよ!永遠への旅人であるこの世界で、永遠に住む住民であるかのような不注意さから、私たちの心を守ってください。私たちの下にある土を踏んでいる時に、いつの日か踏まれる土となることの深い深意と智を私たちの心にお与えください。イスラームの光を私たちの糧と、預言者ムハンマドの魂の雰囲気を私たちの呼吸と、アッラーの愛情とご満悦を私たちの幸福の天国としてください。

アーミーン!

18.　参照：サアド章第44節

利他主義

慈悲深さは、ムスリムの心で決して消えることのない一つの炎です。慈悲深さは、人間性のこの世界での最も特別な鉱石であり、心を通して私たちをアッラーとの出会いに導きます。慈悲を備えた信者は気前がよく、謙虚で、奉仕を行い、同時に人々の精神に秩序や生命を接種する、心の医師なのです。

利他主義

アブドゥラー・ビン・ジャーファルはある遠征の際、ナツメヤシの庭園に立ち寄りました。庭園で働くのは黒人の奴隷でした。奴隷には、3つのパンが与えられていました。その時、犬が一匹やってきました。奴隷は1つのパンを犬に投げ与えました。犬はそのパンを食べました。もう一つ投げると、犬はそれも食べました。3つめのパンも投げ、犬もそれを食べました。

そこでアブドゥラー・ビン・ジャーファルの間に、次のような会話がなされました。

「あなたの報償はいくらなのか」

黒人の奴隷は、

「あなたがご覧になっていた3つのパンです」と答えました。

「なぜ全てを犬に与えてしまったのだ？」

奴隷は、

「この辺りには犬は全くいませんでした。この犬は遠くから来たのです。飢えたままであることを、私の心は受け入れなかったのです」と言いました。

アブドゥラー・ビン・ジャーファルは

「しかし、今日君は何を食べるのだ？」と尋ねました。奴隷は、

「忍耐します。今日の私の取り分を、アッラーのこの飢えた被造物に与えましたから」と言いました。

「スブハーナッラー！私のことを気前が良いと人々は言うが、この奴隷は私以上に気前が良い」と言いました。そしてその奴隷とナツメヤシの庭園を購入し、奴隷を解放し、ナツメヤシの庭園を彼に与えたのでした。

このように慈悲深く、慈愛にあふれ、深い感情を持つ人々をはぐくむイスラームは、社会的均衡において貧者と豊かな者の間の憎悪や敵意を取り除き、バランスを維持し、愛情をもたらす為にザカートを義務としました。イスラームの兄弟愛をより進んだ段階で実現化する為に、そしてすべてのムスリムが「豊かな」心を持つことができるよう、良心にとっての義務である施しを奨励し、それは「利他主義」で頂点に達したのです。

なぜなら宗教の真の目的は、アッラーの唯一性の承認のあとは、立派な人、品格を備えた人、深い人を育てるという形で、その信者集団を安らぎが支配する状態にすることであるからです。

この成熟はただ、心に生じる慈しみと慈悲の感覚、そしてその最も素晴らしい表出として自分が手にしているものを分かち合うこと、あるいはその先の、「利他主義」と表現される、自分がそれを必要としているのにもかかわらず、自分が持っている恵みを断念し、それらを人に与えるという徳、段階に達することです。

慈悲深さは、ムスリムの心で決して消えることのない一つの炎です。慈悲深さは、人間性のこの世界での最も特別な鉱石であり、心を通して私たちをアッラーとの出会いに導きます。慈悲を備えた信者は気前がよく、謙虚で、奉仕を行い、同時に人々の精神に秩序や生命を接種する、心

の医師なのです。また慈悲深い信者は、あらゆる場面での奉仕を愛情と慈悲を持って行うことを知っている、希望と信仰の源となる存在です。彼は人々の魂にやすらぎを与えるあらゆる努力において最前列にいます。また言葉、文章、そしてその態度と共に、あらゆる悲しみの周囲、身寄りのない人のそば、苦しんでいる人の枕元にいるのです。なぜなら信者における信仰の最初の果実は慈悲と慈愛であるからです。人の徳はクルアーンによって完成されます。実際、クルアーンを開いた時に私たちの前に現れる最初のアッラーの特性は「慈悲」と「慈愛」です。アッラーは崇高なその特性を「慈悲深い中でも最も慈悲深い」という形で吉報を与えられ、しもべにもご自身の徳によって徳を身に着けることを命じておられます。したがって創造主アッラーへの愛情で満たされた信者の心は、アッラーのあらゆる被造物を慈悲と慈愛で包むことが必要なのです。アッラーを愛することの結果は、その被造物に愛情と慈悲を持って接することです。愛する者は、愛される者に対して、その愛情の度合いに応じて献身的に振る舞うことを一つの喜び、義務であると認識します。アッラーの被造物への施しは、アッラーへの愛情ということなのです。

実際、アッラーの為に与えることの一般的な名称であるサダカと施しには多くの種類があります。これらの頂点に位置するものが、利他主義です。これは、他者のニーズを自分のニーズよりも優先するという徳です。成熟した信者が良心として責任を負う献身と細やかさの最も高い点での顕現です。ムハンマド・ハーキミ・ティルミズィーに人々が

「与えるとはどういうことですか」と尋ねました。師は

「与えることは、他者の喜びにやすらぎを感じることである」と答えました。

利他主義の豊かな空気の中に入ることは、ただ細やかな心、繊細な魂が得ることのできる益です。なぜなら真の利他主義は、貧窮を恐れることなく与えることができるということです。この状態は、最良の、そして最も完成した形で、預言者たちやアッラーの友である人たちの人生において見られます。当然このような頂点に達すること、その崇高な星に到達することは皆にできることではありません。ただ、その頂点に近づければ近づけるほど、それだけその尊い取り分を得ることができるという真実を考えるなら、利他主義に関する最も小さな歩みですら私たちにとっては断念することのできない永遠の利益なのです。

アブー・フライラの伝承によれば、ある人が預言者ムハンマドのもとに来て、

「アッラーの使徒よ、私は空腹です」と言いました。

預言者ムハンマドは妻のうちの一人に知らせを送り、食べるものを贈るよう求めました。

しかし信者たちの母である彼女は、

「あなたを預言者として遣わされたアッラーに誓って言いますが、家には水以外のものは何もないのです」と答えました。

また他の妻たちも同じ状態であったことから、預言者ムハンマドはサハーバたちに向かい、

「今晩この人をお客として迎えたい人は誰か」と尋ねました。

アンサール（マッカにもともと住んでいたムスリム）の一人が、

「私がお迎えしましょう、アッラーの使徒よ」と答え、この貧者を家に連れていきました。家について妻に、

「家には食べる者はあるか」と尋ねました。妻は、

「いいえ、子供たちが食べるだけの量だけしかありません」と言いました。サハーバは、

「それなら、子供たちを何とかごまかしなさい。食卓に来たがるなら子供たちを寝かしなさい。客が家の中に入ったらランプを消しなさい。私たちも食卓で食べているふりをしよう」と言いました。

彼らは食卓につき、客は腹を満たすことができました。家の人々は空腹のまま寝ました。

朝になってこのサハーバが預言者ムハンマドのそばに行くと、彼を見た預言者ムハンマドはこう言いました。

「昨夜、客の為にあなたが行ったことにアッラーは非常に満足された。」(ブハーリー、マナーイクブル・アンサール、10;ムスリム、エシュリベ、172)

アッラーの友であるラマダンオウル・マフムード・サーミ師は、法学を学んだにも拘らず、しもべの権利を侵害するという恐れを不安によりこの職業にはつかず、タフタカレである職場の会計士として働くことを選択しました。師は職場に向かう為に、フェリーでカラキョイに移動していました。カラキョイからタフタカレまでは乗り合いバスに乗る代わりに、そのニーズを断念して歩いて通い、そのお金で施しをしていました。先人たちのこの崇高な徳やその状態は、私たちにとって素晴らしい模範です。

実際、個人的な快適さ、快楽さ、家の飾り、日々の支出においてなされるほんの小さな自己犠牲によってであれ、この崇高な道徳からそれぞれが自分に適したものを得るべきなのです。

利他主義は、気前良さの頂点でもあります。なぜなら気前の良さとは、財産の余分な部分のうち、自分にとって必要ではない部分を与えることです。利他主義とは、自分が必要としているものを自分から切り離して相手に与えることです。利他主義の精神的な報償は、しもべの献身に応じたものになります。アッラーはマッカのムハージル（移住者）たちに自分たちの資金を譲り、彼らのニーズを自分たちのニーズより優先されたアンサール（もともとマディーナに住んでいたムスリム）について次のように賞賛されています。

「仮令自分は窮乏していても。また、自分の貪欲をよく押えた者たち。これらの者こそ至福を成就する者である」（集合章、第59章、第9節）

❁

ヤムークの遠征で、殉死する間際であった3人の負傷した戦士たちが、それぞれに与えられようとしていた水を断り、別の者に譲ろうとしたものの、結果として誰も死ぬ前に水を飲むことができませんでした。そしてそれぞれ、最期の息で一口の水を求めつつ、殉死したのでした。

イブニ・ウマルの伝承によると、サハーバの一人からある人に羊の頭が送られていました。その人は、

「誰それは私よりもなお飢えている。彼に持って行きなさい」と言いました。その持って行った先の人も、同じことを言いました。こうしてこの頭は、7人の人の間を動いた後、最初の人のところに戻ってきました。なぜなら最も飢えているのはその人であったからです。

また聖ウマルがダマスカスに行く際、ラクダに乗る順番が奴隷にまわってきた時、ちょうど町の門のところに到達するところでした。それにもかかわらず、強く主張して奴

隷をラクダに乗せたこと、自分は歩いて、奴隷がラクダに乗ってダマスカスに入ったことは、追従されることのない施しの顕現です。ここから考えるなら、施しは常に財産で行われるものではありません。このような振る舞いも、一種の施しなのです。

施しの最も高いレベルである利他主義は、自らから取って与える、自分の権利を教えの兄弟に譲るという事象です。預言者、サハーバ、アッラーの友、そして誠実なしもべたちに固有の崇高な段階における施しのあり方なのです。

聖アリーと聖ファーティマの次の状態は、利他主義の真実を素晴らしく表現しています。

イブニ・アッバースが伝えているところによると、聖アリーとその妻聖ファーティマは、子供である聖ハサンと聖フセインが病気から回復するようにと、3日間願掛けの断食を行いました。最初の日は、断食明けの食事として大麦から料理を作りました。ちょうど断食を終えようとしていた時、ドアがノックされました。やってきたのは飢えた、貧しい人でした。この神聖な家族は、手にしていた食事を心からアッラーの為にこの貧者に振る舞い、自分たちは水を飲んで、断食明けの食事の代わりとしました。2日目の断食明けの時間になると、今度はそのドアに孤児がやってきました。その日の食事も孤児に与え、彼らは水だけを飲んでいました。3日目の断食明けの時間には、捕虜が救いを求めてやってきた為、大きな忍耐と利他主義の模範を示し、断食明けの食事を捕虜に与えました。

施しにおけるこの追従されることのない気前の良さ、他人を自分の我欲よりも優先したこと、そしてこの崇高な徳は、下されたクルアーンによってアッラーの承認と祝福を受けることとなりました。

「またかれらは、かれを敬愛するために、貧者と孤児と捕虜に食物を与える。（そして言う。）「わたしたちは、アッラーの御喜びを願って、あなたがたを養い、あなたがたに報酬も感謝も求めません。わたしたちは、主の苦渋に満ちた御怒りの日を恐れます。」それでアッラーは、その日の災厄からかれらを守り、素晴しい喜びを与えられる」（人間章、第76章、第8-11節）

幸福の時代の、利他主義のもう一つの光景は以下のようなものでした。

バドゥルの戦いの後で捕虜たちは2・3人ずつ、サハーバの間で分配され、預言者ムハンマドはこの捕虜たちによく振る舞うことを命じられました。

その当時捕虜の一人であった、ムスアブ・ビン・ウマイルの兄弟アブー・ウザイルが語っています。

「私が捕虜となっていたアンサールは、食事の時間になると自分たちはナツメヤシで腹を満たし、パンやおかずを私に与えました。私はその状態を恥ずかしく感じ、彼らに食べるよう申し出ました。しかし彼らは認めませんでした。なぜなら預言者ムハンマドが彼らに、捕虜の世話をきちんとするよう、命じられていたからでした。(ラマザンオウル・マフムード・サーミ、「バドゥルの戦い」 p. 93)

❁

被造物のうち誰も、その気前の良さた施し、利他主義において預言者ムハンマドと比較することはできません。彼は気前の良さの頂点に達していました。

アッラーの道においてその教えを説き、しもべたちを正しい道へと方向づけること、飢えている人に食事をさせること、無知である人々に忠言をあが得ること、助けを必要としている人のニーズに応えること、困難において忍耐す

ることといった、知識、財産、そして我欲に関わる気前の良さの全てが、彼には存在していました。

クライシュ族の偽信者の重要人物であったサフワン・ビン・ウマイヤは、ムスリムではなかったものの、フナインとターイフの戦いで預言者ムハンマドのそばにいたのでした。

ジュラーネで集められた戦利品の間を歩き回り、サフワンがそれらを大きな驚嘆のうちに眺めているのを見て、預言者ムハンマドは

「そんなに気に入ったかね？」と尋ねました。

「はい」という返事が来たのに対し預言者ムハンマドは

「その全てをあなたのものにしよう」と言われました。

サフワンは自分を抑えることができず。

「預言者の心以外、誰の心もここまで気前よくはあり得ない」と言い、信仰告白を行い、信仰を得たのでした。

実際、利他主義は、もてなしの中でも最も栄光あるものです。考えるべきことは、アッラーの使徒、サハーバ、誠実なしもべたちのこのようなもてなしを要因として、教えを否定することに固執する多くの人々が入信し、多くの敵が親友となり、導きを得たということです。そして多くの信者が、信者の兄弟に対する愛情を深めたのです。

預言者ムハンマドは決して、自分から求められ、自分が対応できる要求を拒むことはありませんでした。ある時にはご自身に9万ディルヘムの割り当てがありました。これを網細工の敷物の上に積み上げました。そしてそれを困窮者たちに全て分け与えたのでした。

ビッル

クルアーンで「ビッル」と表現される、「自分が好むものを施すことができる」という徳も、ちょうど利他主義のように高いレベルの施しの一種です。

道徳の全てにおいて理想的な模範である預言者ムハンマドは、疑いもなくこの点でも、追従されることのない頂点にありました。彼が、小さなことにおいてすら信者の兄弟たちを自分の自我よりも優先させていたことにおける繊細さの例は、次のようなものです。

ある時預言者ムハンマドは、ミスワークの木の枝から、2本のミスワークを作りました。ミスワークの一つは曲がっており、もう一つはまっすぐで、立派なものでした。預言者ムハンマドはミスワークのうち良い方をそばにいたサハーバに与えられ、曲がったものを自分のものとしました。サハーバが「この立派なミスワークはあなたにふさわしいです。アッラーの使徒よ」というと、預言者ムハンマドは、

「1時間であったとしても、誰かと友人であった人には、友としての権利を尊重したかどうかが問われる」と答えられ、この権利が利他主義とビッルの認識、すなわち信者である兄弟を自分の我欲よりも優先させ、愛するものを施すことで可能になるということを説明されました。

火器の物語も、この状態における施しの徳の素晴らしい例です。

ある時サハーバが、預言者モスクで集まり、預言者ムハンマドの恵み深い説話を聞いていました。預言者ムハンマドはクルアーンの次の章句を読み上げられました。

لَنْ تَنَالُوا الْبِرَّ حَتّٰى تُنْفِقُوا مِمَّا تُحِبُّونَ وَمَا تُنْفِقُوا مِنْ شَيْءٍ فَإِنَّ اللّٰهَ بِهِ عَلِيمٌ

「あなたがたは愛するものを(施しに)使わない限り、信仰を全うし得ないであろう。あなたがたが(施しに)使うどんなものでも、アッラーは必ず御存知である」(イムラーン家章、第3章、第92節)

深い心の高まりの中で預言者ムハンマドの話を聞いていたサハーバたちは、この章句を自らの内面世界の深みで感じることができているか、この預言者の招きに含まれる範疇のものを何であれ全て施すことができているか、自己を確認していました。突然、一人のサハーバが立ち上がったのが見えました。その顔にアッラーの光が輝いているこの神聖なサハーバは、アブー・タルハでした。、彼はこのモスクの近くに、中に600本のナツメヤシの木がある、貴重な庭園を持っていました。そしてそこを大変好んでいました。預言者ムハンマドをしばしば招き、振る舞い、庭園をより恵み豊かなものとしていました。

アブー・タルハ—は次のように言いました。

「アッラーの使徒よ、私の資産の中で最も尊く、私が最も愛しているものが、この町にあるベイルハとして知られる庭園です。この瞬間から、それを、アッラーとその使徒に捧げます。これによってアッラーが私をビッル(善の完全な状態)に至らせてくださいますように。それを来世での糧としてくださいますように。アッラーの使徒よ、この庭園をアッラーがあなたに示す形で活用してください」[19]

19. 参照：ブハーリー、ワサーヤー、17

そう、アブー・タルハにこの献身を実行させた素晴らしい徳が魂に根付くことから生じる素晴らしいものが、人間性の表面においてその価値を発揮すれば、この地上で幸福の時代という雰囲気が形成されるであろうことは、想像に難くありません。

アッラーの使徒は、何も持っていない人々ですら、施しに加わることを奨励しました。例えばアブー・ザッルはサハーバの中で最も貧しい人でしたが、彼すらも施しへと招かれ、次のように語られたでした。

「アブー・ザッルよ。あなたがスープを作る時には水を多めに入れ、隣人をも守ってやりなさい」

信者は、暗い夜の月光のように輝き、深く、繊細で、細やかであり、利他主義であり、気前よく、慈悲深く、憐れみ深く、施しの興奮で満たされているべきなのです。

現在においても、それぞれの力に応じた真剣な施しや利他主義が必要です。忘れてはいけないことは、苦難し、困窮のうちにある人々の立場に、私たちもいたかもしれないということです。だから、病人、困窮者、身寄りのない人、困難な状態にある人、飢えている人に施しをし、利他主義を示すことは、アッラーに対する感謝としてやるべきことなのです。私たちが手にしている恵みを、困窮者と分かち合いましょう。満足させ、喜ばせた心が、この世界で私たちの精神と、来世で私たちの助けと、天国で私たちの幸福となりますように。

アッラーよ！慈悲のあらゆる顕現が、心の生における無尽蔵の宝庫となりますように。アッラーよ！諸世界の主と、その後を歩くイスラームの偉人たちの利他主義に満ちた生涯から、私たちも得るものがありますように。

アーミーン。

足るを知ること

足るを知ることは、その本質から救われ、完全性に到達した誠実なしもべと忠実な者たちの心のあり方です。心の豊かさで手にしているものに満足し、他の物を欲しがらないことです。「満足は、無尽蔵の宝庫である」というハディースに基づき、心が豊かさを得て安らぐことです。

足るを知ること

マッカ出身の移住者であるアブドゥルラフマン・ビン・アウフは語っています。

「私たちが全てをマッカに残してマディーナに移住した時、預言者ムハンマドは私とアンサールのサアド・ビン・ラビを兄弟と宣言しました。そこでサアド・ビン・ラビが私に、

「私は、資産という点ではアンサールのうち最も豊かな者です。私の財産の半分をあなたに与えましょう。これが私の財産です。どうぞ」

と言いました」

アブドゥルラフマン・ビン・アウフはこれらを気にも留めていないような態度で彼に、

「アッラーがあなたの資産と力をあなたの為に良いもの、神聖なものとしてくださるように。私にはこれは必要ありません。私に、市場への道を教えてください。それで十分です」と言いました。

アブドゥルラフマン・ビン・アウフは市場に行き、取引を始めました。それほど時間がたちもしないうちに彼は相当の利益を稼ぎ、「感謝する金持ちたち」の仲間に加わったのです。

それから1年がたち、ムスリムたちがイスラームが力を持ち、栄える時代を迎えていました。ある時断食明けの食事の時間に、アブドゥルラフマン・ビン・アウフの前に息

子が何種類かの食事を並べたのを見て、彼は悲しそうな様子で

「ムスアブ・ビン・ウマイルは殉死した時、その遺体を覆う布すらなかった。彼を包んだ布は短すぎて、頭を負おうと足が、足を覆うと頭が出ていた。最後には布を頭の方に引き、足を良い香りの草で包んだ。聖ハムザが殉死した時には、老女が着ている古いコートでその体を包んだ。アッラーは私に、この世界でこれほど豊かな恵みを与えてくだささる。来世では減らされるのだろうか？来世での権利をこの世界で費やしているのだろうか？明日、アッラーの御前でこの恵みの勘定をどのように出すことができるだろうか」と言い、涙にぬれた目で食卓を放棄したのでした。

そう、イスラームの偉人たちが真実の道において心で示した優れたしもべとしてのあり方と、現世に対する見方を反映するズフド（禁欲主義）と足るを知ることの素晴らしい状態です。なぜなら彼らの世界ではズフドは、アッラーの愛情と恐れにより、アッラー以外のあらゆるものの価値がその心で失われ、何の価値も持たなくなることであり、「足るを知ること」は、ズフドが高いレベルで心において実践されることだからです。

従って足るを知ることは、その本質から救われ、完全性に到達した誠実なしもべと忠実な者たちの心のあり方です。心の豊かさで手にしているものに満足し、他の物を欲しがらないことです。

「満足は、無尽蔵の宝庫である」(デイレーミ、ムスナド、4699)というハディースに基づき、心が豊かさを得て安らぐことです。なぜなら満足によって豊かになる心は、現世の不安や恐れから救われるのです。魂は永遠を理解し、こうして信者においてははかない喜びの魅力はその寿命が尽きるのです。

この状態を最良の完全さによって実践し、心が頂点に達していたアッラーの友たちの生涯は、足るを知ることの例で満たされています。

聖ウマルがカリフであった時代に、シリア、パレスティナ、エジプトといった地域が征服され、イランの土地の全てもイスラーム国家の域内に含まれていました。ビザンチンとイランの豊かな宝物が、イスラーム世界の中心であったマディーナに流入してくるようになりました。信者の繁栄は頂点に達していました。しかし信者のカリフであるウマルは、この繁栄のレベルとは無関係な心の極みにあり、国家の繁栄、国庫の豊かさにもかかわらず、つぎはぎの当たった服で説話をしていました。時には借金をし、困難な中で日々を過ごしました。なぜなら彼は、その国庫から何とか足りるだけの割り当てを得ることを選んでおり、それによって困難な形で生計を立てていたからです。

サハーバの有力者たちは彼のこの状態に忍耐ができませんでした。カリフの報償を増やすことを考えていました。しかしこれを提案することに遠慮を感じていた為、聖ウマルの娘であり、預言者ムハンマドの妻であるハフサに提案をしました。彼らの名前を出さず、その父にこの提案を伝えるよう、求めました。ハフサは、サハーバたちのこの提案を父に伝えました。預言者ムハンマドが1日中空腹であり、空腹をいやす為のナツメヤシ一つすら見つけることができずにいた日々を目にしていたウマルは[20]、娘のハフサに、

「娘よ！アッラーの使徒の食事や衣装の様子はどうであっただろうか」と尋ねました。

20.　参照：ムスリム、ズフド、36

「何とか足りる程度でした」との返事を得ると、ウマルはこう続けたのでした。

「二人の親友（預言者ムハンマドとアブー・バクル）と私は、同じ道を行く3人の旅人のようである。1人目（預言者ムハンマド）はその地位に達した。もう一人（アブー・バクル）は同じ道を行き、一人目とお会いした。3人目である私も、友たちのところに到達したいのだ。もしあまりにも多くの荷を負って行けば、彼らに追いつけない。君は私が、この道での3人目となることを望まないのかね？」[21]

疑いもなく、聖ウマルのこの態度は、崇高な心の感覚が生み出すものです。真実と法を実際に体現し、この世界に分配した聖ウマルの無数の徳の逸話は、精神の鍛練において模範とされるべき最も選び抜かれた見本なのです。

実際、人は、芸術家や天才を評価します。しかし彼らの個人的な振る舞いを模倣しようとはしません。模倣されるものは、しっかりした性格、真剣でゆるがない人格です。このような人々の、崇高で頂点に達した人格が、その生涯が終わった後でもウンマへの忠言として示され、徳の鍛錬として伝えられるのです。

アッラーの使徒の人格に驚嘆し、彼の道を進んだサハーバは、

「イスラームに進み、自らに何とか足りるだけの糧によって十分と見なすものは何と幸福なことか」と言われた、被造物の光であるお方の現世への見方を自分の生き方において支配的なものとしない限りは、その崇高な信仰集団に追いつくことはできないと認識しました。彼らは預言者のしつけによって教えられた為、ウンマに徳の基準を示す道案内者となったのです。自分が必要としているのに、それ

---

21. .シェフベンデルザーデ・アフメド・ヒルミ、「イスラーム史」1,367

を必要としている他の兄弟を見た時には、我欲を断念し、信者である兄弟がその恵みによりふさわしいと見なすことができる、その条件を彼に譲ることができるという徳を人類に、彼らが教えたのです。

聖アーイシャは次のように語っています。

「アッラーの使徒の家では、決して満腹するまで食べることはありませんでした。私たちが望めば、満腹することはできました。しかし、（信者である兄弟を優先させ）利他主義を実践していました」

聖ジャービルは塹壕の戦いの前に大きな塹壕が掘られていたその困難な時期の思い出を、次のように伝えています。

「私たちが塹壕を掘る時、とても硬い岩に当たりました。サハーバたちは預言者ムハンマドのところに来た状態を伝えると、預言者ムハンマドは自ら塹壕の中に入られました。ショベルを手に取られ、それを振り下ろすと、その固い岩は砂のように散りました。この奇跡的な状態の際に見たのですが、預言者ムハンマドは空腹のあまりお腹に石を巻きつけておられました。そこにいた3日間、何も食べていなかったのです。そこで私は、

『アッラーの使徒よ、家にまで行くことをお許しください』と言いました。許しが出されたので私は家に戻り、妻に、

『私はアッラーの使徒の状態に耐えられない。家に何か食べるものはないか』と言いました。妻は、

「大麦が少しと、ヤギの子供が」と言いました。私は子羊をほふり、家族は大麦でパンを作りました。肉を鍋に入れました。パンが焼け、鍋が煮立った頃、預言者ムハンマドのもとに行き、

『少しですが、うちに食べ物があります。1人か2人の人と共にうちにいらしてください』と懇願しました。預言者ムハンマドは、

『どれほど食べ物があるのですか』と尋ねました。私はあるものを告げました。

『それはたくさんであるし、素晴らしい。あなたの家族に、私が来るまで鍋を火からおろすな、パンも窯から出すなと注意しておいてください』と言いました。サハーバたちにも

『立ちなさい』と命じました。ムハージルとアンサールが皆立ち上がりました。

そこで私は戻り、（食事の少なさと、見かけ上それが足りないのではないかという不安により、わずかな焦りの中で）『預言者ムハンマドが、ムハージルとアンサール、それに加わった他の人々と共に来られるぞ』と言いました。

私の家族は、

『預言者ムハンマドは、私たちが用意したものがどれだけの量であるかを訊ねられなかったのですか』と聞きました。

『訊ねられた』と私は応えました。家族は、

『それなら、落ち着いて』と言いました。

預言者ムハンマドはやってきた人々に、『入りなさい、押し合わないでください』と言われ、パンを切り、そこに肉を載せられ、肉汁をその上にかけられました。結果として全てのサハーバが満腹しました。食事は少し残ってすらいました。私は家族に呼びかけて、

『これを食べて、隣人たちにも振る舞いなさい。飢えが蔓延しているのだ』と言ったのでした』(イマーム・ナワウィー、ハディースと学ぶイスラームp 363)

このハディースで示されているように、預言者ムハンマドは食事に数人と自分が招かれたことに対してその心がそれを受け付けず、他のサハーバたちをも一緒に連れて行き、慈悲と慈愛に満ちた心の利他主義という特性を示し、「ウンマを、ウンマを」という神秘を顕示させられました。さらに、招いた家についた時には、当然、全てのサハーバがまず彼が食事をすることを望んでいたのにもかかわらず、まずサハーバたちに食事を配り、彼らとともに食事をしたこと、さらには彼らの為に奉仕をしたこと、全てのサハーバが食事をしてから、家族に残った食事の分配を求めたことは、彼の心の広い慈悲と慈愛の、追従を許さない無数の顕現の一つであり、私たちも彼のその慈悲に庇護を求め、「とりなしを、アッラーの使徒よ！」と言うのです。

諸世界への慈悲として遣わされた預言者ムハンマドが実践された禁欲主義と篤信による生により、困難な時と同様、豊かな時でも、わずかなものに満足し、アッラーに次のように庇護を求めていました。

「アッラーよ、ムハンマドの家族の食事を、足りるだけのものとしてください」(ブハーリー、リカーク、17)

また聖アーイシャの説明によると、アンサールから彼の訪問に来たある女性が預言者ムハンマドの蒲団が重ねられた薄いマットであることに気づき、走って家に帰り、綿が詰まった布団を持ってきました。布団が変わっていることに気付いた預言者ムハンマドは、そのことを気に入らなかったことを示し、アーイシャに、

「アーイシャよ、その布団を返しなさい。アッラーに誓って言うが、もし私が望んでいれば、アッラーは金と銀でできた山を私と共に歩ませ、命令に従わせられただろう」と言われたのでした。(アフマド・ビン・ハンバリー、キターブッズフド p. 30)

人生や出来事を前にして、この預言者のやり方を自分のものとしたしるしである「禁欲主義」と「篤信」は、時には誤って理解されます。それは世界の恵みや豊かさから完全に手を引くことであると考えられるのです。しかし財産によってのみ行われる、財産上のイバーダも、アッラーの位階においてはとても貴重なのです。クルアーンでは200か所で施しという言葉が用いられています。イスラームの5つの原則のうちの2つである巡礼とザカートの実行は、宗教上豊かさの最低基準とされているニサーブに相当する額の資本を持っていることで可能となります。さらに「与える」手は、「受け取る」手よりもより上にあるというイスラームの条件[22]もこのイバーダを行うことができるだけの額を所有しておくことを奨励するものです。だから禁欲主義は、教えの奨励している項目に矛盾するものではあり得ないのです。

罪や不注意に陥るという恐れで、現世的な恵みに固執せずに振る舞うことは、禁欲主義と篤信が要するものです。しかし「足るを知ること」とは心におけるものであり、行動や外見のものではありません。つまり、禁欲主義や足るを知ることは、現世の恵みに従事しつつも、それらを心には入れないことです。従って禁欲主義は貧しさのことではなく、豊かな人も貧しい人も全ての信者に必要な、心のあり方なのです。アッラーの定めの結果として外見上、貧しさ、困難さの中に生きる人は、その心が現世の欲望の後を追って

22.　参照：ブハーリー、ザカート18.

引きずられているのであれば、禁欲主義者、足るを知る人とは見なされません。なぜなら禁欲主義と足るを知ることは、運命の流れに従って仕方なくわずかなものに満足することではなく、意志的に、心が現世の捕虜とならないよう守ることなのです。

次の物語は、この原則を素晴らしく表現しているものです。

シャフ・ナクシベンド師が育成した偉大なアッラーの友たちの一人であるムハンマド・パーリサー師は巡礼に行く途中で立ち寄ったバグダッドの町で、若い両替商に会いました。若者は多くの客と常に取引し、彼は若者がその時間をあまりにも世俗的なことへの従事に費やしているのだと思い、悲しみました。心の中で、

「残念なことだ！この若者はアッラーのしもべとなるのではなく、世俗的なものに従事することに夢中になっている」と言ったのでした。しかし若者の心を見てみて驚いたことに、諸器官は現世的なことに従事していても、心はアッラーと共にあり、ズィクルを行っていたのでした。

今度は、

「マアッシャッラー、手は利益を手にし、心はアッラーと主にある」と言い、若者を評価したのでした。

ヒジャーズにつくと、カーバの覆いに包まれて泣いている白いひげの老人に会いました。最初に、その人がアッラーに必死で懇願する様子と外見を見て、

「私もあのように泣いて、アッラーに庇護を求めることができれば」と言い、その人の様子をうらやましく思いました。それから、彼の心の様子を見てみると、彼のドゥアーも嘆きも、はかない世俗的なものへの要求の為でした。それを見て彼の細やかな心は悲しみました。

この物語からも理解されるように、大切なことは世俗的なものへの従事を、来世を忘れることなく続けられるということです。

メヴラーナも、現世での生を生きる人を、被造物の海を泳ぐ船に例え、次のように語っています。

「もし海が船の中にあるのなら、それを頼ることができる。しかし、波が船の中に入ってきはじめれば、それを滅亡へと導く」

実際、世界の恵みが心をアッラーから遠ざけ、自分に向けさせるという点での精神的な危険は否定することができません。そもそも、全ての信者は、クルアーンでこの危険から、「財産」と「子供」の為に用いられる「災い」という表現で警告を受けています。従って、現世に従事する時には心を不注意さから守るべきです。心が現世への愛着から守られなければ、現世の微粒子ですら拒まれるものとなるのです。

預言者ムハンマドは、

「（我欲で満たされた）現世の快楽は来世をつらいものとする。（試練である）この世界の辛さは、来世を心地よいものとする」と言われています。(ハーキム・ムステドゥレク IV、p. 345)

また別のハディースでは、

「現世は完備であり、その光景は心地よい。疑いもなくアッラーは現世の統治をあなたに与えられ、どのように振る舞うか、どういった仕事を行うかをご覧になる。だから、現世には用心しなさい」と言われています。(ムスリム、ズィクル、99)

❁

ある時、朝の礼拝の為に家を出ようとしている時、外で二匹の猫の必死な叫び声を聞きました。私は気になり、庭に出る時にそちらに注意を向けました。私が見ると、二匹の猫が向かい合い、攻撃する準備ができたライオンのように唸りながら、全く動くことなく相手を見つめていました。猫の毛は逆立っていました。わずかな攻撃で相手をバラバラにしようという心意気の中にいました。これほどの対立の理由は何であろうと考えていると、そこに一匹の死んだネズミがいるのを目にしました。猫たちはそのネズミの死体を手にする為にこれほどの争いをしているのでした。相手を引き裂くか引き裂かれるかという状態で、双方を待ち受ける害の原因は、小さなネズミの死骸だったのです。

この状態は実は、ある警告を示していました。一つの死骸を失いたくないが為に陥った、そしてこれから陥るであろう悪い結果を反映していたのでした。ある意味で、現世に従うものの無駄な愛着の為に、来世の失望を選択している様子を思い起こさせました。不注意な人々が必死にしがみつき、追いかけているはかない欲求、欲望、熱意と、一過性の地位、立場、権力争いなどが死骸でできているようなものであることを説き、それらが永遠の地知世を損なうだけの価値のないものであることを示しているのです。この、損なってしまうということの基盤には、しもべの「足るを知る」こととそのニーズを誤った場所に向けてしまうことがあります。このような人についてアッラーは次のように語られています。

كَلاَّ إِنَّ ٱلإِنْسَانَ لَيَطْغَى أَنْ رَآهُ اسْتَغْنَى إِنَّ إِلَى رَبِّكَ الرُّجْعَى

「いや、人間は本当に法外で、自分で何も足りないところはないと考えている。本当にあなたの主に(凡てのものは)帰されるのである」（凝血章、第96章、第6-8節）

精神的に未熟な人は、世俗的な利益を求め、欲望のうちにあがき続けます。何かを手にした時には、不注意さに陥ります。もし手にできなければ、今度は悲しみに溺れてしまいます。財産、地位、糧について必要以上に不安になることは、心を現世に従属させ、そのしもべとするのです。

このことに関連する次の預言者の言葉は、大きな警告です。

「誰であれその悲しみをたった一つの悲しみ、つまり来世の為の悲しみとするのであれば、アッラーは現世的な悲しみについて彼の保証人となられよう。誰であれ、世俗的な事柄について不安や悲しみを募らせるのであれば、アッラーはその人がどこの谷で滅亡しようと気にかけられない」(イブニ・マジャ、ズフド,2)

そう、世界がしもべとアッラーの間の覆いとなれば、しもべは精神的な滅亡へと引きずられます。この不注意さが続く限り、しもべは、外見上はそれをしめしていなかったとしても、現実としては預言者ムハンマドが言われたように、

「彼らの名誉は富であり、彼らの宗教はお金であり、彼らのキブラはお金である。彼らは被造物の中で最も災い深いものである。彼らはアッラーの位階において何も得るものがない」(アリー・アルムッターキ「ケンズル・ウッマール」XI, p 192) という状態に陥ってしまっているのです。アッラーが私たち皆を守ってくださいますように。

預言者ムハンマドはサハーバたちに、

「アッラーに誓って言うが、私はあなた方について、貧困を恐れない。しかしあなた方以前の人々同様、あなた方の前にも現世が広げられ、彼らが現世の為に争ったように、あなた方もその為に争うこと、現世が彼らを滅亡させたように、あなた方をも滅亡させることを恐れている。」(ブハーリー、リカーク, 7)と言われました。

だから、このはかない世界には、それにふさわしいだけの価値を置き、心をあまりにもそれで忙しくさせることを避けるべきです。

この世界はその全てが、諸世界の王の富の中のひとしずくです。来世での生と比較すれば、現世での生は海に指を入れて出した人の、指先についている水ほどですらないのです。[23]

崇高なるアッラーは、

وَمَا هَذِهِ الْحَيَاةُ الدُّنْيَا إِلاَّ لَهْوٌ وَلَعِبٌ وَإِنَّ الدَّارَ الْآخِرَةَ لَهِيَ
الْحَيَوَانُ لَوْ كَانُوا يَعْلَمُونَ

「現世の生活は、遊びや戯れに過ぎない。だが来世こそは、真実の生活である。もしかれらに分っていたならば」(蜘蛛章、第29章、第64節)と言われています。

実際、このことを知る人々の心の目において、この世界は無に過ぎません。彼らの唯一の求めはアッラーのご満悦です。ユヌス・エムレは何と素晴らしく語っていることでしょうか。

23.　参照：ムスリム、ジャンナ 55.

「あることにも喜ばない
ないことにも悲しまない
あなたの愛のみを受け入れる
私にはあなたのみが必要だ、あなたのみが」

不注意な人々の目をくらませ、多くの場合しもべを逸脱させるの世界のお金、名誉、地位、性欲は、正しい心を持った人にとっては決して重要性を持たないのです。アッラーの使徒や誠実な信者たちは、常にアッラーのご満悦を求め、その方向性をわずかでも逸れることはありません。彼らは現世の欺瞞に対し常に覚醒しています。

ヤフヤ・ビン・ムアーズは次のように語っています。

「アーリフは、来世を右手に、現世を左手に撮り、心をアッラーに向けた。もはや何ものも、彼をアッラー以外のもので忙しくすることはできない」

メヴラーナはその「メスネヴィ」という著書で次のように語っています。

「現世とは、アッラーについて不注意であることである。お金、布、女性、子供を持つことではない。あなたの気をそらさせ、アッラーに対し不注意にさせるものが何であれ、それがあなたの現世である」

つまり禁欲主義とは、財産、資本、富に対するものではありません。しもべを、アッラーに対して不注意とさせる全ての存在と、それに従事することを、心から避けることを必要とするのです。

心をアッラーから不注意とさせる最も強い影響力の一つが、人の上に立ちたいという願望、リーダーでありたい、支配したいという欲望です。世界の歴史は、欲望のうちに支配者になろうとした、あるいは支配的な地位を維持する為に迫害を行った残虐な人々で満たされています。ただ、

イスラーム史においては、心がアッラーに結びついており、支配欲の虜とならない、必要となれば手にしている力と支配を自らの希望や意志によって他者に譲ることもできる成熟度に達していた記念碑的な人も存在しています。特に歴史上、三人の存在があり、彼らはイスラームの一体化の為に追従を許さない禁欲主義の模範を示し、後に完全な善と徳の記憶を遺したのでした。

そのうちの1人目は、預言者ムハンマドの孫である聖ハサンでした。ハサンは、国家が分裂しないよう、6か月間カリフの職に就いた後、それを心の深い成熟さと共にムアーウィヤに譲り、政治的な対立を防ぎ、大きな二つの集団が互いと戦い、兄弟の血を洪水のように流すことを防いだのです。

その２人目は、東部の地方を大きな愛情の洪水のように、全く剣を使うことなくオスマン帝国に結びつけたイドリシ・ビトゥリシーでした。

３人目は、バルバロス・ハイレッディン将軍であり、広大なアルジェリアや多くの地域の王であったのに、統治下にあった国家の一体化と統一の為、オスマン帝国に従属する一つの州とし、自らもその大きな帝国の役人となることを、一つの国の統治者であることよりも優先させたのです。

スライマンも、財産や支配への愛着を心から取り出し放棄していており、自らを貧者と呼んでいました。朝起きると、貧しく困窮した人々のそばに行き、謙虚さのうちに彼らと共に座り、

「貧者には、貧者がふさわしい」と言っていました。

要するに、この世界で他の人の重荷にならない為に働き、合法な手段で富を得ることは過ちではなく、逆に

「あなた方のうちの誰かが糸を持って山に行き、その背中に薪を積んでそれを売ること、アッラーがその為に彼の誉れを守られることは、人々に何かを求めることよりも尊い。人々が与えたとしても与えなかったとしても」(ブハーリー、ザカート、50-53;　ナサイー、ザカート、85)というハディースに基づくならそれは美徳なのです。

なぜなら、豊かで力のある信者はより多くの施しを行い、より多くの人に仕事の可能性を提供し、善行にも尽力することができ、結果として

「人々のうち最も尊いのは、人々に最も益を及ぼす者である」(スユーティー、「アル・ジャミーウル・サギール」II、8)というハディースの神秘に至ることができるのです。

間違いなのは、この世界からその取り分を得ることではなく、心を現世で満たすこと、教えや良心に基づく義務を軽視すること、けちになり、現世の虜となることです。お金があるべき場所は金庫や財布であり、心ではないということを忘れては行けないのです。

この点において尊重すべき預言者の基準とは次のようなものです。

「現世に心を結び付けてはいけない、そうすればアッラーがあなたを愛されるだろう。人々が手にしているものに目を向けてはいけない。そうすれば人々があなたを愛するだろう」(イブニ・マジャ、ズフド、1)

アッラーが私たち皆を愛され、また人々に愛させられる者としてくださいますように。アッラー以外のものに対し私たちの心に預言者たちのような禁欲主義を与えてくださいますように、それによって全ての欲求、愛情、結びつきを崇高なるお方とその命令、宣言に向けさせてくださいますように。

アーミーン。

商売における徳

私たちは財産を合法な手段で稼ぐことに責任を負っています。そして合法な場所でそれを費やすことも課せられています。知性を備えた商人は、現世での取引を続けながらも、より大きい来世での利益を忘れることなく、永遠の幸福を考え、アッラーの道を逸れることはないのです。

商売における徳

預言者ムハンマドは、麦を売っている人に出会いました。売り手に、

「何を売っているのですか」と尋ねました。売り手も返事をしました。その時預言者ムハンマドに、

「手をその麦の中に入れなさい」という啓示が下りました。

預言者ムハンマドはその手をそこに入れ、麦が湿っていることに気が付きました。そこで、

「人々が見られるように、湿っている部分を上にすればよかったのに。人を欺く者は我々の仲間ではない」(ムスリム、イーマーン、164)と言われたのでした。

ハディースで示されているように、イスラームの経済システムは、取引の基盤を正直、誠実に個人や集団の為に奉仕するという見解の上に置いています。

資産が生産者から消費者へ移行することを意味し、富を得る為に努力を必要とし、特に利益を出すと同じくらい、損害を出す可能性も秘めている商業活動は、その価値を増すという形で合法とされ、さらには奨励されているのです。預言者ムハンマドの神聖な言葉で、「利益の９割が商取引に寄る者」[24]という点について示されていることを考えるなら、この

24.　参照：スユーティ、「アル・ジャミーウッサギール」I, 113

奨励のレベルがよりよく理解できます。また一方で、イスラームの信仰が基盤としている５つの基本的行為のうち、巡礼とザカートという重要な２つの行為は、豊かである信者に固有のものであり、これもまた、合法な手段で豊かになることの奨励という意味を持つものです。ハディースで語られているように、

「与える手は、受け取る手よりも上にある」(ブハーリー、ザカート、18)という形で、与える手であるよう方向づけるこの判断も、この方向において受け取ることができます。

同時に、財産と資本を手にする為の最も重要な媒介である商売において、

「全てのウンマにはそれぞれの災いがある。私のウンマの災いは財産である」(イブニ・ハンベル、IV、160)というハディースを忘れてはいけないのです。

なぜなら、商売におけるお金を稼ぐという野心は、我欲が執着してしまう恐ろしい弱みの一つなのです。野心を持った人は、壺に似ています。お腹がいっぱいであっても、口を閉じることはないのです。しかし、壺に膿を注ぎ込もうとしても、その容量以上をどのように入れることができるでしょうか。また野心を持った人は、炉やストーブ、たき火のようであり、そこに薪や炭など燃える物を入れても入れても、それで満たされて消えるということはないのです。逆に炎と熱が強くなります。預言者ムハンマドは、野心を持った人について次のように語られています。

「人は、２つの谷を満たす財産を持っていたとしても、３つめを求める。人間の腹を満たすことができるのは土のみである」(ブハーリー、リカーク、10;ムスリム、ザカート、116)

この執着ゆえに、人が商売において行う計略や欺瞞は数えきれません。この為に多くの民が滅亡してきました。ま

たこの世界は、知性を身につけない不注意な旅人でいっぱいです。限りのない豊かさの為に、施し、ザカート、様々な善行によって貧者、困窮者、身寄りのない人、未亡人、孤児、助けを必要としている人々を守るのではなく、彼らの権利まで、吸血鬼のような貪欲さで奪ってきた者は、歴史を通して常にたくさんいるのです。

イスラームは、魂にとっての重荷である肉体に、幸福や快楽さをもたらすものではありません。逆に、魂を人間の肉体や我欲という側面で支配的とするためのものです。商売はある段階から、我欲や欲望に手綱をかけることであるべきであり、分をわきまえずにいて、現世と来世で不幸とならないようにしましょう。商人が暴利をむさぼり、検査機関が贈収賄を行う人で満たされた集団において、安らぎを求めることは空疎な妄想にしかならないのです。

アッラーはクルアーンで、最後の審判の時まで訪れるウンマへの警告として、シュアイブの一族であるマドゥヤンとアイカの人々の滅亡を、商売上の道徳がこの上なく崩壊したことによって起こったものと教えています。だから、取引上で偽証を行いハラームが横行すること、弱者が搾取されることは、一族の滅亡の理由となるほどに重い罪なのです。預言者ムハンマドは次のように語られています。

「金と銀の金、うぬぼれと自尊心を載せた衣装のしもべとなっている者に絵粒を。利益の追求ばかりしている人に、望みのものが与えられれば満足し、与えられなければ満足しない（アッラーの分配と定めに反発する）。」(ブハーリー、リカーク、10; ジハード、70; イブニ・マジャ、ズフド、8)

聖ウマルは、誰かが褒められた時には、褒めた人に３つの事柄、つまり、

「あなたは彼を、隣人ということで知ったのか、旅もしくは商売を行ったのか」と尋ねました。

相手はその３つともやってはいないと答えました。そこで、

「おそらくあなたは、彼がモスクでクルアーンを読んでいる時に頭を揺らしていたのを見たのだろう」と言いました。相手が、

「そうです、ウマルよ！私が見たのはそれでした」と答えたのでウマルは、

「それなら、彼を賞賛してはいけない。イフラースとは人の首にあるものではない」と言ったのでした。

ここで聖ウマルが示している基準は、見かけに騙されないこと、人の行いや人との関係によって判断することが必要であるということです。その利益の為に試験を提出し、合格点を取ることができなかった人の、賞賛の危険を示唆しているのです。

このように商売は、人の内面世界を外に反映するものです。つまり個人の内面世界がどのようなものであれ、商売もその通りとなるのです。

イスラームによれば売り手と買い手は、何かを買う時にそれを意図的に貶めてはいけないし、売る時にもその価値がより優れているかのような表現を使うべきではないのです。相手の弱みを利用して、値段を基準以上に吊り上げてはいけないのです。欺瞞を行ってはいけないし、闇市場、高利貸し、計量のごまかしを行うべきではありません。誓いを行うことを避け、社会に害を与えるハラームの品を売買してはいけません。

取引の条件を、預言者ムハンマドは素晴らしく示しておられます。

「商人の集団よ。疑いもなく、シャイターンと罪が商売に介入してくる。（起こったことへの誓い、不要な言葉などの償いとなるよう）あなた方の商売を、サダカで清めなさい」

「商人は最後の審判の日に罪人として復活させられる。ただ、アッラーに対し篤信を持つ者、善、誠実さ、正直さを備えた者以外は」(ティルミズィー、ブユ、4)

「販売の際の誓は、財産に価値を与えたとしても、お金の恵みをなくすものである」(ブハーリー、ブユ', 26)

資産の価値を知らない売り手には、その資産の価値を教えることが必要です。彼の知識のなさ、経験のなさ、純粋さを利用しようとすることは、欺瞞に含まれます。心にアッラーへの恐れと、アッラーのご満悦を得るという意図を持つ人は、この点で非常に注意深く、細やかです。イマーム・アーザム師は、彼に売る為に絹の服を持ってきた女性に、その値段を尋ねました。女性は、

「100ディルヘムです、イマームよ」と答えたのに対し、彼は抗議し、

「いや、これはもっと高いはずだ」と言いました。女性は驚き、100ディルヘム値上げしました。イマーム・アーザムはそれでも認めませんでした。女性は100ディルヘムさらに値上げしました。それからまた100ディルヘム...イマーム・アーザムが、

「いや、これは400ディルヘム以上のはずだ」というと女性は、

「イマームよ、あなたは私をからかっているのですか？」と自分を抑えきれずに言ってしまったのでした。そこでいまーむは、女性が品物の価値を理解できるよう、その仕事をよく知る者を呼びました。呼ばれてきた人は、その服の価格を500ディルヘムとしました。イマーム・アーザムはその価格で服を購入したのでした。

なぜなら彼は、正しさから逸脱すること、品物の欠点を隠すこと、特に計量に注意を払わないことが人をとても悲しい結末に陥れるものであることを知っていたからです。

オスマン社会は、この道徳を身に着け、それによって集団の安定と幸福を、教えを否定する人々すら驚嘆するレベルで、獲得していました。ファーティフがイスタンブールを征服した後、二人の神父がオスマンの貿易商について調べる為に歩き回っていた時に体験した次の出来事は、この状態をとても素晴らしく伝えています。神父たちは朝早く、店に行って買い物をしようとしていました。店主は彼らに、

「うちでは今日最初の売り上げがあった。まだ売り上げがない隣人から買ってください」と言いました。そこで彼らは隣の店に行きました。そこの店の人も同じように、

「ここでは売り上げがありました。まだ売り上げがない隣の店から買ってください」と言いました。そこで神父たちは他の店に行きました。彼らが得た答えはいつも同じでした。結局、最初の店で買い物をしたのでした。

私たちの父祖はこのように、利他主義で献身的な道徳の基盤で育ったのです。イスラームの徳でできているこの基盤では、常に互いへの思いやりがあります。計略は、ムスリムにとって非常に重い罪です。ムスリムは嘘をつかず、騙すことはないのです。騙されることは、愚かさのしるし

です。それも、ムスリムにはふさわしくないことです。人々の道案内者である預言者たちは、誠実さと理性を特性として備えています。彼らの跡を辿るムスリムも、理性を備え、覚醒しているべきです。アッラーは、騙そうとする人に騙されないという点について、次のように警告されています。

「アッラーから保管を委託された財産を、精神薄弱者に渡してはならない」（婦人章、第4章、第5節）

騙す者については、次のハディースの対象とされています。預言者ムハンマドが

「3人の人が降り、最後の審判の日にアッラーは彼らと話されないし、彼らを見られもしないし、彼らを無実だとされることもない。彼らの為には重い懲罰がある」という表現を3度繰り返したのを耳にしたアブー・ザッルは、

「彼らの名が下げられ、彼らが望んだものを得ることがないように。悲しい結果に至るように。彼らとは誰ですか、アッラーの使徒よ」と尋ねました。

預言者ムハンマドは、

「服を（うぬぼれと自尊心の為に）引きずって歩く者、与えたものについて恩着せがましく振る舞う者、嘘の誓をして品物を売りつける者」と言われました。(ムスリム、イーマーン、171)

また一方で、イスラームの経済秩序においてダフ屋行為を行う為に品物を倉庫にしまい、値上がりするのを待つことも、認められないことです。社会を経済的に搾取することです。預言者ムハンマドはダフ屋行為を行う者を呪われています。ハディースでは次のように語られています。

「品物を販売の為に提示した勇敢な商人は、糧を与えられる。もっと高い値段で売ろうと品を貯めこみ、隠す商人は、呪われる」(イブニ・マジャ、ティジャーラトゥ、6)

イスラームは、商売に関する条件を、それが得られる、もしくは費やされる活動において示しています。クルアーンは、双方の善意によって生じるべき商取引以外の活動をハラームとし、

「あなたがたの財産を、不正にあなたがたの間で浪費してはならない」としています。

ここでの節は次のようなものです。

「信仰する者よ、あなたがたの財産を、不正にあなたがたの間で浪費してはならない。だがお互いの善意による、商売上の場合は別である。またあなたがた自身を、殺し(たり害し)てはならない。誠にアッラーはあなたがたに慈悲深くあられる」（婦人章、第4章、第29節）

「またあなたがた自身を、殺し(たり害し)てはならない。」という表現は、重要で細やかな意味を含んでいます。ここに魂の世界を駄目にしてしまい地獄の民となることを避けさせる為の警告があります。また一方で喧嘩や殺人の一部も府営に財産を搾取したり稼いだりしようという野心が原因となっているという真実に注意をひいています。これらの危険から身を守ることは、イスラームが定めている商業の条件に従うことで可能となります。特に利子を避けることは、この項目で重要な点です。

利子は、リスクや努力を含まない為、資産の運用における搾取となります。ただ金持ちのみがさらに力をつけ、困窮している人がさらに苦しめられる要因となります。預言者ムハンマドには、利子についての恐ろしいハディースがあります。別れの説教で預言者ムハンマドは、

「あらゆる種類の利子が、私の足の下にある！」と言われ、全ての種類の利子をハラームとされました。

クルアーンでも、この項目におけるアッラーの警告を次のように示しています。

「利息を貪る者は、悪魔にとりつかれて倒れたものがするような起き方しか出来ないであろう。それはかれらが「商売は利息をとるようなものだ。」と言うからである。しかしアッラーは、商売を許し、利息（高利）を禁じておられる。それで主から訓戒が下った後、止める者は、過去のことは許されよう。かれのことは、アッラー（の御手の中）にある。だが（その非を）繰り返す者は、業火の住人で、かれらは永遠にその中に住むのである」

「アッラーは、利息（への恩恵）を消滅し、施し〔サダカ〕には（恩恵を）増加して下される。アッラーは忘恩な罪深い者を愛されない」（雌牛章、第2章、第275-276節）

特に利子の為に神の怒りが示されることを告げる次の警告も恐ろしいものです。

「本当に信仰して善行に励み、礼拝の務めを守り、定めの喜捨をなす者は、主の報奨を与えられ、恐れもなく憂いもない。あなたがた信仰する者よ、（真の）信者ならばアッラーを畏れ、利息の残額を帳消しにしなさい」（雌牛章、第2章、第278-279節）

万物の創造主と、万物がご自身の誉れの為に創造された預言者ムハンマドと戦って、誰が勝つことができるでしょうか。

もし信者が利子を取っているなら、その財産を失うか、信仰が弱くなるかという結果を導きます。罪人であれば、このような誤った道に進めば、彼が受けることになる罰に、よりふさわしい存在となるよう、その財産が増えます。つまりその道は彼にとって、この世界においては利益

をもたらすものとなります。なぜならアッラーは放っておかれることはなく、猶予を与えられるからです。このような人々は、彼にふさわしい罰を受ける瞬間まで、猶予されることになるのです。この章句でのアッラーの警告に十分注意する必要があります。そうでなければ、状況はとても恐ろしいものとなります。ジャービルは次のように語っています。

「預言者ムハンマドは利子を取る者、取らせる者、書記、証人を呪われた。そして『彼らは互いに等しいものである』と言われた。」(ムスリム、ムサーカートゥ、106)

アブー・ハニーファの状態はとても素晴らしいものです。彼は偉大なイマームであり、利子に類するような状況があってはならないと、債権者の木の陰で休むことすら避けていたのです。

利子の禁止には当然、多くの理由と英知があります。この主なものとして、失業の増加、人為的な価格上昇の理由となること、助け合い、支え合い、愛情、慈悲、慈愛といった人間的、道徳的な利点が弱まること、自己中心主義をさらにつよめ、お金や影響力を得たいという欲望に火をつける、というものがあります。

これらの理由の枠組みの中で利子を禁じているイスラームは、これに対応するものとして、「できる範囲で、アッラーの為にお金を貸す」ことを奨励し、困難な状況にある人にお金を貸すことは、サダカよりもより尊いと見なしています。

これらすべての状況にも関わらず、高潔な仕事をする人、正しく誠実で信頼できる実業家や商人は、数の上ではいつでも少数派となっているのです。預言者ムハンマドはおそらくそのために、誠実な商人への大きな報償について

告げられています。ハディースでは次のように語られています。

「正しい言葉を話し、誠実で信頼できるムスリム商人は、最後の審判の日、預言者たち、誠実な信者たち、そして殉教者たちと共にあるだろう」(ティルミズィー、ブユ、4; イブニ・マジャ、ティジャーラトゥ、1)

アブー・ハニーファ師は、商売で生計を立て、莫大な資産を持つ豊かな人でした。ただし、学問に従事していた為、商売を代理人を通して行っており、その取引が合法な範疇で行われているかどうかを確認していました。この点において彼は非常に注意深く、ある時、共同経営者のハフス・ビン・アブドゥルラフマンを布の販売に行かせ、彼に、

「ハフスよ、この品物にはこういう問題点がある。そのことを購入者に話し、これだけの値下げをして売りなさい」と指示していたのでした。

ハフスはその品物をイマームが指示した価格で売りました。しかしその問題点を購入者に話すのを忘れてしまいました。そのことを知ったアブー・ハニーファ師はハフスに、

「布を買った人のことを知っていますか」と聞きました。

ハフスがその人のことを知らないというとイマームは、品物の全てをサダカとして分配したのでした。なぜなら彼はいつでも、預言者ムハンマドがアムルに言われた、

「アムルよ、誠実な人の為に誠実な財産とは、何と素晴らしいことか」(アフマド・ビン・ハンバル、ムスナドIV、197、202)との真実を体現しており、ハラールとハラームという点において篤信を基準にして行動していたからです。なぜな

ら、ハラールとハラームに注意することは、私たちに託された財産を清め、来世での勘定を出すという点で最も必要な義務であるからです。

ハラールである食べ物の為に、商売にハラームを干渉させないという点の重要性と豊かさを、今は亡き父、ムーサー師は次の出来事と共に説明していたものでした。

「ムスリムとなったアルメニア人の隣人がいた。ある時彼に、入信の理由を尋ねると、次のように答えた。

『アジュバーデムで隣の畑の持ち主であったレビ師の商売上の素晴らしい徳を通して入信しました。レビ師は牛乳を売って収入を得ている人でした。ある夜私たちのところに来て『どうぞ、この牛乳があなた方のものです』と言いました。私は驚いて、『どういうことです？私はあなたに牛乳を頼んではいませんよ』と言いました。その細やかで優しい人は『私が気がつかないうちに、私の家畜の一頭があなたの庭に入って草を食べているのを見ました。だからこの牛乳はあなたのものです。それから、あの動物が食べた草が体内から完全に排出されるまで、その乳をあなた方に持ってきます』と言ったのでした。

私は、

『何と言うことを。牛が食べたのはただの草でしょう？構いませんよ』と言いましたが、レビ師は

『いえいえ、そうはいきません。あの牛の乳はあなた方の権利です』と言い、牛が消化を終えるまで、牛乳を私たちに持ってきたのです。

この素晴らしい人のこの態度は、私に大きな影響を与えました。結果として私の目にあった不注意さの覆いが取り除かれ、導きの太陽が私の中に昇ったのです。『このような崇高な道徳を持つ人の宗教こそ、疑いもなく最も崇高

な宗教だ』と考えたのです。これほど注意深く、真実を知り、完全で清らかな人を育てる教えが、正しいのかどうかなど疑う余地もないと考え、信仰告白をし、ムスリムとなったのです」

この素晴らしさと共に、ハディースで語られていた、

「人々には次のような時が訪れる。人はその財産がハラールかハラームか、全く気にも留めなくなる」という形で不注意さが横行することは、どれほど悲しいことでしょうか。

しかし教えが設けている条件を無視することから生じる懲罰は個人的なものであり、多くの場合来世で与えられるものであり、ハラームである財産を持つことから生じる災いは、その獲得に加わっていなかった子孫をも含むものとなります。さらにこの痛みはただ来世におけるものとはならず、現世においても必ず生じます。人々はこの点を見て、人のことを「祖父が青いブドウを食べ、孫に歯がない」ということわざにしたのです。ハラームである財産から遺産を引き継いだ者の多くが、正しい道を歩んでいない、というのも一つの真実です。なぜならお金には一つの神秘があり、それは来た道を行くのです。それがハラームの道から来た財産は遺産相続人をその背に結び付け、悪い道へと引きずって行きます。このような道は蛇に似ています。蛇が自分が出てきた穴に入る混むように、財産が費やされる場所も、それが得られた場所に結びついているのです。

信仰と篤信という方向性において用いられない財産が、罪や教えの否定という結末に至ることが、クルアーンではムーサーの言葉で、非常に素晴らしく表現されています。

「ムーサーは申し上げた。「主よ、本当にあなたはフィルアウンとその首長たちに、現世の生活の栄華裕福を御授けになりました。主よ、かれらがあなたの道から迷い出てしまいますように。主よ、かれらの富を滅ぼされ、かれらの心を頑固にして下さい。それ故痛ましい懲罰が下るまで、かれらは信じないでしょう。」（ユーヌス章、第10章、第88節）

奇妙なことに、一部の人々は正直に商売を行うと利益が出ないという考えを示しています。これは不注意さそのものであり、真実を見ないことであり、アッラーの分配プログラムを否定することです。この過ちに落ちた人の考えでは財産を何度もアッラーとその使徒の道において捧げ、資産をゼロにし、決して誠実な取引から離れることのなかった聖アブー・バクルがサハーバの中で最も貧しい人の一人であったはずでしょう。しかし歴史上明らかなこととして、彼はいつでもサハーバのうちで最も裕福な人の一人だったのです。何度も、アッラーとその預言者の為に全てを捧げたのにもかかわらず、アッラーの恵みを得て、再び資産、財産を得ていたのです。

だから私たちは財産を合法な手段で稼ぐことに責任を負っています。そして合法な場所でそれを費やすことも課せられています。知性を備えた商人は、現世での取引を続けながらも、より大きい来世での利益を忘れることなく、永遠の幸福を考え、アッラーの道を逸れることはないのです。次のクルアーンの言葉は、このような人の精神的な生を素晴らしく反映したものです。

رِجَالٌ لاَ تُلْهِيهِمْ تِجَارَةٌ وَلاَ بَيْعٌ عَنْ ذِكْرِ اللهِ وَإِقَامِ الصَّلاَةِ
وَإِيتَاءِ الزَّكَاةِ يَخَافُونَ يَوْمًا تَتَقَلَّبُ فِيهِ الْقُلُوبُ وَالْأَبْصَارُ

「人びとは、交易や商品に惑わされないで、アッラーを念じ、礼拝の務めを守り、定めの喜捨に怠りなく、かれらの恐れは心も目も転倒する日である。」（御光章、第24章、第37節）

このような形での商売を行う人は、また別のクルアーンの節で語られている「決して損害を受けることのない利益」という神秘を実際に生きる人、つまり真の取引から得るべきものを得る人です。アッラーは次のように語られています。

「本当にアッラーの啓典を読誦する者、礼拝の務めを守り、われが授けたものから密に、またあらわに施す者は、失敗のない商売を願っているようなもの。かれは、十分にかれらに報奨を払われ、御恵みを余分に与えられる。本当にかれは、度々赦される御方、（奉仕に）十分感謝される方であられる」（創造者章、第35章、第29-30節）

アッラーが私たちをこの節の神秘のうちに生かしてくださいますように。心の目でアッラーの書を読むこと、ミラージュに上昇するだけの深い服従の中でアッラーにサジュダすること、合法な手段で稼ぎ、浪費せず費やすこと、与えられた恵みをアッラーの道において費やすことを可能とさせてくださいますように。

アッラーよ！商売を行う兄弟たちを、その手や舌について信者たちが安心でき、恩恵を受けることができ、祖国や民族にとって尊い人々としてください。現世と来世の双方で慈悲と恵みの要因となる誠実な行いが私たちに可能となりますように。

アーミーン。

アッラーに差し出される美しい貸し―施し

私たちに信託として与えられたこの体、命、財産は、私たちの手に永遠に残るものではありません。必ず、いつかある日、突然この全てと私たちは永遠に別れるのです。そして全てが、資産の真の持ち主であられるアッラーに帰されるのです。従って、一度だけ与えられている生命という恵みにおいてこの信託をアッラーの道で、あるべきところに届けるべきなのです。そうすれば永遠の報償を得ることができるでしょう。

アッラーに差し出される美しい貸し—施し

この世界が、力の手によってなされた無数の刺繍によって飾られた、皆の為の一過性の住居です。試練の場であるこの世界で過ごす日々は、真剣さ、細やかな精神、深い認識と熟考を必要とします。なぜなら私たちにとって本当に残る恵みとは、永遠の住居、つまり永遠の生へと持って行くことのできる美徳であるからです。しもべたちがこのような永遠の美徳と共にご自身のもとへと来ることを望まれるアッラーは、ご自身の位階における崇高な報償とご満悦の方向性において行われる誠実な行いに与えられる価値について、クルアーンはしばしば言及しています。

アッラーは、特に恵みと慈悲深さ、気前の良さ、恩恵の顕れであるサダカと施しについて繰り返し奨励しておられます。それができる状態、時期にあり、財産を持っている人にザカート、アシャル（作物の10分の1を与えること）、犠牲といった財産によるイバーダを絶対的なものとして命じられました。この義務的な援助に加え、人間性や信仰の喜びに基づいた徳があり、そのうちの一つが「**良い貸し**」です。

アッラーは崇高なそのご満悦の為に与えられるサダカや施しを、ご自身に与えられた貸し（カルズ・ハサン）として認められ、その対価として何倍も与えられることを誓われています。クルアーンでは次のように語られています。

مَنْ ذَا الَّذِى يُقْرِضُ اللّٰهَ قَرْضًا حَسَنًا فَيُضَاعِفَهُ لَهُ وَلَهُ أَجْرٌ كَرِيمٌ

「アッラーに良い貸を、貸付ける者は誰か。かれはそれを倍にされ、（その外に）気前のよい報奨を授けるであろう」（鉄章、第57章、第11節）

従って私たちのサダカが、助けを必要としている人を喜ばせると同様、いきなり私たちの前に立ちはだかる死に対し、最期の息の為の保証となるという考えで、この点でさらに努力をするべきなのです。

私たちが知るべきことは、この世界での苦痛もしくは快適さが、アッラーの定められたものに結びついているということです。真の信者は、アッラーが恵みを与えられるごとにうぬぼれ、調子に乗り、アッラーが与えられた恵みをアッラーのご満悦の為に費やすことのない、不注意な人ではあり得ないのです。彼らは良い貸しを、二つの意味で理解し、実行します。つまり、

1. 必要としているしもべにお金を貸す

2. 同時に施しを行い、アッラーにも貸しを行う

そう、良い貸しの一つの意味は、クルアーンで言及されている通り、、アッラーに貸し付けることです。これは助けを必要としている人に施しをすること、アッラーの道における努力や奉仕を支えることという形で行われます。アッラーはこの行為を、支持、奨励、報償を告げるごとに、「そのお方ご自身に貸し付けられる貸し」と表現されているのです。つまり施しをアッラーご自身が、貸しとしてしもべたちに求めておられるのです。クルアーンでは次のように語られています。

「礼拝の務めを守り、定めの喜捨をなし、アッラーに立派な貸付け（信仰のための散財）をしなさい。あなたがたが、自分の魂のために予め行う、どんな善いことも、アッラーの御許でそれを見い出そう。その（善行の）報奨は、最善にして最大である。あ

なたがたはアッラーの御赦しを請い求めるがいい。本当にアッラーは寛容にして慈悲深くあられる」（衣を纏う者章、第73章、第20節）

アッラーは崇高なるご満悦の方向性においてしもべの施しを良い貸しとして認められ、人間に特別な恵みを与えられています。もちろん、純粋な意志で、現世での個人的な利益を一切期待せず、見せかけや名誉を意図して施されるものではないことを条件としてです。その為、与えた後に感謝を期待するべきではなく、ただアッラーのご満悦の為に費やすべきなのです。アリーとファートゥマの施しについて、クルアーンで語られている、

「またかれらは、かれを敬愛するために、貧者と孤児と捕虜に食物を与える。（そして言う。）「わたしたちは、アッラーの御喜びを願って、あなたがたを養い、あなたがたに報酬も感謝も求めません。わたしたちは、主の苦渋に満ちた御怒りの日を恐れます。」それでアッラーは、その日の災厄からかれらを守り、素晴しい喜びを与えられる」（人間章、第76章、第8-11節）という基準を尊重すべきなのです。

この節の、施しに関する点は以下の通りです。

1．信者である兄弟を、自分よりも優先する：利他主義

2．はかない、世俗的な目的の為ではなく、アッラーのご満悦の為に施しを行う

3．審判の日の激しさから、施しによって守られる

4．イフラースによって行われる施しがアッラーの位階で受け入れられること、それを行った人の顔を輝かせること

5．信者に、このような誠実な行いを実行することが求められていること

そう、アッラーにこの形で与えられた貸しの為に、アッラーが何倍もの報償を与えられます。ある章句ではアッラーは、このような形で与えられた貸しについて次のように語られています。

「もしあなたがたが礼拝の務めを守り、定めの喜捨をなし、われの使徒たちを信じて援助し、アッラーによい貸付をするならば、われは、必ずあなたがたの凡ての罪業を消滅し、川が下を流れる楽園にきっと入らせよう」（食卓章、第5章、第12節）

イブン・マスードの伝承によると、アブー・ダフダ・アル・アンサールは、アッラーに良い貸しを貸し付けることに関するクルアーンの節が啓示された時、預言者ムハンマドに、

「アッラーの使徒よ、アッラーは私たちに貸し付けを求められているのですか」と尋ねました。

預言者ムハンマドは、

「そうだ、アブー・ダフダ、アッラーは貸し付けを求められておられる」と答えられました。そこでアブー・ダフダは預言者ムハンマドに手を伸ばすよう求め、その手を取って

「私は庭園をアッラーへの良い貸しとして差し出します」と言いました。

イブニ・メスードは、アブー・ダフダの庭園に600本のナツメヤシの木があったこと、彼が庭園の中にある家に家族と共に住んでいたことを語っています。この施し、つまりアッラーに貸し付けをするという言葉の後、アブー・ダフダは家に戻り、妻に

「ダフダの母よ。この庭園と家を引き払おう。私はこの庭園をアッラーへの貸し付けとしたのだ」と言いました。

妻も彼に

「アブー・ダフダ、あなたは利益の多い取引をしたのです」と答えました。それから、家具と子供たちをつえて庭園にある家から引っ越しをしたのでした。

この意識と徳が頂点であった時代には、信者の社会は常に安らぎに満ち、幸福に暮らしていました。そして現世と来世を守ったのでした。次の出来事も、この真実の目もくらむような顕れです。

エリー・ケドリーが書いた、オスマン朝の最後の時期にイギリスの中東政策に関する書物の添付の中で説明されていることによるなら、19世紀後半に東アナトリアでは深刻な干ばつが起こっていました。そこでイギリス人たちは、干ばつを理由としてオスマン朝に対する反発が起こすことができるかどうかを確認する為に、そこに一人のスパイを送り込みました。スパイが行った調査の結果として目にした真実は、この上ない教訓を含むものでした。報告書では次のように書かれていました。

「ここでは干ばつが起こっているが、飢えはない。皆が互いを守り、助け合っている。その為に干ばつが飢えをもたらしていない。結論として、このような強い社会構成の中で、干ばつを理由に反発を起こすことは不可能である」

疑いもないこととしてこの高いレベルは、ニーズや貧困が限界地点に達した瞬間での、そして困難な時においての施しの価値に注意をひくクルアーンの言葉の範疇で生きられることの現世での報償であり、恵みです。アッラーはこの点で気の緩みや不注意さが示されることを求められず、しもべへの警告として次のように語られています。

「どんな訳であなたがたは、アッラーの道のため施さないのか。本当に天地の遺産の相続は、アッラーに属する。あなたが

たの中、勝利の前に(財を)施し戦闘する者と、後からそうする者と同じではない。これらの者は、(勝利の)後に施して戦闘する者よりも高位である。だがアッラーは、凡ての者に善(き報奨)を約束された。本当にアッラーは、あなたがたの行うことを熟知なされる」（鉄章、第57章、第10節）

つまりアッラーは、特にイスラームとムスリムが困難な状況にある時に、しもべたちに献身を求められているのです。しもべたちのこの献身が、クルアーンの表現によると「良い貸し」なのです。実際、チャナッカレの戦いや独立戦争で献身がしもべたちの良い貸しとして示されたことで、アッラーはそれに対して勝利を恵まれたのです。

忘れてはいけないことは、私たちに信託として与えられたこの体、命、財産は、私たちの手に永遠に残るものではないということです。必ず、いつかある日、突然この全てと私たちは永遠に別れるのです。そして全てが、資産の真の持ち主であられるアッラーに帰されるのです。従って、一度だけ与えられている生命という恵みにおいてこの信託をアッラーの道で、あるべきところに届けるべきなのです。そうすれば永遠の報償を得ることができるでしょう。私たちがあるべきところに届けなかったとしても、それらの真の持ち主であるアッラーは、私たちが現世と別れる際に、全てを元通り取り戻されるのです。しかしその二つの間には大きな違いがあります。一つめの形、つまり施しを行う場合アッラーは、地と天の宝庫が崇高なるお方のものであるにもかかわらず、それをご自身に与えられた貸し付けであると見なされるという恵みを示され、その報償を何倍も与えられるのです。二つめの形、つまり施しを行わなかった場合、私たちの手には何も残らず、ただその財産の責任だけを負うことになるのです。預言者ムハンマドはその生涯を報償から遠ざかった状態で送る人について次のように警告されています。

「人々は『私の財産、私の財産』と言い続けている。人々よ！あなたが食べて消費した、もしくは着用して着古した、あるいはサダカとして差し出して善行を得る為に送ったものの他に、あなたに財産などあるだろうか？」(ムスリム、ズフド、3-4; ティルミズィー、ズフド、34)

メヴラーナも、その「メスネヴィ」で非常に素晴らしく語っています。

「死の天使が不注意な金持ちの耳を引き（つまり、命を取り上げ）彼を人生という夢から醒めさせた時、実際には所有していない財産の為に金持ちが生きていた時に持っていたそれを失うかもしれないという恐れに、自分でも笑いたくなる」

アーイシャによって伝承されているところによると、預言者ムハンマドの家族が羊を屠りました。多くの人々に施しを行った後、預言者ムハンマドはそのヒツジから何が残ったかを訊ねました。

「肩甲骨だけが残りました」とアーイシャが答えると、預言者ムハンマドは

「肩甲骨以外の全てが、私たちのものになった、と言いなさい」(ティルミズィー、スファートゥルクヤーマ、35)と言いました。

実際、人の真の資本は善行を行うという形で永遠の生の為に貯めたものなのです。

現世の財産がら災いという形で生じ、心の均衡を壊すはかない、我欲的な愛着から遠ざかっていることは、ただ気前の良さと献身の豊かさによって可能となります。

アッラーは人間が現世と別れる際にやっておけばよかったと感じるイバーダとして特にサダカを挙げられ、それを

軽視していた者が死を通過する際に経験する魂の状態を次のように語られています。

وَأَنْفِقُوا مِنْ مَا رَزَقْنَاكُمْ مِنْ قَبْلِ أَنْ يَأْتِىَ أَحَدَكُمُ الْمَوْتُ
فَيَقُولَ رَبِّ لَوْلاَ أَخَّرْتَنِى إِلَى أَجَلٍ قَرِيبٍ فَأَصَّدَّقَ
وَأَكُنْ مِنَ الصَّالِحِينَ

「死があなたがたを襲う前に、われが与えたものから施しなさい。かれは、「主よ、何故あなたは暫くの間の猶予を与えられないのですか。そうすればわたしは喜捨〔サダカ〕をして、善い行いの者になりますのに。」と言う」（偽信者章、第63章、第10節）

だから、けちであることや現世への愛着の為に施しから遠ざかり、ある時全ての財産を後に残る人たちに遺す時、それらの重い勘定や懲罰を負った来世での破産者とはならないようにしましょう。

なぜなら、財産がどこで獲得され、どこで費やされたかという点は、来世での大きな裁きの中の最初の問いであるからです。預言者ムハンマドは次のように語られています。

「どのしもべも最後の審判の日、生涯をどこで費やしたか、その知識によってどのようなことを行ったか、財産をどこで稼いでどこで使ったか、体をどこで疲弊させたかということが問われることなく、その場所から動くことはできない」

この全ての真実を最も素晴らしい形で認識していた私たちの父祖が、施しという点で示していた優れた努力宿の活動は、歴史に偉大な「ワクフ（宗教寄進財団）文明」を贈ったのです。彼らはあたかも善を競い合っており、この競

い合いの中であらゆる種類の存在、あらゆる種類のニーズに応えることのできる組織、ワクフ（宗教寄進財団）を創設しました。それらに加え、高潔さや恥じらいの為に誰かにものを求めることができない人の心を傷つけないよう、そして彼らが物乞いをする必要に迫らないよう、昔のイスタンブールのいくつかの町に置かれていた「サダカの石」は非常によく知られています。

このサダカの石のうち、ウシュクダルのドアンジュラル通りの十字路、結婚局の向かいの歩道のそばに、約１メートルの高さ、30センチの直径を持つ、歴史的な記録であるものの他は、今日、元々あった場所に存在しているものはありません。

しかしこれらはかつて、非常に大きな奉仕と善行での競い合いの証人だったのです。それができる状態にある人たちは、「右手が与えたものを左手が見ないような形で」施しを行う為、夜の闇の中、この石のてっぺんにあるくぼみの中にサダカを入れたのでした。

その後、この地域の徳を備えた貧者たちが、それぞれに必要なだけをそこから取って行きました。必要以上のものには手を出しませんでした。特に、困窮している状態であるのに人に求めることを躊躇する人たちは、夜遅くにこの石のところにお金を取りに来ました。17世紀のイスタンブールを説明しているフランス人の旅行者は、上にお金が載っているサダカの石を一週間観察し、そこにサダカを取りに来た人を誰も見なかったと書いています。

伝承によれば、イスタンブールには4か所にサダカの石がありました。ウシュクダルのギュルフェム・ハートゥン・モスクの中庭、またウシュクダルのドアンジュラル、カラアフメット、そしてコダムスタファパシャにありました。

光栄ある先祖たちがこのような奉仕をなぜ行ったのかは、ご存じのとおりです。ただ、それぞれの社会、それぞれの時代に貧困者、困窮者は必ず存在します。従ってクルアーンで示されている、

「豊かな者の財産には、貧者の権利がある」[25]という原則を心でのスローガンとすべきであり、サダカの石からワクフへと続いた善行の競い合いを私たちも続けるべきなのです。高潔な貧者たちの尊厳を維持することも必要なのです。時には与え、時には受け取る為に、サダカの石に伸ばされる手の誠実さとイフラースを維持しなければいけないのです。私たちの心が、一つのサダカの石となるべきです。困っている人々が私たちに、母の胸の暖かさを感じながら近づけるようであるべきです。私たちもその恵みと気前の良さで「糧を与えるお方」であるアッラーのしもべとして、感謝のサジュダを行うべきです。現世と来世での基準は、

「人々のうち最も尊いのは、人々の為に最も役立つ人である」(スユーティ、「アル・ジャミーウッサギール」II、8)という宣言と、

「言ってやるがいい。「本当にわたしの主は、そのしもべの中から御心に適う者に、御恵みを豊かに与えまた或る者には乏しく授けられる。かれはあなたがたが(主の道のために)施すものはすべて返される。かれは最も優れた御恵を与える方であられる。」（サバア章、第34章、第39節）

というクルアーンの言葉なのです。

結果として、施しであれ良い貸しという形で行われる素晴らしいイバーダや行為は、そもそもアッラーが私たちに与えられた恵みのおかげで実現するものです。つまりあっらーが私たちに与えられた恵みによって私たちが行う善行

25. .参照：撒き散らす者章第19節、階段章第24－25節）

を、ご自身への貸し付けと見なされるのです。この観点からこの状態は、アッラーが私たちに与えられた恵みを、さらなる恵みによって極めることなのです。

つまり、実際に無数の恵みを与えられるのはアッラーであり、それらを得て利益をえるのはしもべです。従って実際に借りがあるのは人間であり、受け取る権利がある側がアッラーなのです。

メヴラーナは次のように語っています。

「天と地に存在するものは、全てをアッラーに求める。なぜなら全ての存在においてアッラーに借りを負っているからである」

ここでとくに人間は、彼自身に与えられた被造物の中で最も尊いものという特性、それからイスラームと信仰という恵みを与えられたこと、預言者ムハンマドのウンマとなったという恵みを得たことなど、数えきれないほどの恵み、贈り物を前にしてアッラーに借りを負っているのです。さらには全ての心は、創造の要因であり永遠の道における唯一の導きの為の案内者である預言者ムハンマドに借りを負っています。彼が明らかな、あるいは秘められた形で人間に送られたイバーダ、行為、振る舞いの完全性と美しさを星のように心に反映させるサハーバたち、そして全てのイスラームの偉人たちに借りを負っています。両親にも借りを負っています。家族にも借りを負っています。

これらの借りを返すことはアッラーと預言者ムハンマドの道徳によって徳を身に着けるという形で、生きたクルアーンとして暮らすこと、スンナの空気の中で芽吹くバラとして、アッラーとの出会いの場に歩を進めることで可能となります。さらにアッラーに感謝をすることは、全てのしもべが果たすべきことなのです。

知っておくべきことは、アッラーのこれほどの無数の恵み、贈り物に対し、人々の心がもし、アッラーのご満悦をもたらさない、つまり現世的ではかない罠において損なわれてしまうのであれば、人間はその誉れと尊厳を失いはじめます。このような形で神の基準の範疇外で生き、一過性の素晴らしさをその目で誇張させるものは、常に卑小なもの、低俗なものに従うことになる、ということです。この観点から、その本質にある「最も素晴らしい被造物」という神秘を忘れ、自分たちよりもずっと低俗でずっと無力な、より困窮してより弱い被造物から貸し付けを求める哀れな存在となるのです。結果として、気が付かないでいた真の宝石を駄目にすることになるのです。このような人の状態に非常に驚いたメヴラーナは、次のように語っています。

「これは何と驚くべきことか。太陽は1つの微粒子に貸しを求めるだろうか？金星が小さな杯に酒を求めるだろうか」

「あなたは何であるかがわからない魂であり、その特性が完全な意味で知られていない命である。性質や特性の世界に閉じ込められている。あなたは太陽である。一つの結び目に引っかかってしまっている。何と残念なことか」

この詩でメヴラーナは人を、精神的な太陽に似せています。世界は、その太陽の光で輝き、それを反射し、微動する微粒子のようです。従って人がアッラーから恵みを得ることを考えず、この世界のはかない喜びを追いかけ、そこに喜びを求めることは、ある意味で太陽が微粒子に貸しを求めることを体現するようなものです。太陽がどうして微粒子を必要とするのでしょうか。

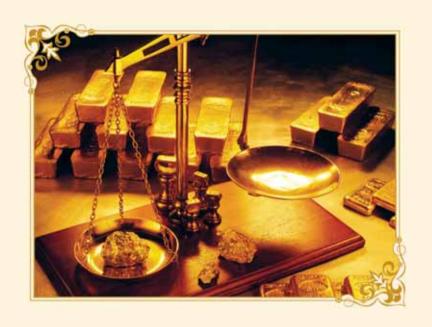
人の魂も、アッラーのクルアーンにおける表現を用いるなら「それからわれの霊をかれに吹込んだ」[26]とされている、神の光です。しかし人々の多くは魂の崇高さや価値を知らず、その真実について何も知らないまま生きるのです。彼らは、彼らに与えられた崇高で神聖な恵みであり、神の信託を物質的で一過性の喜びの犠牲にし、ただ肉体の為のプランを実行することを愛する人々です。怒り、性欲、名誉、肉体的な快楽の渦に陥ってしまっているのです。おいしい食べ物や娯楽の虜となってしまっているのです。あたかもこの太陽が天の事象に従って「罪を生み出すこと」にしばりつけられ、日食となり、光を放てない状態となったかのようです。この状態にあるしもべは、自分の位階を知るべきです。アッラーが与えられた無数の恵み、特に「最も美しい被造物」という神秘を知るべきです。一過性の、どうしても満たされることのない喜びの虜となってはいけないのです。喜びを、我欲の欲望やはかない愛情の中で探してはいけないのです。全てを自分の中で、自分の心で探すべきなのです。

要するに、この世界から強制的に出される前に、アッラーの恵みによって信仰の保証と意志と共に、来世への旅に出る準備をしておかなければならないのです。

アッラーよ！崇高なお方に与えられる貸し付けとしてあなたがしもべから求められた施しというイバーダと「良い貸し」の徳に関して、私たちの心に、あなたの無限の気前良さの海からわずかでもお恵み下さい。私たちが持つ物質的、精神的何全ての責任と借りを果たすことを、私たち皆がかなえることができますように。私たちに、孤児たちの、助けを必要とする人たちの、そして身寄りもない人たちの無言の叫びを聞くことのできる耳、それを感じることのできる心をお与えください。アーミーン。

---

26. 参照：サアド章第72節、アル・ヒジュル章第29節

社会的なつながりにおける借金と、借り入れ

他のイスラームの美徳と同様、お金を貸すというイバーダも、私たちは実行しなければなりません。いつか永遠の住居に移された時には、豊かな人にもこのような機会はなく、貧しい人にはそのようなニーズはなくなるのです。それができる状況にある人は、いくつかの言い訳でお金を貸すというイバーダを放棄するべきではありません。また逆に、お金を借りた人も様々な苦労を前面に出して借りたお金を返すことを軽視してはいけません。この徳を伴う社会的なイバーダを損なってはいけないのです。

社会的なつながりにおける借金と、借り入れ

どのような善行であれ、その真の素晴らしさはその実行における完成度、成熟度、そしてそのイフラースの結果として生じます。その為にクルアーンでは、

أَحْسِنُوا إِنَّ اللّٰهَ يُحِبُّ الْمُحْسِنِينَ

「またアッラーの道のために(あなたがたの授けられたものを)施しなさい。だが、自分の手で自らを破滅に陥れてはならない。また善いことをしなさい。本当にアッラーは、善行を行う者を愛される」(雌牛章、第2章、第195節)と言われているのです。

従って、示される全ての良い行為、振る舞い、言葉、イバーダなどは、常にそこにおける素晴らしさを反映する崇高さと完全さの基準の中で、人生に影響を与えるべきであり、全てがただ心から生じるものであるべきなのです。そうでなければ最も美しいと考えられている振る舞いやイバーダすら、我欲の渦の中でもまれ、害と悲しみのうちに終わるのです。

この深い真実への尊重においてこの上なく必須となる最も重要な項目の一つが、疑いの余地もなく、借金と借り入れに関する細かい基準です。なぜならお金を貸すイバーダの継続性は、お金を借りた人、貸した人という両方の側にとって義務となる原則の尊重に結びついたものであるからです。これらは魂における徳の泉を沸き立たせ、多くの乾ききった心を、愛情や利他主義、気前良さの海に出会わせます。このようにしてアッラーのご満悦を得る媒介となる振

る舞いという段階に、つまり天使たちですらうらやむ崇高な道徳へと至るのです。この真実の反映という観点でアブー・フライラが伝えている次のハディースは、教訓深いものです。

預言者ムハンマドは、イスラエルの民の時代にある人に千ディナールの借金を求めた人について話をされました。借金が求められた人は、

「私に証人を連れてきてください、彼らの前で与えましょう。証人となって貰いましょう」と言いました。

借金を求めた人は、

「証人は、アッラーだけで十分でしょう」と言いました。

借金を与える側の人は、

「それでは、保証人を連れてきてください」と言いました。借金を求めた人は、

「保証人は、アッラーだけで十分でしょう」と言いました。

借金を与える側の人は、

「あなたは正しいことを言った」と言い、一定の期限をつけてそのお金を与えました。

受け取った人は海を旅し、そのニーズを満たしました。それから借金を期限内に返す目的で戻る為に船を捜しました。しかし、見つけることができませんでした。その為、他にどうすることもできず、薪を一つ買って中をくりぬき、千ディナールを、持ち主に呼びかける手紙と共にその薪の空洞に入れました。そしてその空洞にふたをし、整えました。それから海岸に来て、

「アッラーよ、ご存じのように私はこれこれの人から千ディナールのお金を借りました。証人を求められた時には、私は『証人は、アッラーだけで十分です』と言いました。彼も、証人としてあなたを認めました。保証人が求められた時には、私は「保証人は、アッラーだけで十分です」と言いました。彼も、保証人としてあなたを認めました。私は今、船を見つけようと努力しました。しかし見つけることができませんでした。これをあなたに委ねます」といい、その薪を海に投げました。薪は海を流れて行き、見えなくなりました。

その後その人は、そこから離れ、自分が乗る船を捜しに行きました。

その頃、お金を貸した人は、お金を持って来るはずの船を待っていました。船は見つからなかったものの、中にお金が入っているその薪を見つけました。それを、家で薪として使う為に持って帰りました。斧でそれを割ると、中からお金と手紙が出てきたのでした。

しばらくして、お金を借りた人も船を見つけ、自分の国に戻ってきました。薪に入れて送ったお金を、貸した人が受け取っていない可能性を考え、すぐに千ディナールを持ってその人を訪ねました。

「あなたのお金を持って来る為にずっと船を探していました。しかし、私を乗せてきた船より前に出る船は見つからなかったのです」と言いました。

お金を貸した人は、

「あなたは私に何かを送りましたか」と聞きました。

借りた人は、

「私は、これより早い船を見つけることができなかったと知らせました」と言いました。

貸した人は、

「アッラーは、薪の中に入れて送ったお金を、あなたの代わりに私に支払われました。、｛つまり、イフラースの対価としてアッラーはあなたの保証人として私に届けられました。だからあなたが今持ってきた千ディナールはあなたの手に残りました。だから、安心して｝千ディナールを得たものとして、お帰りなさい」と言いました。

このハディースは、アッラーの名においてされた約束や、それを実行する為の努力における大きな誠実さが、アッラーによっていかに認められ、守られるものであるかという真実を示しています。このことも、貸し借りという点で双方が理解を示し、イフラースを備え、均衡を保っていることが必要であることを示します。その取引の中に搾取が関わっていない限り、アッラーは双方に慈悲を持って対応されます。この真実を反映する、英知に満ちた次の物語も、教訓深いものです。

イフタールの時間が近づいていました。パン屋の入り口に、他の人々の目が見ることのできない品格を備えた人がやってきました。パン屋に近づき、混雑していた人々がいなくなった後、パン屋に、

「今日は糧を得ることができなかった。寿命が尽きなければ明日支払うから、4分の1のパンを頂けないか」と言いました。声が震え、顔が赤くなっていました。

「何と言うことを。4分の1ではなく、1つ丸ごと差し上げますよ。お金はいりません」と言いました。しかしその困窮した人は、

「いや、4分の1で十分です。もしかしたらあと3人、貧者が来るかもしれない。それに4分の1だけの分しか、顔を染めることもできない。これ以上のものには耐えられない。4分の1を受け取る条件は、明日その借りを返すことです」と言いました。

パン屋は驚きながらも、4分の1のパンを与えました。キスをしながらパンを受け取ったこの人は、ゆっくりと静かな足取りでその場を去りました。その先に、通りの角に犬がいました。懇願するような目で、空腹を訴えるかのような目でその老人を見ていました。輝かしい顔をしたこの祝福された人は、

「半分はおまえのものだったということだ」と言い、4分の1のパンの半分をその犬に与えました。それからモスクに歩いて行きました。手に残った一口のパンと数口の水で、断食明けの食事を済ませました。この恵みを与えられたアッラーに感謝しました。

翌日、ある店の持ち主が、

「親父さん、そこの向かいにある水汲み場で、この水入れに水を汲んできてくれ。それから新しく来たこの商品を中に運んでくれ」と言い、その対価として彼に1リラを支払いました。

この男性はすぐにパン屋に走り、4分の1のパンの値段である250クルシュを支払いました。パン屋はそれを受け取ることを望みませんでしたが、この輝かしい顔の人が何度も懇願する為、それ以上は言えず、目に涙を貯めながらその代金を受け取らざるを得なかったのでした。

この例であったように、誠実に支払う意思を持って借金をする人には、アッラーはその支払いを容易にされます。借金を負う人が、その困難さに忍耐し、搾取したり悪用し

たりといったことをせず、借金をイフラースのうちに支払う努力をしていれば、アッラーはその努力に応じて容易さと出口を与えられます。

自分の管理下である財産を持っている人が、それを支払わず、借金を返さないのであれば、責任を問われます。つまり借金をしている人は、他に手段が見つけられなかった場合、命にかかわるようなものではない動産、不動産を売ってその借金を支払う手段を選ぶべきです。人が、借金をしておきながら、その暮らしをぜいたくさと浪費の中で送り、結果としてその借金を返せないのであれば、この状態はしもべの権利と責任を侵害しているものになります。借金をしている人は、その支出においていくつかの制限をつけ、多額の出費を行うことは避けるべきです。借金を返すまで、わずかでも金を貯め、お金を貸してくれた人の権利を尊重するべきです。それを行わず、我欲による計算がそこに入ってくれば、神の慈悲はそこから取り除かれ、しもべとしての権利が生じます。これはアッラーが許されないことなのです。つまり、「**疑いもなく、アッラーは悔悟を受け入れられる**」[27]というクルアーンの言葉が示すように許されるお方であるアッラーは、しもべの権利についてはその許しの対象外とされているのです。

また一方で、借金を返すのを送らせている人の糧は、ハラームが交ざっていることになります。特に、返さないつもりでお金を借りることは、来世の大きな災いとなります。このような罪を犯す人は、預言者ムハンマドが

「誰であれ、返さないつもりで借金をする者は、アッラーの御前に泥棒として出ることになる」(イブニ・マジャ、サダーカトゥ、11/2410)

27.　参照：相談章第25節、悔悟章第104節

という形で示された危険の中に陥ることになります。また別のハディースでは、この点のアッラーの位階における重要性を非常に明白な形で示しています。

「誰であれ、支払うつもりで人々から何かを得たのであれば、アッラーがその人の借金を返される（返済を容易にされる）。誰であれ、損なうつもりで人々から何かを得たのであれば、アッラーはその人の財産をまだこの世にいる間に損なわれる」(ブハーリー、イスティクラズ、2)

借金に関して、預言者ムハンマドの次の奨励と実行は、非常に素晴らしい模範です。

ザートゥリッカの遠征から戻る際、預言者ムハンマドは、ジャービルと話をされていました。結婚したばかりだということ、その為にたくさんの借金があることを知り、何を持っているのかを訪ねました。彼はただ1頭だけラクダを持っていると答えました。預言者ムハンマドは借金から救われる為にラクダをご自身に売るよう求めました。そこで取引がなされ、預言者ムハンマドはマディーナに到着した時にその代金を払う約束で、ジャービルのラクダを買ったのでした。マディーナに到着するとジャービルがラクダを連れて行き、預言者ムハンマドは示された代金を払いました。取引の誓約が終わった後、預言者ムハンマドはラクダをジャービルに贈り物とされました。追従を許さないこの崇高な優しさと道徳はムスリムを非常に感動させました。この出来事が起こった夜を「ラクダの夜」と呼んでいたのでした。その夜、預言者ムハンマドはジャービルの為に25回、許しを求められたのでした。(リヤーズッサーリヒーンI、p 104-105)

ジャービルは次のように語っています。

「道で、ユダヤ人に会いました。私はこの出来事を説明しました。彼は大いに驚き、『ラクダを購入し、お金を払い、それからそれをあなたに贈ったのか？』と言っていました。私も『そうだ』と答えました。」

この素晴らしく、崇高な道徳の範疇には、

1. 借金をしている人は、自分が持っている財産やそれに類するものを売り、借金を返すべきである

2. それができる状態にある人は、借金を負っている人を助けるべきである

3. 借金を負っている人の為に許しを乞い、ドゥアーするべきである

ことが読み取れます。

ハディースでは次のように語られています。

「アッラーがしもべに恵みを与えられ、それを最も美しい形で完成させられ、その後、人々のニーズを彼に委ねられ、もしその人がそれを不快に感じるのであれば、手にしている恵みを壊滅へと投げたことになる」(ムンズィリ、アッタリギブ4/170)

ある時預言者ムハンマドは、

「破産者とは誰であるか、知っていますか」と尋ねました。サハーバたちは、

「破産者とは、私たちの中で、お金がなく、財産もない者のことです」と答えると、預言者ムハンマドは次のように続けられました。

「私のウンマにおける破産者とは、最後の審判の日、礼拝、断食、ザカートの善行と、（この善行と共に行動が記録された帳面で）この人を傷つけた、この人が姦淫したと中傷

した、この人の財産を横取りした、この人の血を流した、この人を殴った（と記されている）ひとである。彼の善行の報償から、（権利を持っている）人々にそれが与えられる。もし、自分が負っている借りをかえすことなく、イバーダと善行の報償が尽きてしまえば、借りを返すべき相手の罪から取られた分の罪が、その人の上に加えられる。それから（彼らの罪と共に）地獄に投げ入れられる」(ムスリム・ビッル9; アフマド・ビン・ハンバル、II、303、324、372)

また別のハディースでは次のように語られています。

「*1*ディナール、もしくは*1*ディルヘムでも借金をしたままで死んだ人の借金は、その人の善行から支払われる。そこでは（集合の場では）ディナールもディルヘムもない」(イブニ・マジャ、サダーカトゥ、12/2414)

この観点から預言者ムハンマドは、借金を始めとして他のしもべの権利を負っている人が、まだこの世界にいる時にそれを相手との間で解決することを、次のように命じられています。

「誰であれ、その上に兄弟に対する貞操もしくはその他の理由で権利があるのであれば、ディナールやディルヘムの存在しない（世界の終りと審判がある）日が来るまでに、まだここにいる間に解決するようにしなさい。そうでなければその日、誠実な行為がある場合はその害に応じて彼自身からそれが取り去られる。もし誠実な行為がなければ、友人の罪が取られ、彼の上に積まれる」(ブハーリー、メザーリム 10、リカーク48; ティルミズィー、 2)

もちろん、その本質という点から、ここでの「解決」は、受け取る側の権利や法を守り、借金を来世に遺さず、この世界で支払うということです。預言者ムハンマドの実行もそのように行われました。彼はご自身の前に借金を

負った人の遺体が運ばれてくると、彼の為の礼拝は行わせず、ただその借金が支払われた場合、イマームとして前に出られました。アブー・カターダは次のように語っています。

「預言者ムハンマドに礼拝をして貰う為にある人（の遺体）が運ばれてきました。ただし預言者ムハンマドは、

『彼は借金を負ったままである。あなた方の仲間の礼拝をあなた方が行いなさい』と言われました。

私は、

『ではその借金は私が負いましょう、アッラーの使徒よ』と言いました。彼は

『忠誠を誓って言うのか」と尋ねられました。

『忠誠を誓って言います』と私は答えました。そこで預言者ムハンマドは葬儀の礼拝を行われました」(ティルミズィー、ジャナーイズ、69; ネサーイ、ジャナーイズ、67)

この細やかな基準の中で、預言者ムハンマドは言われています。

「アッラーの観点からは、しもべがアッラーによって禁じられている大罪について、共にたずさえてくる可能性のある最大の罪の一つは、人が支払うべきお金を残すことなく、借金を負ったまま死ぬことである」(アブー・ダーウード、ブユ、9)

借金をした人、与えた人が注意をすべき点を簡潔にまとめるのであれば、これらを2つのカテゴリに分けることができます。それに基づけば、借金を与える人は、

1. ただアッラーのご満悦の為に、信者である兄弟の苦労を取り除くことを目的とすべきです。ハディースでは次のように語られています。

「誰であれ、（宗教上の）兄弟のニーズを満たすなら、アッラーも彼の苦労を取り除かれる（彼に援助をなされる）誰であれ、ムスリムの悩みや悲しみの解決策となるんであれば（彼を安泰へと導けば）、アッラーもその為に最後の審判の日の苦痛から、その苦痛を取り除かれる（彼を喜びへと至らせる）」(ブハーリー、メザーリム、3;ムスリム、ビッル、58)

2. 貸すお金に、何らかの利益を混入させないこと。

3. できる限り、容易となるようにすること。特に、借金のある人が誠実に支払いをしようと努力しているのに、それがうまくいかないのであれば、彼の為に猶予期間を与えるべきです。ハディースでは次のように語られています。

「誰であれ、お金を貸している相手に猶予期間を与えれば、その一日分ごとに善行を得る。誰であれ、その借金を期間が来た後で遅らせれば、遅らせている限り、毎日（受け取る財産だけの）サダカが記録される」(イブニ・マジャ、サダーカトゥ、14/2418)

「あなた方以前に生きていたある人のところに、その魂を取る為に天使が来て、尋ねた。

『あなたは何か良いことをしましたか』

男は、

『わかりません』と答えました。彼に再度、

『考えなさい、もしかしたら思い出すかもしれない』と声がかけられた。

男は、

『何も思い出せない。ただ私は生きている時に、人々と取引を行っていました。その行為をする際に、金持ちには支払い期限を長くし、貧しい人には（支払いにおいて寛容を示し、不足部分を許すという形で）彼らの仕事を容易にしていました』と答えた。アッラーは彼を（この善行を理由として）天国に入れられた」(ブハーリー、ブユ、17-18;ムスリム、ムサーカートゥ、26-31)

4. もし、自分の状況がよく、またそれに対して相手が非常に貧しく困窮していれば、与えた借金をサダカと見なすこと。

5. 借金をしている相手を傷つけないこと。ハディースにおける

「相手が与えても与えなくても、自分の権利を求める人は、高潔さの範疇でその権利を要求しなさい」という原則に基づき、良い振る舞いを示すべきです。(イブニ・マジャ、サダーカトゥ、15)

実際、別のハディースでも預言者ムハンマドは次のように語られています。

「アッラーはあなた方以前に生きたある人に、慈悲を持って振る舞われた。なぜならその人は、何かを売った時、あるいは買った時に相手の仕事を容易にし、買ったものを求める際にも（粗暴ではなく、理解を示し）容易にしていたのだ」

これらすべてに対し、お金を借りた人は、

1. やむを得ない理由がない限り、借金をするべきではありません。

2．非常に重大なニーズがある場合にのみ、必要なだけのお金を借りるべきです。

3.贅沢、浪費をするべきではありません。

4．支払い意志、努力、その決意において誠実であるべきです。

5．お金を借りている人は、貸してくれた人のいい意志や良い振る舞いから搾取したり、悪用したりするべきではありません。なぜならこのように振る舞う人は、真に助けを必要としている人が借金をする際の妨げとなり、他の人々に害を及ぼすからです。

6．借りた金額の価値が目減りするような形でお金を借りるべきではありません。特に長期間借りる場合は、借りたお金の価値が目減りしないような形で借りるべきです（もちろん、お金を貸す側の寛容が示されている場合を除いて）

7．支払いの期限を遅らせてはいけません。特に借金を負っている側が、支払いができるだけの資産を持っているのであれば、期限通りに支払いを行うべきです。支払う状況にない場合は理由を知らせて猶予を求めなければなりません。ハディースでは次のように語られています。

「借金を返すことができる豊かな人が、支払いを遅らせることは、迫害である」(ブハーリー、イスティクラズ、12;　ハワーラートゥ、1-2;ムスリム、ムサーカートゥ、33)

8．借金は決して、来世に持ち越してはいけません。

ただし、これらすべての基準に注意を払ったにも関わらず、どうしてもやむを得ない理由で借金を支払う前に来世へと移ってしまった場合、次の3つの状況では、借金をしている人の支払いをアッラーがご自身でなされることを誓

っておられます。ハディースでは次のように語られています。

「疑いもなく、借金をした人が死んだ場合、その借りは最後の審判の日、その人から取られる。しかし次の3つの理由で借金を負った人は、この範疇には含まれない。

1. 人の力がアッラーの道において（戦いで）弱り、その人がアッラーの敵に対し、そして彼自身の敵に対し、力をつける為に借金をする場合。

2. 誰かのそばでムスリムが亡くなり、彼を白布で包んで埋めるお金がなく、その為に借金をする場合。

3. 誰かが、独身であることからアッラーに対し我欲に恐れを感じ、自分の教えに害を及ぼさないよう、（借金をして）結婚する場合。

アッラーは最後の審判の日、この人々の借金をご自身が支払われる」(イブニ・マジャ、サダーカトゥ, 21)

疑いもなく、アッラーがその借金を審判の日に支払われることは、受け取る側に何倍もの恵みを与えらえるということを意味します。しかも、来世における気前の良さで、決して損なわれることのない報償と永遠の利益によって。このような対価は、確実に、受け取る側にとって宝庫よりも尊い報償となります。

ただし当然、借金を負っている人が、ハディースで挙げられている状態に含まれるかどうかが、この点では最も重要な要素となります。もし借金において何らかの搾取がふくまれていれば、その人がアッラーの道において、もしくは宗教上の兄弟の為、あるいは教えに害を及ぼさないようにという意志で結婚する為に費やしたとしても、やはりそれは咳印を問われるものとなり、その借りを審判の日であれ必ず自分で支払うことになるのです。

だから、どのような理由であれ、借金をする人は、足りるだけの額で十分と見なし、その借金を必ず返すという努力の中にあるべきです。受け取る側も、お金を貸すという特に新たな徳を付け加えるように、寛容を示すべきなのです。

借金という点で、貸す側と借りる側の事情をかんがみる形で考えることが必要です。なぜなら、貸す側の権利が守られることが、この素晴らしい行為の継続を可能とする最も重要な要素であるからです。そうでなければ集団の中でお金を貸すという徳が継続することは不可能なのです。

貸す側の権利をかんがみることに関連する次のハディースは、非常に教訓深いものです。

「ある人が預言者ムハンマドのそばにきて、彼から借りを返すことを求めた。それを行う際、親切とは言えない、粗野で不適切な言葉を用いた。この人の、預言者ムハンマドに対する不遜な態度の為、サハーバたちは彼に分をわきまえさせようとした。しかし預言者ムハンマドはそれを許さず、

『やめなさい。お金を貸した側は、その権利を得るまで、借りた側にものをいう権利がある』と言われた」(ブハーリー、イスティクラズ、7; ムスリム、ムサーカートゥ、118-122/1600-1601)

この出来事の別の例について、アブー・サイディ・フドゥリが次のように語っています。

「ある遊牧民が預言者ムハンマドのところに来て、預言者ムハンマドに貸したものを返すよう求めた。その際、厳しい態度を示した。さらには、

『借金を返すまではあんたを不快にし続ける』と言った。サハーバたちは遊牧民を叱り、

『何と言うことを。あんたは誰と話しているのか知らないのだな』と言った。

その人は、

『私は、私の権利を求めているのだ』と言った。預言者ムハンマドはサハーバたちに、

『あなた方はなぜ、権利の持ち主の見方をしないのか』と言われ、ハウラ・ビンティ・カイスに人を送られ、

『あなたに乾燥ナツメヤシがあれば、私の借りを支払いなさい。私たちのナツメヤシが来れば、私の借りをあなたに返そう』と言われた。

ハウラは、

『もちろんです、わが父をあなたに捧げましょう、アッラーの使徒よ！』と言った。

預言者ムハンマドは遊牧民への借りを返され、さらに彼に食事を振る舞われた。（この態度に満足した遊牧民は）

『あんたは借金を立派に返してくれた。アッラーもあんたに報償を完全な形で与えられるように』と言い、満足していることを示した。それに対して預言者ムハンマドは

『そう、この人々（借金を正しく支払う人々）は、人々の中で尊いものである。そこに含まれている弱者が、傷つけられることなくその権利を得ることができない集団は、栄えることはない』と言われた」.” (イブニ・マジャ、サダーカトゥ、17)

アッラーの使徒は、お金を貸した人がその貸しを期限が来る前に受け取ることを求めた場合ですら、常に彼らの側に立って行動され、人類史の中でどの指導者も想像すら

したことのない、権利と法に関する徳を示されました。彼が、ご自分の味方になったサハーバたちを

「あなた方はなぜ、権利の持ち主の味方をしないのか」と言って警告したことは、まさに涙を誘い、人々の心に多くの公正さの芽を芽吹かせる、人権の為の授業となったのです。おそらく、彼以降の人々の最大の弱みの一つとなるという理由で、預言者ムハンマドがウンマに模範を示されるという英知に基づいて、この点において示されている例は非常に多くあります。

実際、ユダヤ人の学者であるザイド・イブニ・サアナは、預言者の特性として「律法」で記されている事柄が預言者ムハンマドに存在するかどうかを調べていました。ある時、預言者ムハンマドのそばに聖アリーがいる状態で家から出たのを見かけ、追跡をしていました。その時、遊牧民の衣装を着た人が預言者ムハンマドに近づき、

「アッラーの使徒よ！私はこれこれの部族の民に、もし彼らがムスリムとなれば、彼らにアッラーが豊かな糧を与えられるだろうと話しました。彼らもムスリムとなりました。しかし残念なことに、その部族を干ばつが襲っています。人々は非常に困難な状態にあります。世俗的な望みでムスリムとなったこの人々が、期待したものを得られない為に再び以前の教えに戻るかもしれないと恐れています。もし彼らに援助することを望まれるのなら、私がそれを運びます」と言いました。

この会話を聞いていたザイド・イブニ・サアナは、預言者ムハンマドを試すのにちょうどいい機会を得たと考え、会話に加わりました。

「ムハンマドよ、もしその人に援助をすることを考えているのなら、ここでのやりとりであなたにお金を貸すことができます」と言いました。

預言者ムハンマドも彼に80ディナールのお金を借り、必要な援助をする為にそのサハーバに与え、

「急いで彼らのそばに行きなさい、彼らを助けなさい」と言われました。

また別の日、預言者ムハンマドのそばに聖アブー・バクル、聖ウマルと数人のサハーバが永遠の墓地にある遺体を運んでいました。預言者ムハンマドが葬儀の礼拝を先導し、ザイドは彼に近づいていきました。そしてその神聖な背中の衣装をありったけの力で引きました。彼がなぜそのようなことをしたのか、その時点で理解できていなかった預言者ムハンマドは、地面に落ちた衣装とザイドのしかめっ面を驚いて見ていました。ザイドは計画した通りに話し始めました。

「借金を返さないつもりか、ムハンマドよ。あなた方アブドゥルムッタリブ家の者はいつも借金を遅らせるのだ」と言いました。

しかし、預言者ムハンマドがザイドに借りたお金の期限はまだ来ていませんでした。

この出来事を説明するザイドは、次のように語っています。

「私はその時振り返ってウマルを見た。その胸が蛇腹のように膨らんではしぼむのを見て、私は非常に怖かった。ウマルは私の顔を厳しく見つめながら、

『アッラーの敵よ！お前はこの言葉をアッラーの使徒に向けているというのだな？彼に非常に失礼に振る舞い、ま

た徳に欠ける話し方をしている。彼を預言者として遣わされたお方に誓って言うが、もしアッラーの使徒がおまえに借金をされていなければ、私はおまえの頭をはね飛ばしていたところだ』と叫んだ。

自分のそばで、ユダヤ人がアッラーの使徒を侮辱することに耐えられなかったウマルがその怒りで沸き立っている時、預言者ムハンマドは彼に微笑され、

『落ち着きなさい、ウマルよ。今、私もその人も、あなたに別に態度を期待している。あなたは私に、借金を立派に支払うこと、彼にももっと適切な言葉で支払いを求めることを勧めるべきであったのだ。支払期限までまだ3日あるが、さあ、彼に私たちの借金を支払いなさい。彼を怖がらせたのだから、その分も少し余計に払いなさい』と言われた。」

ザイドはお金を受け取った後で、ウマルに次のように告白しました。

「ウマルよ、預言者ムハンマドの顔を見るたびに、そこに預言者であるしるしの全てを見出していた。しかし、彼にあるべき二つの特性を備えているかどうかを今まで把握できずにきた。彼自身に対して粗野に振る舞う人を許すだろうか？彼に対してなされる粗暴なふるまいがひどくなるにつれて、彼の優しい言葉や寛容はそれに比例してより増していくのか？今日、私はそれを試した。そして彼が待たれていた預言者であることを理解した。アッラーを神と、イスラームを教えと、ムハンマドを預言者と私が認めること、財産の半分をムハンマドのウンマにサダカとして寄付することの証人となってほしい」

ザイドがムスリムとなったことを喜んだウマルは、彼に注意も行いました。

「あなたの財産は、全ムスリムには足りない。せめて、ムスリムの一部に寄付すると言うべきだ」

ザイドは「その通りだ、私の財産の半分を、一部のムスリムに寄付します」と言い、言葉を修正しました。(ハキーム、ムステドゥレク、 III、700/6547)

このハディースは、借金をした人がアッラーの為に示す心の細やかさと、お金を貸した人の権利が注意深く守られた結果生じた、アッラーの恵みと素晴らしい出来事の、預言者としての例です。預言者ムハンマドが時々借金をされていたことの英知も、お金を貸してくれた人に対する行動の素晴らしさを示し、ウンマの模範となることでした。

これらの例から理解されるように、お金の貸し借りの問題は非常にセンシティブな項目です。だからこのような関係がある人たちは、行ったこのイバーダの豊かさ、恵みを得ることができないという事態に陥らないよう、いくつかの基準に注意を払うことが必須となるのです。

残念なことに、今日お金を貸すという徳のあるイバーダが次第に減っていること、お金を貸す人によって損害もしくは損失であるかのように見られること、多くの人がこの尊いイバーダを行おうとしないことは、上記で挙げた基準が尊重されなかったことから生じているものです。つまり、取引において信頼が失われること、嘘や誓への不誠実さが広まっていること、約束した時に支払わないことが普通のようになっていることといった不誠実さが、このイバーダをほとんど忘れられたものとしたのです。しかしこの問題の原則、基盤を見るなら、この障害が乗り越えられることが必要です。つまり、それができる状況にある人は、いくつかの言い訳でお金を貸すというイバーダを放棄するべきではありません。また逆に、お金を借りた人も様々な苦労を前面に出して借りたお金を返すことを軽視してはい

けません。この徳を伴う社会的なイバーダを損なってはいけないのです。そうでなければ、豊かな人はアッラーが信託として与えられた恵みの感謝を行わなかったことになり、また困窮している側も、この基準に注意を払わなかった結果として、お金を借りることができなくなり、また本当に必要になった場合でも、利子のある借金をしなければいけないと感じる追い詰められた状態から救われることができなくなるのです。

しかし、お金を貸すことが偉大な徳であることは、多くの章句やハディースで確実なことです。誤った振る舞いをする者、その作法を尊重せず、この偉大な徳の実行の妨げとなる者は大きな責任を負います。なぜならそのやり方や作法を尊重して与えられた借金は、信者にとって来世での資本となるからです。

アナス・ビン・マーリクは次のように語っています。

「預言者ムハンマドは言われました。

『ミラージュの夜、天国の門に次のような忠言が書かれているのを見た。

サダカには*10*倍の報償が与えられる。貸したお金には*18*倍の報償…。私は、

『ジブリールよ、貸されたものは、サダカよりもなぜより尊いとされているのですか』と尋ねた。

ジブリールは、

『なぜなら、他の者はたいてい、お金があるのにサダカを求める。借金を求める者は、自分の必要性の為に求めているからである』と答えた』」(イブニ・マジャ、サダーカトゥ、19/2431)

疑いもなく、サダカを与えることはイスラームで奨励されているイバーダです。、ただし、困っている人の自我に触れ、傷ついてしまうのであれば、サダカではなく借金として与えることがより適切とされています。あるハディースでは

「何かを貸すことは、それをサダカとして与えることよりもなお尊い」とされています。（アル・アズーズイ、アッシラージュル・ムニール、III，57）

この項目におけるアッラーの、そして預言者の奨励に従い、一部の誠実な信者たちは、貸したお金が返ってきた時にはそのお金には一切手を付けず、困窮した人たちが自分たちに再び借金を申し込んだ時に喜んで再度貸していました。つまりある意味で、自分に固有の「良い貸し」の為の貯金箱を用意していたのです。

実際、カイス・ビン・ルーミーは次のように語っています。

「スライマン・ビン・ウズナーンは、サハーバのイブニ・マスードの弟子であるアルカマ・ビン・カイスに支払うお金が車で、千ディルハムのお金を貸していました。アルカマにお金が入るとそのお金を返すように求め、またその際に少しきつい態度をとりました。アルカマはすぐにお金を返しましたが、このきつい態度の為にスライマンに怒っていました。数か月後、アルカマはまた、彼に千ディルハムのお金を借りるより他に仕方のない状況となりました。スライマンは

『わかりました、喜んで』と言い、家族に向かって、

『ウンム・ウトゥバよ、そこにある封印された袋を持ってきてくれないか』と呼びかけました。彼女は袋を持ってきました。スライマンはアルカマに、

『これはあなたが支払ったお金です。私はそのうちの1ディルハムにすら手を付けていません』と言いました。それに対してアルカマは、

『アッラーがあなたの父にご満悦くださいますよう！しかし、お金を返す際の私へのあのきつい態度の理由は何だったのですか？』と尋ねました。

スライマンは、

『あなたから聞いたハディースゆえです』と答えました。アルカマは不思議に思い、

『私から何を聞いたのですか』と尋ねました。スライマンは次のように答えました。

『あなたはイブニ・マスードから、アッラーの使徒がこう語ったと伝えていました。

『一人のムスリムに、同じものを2度貸したムスリムで、彼のその振る舞いが（良い貸しの報償に加え）そのものを一度サダカとして与えられただけの善行とされない者はいない』

それに対しアルカマは、

「そう、イブニ・マスードは私にそのように告げました」と言い、それを確認しました。

この素晴らしい徳を、イスラームの偉人としてのあり方を身につけられていた親愛なる父ムーサー師も、細やかな形で実行されていました。彼も、個人的な「良い貸し」の予算を持っていました。そこから、助けを必要としている人に分配していました。返すことができない状態の人の借りは、サダカと見なし、返されたお金は別のことに費やさず、また同じ目的の為に用いていました。アッラーの為に与えていたこの素晴らしい貸しは、こうして継続していっ

ていました。この種の善行はイスラームの道徳に属する振る舞いの素晴らしさの、特別な顕れなのです。

借金は、それを貸す人にとってこのように尊い徳であると同時に、それを借りる人にとっても奨励されるものです。そうでなければ、借金ができない状態にある困窮した人は、もし真剣な困窮状態に陥れば、謝った道、そして罪に汚されてしまう可能性が高まるのです。実際、非常に困窮した為に、今日信者の中で、望んでのことではないとはいえ、利子という泥沼に陥ってしまった困窮者は少数ではないからです。このような人々が誤った道、罪へと向かわず、お金を借りるという道を選択することを奨励する為、預言者ムハンマドは次のように語られています。

「借金が、アッラーが望まれないものの為でない限り、アッラーはその借りたお金を支払うまで、借りた人と共にあられる」(イブニ・マジャ、サダーカトゥ、10)

つまり、その他のイスラームの徳と同様に、今日においてもあらゆる細かな点に注意を払いつつ、このお金を貸すというイバーダを実行するべきなのです。このイスラームの美徳を生きた形で継続させる為にも、その基準と原則の深みを認識し、実践することが条件となります。いつか永遠の住居に移された時には、豊かな人にもこのような機会はなく、貧しい人にはそのようなニーズはなくなるということを忘れないようにしましょう。

要するに、私たちがやってきたこのはかない世界はチャンスの世界であり、善行を施す為の場です。特にこのラマダーン月とイード（イスラームの祝日）の日々は、アッラーの特別な恵みの時であり、私たちが失ったものを補填し、過ちを償う機会なのです。

はかない日々をラマダーン[28]やイードとする英知と神秘は、信仰とその喜びを味わうこと、特にイバーダ、ズィクル、社会的相互援助、困窮者や身寄りのない人、孤児へと伸ばされた心によって飾られる瞬間であり、これらは死の向こうにある楽しい日々の為の慈悲の灯火なのです。

特に、十分に従っていなかったことから許され、ラマダーンからイードに至ることは世親的な勝利を祝うものです。神による勝利により、集団の喜びが一度に実現することです。

また一方で、この世界での生がちょうど短いラマダーン月であるということを認識し、安らぎ、平穏といった崇高な勘定を生活すべてにおいて持っているべきなのです。なぜならこの日々は、私たちのはかない生涯の中で最も需要なチャンスの瞬間だからです。もしこのチャンスの瞬間が、ラマダーン月の恵みと精神によって活用されれば、疑いもなく、審判の日は私たちにとって真の、永遠のイードの朝となるのです。イードのうち最も素晴らしいものが、これなのです。

ベフルール・ダーナー師は非常に素晴らしく語っています。

「イードは、美しく新しい服を着る人たちのものではなく、アッラーの懲罰から救われ、永遠の悲しみからの救いに至った人たちのものである。またイードは、立派な動物に乗る人たちのものではなく、過ちや不足を放棄し、純粋なしもべという状態になることのできた人たちのためのものである」

アッラーよ!私たちをこのような心の地平線、美しさと共に、現世と永遠の世界でのイードに至らせてください。このはか

28.　この文章はラマダーン月に発表されたものである。

ない世界で私たちに恵まれた神の機会、可能性を、あなたの崇高なご満悦を得ることができる形で活用できるようにお恵み下さい。信者である兄弟の苦しみと悲しみを取り除き、来世での苦しみから救われた幸福な集団に加えてください。

アーミーン！

友情

「真実の旅人よ、その日が来る前に、世界が終わる前に、真の統治者（であられるアッラー）と友情を築きなさい。その恐ろしい日にあなたの手を取って下さるように。なぜならその日、そのお方の許しなくあなたの手を取る人は誰もいない。その日、人は兄弟から、母から、父から、妻から、息子たちから逃げる。だからアッラーとの友情についてよく理解しなさい。この友情は、最期の息の為の種となることを知りなさい」メヴラーナ

友情

伝承によると、ある日預言者ムハンマドは病気になりました。それを聞いた、預言者への愛に満ちた聖アブー・バクルは、すぐにその御様子を知ろうと預言者ムハンマドを訪問しに走りました。しかし預言者ムハンマドが病気で苦しんでいるのを見て耐えることができず、家に帰ると悲しみのあまり寝付いてしまいました。

数日後、回復した預言者ムハンマドは、アブー・バクルも病気になったことを知り、そのお見舞いに行きました。アブー・バクルに人々が

「アッラーの使徒があなたのお見舞いに来られる！」と伝えました。

預言者ムハンマドを愛するその彼は、すぐに寝床から飛び上がり、この上ない活力と表現できない喜びの中でドアへと走りました。彼は病から救われていました。諸世界の王をドアで迎え、中に招き入れました。彼がこのような健康で元気な状態で喜んでいるのを見た預言者ムハンマドは、驚きのうちに

「あなたが病気だと言っていたが、アブー・バクルよ」と言いました。

預言者ムハンマドへの愛情、情熱という点で他の人よりも優れていたアブー・バクルは、預言者ムハンマドの訪問に歓喜しながら次のように答えました。

「アッラーの使徒よ！私の親友が病気になり、その悲しみのあまり私も病気になったのです。彼が回復して、私も回復しました」

アブー・バクルのこのような友情や愛情の顕れは、彼をクルアーンで「二人の中の、二人目」と表現される名誉に至らせたのです。だから全ては、アッラーが喜ばれ、私たちを方向づけられた心の愛着を、最も親しい友情の結びつきによって強めること、このようにしてアッラーへの愛情の喜びから何かを得ることにかかっているのです。なぜならただこのような友情が、真の意味での愛情や情熱から取り分を得ることができるのです。

イマーム・アリーユル・ルザーは非常に素晴らしく表現しています。

「アッラーがその友たちに与えられた精神的なシャーベットがあり、かれらはそのシャーベットを飲むと我を忘れる。我を忘れて喜び、喜びのあまり清らかな状態となる。清らかな状態となって溶けこむ。溶けこむと、イフラースに到達する。イフラースに到達すると、その友と出会う。その友と出会うと、愛するお方との間に分離はもはやなくなる」

この状態は、友情に溶けこむという状態です。この状態を体現していたアブー・バクルにとって病気は、親友の状態を分かち合っている為に、健康よりもなお好ましいものでした。なぜなら友達と共にいるのなら、最も苦い果実でも甘くなるからです。メヴラーナの表現によると、

「親友と共にいる人は、炉の炎の中にいたとしても、バラの庭園で座っていると思っている」

「親友たちよ！もし形や形状から離れ、意義の世界に入っていくなら、そこが天国であり、バラの庭園の中にもっと美しいバラの庭園があるのを目にするだろう」

友情は、肯定的もしくは否定的な特性の共通点から生じるものです。真の友情は、ただ誠実な魂に存在します。この特性は、人の人格のうち最も崇高な段階のものに見受けられます。あらゆる出来事を前に、二人の人が同じ感情を持つことにより、友情が生じます。真の友情は、二つの心の間に生じるラインなのです。これが生じること、つまり愛情の流れの結果として、愛される人の全ての状態が愛する側にも移行します。その心での愛情の大海がわきたち、熱情の太陽に焼かれ始めます。

実際、メヴラーナは、セルジューク朝の神学校で学長であった時、心が愛情で満ちたシャムスという名の修行僧のまなざしから火花を得て燃えたことの結果、彼の中で見せかけの書物はその寿命を終え、この世界が一つの書物のようになったのです。その後、人間、世界、クルアーンを神秘的に説き明かす嘆きの書、メスネヴィが書かれたのです。その状態を自らの状態としてアッラーの友となることはただ、信者の本髄にある愛する力を、アッラーのご満悦の方向に向けることのできる度合によるものとなります。

そうでなければしもべは、見かけ上はバラの庭園の中にいたとしても、親友から遠いという理由で穂内面的には炎の中にいるということなのです。従って、同じ感情を分かち合わない、親戚や兄弟といった見かけ上、偶然の近しさは、友情とは関係はありません。なぜならあぶ・ラハブは預言者ムハンマドの叔父でありながら、彼から最も遠い人の一人だったのです。

魂の世界には無限の秘密と謎があります。これらは肉体や社会の型にはおさまりません。友情は魂の深みからもた

らされる吉報であり、一つのインスピレーションです。ヒラーの洞窟で最初の啓示を迎えた預言者ムハンマドにおける神の愛と友情は、後に、その愛されるお方をミラージュで崇高な御前へと高めたのです。

人類を孤独から救う友情は、アッラーの恵みです。アーデムとハッヴァがこの世界に下された後、40年間別々の場所で生かされ、友情への慕情を味わいました。ちょうど友情とは、一つの魂を二つに割り、自分の片割れを見つける状態のようです。ハディースでの、

「人は、親友たちの宗教に影響を受ける。だから皆、誰と友達となっているのか、十分に注意しなさい」(アフマド・ビン・ハンバル、II、303、334)

「人は愛する人と共にいる」(ブハーリー、アーダーブBu、96)

という宣告は、親友たちにおけるその深部にまで及ぶ影響、浸透力の表現として十分なものです。

また一方でこのハディースは、次の点についても述べています。

人が愛する人と共にいるということは、その人と言葉で、本質で、行為で同じ態度、考え、感覚、生き方をしているということです。つまり、「愛していること」を反映させる同一性と一体化が存在しているという意味です。そうでなければ、本質も言葉も、行為も感覚も常に常にトゲと共にある人が、バラを愛していると主張することはどれほど正しいでしょうか？同様に感情、考え、行いによってアッラーとその崇高な預言者と共にいない人は、真の愛の人とは見なされないのです。

そう、愛する者と共にいるということをこの方面からも評価するべきであり、不注意な生活を送り、無駄に「私はアッラーとその預言者を愛している」と言い、ハディース

の吉報の対象に自分も含まれていると思い込んではいけないのです。知っておくべきことは、ただ、状態として共にあることが実現化した時に、愛情として共にあることが実現化するということです。アッラーはこのような親友たちの心に、精神的な庭園と庭を植え付けられます。この恵みを得た者の筆頭に挙げられるアブー・バクルの状態は、多くの英知で満たされているのです。

彼は、預言者ムハンマドとの友情、そしてその説話において非常に活気づいた状態でした。愛情と慕情が抑えられるべき場所ですらそれはさらに増していました。ある時預言者ムハンマドは、アッラーの道に全ての財産を持ってきたアブー・バクルに、賞賛に満ちた言葉をかけました。しかしアブー・バクルは余りにも我欲を超越し、預言者ムハンマドに溶け込んでいた為、賞賛という形であっても、呼びかけられたということを対話の相手と見なされたと感じ、また対話の相手と見なされたということから、別々と見なされているという気持ちに包まれました。この気持により、魂の深いところで別離の炎に似た、焼けつくような痛みを感じました。他者であると認識される不安の中で、

「アッラーの使徒よ！私の財産と命は、ただ、ただ、あなたのものではないのですか」と言いました。(イブニ・マジャ、ムカッディマ、11)

財産、命、全てはあなたの為のものではないのですか、と言ったのです。このような崇高な魂の真実を理解する為、メヴラーナは次のように語っています。

「アッラーと共に存在すること、アッラーと共にいることを求める人は、アッラーの友である聖人たちの前に座りなさい」

「なぜなら、親友が親友と一緒に座れば、何十万もの秘められた銘板が開かれ、読まれる」

またある詩人も、次のように語っています。

「数人が、わずかな時間の為であれ、集まって、アッラーや真実について語りあうなら、彼らがいる場所に天がサジュダを行う」

シャイフ・サアディも、アッラーの顕現に至り、自らを完全な意味で世俗的な要求から清めた親友について次のように書いています。

「親友たちの顔を見ることは、傷口から鮮血が流れ出る心からの信者にとって、軟膏のようである」

アッラーは、その集団に含まれる親友たちを、次のように教えておられます。

إِنَّمَا وَلِيُّكُمُ اللّٰهُ وَرَسُولُهُ وَالَّذِينَ آمَنُوا الَّذِينَ يُقِيمُونَ الصَّلَاةَ
وَيُؤْتُونَ الزَّكَاةَ وَهُمْ رَاكِعُونَ

「誠にあなたがたの（真の）友は、アッラーとその使徒、ならびに信仰する者たちで礼拝の務めを守り、定めの喜捨をなし、謙虚に額ずく者たちである」（食卓章、第5章、第55節）

このような人々は何と幸福なことでしょうか。はかない親友や愛情の罠から自らを救い、まだこの世界にいるうちに、永遠の親友である真の愛する存在であるアッラーを見出すのです。預言者ムハンマドに心から結びつき、信仰を持つ者として生きるのです。友情におけるこの神秘に至ることのできない心に、メヴラーナは次のように呼びかけています。

「このことをよく知っておきなさい。この世界のはかなく偽りの友情、偽者の愛情は最後には全てがあなたの敵となる。頭を刎ねる敵となる」

「しかしあなたは、嘆きの中で墓場で『アッラーよ、私を一人にしないでください』とアッラーに懇願することになる」

物の見方や考え方が高いレベルを獲得すること、この世界というページの神秘と英知を、真の意味で理解することは、ただ心の世界で深みを増し、真の友情を実現することができた、神の愛情と活気の勇者にのみできることなのです。

イブラーヒームは、「ハリール」すなわち親友であった為、非常に困難な状態であるのにも関わらず、友情の条件として大きな従順さと信頼の中にいました。その心には最も小さな恐れや不安すらありませんでした。火に投げ入れられる時、彼を助けようと申し出た天使たちに、

「親友と親友の間に入らないでください。アッラーが何を望まれようと、私はそれに満足しています。救われるのならその恵みからであり、焼かれるのなら私の欠点からです。私は忍耐する者となるでしょう、インシャラー」と答えた後、続けて、

「アッラーは私の状態をご存じです。答えてください、火は誰の命令で燃えますか、燃やすことは誰のわざですか？」と尋ねたのです。

ついに、その偉大な親友、すなわちアッラーからもたらされた命令により火はイブラーヒームを焼かず、彼に平安をもたらしました。この形で友情の壮大さが示されたのでした。アッラーはイブラーヒームを、この誠実さゆえにクルアーンで、

وَاِبْرَاهِيمَ الَّذِى وَفّٰى

「また(約束を)完全に果たしたイブラーヒームのことも」(星章、第53章、第37節)という表現で評価され、敬意を示されたのです。

この忠実さ、誠実さが、皆に全てを反映させるのです。人々が互いに友情の基準を尊重することも、この状態に結びついたものです。心が友情という特性に至った人々は、宗教上及び歴史上の観点から、人類の中でもよく知られた人となったのです。歴史の書物で語られているように、イスラームへの反発ゆえに殺されたシャフザーデ・コルクットには、ピヤーレという名の非常に誠実な従者がいました。ヤヴズ・スルタン・セリム・ハンは彼のこの特性を知り、彼を呼び、

「あなたの誠実さの報償として、あなたを望む通りの地位に任命しよう。望むなら、宰相となりなさい」と提案しました。

彼は感謝し、誠実さをさらに強めて、

「スルタンよ、これからの私の任務は、シャフザーデ・コルクットの墓守となることです」と答えました。

ピヤーレのこの状態は、友情の概念の頂点を形成するものです。友情における作法の、具体的な教育なのです。英知の観点から、あらゆる親友や友情への教訓を示す勲章です。

アブー・ウスマーン・ヒリー師は語っています。

「アッラーとの友情は、よい徳と継続的な自己の点検、つまりあらゆる瞬間に自らをアッラーの監督下に感じることであり、預言者ムハンマドとの友情は、そのスンナに従う

こと、愛情に満ちた服従、従順さで包まれていること、聖人たちとの友情は敬意と奉仕によってなされ、親友との友情は、彼らが罪を犯していない限り、いつでも笑顔を見せることによってなされ、家族との友情は良い性質によってなされ、無知な人々との友情は彼らの為にドゥアーすること、アッラーの慈悲に至ることができるよう願うことでなされます。

それぞれの友情と対話に、それぞれに固有のあり方とやり方があります。ただこれらを尊重した場合にのみ、その友情と対話が継続し、それぞれの心にある愛情の宮殿は揺らがないのです。友情と対話の作法が尊重されなければ、あらゆる種類の愛情のきずなは、敵意の結び目に変わってしまいます。この観点から、親友たちと話す時には非常に注意深く、慎重に行動することが必要です。なぜなら、鋭い剣のような言葉があり、友情を切り、殺してしまうのです。また春の雨のように周りを美しくし、無数の効果をもたらす言葉もあるのです。

それとは逆に、友情と思い込まれている礼儀の欠如した近しさ、あるいは近しさを礼儀の欠如という形で示すことを真の友情と愛情として考えることは不可能です。なぜなら礼儀の欠如や世俗性に汚染された友情は、鋭い刀の刃先に当てられている細い糸のようなものであり、それは刀の刃に最高でも3度か5度耐え、ついには切れてしまうでしょう。疑いもなくこのような友情は現世でも来世でも益をもたらすものではありません。逆に、両方の世界において害の上に害をもたらすでしょう。だから、ふさわしい人と友達になることが重要であるように、この友情を守ることもまた必須となるのです。

この範疇での心の愛情が、全ての被造物を包括する性質のものであれば、その持ち主を完全な信者、言い換えるな

ら真の愛情、つまりアッラーの友とするのです。愛情は、つぼみをつけた花のようにある程度はかない愛情や執着によって始まったとしても、被造物に、その創造主ゆえの包括性に達した時に、神の愛となり始めるのです。

しかし、アッラー以外の被造物という障害物に引っかかってしまう者は、この状態には到達できません。なぜならしもべはただ、アッラー以外の被造物という障害物を超越した場合に、愛情と友情の喜びを味わうことができるのです。そうでなければ、それは不可能なのです。実際、ナフシェビー師はこのような障害物に引っかかる者の例として、次のような話を伝承しています。

「ある若者が、皇帝の娘の門に来て、自分が彼女に恋をしていることを告げました。その知らせが皇帝の娘に伝えられ、妃は門のところまで来て若者に、

『この千ディルヘムを受け取りなさい。二度と、私にもあなたにも害を及ぼすことを言わないでください』と言いました。

若者があきらめることができずにいると、

『それなら、二千ディルヘムを受け取りなさい』と提案しました。

この取引がついに1万ディルヘムに達したところで、若者はそれを認めました。この状態を見ていた皇帝の娘は、

『あなたは私をどういう形で愛しているというのですか。あなたの目はお金でくらんで、私のことが見えなくなりました。私以外の誰かを私よりも優先させる人の罰は何であるかしていますか。首をはねられることです！』といい、その偽りの愛情の為にその人を自分から遠ざけさせたのでした。

このことを聞いたある学者は気絶して倒れ、我に返った時、次のように言いました。

「人々よ！見なさい、現世での偽りの愛情にどのようなものが起こったか。ましてやアッラーを愛していると主張して、それ以外のものに向きを変える人の身に、来世で何が起こらないと言えようか」

愛情の大きさは、必要な時にその愛される者の為になされる献身や、引き受けることのできるリスクで計ることができます。深く愛している人は、必要とあらばその親友の為に自分の生命を与えても、献身を行ったとは感じません。愛情や友情を完成させ、その愛や友情から何かを得ることができずにいる人は、完成への道に入ることができず、我欲と共に生きているということなのです。なぜなら愛することを知らない心は、土壌のようであるからです。アッラーを知ることとは、愛することです。なぜなら、存在の理由は愛情であるからです。実際、聖ハディースとして示されている有名な伝承によるならアッラーは次のように語られています。

「私は秘められた宝庫だった。知られることを望んだ。そして存在を創造した」[29]

だから、アッラーの神秘の顕現も、友情と愛情に属する性質のものとなります。だから、アッラーの友となった人々は、友情の顔をただ人間にではなく、この世界で生命という形で広げられた全ての植物や動物にも見出すのです。

私の父ムーサー師は、被造物と親友となるという点で、身に起こったある出来事を次のように説明していました。

---

29. 参照：アジュルーニ、「ケシュフル・ハファー」II, 132;、ブルセヴィ、「カンズィ・マフフ」

「おそらくは40年前、親愛なる師サーミ師と共に、マディーナで家を借りた。その当時の条件として、家は煉瓦造りだった。彼の休憩の為に用意した部屋に入ると、部屋の隅でとぐろ巻いている蛇がいて、私たちは思わず緊張してしまった。彼は平穏と安らぎの中で、

『このアッラーの創造されたものを、そのままにしておきなさい、それに手を出してはいけない』と言われた。しばらくして動物はそこからいなくなった。」

これも、次のことを示しています。友情の源に、アッラーと預言者において到達する者は、全ての被造物の親友となるのです。ユーヌスの黄色い花への愛情は、この友情の素晴らしい作品です。自然界の中に隠された親友の顔を見ることができない心は、盲目なのです。自然と話すことのできない人間の魂は、言葉を持たないのです。親友を求める心は、それを人間という存在で見出すことができなかったとしても、自然界の中で見出します。川、緑、山、花、庭園は、親友を求める人の心に、無数の友情の誌をささやきます。この素晴らしい歌声で捏ねられた心は、アッラーの芸術家たちの芸術の奇蹟に感動します。それらと、状態という言葉で語り合います。このような友情という感覚に満たされた心の深みには、無数のアッラーの秘密が開かれ、結果としてその崇高な出会いが明らかに示されるのです。このようにして、望郷の病への癒しが期待されます。その内部の慕情は治療がなされます。自然におけるこの力の流れや、神秘や謎と親友になることは、心の感性を細やかなものとします。アッラーの親友となることの豊かさと恵みの基盤を形成します。なぜなら、自然界や被造物における無数の刺繍は、その親友たちの親友である偉大な親友、すなわち全ての美の創造者に到達する為の一つの階段なのです。この階段を上るひとは、アッラーとの対話へと高められます。もはやこの段階では信者は、あらゆる場所

でアッラーと共にあるのです。その顔には常に、この共にあるということがもたらすアッラーの光が輝いています。

このような輝かしい、幸福な顔は、ウンマや諸世界の為に物質的、精神的な慈悲と恵みの源となります。

マーリク・ビン・ディナールは次のように語っています。

「ウマル・ビン・アブドゥルアジズがカリフの階級についた時、山々にいる羊飼いたちが

『人間の統治を、誠実な人が引き受けた』と話していました。

彼らに、

『それをどうして知っているのか』と尋ねられました。彼らは、

『動物たちですら、安らぎと落ち着きの中にいる』と答えました。

ムハンマド・ビン・ウヤイナは次のように語っています。

「ウマル・ビン・アブドゥルアジズがカリフだった時、キルマンでヒツジの放牧を行っていました。カリフの精神性や公正さゆえに、私には羊とオオカミが一緒にウロウロしているように見えました。ある晩、突然オオカミたちが羊を襲っているのを目にしました。私は驚きました。あたかもこの世界が全ての安らぎと平穏さを失っていくかのようでした。私は心の中で、『この公正な、アッラーの親友であるカリフが死んだに違いない』と言いました。私は調べてみました。ウマル・ビン・アブドゥルアジズがその夜亡くなったことを知りました。」

人間の完成度というページを満たすこのような模範的な人々によって、心の世界を捏ね上げるべきである人間は、アッラーの親友たちの心で開いた洞察力の目で、時々夜明け前の時刻に頭を上げて地平線を満たす太陽を、その教訓と共に見つめるべきです。天空に描かれる様々な、色々な光景を眺めるべきです。熟練した芸術家の光景に私たちは驚嘆します。そのはかない力に応じてそこに示した画像に愛着を感じ、その芸術を祝福します。この細やかさで触れるなら、この世界のあらゆる光景、形状の絶対的な描き手であるアッラーが私たちの目の前に描かれたこの世界の光景において動かしている力のブラシと色とりどりの刺繍はどれほど教訓に満ちたものでしょうか。バラを、スミレを見てください。それらはこの色を、黒い土壌のどこから見つけてくるのでしょうか。この世界で数えきれない細やかなもの、美しいもの、力の流れ、芸術の奇蹟があるのです。見ることのできる心にとって万物は、奇蹟の展示場なのです。なぜなら全ての美は、アッラーの美の素晴らしさからにじみ出る流れであるからです。だから、この世界の教訓に満ちた光景と共に旅に出る目と耳は、驚嘆のまなざしによって戻ってくるのです。

しかし残念なことに、理性と論理はたいていの場合、この奇跡の前を、上を転がる雨のしずくから何の取り分も得ることのできない岩のように、何も得ずに通り過ぎるのです。

アッラーが神の芸術のこの世界での力と崇高さの顕現から、私たちの心に熟考と感覚の深みを与えてくださいますように。

真剣な形で熟考と自己の点検を行えば、次のことが見えてきます。この世界における力の流れがあらゆる瞬間を包

括しているにもかかわらず、心は、自我の妨げによって覆われており、アッラーの愛情と友情を得られることができずにいます。この喪失に気づいていない人を、詩人は次のように警告します。

「この異邦から、『親友よ』と言って来世に行くことができないのなら
その出会いの日は、二つめの異邦となる」

（ラフメティ）

この事柄についてメヴラーナも次のように語っています。

「「真実の旅人よ、その日が来る前に、世界が終わる前に、真の統治者（であられるアッラー）と友情を築きなさい。その恐ろしい日にあなたの手を取って下さるように。なぜならその日、そのお方の許しなくあなたの手を取る人は誰もいない。その日、人は兄弟から、母から、父から、妻から、息子たちから逃げる」

「だからアッラーとの友情についてよく理解しなさい。この友情は、最期の息の為の種となることを知りなさい。つまり最後の審判の日のためである。アッラーのご満悦の為である」

生涯を通してこの愛の神秘と共に生きたユヌス・エムレ師は、燃える愛の嘆きにより、ここごとに呼びかけ、『最も崇高な親友へと』呼んでいます。

「さあ、行きましょう、止まることなく
道が消失する前に
間に敵が入ってくる前に
さあ、親友へと向かいましょう、心よ！

この世界でとどまるのはやめましょう
これははかないものです。騙されてはいけない
一体であるのに、別れてしまうのはやめましょう
さあ、親友へと向かいましょう、心よ！

私たちはこの世界から移りましょう
親友になりなさい、その土地へと飛びましょう
欲望や欲求から去りましょう
さあ、親友へと向かいましょう、心よ

死の知らせが来る前に
寿命が首根っこをつかむ前に
アズラーイールがやってくる前に
さあ、親友へと向かいましょう、心よ」

この招きは、実際に預言者ムハンマドの死の瞬間にその口からこぼれた、

「アッラーよ、最も崇高な友よ、最も崇高な友よ」という表現における情熱と愛情を反映したものです。

この反映から、あるべき形で得るものを得ることのできた心は、神の友情の頂点に到達し、永遠の旅路において、

اَلاَ إِنَّ أَوْلِيَاءَ اللهِ لاَ خَوْفٌ عَلَيْهِمْ وَلاَ هُمْ يَحْزَنُونَ

「見なさい。アッラーの友には本当に恐れもなく、憂いもないであろう」（ユーヌス章、第10章、第62節）における、アッラーの約束の神秘に到達するのです。

アッラーよ！私たちの心を、あなたの崇高なご満悦へと至らせるような友情で発展させてください。愛してください、愛させてください、喜ばせてください、アッラーよ！

アーミーン！

忠実さ

　アッラーへの忠実はただひとえに、その命令への尊重により実現します。この忠実はアッラーに結びつくという感情や行動の頂点です。なぜなら創造され、生かされ、あらゆる瞬間に必要とされる唯一の存在がアッラーであるからです。生も死も、アッラーの手にあります。この形でアッラーへの愛情と、あらゆる呼吸においてアッラーに従順でいることができるという性質は、しもべであることの最も崇高な地平線であり、忠実が必要とするものです。

忠実さ

故メフメッド・アーキフは娘の婚姻式に深く愛している友人であるボスニア人のアリ・シェヴキ師を招待しました。年老いた師はこの招きに少し遅れてきました。その遅刻の理由として、ヴェファ（忠実）の坂（イスタンブールのヴェファ地区にある坂）を登ってきたことを上げました。故アーキフは弁解を真実を混ぜ合わせ、微笑みつつ、意味深い様子でこう言いました。

「どのヴェファ（忠実）の坂のことですか？今の世代の人々はその坂をとっくに平らにしてしまいましたよ」

故人が悲しみの中に言及し、あたかも「ああ、忠実さよ…」と言わんばかりに表現した真実は、人間が最も必要としている、不可欠な性質です。この性質を実現させることの困難さを表現する為に、ヴェファ（忠実）の坂を登ることが困難であるという言葉を利用し、引き合いに出した故人アーキフは、今日の信者たちの様子を見ればどれほど嘆くことでしょうか。今日人々はその痕跡の残っていない善行を思い起こすことすらなく、多くの場合ヴェファ（忠実）という言葉は、イスタンブールにある地区の名としてのみ用いられているのです。

しかし忠実さは、イスラーム法の一つであり、おそらくは最たる基盤となるものです。イスラームの観点において、基盤の中の基盤は、信仰です。しかし信仰は同時に、忠実さを示す者であることも真実です。なぜなら忠実さとは約束への尊重、すなわち自分がした約束を守ることであ

るからです。信仰も、魂の世界でアッラーを認め、その公言にこの世界において誠実さを示すことであり、すなわち結果として一つの忠実さであるからです。

同時に忠実さは、ただ単に約束を守るという状態を意味するものではありません。それはアッラーへの誠実さ、心の状態を変化しないことであり、血縁者、親戚、宗教上の兄弟たちから両親に至るまで、信仰の恵みを私たちに伝える上で奉仕を行った学者や誠実なしもべたちから預言者たちに至るまで、行動もしくは感情という形で私たちが素晴らしいつながりを持つべき相手への恩義や心の結びつきを実現化させること、この状態を一過性のものではなく、良い時にも悪い時にも生涯維持することです。

忠実さという言葉は、恩義、誠実さ、方向性という性質全てにおいて1枚の布の片面であるかのように、一体性や同一性を示すものです。この基本的な観点によるなら、信仰が必要とするあらゆる態度や行為は、同時に忠実さを示すものであり、これらの態度や行動の逆は「不誠実さ」と見なされるのです。

忠実さは、預言者たちやアッラーの親友たち、徳を持つ人々の特性として、人間の生を最も崇高な段階で称える精神的な性質です。従って一部の解釈学者はイスラームを、言葉での公言と共に心での承認、そしてアッラーの全ての運命、定めへの従順さ、そして忠実さであると説いています。

その心に、忠実さの源泉から何かを得させることができる人々は、炎のような我欲をバラの庭園のような状態にした、ということなのです。その庭園には、内部にはズィクルのバラ、賛美のナイチンゲール、信仰と英知の芝、アッラーの恵みの花、誠実な行為の川が存在します。このような心の報償はどの状態にふさわしいものとなり、それは

崇高な天国とアッラーの美なのです。このような心の前では、炎ですら性質を変え、バラの庭園と化すのです。実際イブラーヒームがネムルードに山のような炎の中に投げ入れられた時、

يَا نَارُ كُونِى بَرْدًا وَسَلاَمًا عَلَى إِبْرَاهِيمَ

「(その時)われは命令した。『火よ、冷たくなれ。イブラーヒームの上に平安あれ。』」（預言者章、第21章、第69節）の命令により、炎はバラの庭園となったのです。なぜならイブラーヒームは、火に投げ入れられる前に我欲の炎が忠実さの水によって消され、アッラーへの誠実さをあらゆる形で顕していた預言者であったからです。

預言者ムハンマドの最も素晴らしい模範であるその生涯は、最初から最後までまさに忠実さの展示のようです。被造物の光であるそのお方は、征服後のマッカに15日間滞在しました。それに対してアンサールの一部が不安になり、預言者ムハンマドが二度とマディーナに戻らないのではないかという考えが生まれ、彼らの間でも悲しみのうちにそのことが話されるようになっていました。なぜならアッラーは、彼が生まれ育った神聖で祝福された都市の征服を、彼に許されたからです。アンサールたちの不安な様子を見た預言者ムハンマドは、彼らのもとに行き、

「あなた方が話していることな何ですか？」と尋ねました。彼らの心配を知ると、忠実さの偉大な模範として次のように語られたのでした。

「アンサールよ！そのようなことを行うことから、私はアッラーに庇護を求めます。私はあなた方の祖国に移住をしました。私の人生は、あなた方の人生もであります。

私の死も、あなた方と共にあるでしょう」(ムスリム、ジハード、86; アフマド・ビン・ハンバル、ムスナド、II、538)

この忠実さを、死へとつながる病にかかり、モスクを最後に訪問した時、説教台に上がってムハージル（移住者たち）に対し、

「あなた方にアンサールに良く振る舞うことを勧めます。彼らは私の信者集団であり、仲間であり、私を信じる人々です。彼らは自分たちの任務を正しく実行しました。彼らの奉仕への見返りはいまだに完全に与えられてはいません（来世で豊かに与えられるでしょう）。従ってアンサールの善行に、善行で応えなさい。悪いことを行う者は許しなさい」(ブハーリー、マナークブル・アンサール、11)と言われるという形で、最後の瞬間にすら、繰り返されたのです。

全ての預言者たちは、ある意味で人々に忠実さを最も崇高な形で教える案内者であるということができるでしょう。アッラーの愛情に至ることができるしもべとなる為に、導きの案内者である預言者ムハンマドが忠実さの点で示した原則を、、私たちの心の最も特別な基準として生きるべきなのです。これらを簡潔に、次のように挙げることができるでしょう。

1. 諸世界の主であるアッラーへの忠実さ

最初の要素であり、その結果でもある忠実さは、アッラーへの忠実さです。なぜならアッラーは創造された魂たちに

أَلَسْتُ بِرَبِّكُمْ قَالُوا بَلَى

「（その時かれは仰せられた。）『われは、あなたがたの主ではないか。」かれらは申し上げた。「はい、わたしたちは証言いたします」』（高壁章、第7章、第172節）

とされ、また宣言がなされたからです。

この宣言は、アッラーの神性と人間のしもべであることを認める証言です。これを認める者は、宣言によって誠実さを示し、しもべとしての振る舞いを生涯を通して最善の形で続けることにより、その忠実さを示したことになります。なぜならこの忠実さの為には、宣言だけでは十分ではないからです。この承認が生み出す、一定の知性と良心の責任があります。それは、アッラーの命令を尊重し、禁じられていることを避けることです。

だからアッラーへの忠実はただひとえに、その命令への尊重により実現します。この忠実はアッラーに結びつくという感情や行動の頂点です。なぜなら創造され、生かされ、あらゆる瞬間に必要とされる唯一の存在がアッラーであるからです。生も死も、アッラーの手にあります。この形でアッラーへの愛情と、あらゆる呼吸においてアッラーに従順でいることができるという性質は、しもべであることの最も崇高な地平線であり、忠実が必要とするものです。フィルアウンが、信仰を持ったという理由でひどい迫害により、腕や足を互い違いに切ってナツメヤシの木につるした魔術師たちが、この状況において

「アッラーよ、私たちをこの災いから救ってください、楽にしてください」という形ではなく、

رَبَّنَا أَفْرِغْ عَلَيْنَا صَبْرًا وَتَوَفَّنَا مُسْلِمِينَ

「主よ、わたしたちに忍耐を与え、ムスリムとして死なせて下さい。」（高壁章、第7章、第126節）と懇願したことは、いかに崇高なしもべの忠実さでしょうか。

このような忠実さと誠実さの模範となるしもべたちについてアッラーは、クルアーンで次のように語られています。

لِيَجْزِيَ اللهُ الصَّادِقِينَ بِصِدْقِهِمْ

「アッラーが、忠実な人々に対しその忠実さに報われ」（部族連合章、第35章、第24節）

また別の章句では、忠実さを示す信者を次のように賞賛されておられます。

مِنَ الْمُؤْمِنِينَ رِجَالٌ صَدَقُوا مَا عَاهَدُوا اللهَ عَلَيْهِ فَمِنْهُمْ مَنْ
قَضَى نَحْبَهُ وَمِنْهُمْ مَنْ يَنْتَظِرُ وَمَا بَدَّلُوا تَبْدِيلاً

「信者の中には、アッラーと結んだ約束に忠実であった人びとが（多く）いたのである。或る者はその誓いを果し、また或る者は（なお）待っている。かれらは少しも（その信念を）変えなかった」（部族連合章、第35章、第23節）

この真実故にメヴラーナは、真実の旅人たちに、このはかない世界での試練や災いへの忍耐とアッラーへの忠実さの為に、比喩を用いて次のように呼びかけています。

「ナイチンゲールよ。黒い冬の為にいつまで嘆いているのか。ナイチンゲールよ！いつまでも苦しみについて語るのは適切なことか？もしあなたの心が愛するお方に本当に結びついているのなら、目を開いて感謝しなさい、その忠実さについて語りなさい！トゲではなく、バラについて語

りなさい。バラの茎や根の特徴ではなく、その本質を見なさい。このはかない世界で、なぜこれほど忙しいのか。あなたが行くことを望む場所は、彼方のさらに彼方ではないのか？」

メヴラーナが表現しているように、本来到達すべき永遠の地を、はかなく一過性の熱情の後を追うことで忘れてしまう不誠実さの結果は、大きな悲しみです。アッラーはしもべがこの不注意さに陥ることを警告する為、次のように仰せられています。

「あなたがたは、アッラーを忘れた者のようであってはならない。かれは、かれら自身の魂を忘れさせたのである。これらの者はアッラーの掟に背く者たちである」（集合章、第59章、第19節）

「だが誰でも、わが訓戒に背を向ける者は、生活が窮屈になり、また審判の日には盲目で甦らされるであろう。」かれは言う。「主よ、わたしは（以前）晴眼者であったのに、何故わたしを盲目として甦らせたのですか。」かれは仰せられる。「われの印があなたに下った時、あなたはそれを無視したではないか。今日あなたはそれと同様無視されるのである。」（ター・ハー章、第20章、第124－126節）

このはかない世界で、諸世界の主であるアッラーに忠実さを示す者は、来世で忠実さが示されるのです。なぜなら、忠実さの最も崇高なものは、アッラーのものであるからです。

「誰がアッラー以上に、約束に忠実であろうか」（悔悟章、第9章、第111節）

という神の呼びかけも、これを示すものです。だから、これら全ての逆で、現世で不注意さに陥り、アッラーを忘れる者は、最もわずかな善や援助ですら必要とされるそ

の恐ろしい審判の日に、この不誠実さの対価を非常につらい形で支払うことになります。なぜなら忠実さとは、しもべとしての行為を始めとして、友情や要するにあらゆる事柄において求められ、望まれる性質であり、その対価もまた、忠実さなのです。メヴラーナはこの点をとても素晴らしく説いています。

「愛着、愛情、友情と言ったものの全ては、忠実さに結びついており、それらは常に忠実な人を求める。それらは忠実でない心には決して近づかない。

「ペンは、『忠実さの対価は忠実さであり、苦悩の対価も苦悩である』と書いた。そしてそのインクは乾いた」

「皇帝は、自分を裏切る者は息子であったとしても、彼の頭をはね飛ばす。しかしインド人の奴隷が皇帝に忠実さを示せば、その手はその奴隷に『よくやった』と拍手する。彼が示された敬意は、何百もの宰相が見ることのできないものである」

「奴隷どころではない。もし門前で忠実さを示す者が犬であったとしても、その持ち主の心にはその犬への何百もの承認、何百もの満足の気持ちが芽生える。持ち主はその犬を、愛情をこめて撫でる」

2．預言者ムハンマド(彼の上に祝福と平安がありますように)への忠実さ

アッラーへの忠実さの次に最も崇高で必須である忠実さとは、諸世界の王である預言者ムハンマドへのものです。この忠実さは、「ウンマよ、ウンマよ」と言い、アッラーへの懇願、嘆願においてまずウンマの為に願いを訴えておられた預言者ムハンマドへのものです。

預言者ムハンマドへの愛情、親愛の情を深めることで始まるこの忠実さは、そのスンナの範疇で生きることで可能になります。この崇高な預言者は、私たちをアッラーへと導き、生と死を前にして正しい道を示し、無限の幸福への道を照らす唯一の灯明となられたのです。彼への忠実さと、また彼の忠実さへの対応を示す次の出来事は非常に教訓深いものです。

ウフドの戦いが信者にとって良くない流れになっていた段階で、多神教徒たちは預言者ムハンマドを殺すつもりで全力で攻撃を仕掛けていました。預言者ムハンマドの神聖な歯を、彼らは殉教させたほどでした。その恐ろしい混乱の中で、預言者ムハンマドのそばにいたサハーバたちの献身や忠実さは、追従を許さない、それぞれが伝説のような形で示されていました。ある人は自分の体を預言者ムハンマドの為の盾とし、ある人は飛んでくる矢に対し、その手を盾にしていました。ある人は敵に矢を放ち、彼らを撃退しようとしていました。その日預言者ムハンマドのそばで千本もの矢を放ったと伝承されるサアド・イブニ・アブー・ワッカースも献身的な努力の中にありました。彼のこの忠実さと献身的な状態を前に、預言者ムハンマドはその満足から次のように呼びかけられました。

「両親をあなたに捧げましょう、サアドよ」

聖アリーは語っています。

「私は預言者が、サアド・イブニ・アブー・ワッカース以外の人に、両親を捧げようと呼びかけているのを聞いたことがありません」(ブハーリー、ジハード、80; ムスリム、ファダーイルッサハーバ、41/1876)

また別の例では；

フダイビーヤの日、聖ウスマーンは預言者ムハンマドによって使者としてマッカに派遣されました。ウスマーンは多神教徒に、彼らの意志がウムラを行って戻ることであることを伝えました。しかし多神教徒はその年については許可を出しませんでした。ウスマーンに、

「あなたは今、周回を行ってもいい」と言いました。しかし自らをアッラーとその使徒に捧げていたウスマーンは、

「預言者ムハンマドがカーバの周回を行えないのであれば、私もそれを行えない。私はアッラーの家を、彼の後についてのみ、訪問できる。彼が認められていない場には、私もいないのだ」と答え、アッラーの使徒への誠実さを示しました。

その時、預言者ムハンマドは、その時の事態ゆえに、サハーバが誓約を結ぶことを承認していました。ウスマーンはその場にいなかったことから、預言者ムハンマドは片手でもう片方の手をつかみ、

「アッラーよ、これもウスマーンの誓約です」と言われました。(ブハーリー、アスハーブン・ナビー、7;ティルミズィー、マナークブ、18)

ウスマーンが達することのできたこの預言者の親愛の情は、その忠実さや誠実さにしっかりと結びつくことを条件に、全てのウンマを包括するものです。私たちも心の中の忠実さで、「誓約」を結んだサハーバたちと心で共にいることができるでしょう。そして、

「本当にあなたに忠誠を誓う者は、アッラーに忠誠を誓う者である。アッラーの御手がかれらの手の上にあり、それで誰でも誓いを破る者は、自分の魂を損なう者である。また誰でもアッラーとの約束を、果す者には、かれは偉大な報奨を与えるので

ある」（勝利章、第48章、第10節）という章句の伝える吉報に至ることができるでしょう。

そこに至る為に、そのお方をふさわしい形で愛し、忠実さを示す為の道は、クルアーンで、

اَلنَّبِىُّ أَوْلَى بِالْمُؤْمِنِينَ مِنْ أَنْفُسِهِمْ

「預言者は、信者にとりかれら自身よりも近く」（部族連合章、第33章、第6節）という形で示されています。

こういった多くの結びつきや忠実さの表現の範疇で、預言者を愛する人々は、その神聖な髪、ひげ、そして足跡まで、そのお方のあらゆる信託を自分たちの宝冠としたのです。彼の外套からつえ、剣から矢、そしてその印に至るまで、今日まで残されている全ての信託は、この感情により続けられ、預言者ムハンマドに属する全てのものが、「神聖な信託」と見なされてきたのです。この点で特にオスマン朝の人々が示した細やかさ、敬意、忠実さは、伝説となるものです。一部の思想家は、オスマン朝が約600年の壮大な寿命を手に入れたことを、クルアーンやスンナに従ったことに加え、預言者ムハンマドからウンマへの崇高な記憶として遺された神聖な信託に対し示した、驚くべき敬意にも結び付けています。

3. イスラームの偉人に対する忠実さ

全ての信者は、イスラームの偉人に対しても、忠実さの気持ちで満たされるべきです。アッラーと預言者ムハンマドがもたらされた命令と禁止事項、良い徳、そして二つの世界を照らす崇高な灯明を私たちにまで運んだのは、イスラームの偉人たちです。信者集団は、彼らの導きと教育に

よって方向づけられ、精神的な世界を改良させ、将来へと歩くのです。その為に、

「学者たちの死は、世界の死のようである」と言われているのです。

また一方でアッラーの、

يَا أَيُّهَا الَّذِينَ آمَنُوا اتَّقُوا اللهَ وَكُونُوا مَعَ الصَّادِقِينَ

「あなたがた信仰する者たちよ、アッラーを畏れ、（言行の）誠実な者と一緒にいなさい」（悔悟章、第9章、第119節）での「誠実な者」という語を、一部の解釈者たちは「忠実さの持ち主」と解釈し、この章句を

「信仰とイスラームの道においては、忠実さの持ち主と共にありなさい。そしてあなた方も忠実さの持ち主となりなさい。現世と来世で救いを得ることができるように」という形で解釈しています。

4. 両親や血縁者、親戚への忠実さ

両親への権利は、最も注目される項目の一つです。彼らへの奉仕、良い言葉、もてなしは、特に彼らが年老いた時には子供たちにとって最大の忠実さを要するものです。クルアーンでは、アッラーへのイバーダに次いで、両親への愛情と奉仕が奨励されています。

アッラーは次のように語られています。

「あなたの主は命じられる。かれの外何者をも崇拝してはならない。また両親に孝行しなさい。もし両親かまたそのどちらかが、あなたと一緒にいて老齢に達しても、かれらに「ちえっ」とか荒い言葉を使わず、親切な言葉で話しなさい。そして敬愛

の情を込め、両親に対し謙虚に翼を低く垂れ（優しくし）て、「主よ、幼少の頃、わたしを愛育してくれたように、２人の上に御慈悲を御授け下さい。」と（祈りを）言うがいい」（夜の旅章、第17章、第23－24節）

預言者ムハンマドの神聖な生涯は、多くの忠実さの模範で満たされています。

聖アリーの母、ファトゥマ・ビンティ・アサドは、若い頃、預言者ムハンマドに実際の母親であるかのように奉仕していました。この誠実な女性が亡くなった時、預言者ムハンマドは遺体のそばに来て枕元に座り、その献身的な奉仕をアッラーの位階で証言し、次のように語られています。

「母よ！アッラーがあなたに慈悲をかけられますように。あなたは私の産みの母につぐ、私の母でした。あなた自身は空腹のままで私に食べさせてくれました。自分は着なくても、私に着させてくれました。自分をごちそうから遠ざけ、私に食べさせてくれました。そしてこれらを行う際には、アッラーのご満悦と来世を求めていました」

それから預言者ムハンマドは遺体を3度洗うよう命じられました。順番が、カフールと呼ばれる良い香りのする水になった時、預言者ムハンマドはこの水を自分自身の手でかけられました。それから自分のシャツを脱いで、彼女に着せられました。遺体はこのシャツの上から、白布で包まれました。

墓が開かれ、遺体を入れる場所を掘る時には、預言者ムハンマドはご自身の手で掘り、土を自ら運び出しました。この作業を終えた後、そこに横たわり、こう言われました。

「生かされるのも殺されるのもアッラーである。彼は決して死ぬことなく、生きておられる。アッラーよ。わが母、ファトゥマ・ビンティ・アサドをお許し下さい。彼女にタウヒードの言葉を勧め、彼女が入る場所を彼女の為に広げてください。あなたの預言者、そして私以前の預言者たちの権利にかけて、私のドゥアーを認めてください。疑いもなく、あなたは慈悲深い者の中でも最も慈悲深いお方です」

それから預言者ムハンマドは遺体の為に4回、タクビールを行い、続いてアッバースやアブー・バクルと共にご自身で遺体を墓に入れられました。(タベラーニ、ムジャームル・カビール、XXIV、351-2)

預言者ムハンマドの模範的な生活において、このような忠実さの気持ちでなされた多くの、追従を許さない例があります。最後の審判の日まで、あらゆる人間に与えられた比類のない美徳の授業という意味を持つものです。

実際、フナインの事件の後、ハワーズィンの部族からの一団が、アッラーの使徒を訪れ、自分たちが入信したことを知らせ、その捕虜を解放するよう求めました。その中の一人が、

「我々の中には、あなたの乳母や子供の時に世話をした女性がいます」と呼びかけました。

そこで預言者ムハンマドは忠実さの気持ちにより、

「私と、アブドゥルムッタリブの息子たちに割り当てられた奴隷を、あなた方に返却します」と言いました。

サハーバも、同じ徳を得られるよう、心から気持よく、

「私たちも自分たちの捕虜を、預言者ムハンマドに差し出しました」と言ったのでした。

このようにしてその日、6千人の捕虜が、世俗的な何らかの対価を伴うことなく解放されました。この比類ない美徳の結果として、全てのハワーズィンたちが集団でイスラームを受け入れたのでした。

❀

両親に次いで、血縁者や親類への愛情や彼らへの忠実さがあります。親族であることは、二種類に分類できます。一つめは広い意味での、信仰や徳の近しさです。もう一つの個別の近しさは、親戚関係による近しさです。イスラーム上の表現では親戚を「子宮の人々」、親戚づきあいを「子宮との出会い」と表現します。親戚との付き合いを絶つことは、醜悪で罪となる行為です。それにより、

「親戚との付き合いを絶っている人がいる場には、慈悲は下されない」と言われています。

イスラームでは、親族を決して善行や親しさから遠ざけないこと、近い親戚から遠い親戚まで、その程度に応じて彼らの権利を尊重することを命じ、それを非常に重要な任務をして私たちの背に負わせています。

家族構成と親戚づきあいの顕現は、アッラーの驚嘆すべき、感嘆すべき顕現の一つです。他人同士を、婚姻という影の下でお互いの命という状態にし、彼らを親戚という形で愛情の枝のようにまとめる血縁と親族のあり方は、アッラーの恵み、贈り物そのものなのです。血族の結びつきを絶つことは非常に醜い不誠実さです。見かけ上の距離は、アーデムとハッヴァの人間としての婚姻により一つにされています。篤信の喜びと、忠実さの気持ちと徳が、血筋や血統の発展の上にあることは確かなことなのです。

現世での幸福は、イスラームにおける家族や親族の結びつきを強めます。この世界における親しさと、その親しさの先にある忠実さの気持ちは、来世の幸福でもあります。

忠実さが示されるべきなのは、ただここで挙げたもののみではありません。特に親友や、教えにおける兄弟たちへの忠実さも、心に植え付けるべきです。また一方で、祖先への忠実さ、生きている、もしくは死んだ目上の人への忠実さ、祖国への忠実さ、集団における全ての信託への忠実さも、しっかりした性格や人格の特性の一つです。

しもべにおいては、ただ篤信と忠実さという意識が、神の境界が軽視されること、愛情の城が壊されることを認めないのだということを知っておくべきです。逆に我欲は、分裂や不注意さの道をうろつき、心を崖から崖へと引きずります。事実、アッラーの激しい怒りを受けた多くの民の滅亡の理由は常に、アッラーとの約束を守らなかったことでした。彼らは約束に忠実であることが人間の義務であり必須であるのにもかかわらず、それに近づこうとしなかったのです。こうして知識や認識、アッラーについての智、理解を得ることができず、滅亡したのです。彼らの様子を目にした人、そして後から生まれてくる人への教訓と、罪を避け、アッラーの命令を守る人々への忠言への要因となったのでした。クルアーンでは次のように語られています。

「われはかれらの大部分の者に、契約を（忠実に）果す者を見いだすことが出来ない」（高壁章、第7章、第102節）

アッラーが自分に与えられた恵みを忘れ、単純な我欲の傾きの虜となって不誠実さを示す人々の状態を、フェリードゥッディン・アッタール師は次の物語で素晴らしく伝えています。

皇帝に、特別に気に入られている猟犬がいました。猟においては才能があり、熟練していました。皇帝はその犬にこの上なく価値を与えており、猟に出るたびに必ずその犬を連れていました。首輪は宝石で飾られ、足には金や銀で造られた輪や、腕輪がはめられていました。その背中は、金メッキされた糸で刺繍されたサテンの布で覆われていました。

ある時皇帝は、その犬を連れ、宮殿の兵たちと共に猟に出ました。首輪についている絹の糸を手にし、馬に乗って優雅に進んでいた皇帝は、非常に上機嫌でした。しかし突然、この機嫌を損ねるものが目に飛び込んできました。とても愛していた犬が、皇帝のことを忘れ、他のものに気をひかれていたのでした。皇帝はまず悲しげに、手にした絹の犬をひきましたが、犬は抵抗しました。目の前にある骨のかけらをかみ砕き続けていました。この状態を前にした皇帝は、驚きと怒りの感情の間で叫びました。

「私の目の前で私のことを忘れ、他のことをしている！これは何と言うことだ！」

彼はこの上なく悲しんでいました。犬のこの恩知らずな態度、不誠実さ、そして無関心さは、彼に大きな影響を与えました。犬であろうと、それを言い訳として許す気にはなりませんでした。あれだけの誉れ、恵み、もてなしに対し、犬が一瞬にして、しかも骨のせいで自分を忘れることは心を傷つけ、忠実さを損なう行為として、決して許されるものではありませんでした。激怒しつつ、

「この卑劣な者を去らせなさい！」と言いました

犬はこの激しい怒りの意味を理解したものの、既に手遅れでした。出来ることは何もありませんでした。周りの人々は皇帝に、

「皇帝よ、この犬が身に着けている宝石や金、銀、全てを取りましょう。それから放しましょう」と言ったものの、皇帝は、

「いいや！そのままにしておきなさい、そのまま行かせなさい」と言いました。それから付け加えて言いました。

「そのままにしておきなさい、そのまま行かせなさい。誰もいない、焼けた、何もない砂漠で、孤独で、空腹で渇きの中にいればいい。それらを見て、失ったもてなしや恵みの痛みをいつでも感じればよい」

アッラーの無数の恵みの価値を理解せず、単純ではかない、低俗な利益を追い求め、滅亡した不誠実な人々の状態を伝えるこの物語はいかに教訓に満ちているものでしょうか。この状態に陥った人は、最後にはこのはかない追及が全く無駄な者であることを目にします。しかし、全てが終わっているのです。メヴラーナは次のように語っています。

「不誠実さは、犬によってすら汚点であり、恥であるのに、あなたはどうして、人間として不誠実さを示しているのか」

だから偉大な先人たちは、正しい道の旅人たちに次のように呼びかけているのです。

「不注意な者からも、誠実な者からも、その様子からあるべき形で教訓を得なさい。そしてアッラーに忠実なしもべとなるようにしなさい」

そう、重要なのはこの点なのです。ただ、忠実なしもべとなることです。

私たちを、このようなしもべの近くに何年もいるという名誉と恵みに至らせてくださったことに、アッラーに限り

のない感謝を捧げます。この特別な人、1999年の7月にアッラーの慈悲にお返しした、サフラーユ・ジェディード墓地に埋葬された信頼なる私たちの父、ムーサー師です。

道徳という点で、アブー・バクル・スッドゥークの、今日における完全な代理人である私たちの父、そして師は、彼を愛する人々の間で『**忠実さの持ち主**』として知られていました。この表現は、この偉大な人物の為に、何の理由もなく用いられていたのではないことには疑いの余地もありません。なぜならアッラーの友であるこの人は、生涯を通して特別な忠実さ、誠実さの記念碑として生きた、心の地平線であり、私たちの日々の太陽であり、夜の月でした。彼は極であり、賢者の中の王でした。

彼はここまで説明した忠実さのあらゆる顕現をその心に集約しており、その為に『**忠実さの持ち主**』と呼ばれる権利を得ていた、アッラーとの出会いを待つつぼみでした。彼の死後に過ぎたこれだけの時間は、私たちの心での別離の傷をわずかでも癒してはくれませんでした。逆に、より強いものとなりました。なぜなら彼の言葉で説明できない忠実さと、遺されたその心のもたらす空気は私たちにとって常に、誠実さと結びつき、親愛の情と愛情の特別な学びの場であったからです。

アッラーはひとりのしもべに、誉れある奉仕を認められた時、彼にその仕事の能力をも恵まれます。この観点から見るなら、ムーサー師の人格における外面、内面の完全さは、あらゆる点で目にされるものでした。彼は非常に困難で難解な事件や出来事すら、最も細かい細部に至るまで、深く覚醒した理解と慎重さで把握していました。

彼が、忠実さのもたらす空気の中で示した広場にたバラやカーネーション、スイセン、ヒヤシンスは、私たちの心を活気づかせる、枯れることのない美です。彼におけるア

ッラーへの誠実さ、聖典やスンナへの結びつき、行った施しや祖先の信託への尊重、親戚や親友、さらには親友たちの親友に対する親しい関係や振る舞い、ワクフ（宗教寄進財団）への奉仕における努力など、たくさんの美徳で満たされたその状態は、常に私たちに、魂の世界でのアッラーとの問答の際のアッラーへの誓いをどのように実行すべきかという点で、最良の模範なのです。

ムーサー師の限りのない忠実さのうちのいくつかを、次のように示すことができるでしょう。

彼は信者集団において、不誠実にも孤独へと追いやられ、苦痛の中に残された身寄りもない老人に対し、この上なく深い感情を示されました。

「私たちはこの困窮した人たちを、本来なら家で保護すべきだ。しかしそれは私たちにはできない。だから、老人たちの家を建設しなければならない」と言い、数人の近しい人々と共に、この素晴らしい考えを実行に移したのでした。時には身寄りのない人を訪問され、彼らのニーズに自ら対応していました。

彼の心は、その庭にいる猫の性格にまで伸ばされ、彼らにその特性に応じた名を付けられ、子猫たちへの忠実さや慈悲に応じて、それぞれに別の対応をしていました。

私がまだおくるみに包まれている年齢だった頃に私に奉仕してくれた看護婦を、55年後になって探し、見つけださせ、彼女に名誉ともてなしを与えました。

特に彼の、彼の師であるサーミ師への忠実さは、人々の伝説となりました。イードの日に最初に訪問する場所は、サーミ師の家でした。最初の動物を、彼の為に捧げました。特にその誉れある魂の為にクルアーンが読まれる為の要因となり、毎年彼を愛する人々によって師の為に読まれ

る何万ものクルアーンの最初から最後までの読誦（ハティム）は、その忠実さに満ちた心をこの上なく喜ばせていました。

つまり彼は、その生涯全てを包み込む振る舞いと生き方によって私たちに、「愛する者の忠実さとは何であるべきか、どのようにあるべきか」という項目で、アブー・バクルのように愛情と親愛の情の教師となったのです。今、愛を持つ人がなすべきこととは、その愛情と親愛の情の王が育まれた忠実さの土壌で、預言者のつぼみとなることです。

アッラーが私たち皆にそれを可能としてくださいますように。

アッラーよ！私たちの心に、あの「忠実さの持ち主」の素晴らしい状態を与え、私たちを誠実な者の集団に加えてください！私たちの行為に誠実さと誠意を恵んでください。私たち皆をナーイム（天国の8層のうち4番目の層）の天国の遺産相続人としてください。私たちの次世代、子孫に、罪を避けアッラーの命令を守る人々に愛されるような、目の光となり、心の喜びとなるような子供たちをお恵み下さい。私たち皆を、あなたに、あなたの使徒に、両親に、親戚に、あらゆる信仰者に、祖国に、民族に、そして尊い信託に対し、忠実な者としてください。二つの世界において、ご満悦と誉れのもたらす空気の中で生かしてください。

アーミーン！

模範的な信仰者となること

アッラーの友たちは、アッラーの愛情や親愛の情の顕現のもとにある為、虫眼鏡のレンズの下の紙が燃えるように、我欲の傾きは彼らにおいてはその寿命が尽きているのです。このように輝かしい魅力の中心となり、他の人々も自発的にではなくても、彼らの輝かしい美に引き込まれるのです。

模範的な信仰者となること

アッラーは、しもべたちを導きへと至らせる為に、性格や人格を持ち、特別な天性を備えた誠実な人々を道案内として任命し、しもべたちが幸福に至ることを助けられているのです。

人は天性のものとして、性格や人格に驚嘆します。つまり、その人が事実や真実に方向づけられること、そして精神的な鍛練において知性や心に影響を与える実際の模範が必要なのです。だからこそ、アッラーはただ啓典ではなく、人間的な導きの為に、彼らの上にあらゆる観点から深い痕跡や影響を残す崇高な人格と性格を持った人々、すなわち預言者たちを派遣され、彼らの足跡をたどるアッラーの友たちを恵まれたのです。預言者たちや聖人たちは、素晴らしくない何らかの特性をその敵ですら見出すことができないような人物でした。そのおかげで多くの人々が事実と真実に気づき、信仰によって誉れを得たのです。実際、サハーバたちも預言者ムハンマドの生きたクルアーンと言えるその特別な人格と性格に驚嘆し、信仰し、彼の周囲に集っていたのです。女の子たちを生きたまま埋めていた野蛮な人々は溶けて消えてしまい、彼らの代わりにイスラーム史の最高の記念碑的な人々が現れたのです。

だから信仰、イフラース、そして篤信の道を進む信仰者の最も重要な特性は、その預言者たちにふさわしい人格を構成することです。このような性質、特性を持つ信者は、それぞれがあたかも導きの磁石となります。それを得られない人は、気が付かないうちに導きを受けている人々をす

らうんざりさせ、その道から逸脱させる役割を負うことになります。この真実をメヴラーナは次のように語っています。

「ベヤズィディ・ビスターミ師の時代、火を拝んでいる人がいた。ある時信仰を持つ人は彼にこう言った。

『あなたがムスリムになって、平安を得ればいいのに。誉れと崇高さを手にすればいいのに』

火を拝む人は次のように答えた。

『私が救いを得ることを望む人よ。私の口に確固たる印があるとはいえ、つまり私が信仰を明白に口に出してはいなかったにしろ、実は密かに、私はベヤズィッドの信心を信じている。なぜなら彼には特別の素晴らしさと深さがある。私はまたイスラームや信仰に完全に心を捧げてはいないが、彼の信仰心にある崇高さに驚嘆している。彼は皆とは異なり、細やかで注意深い魂を持ち、繊細で輝かしい、非常に崇高な模範的な人である。

しかしもし、あなたが私を招いている信仰が、あなたの信仰であるなら、私はその信仰には存在しない。私はあなたの信仰には心も傾かないし、求める気持ちもない。なぜなら、誰かの心に信仰しようという何百もの傾きがあり、信仰しようと求めたとしても、あなたの厳しさ、かたくなさのせいで強張ってしまい、その気持ちが冷めてしまう。その人の、信仰を持とうという心の傾斜は弱まってしまう。なぜならそれはあなたにおいて、イスラームの名における、意味もない名称とまさに乾ききったブランドを見ることになるからだ。この状況は水もない砂漠を、バラや果物、野菜を育てる肥沃な土地と見なすことと同じくらい奇妙であり、無意味である。

私が見た限りでは、信仰のあらゆる魅力や輝かしさはベヤズィッドの信仰にある。彼の信仰の細胞の一つがしずくとなって落ちれば、それは大海と化す。

あなたの信仰は殻の中でとどまっており、偽善や見せかけにとらわれている。来ては去る信仰は、醜い声の心の伴わないムアッズィン（アザーンを唱える人）のようであり、人々に愛させるべきであるのに、遠ざける。つまりあなたの信仰がバラの庭園に入れば、バラへのトゲとなり、それらをしおれさせる。

しかしベヤズィッド師の信仰の太陽が、その神聖な魂の豊かな空に昇り、この世界で輝けば、この無価値な世界は地面の底までエメラルドとなり、天国と化す。信者たちの心の世界も豊かさの源となる。だからベヤズィッドの信仰と誠実さは私の心、生命に、信仰に対する言葉にできない深み、渇望や願望を生じさせたのだ」

そう、ベヤズィッディ・ビスターミの、拝火教徒に影響を及ぼした崇高な人格と、教えを奨励しようとする人々の為の教訓に満ちた光景です。

この偉大なアッラーの友は、この人格を何によって構成したのでしょうか？疑いもなくアッラーと預言者ムハンマドへの親愛の情と結びつきによってです。創造主のまなざしで被造物を見るというものの見方、すなわち「**創造主ゆえに、被造物に慈悲を示すこと**」の顕現に至ることによってです。次の例も、アッラーの友であるベヤズィッドの心の世界を伝えるという観点から、非常に教訓に満ちたものです。

ベヤズィッディ・ビスターミは、ある旅の途中、木の下で少し休んでから、旅を続けていました。

途中で、休憩していた場所で袋に上っていた数匹のアリが、袋の上で動いているのを目にしました。彼らをその祖国から遠ざけ、異邦での暮らしを強いることがないようにと彼は長い距離を戻り、休んだ場所にまで来て、アリたちをもといた場所に放したのでした。

ベヤズィッディ・ビスターミは時にアッラーとの愛情に非常に繊細になり、細やかさを増していました。創造主ゆえに被造物の全ての苦痛をその心に感じていました。

ある時、彼の目の前で人々がロバを酷く殴っていました。どの動物の背中から血があふれていました。その時、ベヤズィッディ・ビスターミのふくらはぎからも血が流れ始めました。

この状態は、預言者ムハンマドの次の素晴らしい徳の反映でした。

預言者ムハンマドはマディーナで、ナツメヤシの木々の間で休憩し、熟考する為に、アンサールの一人の庭でお客となっていました。そこにいたラクダは、預言者ムハンマドを見ると鳴き、人間の無く様子に似た形でその目から涙が流れました。預言者ムハンマドはロバに近づきました。涙をふき、撫で、動物を落ち着かせました。それからラクダの持ち主を、

「アッラーがあなたの財産とされたこのラクダについて、アッラーを恐れないのですか。見なさい、このラクダは私に不満を訴えている。あなたは彼を空腹のままにし、過度に働かせ、疲れさせているらしいい」と警告されました。(アブー・ダーウード、ジハード、44)

このような預言者の道徳によって鍛錬されたベヤズィッディ・ビスターミのような人々は、完成された心に到達していた為、あらゆる状態において預言者ムハンマドの後を

歩いていました。従って彼らや、彼らの後を行く者も、あらゆる状態において模範的な信仰者です。彼らの微笑みは春の季節のように人々の心に喜びと安らぎを与えます。そのまなざしは魂への微風となります。その輝かしい顔により、常にアッラーを思い起こさせます。なぜなら彼らは、預言者ムハンマドから常に影響や豊かさを得ているからです。次の例は、この影響や豊かさを素晴らしく示すものです。

メヴラーナを経済的に支援していたギュルジュ・ハトゥンの、将軍である夫がカイセリに赴任しました。ギュルジュ・ハトゥンは、セルジュークの宮殿の有名な画家であり、装飾家であるアイヌドゥダウラを、こっそりと絵を描き、持って来る為にメヴラーナのもとに送りました。画家は不注意なままで彼の前に出て、その状況をメヴラーナに伝えました。彼は微笑み、

「あなたに命じられたことを、あなたが望むとおりに実行してください」と言いました。

画家は絵を描き始めました。しかしその結果、目の前にある顔が描いた絵と全く別の内容に包まれていることに気づき、再び描き始めました。こうしてメヴラーナの絵を描いている間に20回形を変えていたのを彼は目にしました。自分の無力さを理解し、その仕事を断念せざるを得なくなりました。なぜならその芸術は、その線の中に消えてしまっていたからです。

この出来事は画家を目覚めさせました。驚き、恐怖、慄きの中で深い考えに沈み、主観的な思考の世界を旅していました。その中で画家は、

「ある宗教における聖人がこのようであるならば、その預言者とはどのような者だろうか」と考え、メヴラーナの手に伏したのでした。

また別の例があります。

故サーミ師と、その付添をしていた亡き父ムーサー師と共に、私たちはブルサからイスタンブールに戻る所でした。ヤロワでフェリーに乗る為に自分たちの車と共に列に並びました。車が混雑することなく秩序正しく列に並ぶよう対応していた一般人である係員が、私たちの車にも場所を示す際、その目が後ろの席に座っていたサーミ師とムーサー師に向けられました。驚いたようにそこで止まり、それから近づいてきました。車の窓から中をより注意深く覗き、深いため息をついて言いました。

「何と奇妙な世界だ。天使のような顔がある。ネムルートのような顔がある」

この状態は疑いもなく、文字や言葉を伴わず、ただその顔でアッラーへと招いていることの素晴らしい顕示です。

信者それぞれとして私たちがなすべきことは、このような幸福な誠実なしもべたちの心の世界から取り分や豊かさを得て、自分たちの人格を発展させることです。特に人々の前を歩く人々はこの点に、つまり導きのマグネットとなることのできる崇高な性格や人格に、より注意を払うことが必要です。なぜなら車の後ろの車輪が前の車輪の後を追うように人々も、自分たちの前にいる人の模範によって形成され、生きるのです。

世界の均衡の継続と道徳的な構成の調整は、ただ叡智、すなわち心の深みによって可能となります。誠実な人々は、その国の幸福や安らぎの地平線における慈悲の太陽です。不注意な人々は、闇と残酷さの穴です。アブマド・ジ

ャウダト・パシャの次の表現は、この現実を非常に明快に示しています。

「ウマイヤ朝のカリフであるワリド・ビン・アブドゥルメリクは、新しく造られた建物や農園に興味があった。人々も建物や農地に興味を持つようになった。集まりや会議では常に建築や農地について語られるようになった。スライマン・ビン・アブドゥルメリクは道楽にはまり、ハレムの生活や食事に夢中になっていた。彼の時代には装飾や賑やかな音、煌めきを伴う宴、淫行が求められ、盛り上がっていた。娯楽がその時代の流行となっていた。ウマル・ビン・アブドゥルアジズは崇高なカリフであり、イバーダを行い、禁欲主義者だった。彼の時代には人々は、イバーダやアッラーへの従順さの道を進んでいました。モスクでは、

『今夜はどのドゥアーを行ったのか。クルアーンのいくつの節を暗記したのか。今月は何日断食をしたのか。（何人の困窮者や身寄りのない人のそばにいたのか）』と言った精神的なやりとりがなされていた」

完全な人格が人間に与えるこれほどに肯定的な影響や豊かさは、疑いもなく彼らが、光の周りを飛び回る蛾のようにアッラーへの愛情で満たされていることによるものです。アッラーは彼らの見る目、聞く耳となられるのです。

つまりアッラーの友たちは、アッラーの愛情や親愛の情の顕現のもとにある為、虫眼鏡のレンズの下の紙が燃えるように、我欲の傾きは彼らにおいてはその寿命が尽きているのです。このように輝かしい魅力の中心となり、他の人々も自発的にではなくても、彼らの輝かしい美に引き込まれるのです。ただ彼らは、一過性の賛辞や関わり合いの嫉妬から自らを救っている人々であり、うぬぼれ、プライ

ド、自尊心といった不適切な特性の渦に陥らない為の努力の中で生きるのです。

彼らの全ての目標、意図はアッラーのご満悦です。だから少ないことと多いこと、冷たいことと熱いこと、豊かであることと貧しいこと、つまりはかない地位や相対的な条件は、彼らにとって何も変わらないのです。なぜなら全て、消えてしまう影であるからです。

この幸福な人々は、その息をタスビーフ（賛美）とし、自分たちを常に点検しています。他人の欠点や責任はその目には見えないのです。

この世界での一過性の見解に心を捧げず、誰からも何の利益も期待しない生涯を送り、他者によって時にどれほど非難をされても、クルアーンで語られているように、

وَعِبَادُ الرَّحْمَنِ الَّذِينَ يَمْشُونَ عَلَى الْأَرْضِ هَوْنًا
وَإِذَا خَاطَبَهُمُ الْجَاهِلُونَ قَالُوا سَلاَمًا

「慈悲深き御方のしもべたちは、謙虚に地上を歩く者、また無知の徒（多神教徒）が話しかけても、「平安あれ。」と（挨拶して）言う者である」（識別章、第25章、第63節）

世界はこのようなしもべに奉仕し、従うことを命じられています。

ハディースでは次のように語られています。

「人の不安が来世であれば、アッラーはその豊かさを心におかれ、仕事を乱雑から救われ、この世界が彼に頭を下げつつ彼のもとに来る。人の不安が現世であれば、アッラーは貧しさを彼の目の前におかれ、彼を乱し、この世界からもただ自らに定められたもののみがもたらされる」

偉大な人々は、非常に完全な道徳や性質を持っており、-アッラーの為の場合を除いて-誰も傷つけず、誰にも傷つけられません。彼らは、

اَلَّذِينَ يُنْفِقُونَ فِى السَّرَّاءِ وَالضَّرَّاءِ وَالْكَاظِمِينَ الْغَيْظَ
وَالْعَافِينَ عَنِ النَّاسِ وَاللّٰهُ يُحِبُّ الْمُحْسِنِينَ

「順境においてもまた逆境にあっても、(主の贈物を施しに)使う者、怒りを押えて人びとを寛容する者、本当にアッラーは、善い行いをなす者を愛でられる」（イムラーン家章、第3章、第134節）という神の宣言の神秘を体現するのです。

ジャーフェリ・サードゥック師は、自分に食事をこぼした召使を、この節の内容を実行し、許しました。さらには彼を解放するという善行を示しました。ハサヌ・バスリ師も、彼の陰口を言っていた人々を許し、彼らに贈り物を送り、善行を示すという形で、彼らを教育したのでした。

このイスラームの偉人の立派な態度を反映させたユヌス・エムレは何と素晴らしく語っていることでしょうか。

断食と礼拝と断食で
鍛錬の為の行いが終わったと思うな
完全な人間になる為に
必要なものは、叡智なのだ

要するに、全ての人々の模範となり、信仰を持った誠実なしもべたちは、あらゆる状態において被造物への慈悲、尊いこと、善行、そして創造主に対する秘められたイバーダを行っています。彼らの呼吸はタスビーフ（賛美）です。彼らと会話を行うのは、彼らが味わっている神聖な味わいや喜びと共に、愛のうちに行きます。なぜならその純粋なしもべたちの心は、預言者ムハンマドを感じることに

よって満たされており、その対話相手にも、その能力に応じて多くの精神的な取り分や恵みを分け与えるのです。

従ってアッラーの友から益を得る為に、彼らとこの世界で一緒にいることに加え、永遠の世界に移った際にも共にいる、ということについて預言者ムハンマドは次のように語られています。

「あなた方の仲間で死んだものを、誠実な人々の間に埋葬しなさい」(デイレーミ、ムスナド、I、102)

誠実なしもべたちについて、アッラーはその人格や徳により、その死後、遺体を土に腐食させません。ジャービル・ビン・アブドゥッラーは語っています。

「ウフドの戦いの前の夜、父は私を呼び、

『預言者のサハーバのうち、最初に殉死するのが私であると考えている。預言者以外に、私が遺す最も尊い人はあなただ。私には借金がある。それを支払ってほしい。兄弟たちには常に良く振る舞いなさい』と言いました。

朝になって、ウフドで最初に殉死したのは父でした。どうしようもない理由があり、他の殉死者と共に彼を一つの墓に埋葬しました。それから、彼を他の人と同じ墓地に埋めたことが自分で納得できないようになりました。6か月後、父を墓から出しました。驚いたことに、耳の一部を除いてその全身が父を墓に入れた日のままのようでした。彼を単独で一つの墓に埋め直しました」

そう、誠実な信仰者の模範的な、崇高な態度なのです。

この状態の、近年の見本が、アダナ出身の正しい道を行く人、クルアーンを暗記したムアッズィン（アザーンを唱える人）です。アッラーの友であるマフムード・サーミ・ラマザンオールは、アダナでこの属性のうちに死亡したハ

ーフズ（クルアーンを暗記している人）の墓を30年後に道路が通るというやむを得ない理由で移動させる為に開けたところ、ただその人の遺体が全く腐っていなかったこと、特にその白布がとてもきれいであったことが証言として伝えられています。

イスラーム史においてこのような、また類似する伝承や証言はかなり見られます。これらは、アッラーの、一部の誠実なしもべへの特別な顕示であり、教訓、導き、そして警告の為のものです。他の人と同じように、死亡した誠実なしもべたちの遺体も、土となります。一部の誠実なしもべたちの死後、その遺体が腐らないこと、といったアッラーの恵みは、アッラーのある英知によるものであり、崇高なその意志に属する状態です。

重要なのは私たちが永遠に獲得するものであり、それは一方でこのような崇高な人々のようになろうという努力、また一方は自分たちの子供たちを誠実な人々として育てることによって可能となります。ハディースでは次のように語られています。

「アッラーは天国にいる誠実なしもべたちの位階を高められ、それに驚いたしもべは『アッラーよ、こうして位階が高められたのはどのような理由の為ですか』と尋ねる。アッラーも、『あなたの子供があなたに行った悔悟やドゥアーゆえである』と答えられる」

この項目に関し、別のハディースでは次のように語られています。

「人が死ぬと、全ての行為の善行が閉じられる。しかし次の三つのものは例外である。次世代に残されるサダカ、役に立つ知識、その死後にドゥアーする誠実な子供」(アフマド・ビン・ハンバル、II、509; イブニ・マジャ、アーダーブ、1)

霊的な心を伴って生きられる生涯は、地上を天国に変えます。アッラーの慈悲と恵みは、罪を避け、命令を守る人々の上にあります。預言者ムハンマドの愛情と共に、預言者ムハンマドの春の空気の中で生きられることは、現世での生の幸福の頂点であり、永遠の幸福の始まりです。預言者ムハンマドのウンマであるという尊厳を維持すること、そのお方の後を歩く人々の後をついていくことは、生涯を通して私たちの義務です。

アッラーがこの崇高な任務の実行によって私たちに恵みを与えてくださいますように。私たち皆をウマル・ビン・アブドゥルアジズ、ベヤズィッディ・ビスターミ、サーミ師や彼らのような人のように、生涯を通して信仰者として生き、ウンマにおける魅力の中心となった幸運な人々に加えてくださいますように。

アーミーン！

カダル（アッラーの意志の元で全てが起こること、運命）とその神秘

目の見る力や、耳の聞く力は、一定の距離までに限られています。その距離よりも遠いものを見ること、聞くことはできません。同様に、カダー（アッラーが決定された通りに全てが実現すること）やカダル（アッラーの意志の元で全てが起こること、運命）についてそれにふさわしい形で認識することも、人間の力を超越したものです。なぜなら私たちは、出来事の理由、要因を知り、それを解決しようとします。その背後にある英知は、たいていの場合認識できないのです。

カダル（アッラーの意志の元で全てが起こること、運命）とその神秘

この世界では、微粒子から天体まで、ハッベ（1ディルヘムの48分の1）から丸天井に至るまで、「ミクロ」の世界、「マクロ」の世界から将来の「ノルモ」（基準値）の世界まで、あらゆる事象において時間、場所、形状、理由が定められ、最も細かな詳細と共に定められた定めの時が来ると実現するカダー（アッラーが決定された通りに全てが実現すること）は、アッラーの荘厳さにふさわしい偉大さでその働きを続けています。

アッラーは存在を一つのカダル（アッラーの意志の元で全てが起こること、運命）により創造され、カダルにより実行されます。生きる道における出来事の痕跡は、まさに運命のラインなのです。月、太陽、星、植物、人間、動物、全ての被造物の動きは、このカダルのプログラムに含まれています。枝から落ちつ1枚の葉すら、このプログラムから外れてはいないのです。もし被造物がカダルのプログラムに従わなければ、この世界では大きな騒動が起こることでしょう。

あらゆる芸術作品は、芸術家の力とその可能性により、存在するようになります。例えば画家は絵を、アラビア書道家は書の作品を、自分の意志と能力に応じて作り出します。アッラーはこの世界の創造から滅亡まで、そこで示される力の流れ、芸術の奇蹟である人間の神秘と英知、その

他の生物が誕生から死まで手にする特性をそのご意志によりあらかじめ定められ、確定されたのです。

そう、カダルはアッラーの意志から生じたこの調整のあり方の名称です。この真実をアッラーはクルアーンで次のように語られています。

「本当にわれは凡ての事物を、きちんと計って創造した」（月章、第54章第49節）

مَا أَصَابَ مِنْ مُصِيبَةٍ فِى الْأَرْضِ وَلاَ فِى أَنْفُسِكُمْ إِلاَّ فِى كِتَابٍ مِنْ قَبْلِ أَنْ نَبْرَأَهَا إِنَّ ذَلِكَ عَلَى اللهِ يَسِيرٌ

「地上において起こる災厄も、またあなたがたの身の上に下るものも、一つとしてわれがそれを授ける前に、書冊の中に記されていないものはない。それはアッラーにおいては、容易な業である」（鉄章、第57章、第22節）

要するに、アッラーがまだ生じていない出来事を前もって知られ、整えられること、保護された銘板で確定されることが「カダル」であり、確定された形でその時が来れば実現することが「カザー」なのです。

アッラーが、これから生じる出来事を、まだ起こる前に「知」という特性で知られることは、その神性が必要とするものです。時間と空間を超越しているという形で、アッラーがこれらの知識を得られることはごく自然なことです。なぜなら私たちがカダルとカダーを把握することを困難とする条件は、アッラーにとっては問題ではないからです。

この世界では全てがアッラーのペンのラインによって生じているということを信じることは必須条件です。カダル

は、信仰の6つの条件のうち最も抽象的なものであるにもかかわらず、実は皆が一致して受け入れている真実です。この点では、信仰を持たない人々すら、常に自分の力を超えたある力の影響を「**運命だ**」といい、暗黙のうちに受け入れているのです。さらにはイスラームを否定する人々の「**運が良かった**」もしくは「**運命に呪われた**」という形での表現は、全ての人が間接的にではあっても、無意識のうちにカダルの真実を認めていることを示しています。

ナジップ・ファズルの劇から引用された次の文章は、知られざるカダルの真実を熟考する人に、カダルが自らをどのように認めさせるのかという点を何と素晴らしく表現しているでしょうか。

「例えばある日、エミノニュ広場で車が人をひいた。この出来事の10分前に戻ってみよう。この人はギュルハーネ公園の前にいる。車は、仮にタクシムから来ているとしよう。この光景を見ているか？ほら、来る！千もの車の中でこの車が、そして10万もの人の中でこの人が。この人は車にひかれることを知らないし、この車も人をひくことを知らない。双方とも、多くの偶然（！）の中で、知らないうちに相手に近づいていく。例えば、この人はある店の前で立ち止まる。人はこのマッチを買う。数歩進む。友達と話す。飾り棚を眺める。こうした罪もない動きさえも、数分後に起こる悲劇の為にそれぞれの役割を果たしている。これらで出来事は全て、互いに秘められた形で起こり、ついにはその悲劇の瞬間を生じさせる。その瞬間は、非常に単純な最後の要因によっている。何かの物思いにふけっていること、情報がないこと…偶然（！）には、どうやって、どこから支配されているのかわからないこの上なく複雑でそこから抜け出ることのない計算がある」(「人を創造すること」 p. 43)

このよに、人生における出来事をそれにふさわしい形で熟考することができる人は、世界という舞台で繰り広げられる無数のシナリオが、アッラーのペンによるラインに沿って生じていることを信じざるを得なくなるのです。

ただし、目が見えない人に色を説明することができないように、この世界から得た印象でものを考え、時間や空間の制約に従っている人間の見解では、カダーやカダルと言った崇高な性質の神秘には、それにふさわしい形で到達することはできません。この状況は、人が絶えることのない秘密を知り、不安に陥ってしまわないように、といった英知によるものです。

実際アッラーは、カダルを全ての被造物に対し、知ることができないものとされ、それがカダーとなるまえに知ることを、-あたかも-不可能とされたのです。ここではただアッラーが幽玄界から知らせを与えられる者たちのみがそのいくらかを得ることができるのです。

アッラーの無限の慈悲の要するところとして、カダルが未知のもの、知ることのできないものとされたことは、人の思考力の前に超えることのできない壁として立ちはだかっています。ただしこれもまたアッラーの恵みにより、この障壁を超えて壁の向こうが見えるという例外的な状況も存在します。その一つが正夢です。実際、誠実な人々が夢で見た、将来に対する知らせが正しかったということは非常に多く見られます。これらは「保護された銘板」から、彼らの心に反射した煌めきなのです。

人が、肯定的なこともしくは否定的なこと、善いこともしくは悪いことを行うか行わないかという選択を行う能力を「部分的な意志」と言います。「全体的な意志」は、ただ

アッラーに属するものです。したがってしもべには、完全な意味の自由はあり得ないのです。生まれること、死ぬこと、寿命、性別、民族、能力といった人が干渉できない事柄は、絶対的なカダルに含まれるものであり、人は否応なしにしたがっているこれらの行為の責任は問われません。

アッラーはしもべに与えられた能力に応じ、彼に責任を負わせます。その為、人の意志の範疇ではないところで起こっている行動には、報償も懲罰もありません。断食中の人が無意識に、忘れていて食べたり飲んだりすることは断食を無効にしません。またこのことで何らかの罰を受けることもありません。

アッラーはクルアーンで「**アッラーは誰にも、その能力以上のものを負わせられない。**」（雌牛章、第2章、第286節）と語られ、人にはその能力以上のものを負わせられなかったのです。しかし全ての人を、その能力に応じた程度には、責任を持つものとされたのです。能力があるのにもかかわらず、そのやるべきことを実行せず、その罪をカダルのせいとすることは、人の不注意さと無知の産物です。

アッラーは試練を受け、責任を負う存在であることから、人の我欲に罪と篤信の基本を与えられ、意志をその双方に自由に用いる上で、彼自身に選択権を与えられました。つまりこのはかない世界で、しもべに一定の範囲内での自由を与えられました。これはちょうど、子供が父親から得たおこづかいをいいこと、悪いことに使うことの選択権を与えられているようなものです。この選択権は、永遠の幸福もしくは災いへの、最も重要な資本となるのです。

この世界では1枚の葉すら、アッラーの意志がなければ動くこともありません。つまりあらゆることにおいてアッラーの意志がある一方で、そのご満悦はただ良いものにのみ与えられます。一人の教師の目的は、その生徒が良い

成績を得て試験に合格することです。生徒が勉強しなければ、教師にはできることはありません。また一人の医師の任務は、病人を回復させることです。病人が与えられた処方箋に従わなければ、そこから生じる悪い結果は、本人の責任になります。医師が何かの罪に問われることはありません。

だから、誰かが悪い道に陥り、「仕方がない、私のカダルがこうだったのだ」ということは、ただ不注意さのもたらすものです。礼拝を行うことを望む人に、アッラーは礼拝を行う為の要因を与えられます。礼拝をしたがらない人にも、その妨げとなる要因を与えられ、それを行わせない、という形で顕現を示されます。だから人がカダルを中傷して自分が無実であると見せようとすることは、事実や真実に対してなされる不正な行いなのです。

アッラーはクルアーンで次のように語られています。

إِنَّ اللهَ لاَ يَظْلِمُ مِثْقَالَ ذَرَّةٍ

「誠にアッラーは、微塵の重さ程も間違えられない」（婦人章、第4章、第40節）

وَمَا أَصَابَكُمْ مِنْ مُصِيبَةٍ فَبِمَا كَسَبَتْ أَيْدِيكُمْ وَيَعْفُو عَنْ كَثِيرٍ

「あなたがたに降りかかるどんな不幸も、あなたがたの手が稼いだものである。それでもかれは、（その）多くを赦される」（相談章、第42章、第30節）

メヴラーナも、あたかもこの節の解釈の為であるかのように、部分的な意志に応じて人々が責任を負うこと、罪をカダルの着せるべきではないことを、「メスネヴィ」で次のように示しています。

「もしあなたにとげが刺さったのであれば、そのとげを刺したのはあなたであることを知りなさい。もし柔らかく、心地の良い布に包まれているのなら、その布を織ったのもあなたである」

目の見る力や、耳の聞く力は、一定の距離までに限られています。その距離よりも遠いものを見ること、聞くことはできません。同様に、カダー（アッラーが決定された通りに全てが実現すること）やカダル（アッラーの意志の元で全てが起こること、運命）についてそれにふさわしい形で認識することも、人間の力を超越したものです。なぜなら私たちは、出来事の理由、要因を知り、それを解決しようとします。その背後にある英知は、たいていの場合認識できないのです。カダーとカダルの神秘について質問した人に、聖アリーは、

「その項目は、深い海である」と答えています。

自分の理性を信頼してその海を泳ごうとした人の大多数は、しもべには何の意志もないことを主張する「宿命論者」もしくはあらゆる点において絶対的な意志の持ち主がいることを主張する「運命論者」のように、逸脱の渦に巻き込まれていったのです。そしてその底もなければ岸もない海でおぼれてしまったのです。

だから、人の責任の源を構成する意志の範疇を正しい形で確定できない限り、誤りへと引きずられていくことからは救われないのです。しもべを、その行為の創造者と見なして、意志と選択の力を崇めることと同様に、部分的な意志を否定し、人を自動化された機械のような存在と見なすことも、イスラームの基本的な条件に反するものです。正しいのは、人にこの意志と選択があること、ただそれもアッラーによって与えられている、ということなのです。

理性や認識が無力となってしまうこのような項目においては、服従によって心の世界で少し前進することは可能であったとしても、このことの神秘を完全な意味で解くことは不可能です。これを把握し、分をわきまえること、それ以上のことをしないことが、完全なしもべとして要されるものです。

❁

メヴラーナはカダルの神秘を理性で説き明かし、理解することの不可能性と、この秘密が実は大きな恵みであるということを、メスネヴィ—の次の話で素晴らしく表現しています。

「ある人が聖ムーサーを訪れ、

『アッラーの言葉である人よ。私に動物たちの言葉を教えてください。彼らの言葉を理解し、その様子から教訓を得たいのです。アッラーの偉大さを認識したいのです』と言った。

ムーサーは彼にこう言った。

『あなたはその望みを捨てなさい。自分の力以上のことを学ぼうとしてはいけない。アリが湖から、自分の容量以上の水を飲もうとすれば、溺れて滅びてしまう。つまり、あなたに与えられている知識以上のものを無理に求めるな。そこには多くの危険がある。あなたはこの世界のアッラーの統治から、あなたの理解力でかなうだけの教訓を得るようにしなさい。心をアッラーに向けなさい。アッラーの顕示の神秘は、完全な心に示されることを知りなさい』

それに対して男は、

『せめて、門の前に横たわり、門番の役目を果たしている犬と、かごの中にいる動物たちの言葉を教えてください』と言った。

どうしてもこの男に、その願いを断念させることができないと理解したムーサーは、彼の最後の要求を受け入れた。ただ、

『気を確かにしていなさい。この神秘の海でおぼれてはいけない』と警告を行った。

この男は朝になると、

「どうだろう、本当に私はこの動物たちの言葉を学んだのだろうか』と言い、試す為に門のそばで待っていた。

その時、召使の女性がテーブルカバーをはたき、ひとかけらの乾いたパンが地面に落ちた。

そこにいた雄鶏はそのパンのかけらをすぐに食べてしまった。犬は彼に、

『あなたは私たちを迫害している。あなたは麦の粒でも食べることができる。しかし私にはそれは食べられない。どうして私の取り分であるパンのかけらを取ってしまったのか』と言った。雄鶏は犬に、

『気にするな。明日になればこの家の持ち主の馬が死ぬ。あなたもお腹いっぱいになるまでその肉を食べるだろう』と言った。

雄鶏が幽玄界から知らせを得ているのだと考えた家主は、その言葉を聞いてすぐに馬を打った。雄鶏は犬に対して立場が悪くなってしまった。

雄鶏と犬のこの分け前争いはそこから3日続いた。1日目は馬、2日目はラバ、3日目には奴隷が死ぬことを雄鶏の会

話から知ったこの男は、死ぬ前に馬を売ったように、ラバと奴隷も-利口なことをしていると考えつつ-売り払ってしまった。こうして犬は、そのどれからも期待した利益を得ることはなかった。雄鶏が毎回、犬をだましたことになってしまった。このことのせいで3度、犬に対して恥をかいた雄鶏は、ついに4日目に犬にこう言った。

『実際のところ、あの用心深い男があなたのものを奪っていたのだ。しかしこの行為の生で、自分を滅ぼすことになった。明日にはついに彼自身が死ぬのだ。遺産相続人たちは大いに泣くだろう。そして牛を1頭屠り、皆そこから益を得るだろう。私たちも、あなたも。馬やラバ、奴隷の死は、この未熟な男の身を襲うカダーの盾であり、鎧だったのだ。しかし彼は財産を失い、損害を出すという災いから逃げ、自らを滅ぼしたのだ』

愚かな男は雄鶏のこの話にも耳をそばだてていた。耳にした事実を前に、真青になった。恐ろしい恐怖に襲われた。ムーサーのところまでいちもくさんに行き、彼に、

『アッラーの言葉である人よ！私の嘆き、苦悩を鎮めてください』と言い、懇願した。ムーサーは彼に言った。

「あなたは自分を超越している仕事に取り組んだのだ。それで今は袋小路に入ってしまっている。あなたはあの動物を売って、利益をあげられると思ったのか？あなたに、カダルとカダーの神秘に無理押しをしないよう繰り返し言っていた。利口な人には、後で見えるものが最初に見えるが愚かな人には最後に見えるのだ。しかしもう、手遅れだ。取引や商売であなたは熟練している。今度は自分の命を売って救われるがよい」

この男が深い後悔のうちに懇願したので、ムーサーは彼に、

「もはや、矢は弓から放たれたのだ。それが元に戻るのは不可能なのだ。しかし恵みの主アッラーに、せめて死ぬ時には信仰を持っていられるように願おう』と言った。

ムーサーはアッラーに懇願を行った。これによりその男は信仰と共に死ぬことがそのドゥアーの恵みによりかなった。さらにアッラーは聖ムーサーに、

『ムーサーよ、あなたが望むなら、彼を蘇らせよう」と言われたが、ムーサーは、

『主よ、あなたを賞賛します。彼を来世で、その輝かしく崇高な世界で蘇らせてください。そこは永遠であり、カダーとカダルの神秘が明らかにされる場であるからです』と言った」

この物語からも理解されるように、時に人は自分にとってよくないものを強く求め続けます。しかし彼が願っているものは、彼自身を滅亡へと導くものなのです。結果としてこのような結末に陥った人が、それを不注意さによって強く求めていたにも関わらず、後悔することをやめられず、嘆きます。この為、この世界で心の安らぎと来世での永遠の幸福の為に最も適切であるものは、この神の崇高さを認識し、信頼（タワックル）し、従順さを示すことです。しかしこれも、皆にできることではありません。しもべが自らが無であると把握できるということは、無限の資本です。つまり、カダーやカダルを前にした唯一の手段は、アッラーに服従することなのです。なぜなら信頼と服従は、カダルを喜びに変える慈悲の扉であるからです。

実際、預言者ムハンマドは、

「カダルを信じることは、あらゆる種類の悲しみ、痛みを取り除く」(スユーティ、「ジャミーウッサギール」I、107)と言われています。

ただ、甘受や服従、信頼を、何の用心もしないこと、訪れるかもしれない災いを防ぐ為に何の努力もしないこと、という形で、受け身で怠惰な態度であると理解することも誤りです。この信頼は、良いことを引き寄せ、災いを遠ざける為にあらゆる手段をとった後で、その結果についてアッラーに従い、アッラーに庇護を求めることです。要因の為にやるべきことをやらないしもべの信頼は認められないし、この状態は真の信頼（タワックル）の精神にも反するものです。

実際、聖ウマルがある旅の途中、行く予定であったダマスカスで伝染病が発生していることを知り、必要な相談の結果として、ダマスカスに行くことを断念しました。そもそも、アッラーと預言者ムハンマドの命令により適していたこの用心、対策に対してサハーバの一人アブー・ウバイダ・ビン・ジャッラフはウマルに、

「アッラーのカダルから逃げるのか」と尋ねました。ウマルはこの知識豊かで徳のあるサハーバからこのような問いかけを予想しておらず、

「これをあなた以外の別の者が言っていればよかったのだが、アブー・ウバイダよ。そう、アッラーのカダルから、やはりアッラーのカダルへと逃げるのだ。あなたがラクダを持っていて、片側が豊かな土地、もう片側が不毛な土地である谷に降りていき、あなたは彼らを豊かな土地の方で放牧させるなら、アッラーのカダルによって放牧させたことになる。不毛な土地で放牧させれば、やはりアッラーのカダルによって放牧させたことにはならないのか」と答えました。

このように、カダルから逃れることはできません。だからしもべがなすべきことは、対策や努力なのです。それから、アッラーが定められた結果を甘受することです。

英知の窓から見る人々にとって、カダルが秘められていること、しもべがそれを、それにふさわしい形で認識できないという状況は、悲しみの要因ではなく、逆にこの上なく大きな恵みの媒介なのです。なぜなら、人間がカダルを知った場合、そこから抜け出ることのできない多くの危険や災いに陥ることは、否定することのできない真実であるからです。

例えば、不治の病にかかり、命を落とすことになる人が、死の瞬間まで不安を感じないことは、カダルが知られないものであることのおかげです。しかし、誰であれ自分が死ぬ時を知っていれば、死が自分に近づいてくる時期にはその悲しみで手足がとられ、何も手につかなくなり、何度も死んでは蘇るような状態になるでしょう。子供が自分より先に死ぬことを知った母親も、その何年も前からそれを悲しむでしょう。結果としてこの状態は人生における調和の必要性に反するものとなり、バランスが崩れてしまうでしょう。

近年増加しているストレス、鬱状態、そして自殺は、精神的な喪失感がもたらす悲しい結果です。なぜなら精神的な教育から遠い心が、自我の欲望、熱情の虜となることはごく自然であるからです。人生における予想外の出来事を、辛抱強さや静けさのうちに迎えることのできるような服従の状態が実行されることはただ、人を「幽玄界」に方向づけるカダルを信じることによって可能となるのです。

幸福のゆるぎのない条件は、理性を啓示に従わせ、心を良い徳で飾り、それによって人生の予想外の出来事を甘受することです。また真の幸福は、人生の上昇下降を受け入れ、困難さに忍耐を示すこと、全ての良い側を見て、諸世界の主に服従することです。

アッラーは時に、恵みを悲しみとして、時には悲しみを恵みとして示されます。これらすべての状態が人間に知らされないことは、この世界が試練の場であることゆえなのです。

アッラーは次のように語られています。

وَعَسَى أَنْ تَكْرَهُوا شَيْئًا وَهُوَ خَيْرٌ لَكُمْ وَعَسَى أَن تُحِبُّوا شَيْئًا
وَهُوَ شَرٌّ لَكُمْ وَاللّٰهُ يَعْلَمُ وَأَنْتُمْ لاَ تَعْلَمُونَ

「自分たちのために善いことを、あなたがたは嫌うかもしれない。また自分のために悪いことを、好むかもしれない。あなたがたは知らないが、アッラーは知っておられる」（雌牛章、第2章、第216節）

また別の節では次のように語られています。

قُلْ لَنْ يُصِيبَنَا إِلاَّ مَا كَتَبَ اللّٰهُ لَنَا هُوَ مَوْلاَنَا
وَعَلَى اللّٰهِ فَلْيَتَوَكَّلِ الْمُؤْمِنُونَ

「言ってやるがいい。『アッラーが、わたしたちに定められる（運命の）外には、何もわたしたちにふりかからない。かれは、わたしたちの守護者であられる。信者たちはアッラーを信頼しなければならない』」（悔悟章、第9章、第51節）

実際、この世界での生という観点から、例えば目が見えないことは大きな損失のように見えます。どの恵みであれ、見える目とは比べ物にならない、と考えられます。しかしこの世界に視覚障害者として生まれてきた人は、この障害が妨げになることにより、罪の沼に落ちることから救われるのであれば、外見上は悲しみの要因であるかのよう

に見えるこの状態は、真実においては喜びに変わるのです。貧しさと豊かさも同様です。貧しい人がその状態に不満を言わず、アッラーの定めを甘受していれば、これは彼にとっておそらくは永遠の豊かさへの要因となるものです。しかしもしこの貧しい人が現世で金持ちになっていれば、手にした力が自我を唆し、我欲に力の幻影をいだかせ、もしかしたら不注意さの中で性欲や怠惰にふけり、永遠の幸福を損なっていたかもしれません。もちろん、この逆も考えられます。要するに信者は、自分がいるあらゆる状態を良いものと見なし、アッラーの定めと調整に満足し、それが永遠を得る為の機会であることを知るべきです。忍耐、感謝、服従の中で生きるよう、努力するべきなのです。

あるハディースでは次のように語られています。

「信者の状態は、まさに羨望され、驚嘆されるにふさわしい。なぜならあらゆる状態が彼にとっては善の為の媒介である。このような状態はただ信者にのみある。信者は、喜んだ時には感謝し、これは彼にとって良いものとなる。その身に災いが降りかかってきた時には忍耐し、これも彼にとって良いものとなる」(ムスリム、ズフド、64)

カダルに関してここまで述べてきた根本的な原則が深められていくと、非常に多くの問題に出会うことになります。これらは学問上の論議の元となるばかりです。だから預言者ムハンマドは、カダルを信じることで十分とするよう命じられ、この項目についての不毛な論議を拒まれました。カダルについて話し合っている一団に出会った時、彼らに

「あなた方はそのような命令を受けているのですか？あるいは私はあなた方にこの為に遣わされたのですか？あなた方以前の人々も、この問題について論議をしたために滅亡した。決してこの問題を議論してはいけない」と言われたのでした。(ティルミズィー、カダル、1)

詩人のズィヤー・パシャも、人間の能力を超越した事実について次のように語っています。

その意味の把握を行うことは、その小さな理性では、不要である

なぜならこのはかりは、これほどの重さを乗せられない

アッラーよ!私たちを真の意味で、信頼(タワックル)を行うしもべとし、あなたのご満悦を得ることのできる行為を行えるようにしてください。カダーとカダルの甘受の喜びに到達することがかないますように。

アーミーン。

信仰からイフサーン
（アッラーがまるで眼前におられるかのように崇めること）へ
ムーサー師（1917ー1999）

「アッラーの、しもべへの最大の恵みの一つは、そのしもべに彼の無力さを知らされることである。この精神的な道において私が得たおそらく最大の恵みは、自分の過ちを目にしたことである。アッラーに対し、自分が破綻していることを認識した。これによって、他者の過ちを目にしたり、それに関わったりする力は残らなかった。私はこれらすべてへの感謝の中にいる。」ムーサー師

（アッラーの慈悲がありますように）

信仰からイフサーン（アッラーがまるで眼前におられるかのように崇めること）へ
ムーサー師（1917－1999）

信者が常に、アッラーがご覧になっているということを認識し、その状態を心に定着させるという意味であるイフサーンは、同時に、何らかの仕事や行為を最も完全な基準に基づいて行うことでもあります。

1999年7月16日にアッラーの慈悲に委ねたムーサー師の生き方、その方法は人間的なつながりや振る舞いという観点からも特別な繊細さ、優美さ、細やかさの例で満たされていました、つまり彼の生涯は簡潔に言うと「イフサーン」の状態だったのです。

彼は冗談を言う時にすら、アッラーがご覧になっているという点での認識や注意を弱めることがないよう、努力されていました。彼のこの素晴らしい状態は、周囲の人々に常にイフサーンの感覚を思い起こさせるものでした。

この偉大な人物は「信仰からイフサーンへ」と向かうその方法と内容を全ての振る舞いや言葉で、完全な形で実現化する為に努力していました。その輝かしい生涯は、この振る舞いの細やかさや完全さの、この時代の最も完成された模範の一つです。彼は常に、その態度や言葉で、途切れなく光を放ち温める太陽のように周囲にこの奨励の豊かさと恵みを広めていました。

彼自身といくらかでも、近しくもしくは遠くからの関わりを持った全ての人は、特別な豊かさの媒体であるアッラーの友は、この世界における神の均衡の要するところである調和が損なわれることに心を痛めていました。目にした過ちや不足を取り除く際にも、深い注意や細やかさの中で行動していました。例えば最も単純なものとして、壁にかけられたプレートがゆがんでいること、あるいは礼拝用の絨毯が適当に床の上に置かれていることにすら、心に苦痛を感じていました。誰かにそれを直させるか、彼自身の手で直していました。集まりの場や説話において部屋が整っていないこと、やってきた人たちが適当に座ること、ドアのところに人がたまることも、彼の注意から逃れることはなく、その完成された心に苦痛を与えました。

アッラーの友たちの行動の完全さとその細やかさを、この節は実に素晴らしく表現しています。

وَعِبَادُ الرَّحْمَنِ الَّذِينَ يَمْشُونَ عَلَى الْأَرْضِ هَوْنًا وَإِذَا خَاطَبَهُمُ
الْجَاهِلُونَ قَالُوا سَلَامًا وَالَّذِينَ يَبِيتُونَ لِرَبِّهِمْ سُجَّدًا وَقِيَامًا

「慈悲深き御方のしもべたちは、謙虚に地上を歩く者、また無知の徒(多神教徒)が話しかけても、「平安あれ。」と(挨拶して)言う者である。また主の御前にサジダ(または)起立して、夜を過す者」(識別章、第25章、第63－64節)

この節やこの後に続く他の節でアッラーは、誠実なしもべの特性を8つの性質としてまとめておられます。

1. 地上の歩き方や行動の仕方は穏やかであり、うぬぼれや傲慢さからは程遠く、謙虚で真剣です。無知な人々が彼らにからんできたとしても、穏やかさで締めくくられる

ような言葉を語ります。周囲の人に慈悲深く忍耐強い人として信頼と安らぎを与えます。（参照：識別章第63節）

2. 夜をイバーダで活用します。寝ることも起きることも全てアッラーの為です。（参照：識別章第64節）

3. 次のようにドゥアーします。「主よ、地獄の懲罰をわたしたちから追払って下さい。本当にあの懲罰は、苦しみの極みです」（参照：識別章第65節）

4. 財産を使う際に浪費もせず、けちでもありません。その二つの間の中道を保ちます。（参照：識別章第67節）

5. アッラーとならべて、外のどんな神にも祈りません。アッラーが禁じられた殺生を犯すことなく、また姦婬しません、（参照：識別章第第68節）

6. 嘘の証言をせず、また無駄話をしている側を通る時も自重して通り過ぎます。（参照：識別章第72節）

7. 話題が主の印に及べば聾唖者か盲人であるかのように、戯らに知らないふりをしません、（参照：識別章第73節）

8. そして、「主よ、心の慰めとなる妻と子孫をわたしたちに与え、主を畏れる者の模範にして下さい。」と懇願し、家庭生活や子孫が現世と来世で顔を輝かせる信仰、叡智、道徳の中にあること、育ち、成熟していくことを願います。そして自分たちの為の願いも、篤信において最前列にある者となることなのです。（参照：識別章第74節）

アッラーはこういった誠実な信者たちが得る永遠の幸福について、次のように知らされています。

「これらの者は、その耐え忍んだことにより高い階位の住まいをもって（楽園の中に）報われよう。またそこで歓迎と挨拶の言葉をもって迎えられよう」（識別章、第25章、第75節）

心は、この形で清められるごとに、人間的な、そして神秘主義的な鍛練に加えられるアッラーの恵みと気前の良さにより、その道の最後では次のような状態に達するのです。その持ち主を形の上では人間のまま残す一方で、内面はあたかも天使の位階にまで上昇するのです。この状態にある人の一部は、宇宙にある無数の星のどれか一つのように、自分の世界で、そして外部に対しては完全に秘められた中で生きます。このような人は知られることがありません。実際、聖ハディースとして伝承されている、

「聖人たちは私の丸天井の下にいる。彼らのことを、私以外の誰も知ることはない」という形での言及は、この集団についてのものなのです。

アッラーの友のうち一部は、その責任の範疇に委ねられた導きの任務の為に-一定の基準で-知られており、彼自身の時代から未来に向けて、導きの灯明として、人間としての生においてその奉仕を続ける為、「永遠」の神秘からその取り分を得ます。出来事の覆いの背後に存在する秘密、叡智、アッラーの望みを理解します。その為にアッラーの意志を知ったことによる安らぎと平穏さの中で生きるのです。彼らは焦りや不安といった多くの人間的な弱さから守られているのです。

彼らにとってもはや「無駄」なことは存在しません。「被造物をよく受け止めなさい。その創造主ゆえに」という基準と共に始まる精神的な発展において、アッラーの英知を尊重することにより、全世界を警告、愛情、そして驚嘆の気持ちで満たされた状態で旅し始めます。

これらすべての素晴らしい、そして崇高な状態と特性を、その本人の生涯を通して目にしてきたムーサー師の振る舞いにおける細やかさと優美さの完全性の一つの顕現が、日々の生活の流れの中でアッラーのあらゆる被造物に

慈悲と愛情を持って目を向けることでした。周囲にいる猫、そして庭の上で飛んでいる鳩も、もてなしや恵みによってこの広い慈悲から得るものを得ていました。

私たちも、「与えられた恵みを感謝のうちに皆に告げる」という形でのズィクルを行いましょう。そして私たちに与えられている概念的、実体的な恵みの真の影響であるそのアッラーの友の生活を支配していた一つの行動様式である「信仰からイフサーンへ」という概念を、最新の作品である「イスラーム神秘主義」の見出しに用い、それを「信仰からイフサーンへイスラーム神秘主義」と名付けたのです。

この機会に、あのアッラーの友について、彼を愛する全ての人やその弟子たちの名において、ここで最も深い敬意、愛情、心からのドゥアーと感謝の気持ちで思い起こす必要があると感じています。

読者の皆さんに、彼の為にファーティハ章を読んでくださるよう、お願いします。

- 彼の忠言から -

故ムーサー師がその弟子に書いた手紙における忠言の一部を紹介します。

「信者の心の世界とその完全性は振る舞いによって示されます。この美点のうち最たるものは次の通りです。

いつでも謙虚であること、自分の時間とその呼吸の価値を知り、浪費しないこと、アッラーのしもべたちを愛し、彼らと争わないこと、聞き手の宗教的な段階に応じて振る舞うこと、過ちを覆い隠す人であること、非合法なものと合法なものに注意すること、人々が軽視している不服従についてもそれを大きくとらえることです。なぜなら罪を軽

視する人は-絶対にないことであるが-アッラーの命令を軽視することになるのです。

アッラーのご満悦を得る為の道において、特に暁の時間帯を礼拝、ズィクル、ドゥアーで彩りましょう。家族の一員である人々や、家族の中の目上の人に奉仕を行いましょう。世俗主義者、つまり不注意さにふけっている人との親交を減らし、誠実な人と共にいるようにしましょう。その他の親戚や助けを必要としている人々の為に奉仕し、言葉でも、物質的にも援助を行いましょう。最も重要なことは、禁じられているもの、合法であるものに注意深くありましょう。さらに市場、商店街などでのやりとりにおいても注意深く振る舞いましょう。しもべとしてのふるまいを不足させないようにしましょう。

しもべは、その慈悲や道徳に応じてアッラーに近くなります。アッラーに近いしもべは、

اَدَّبَنِى رَبِّى فَأَحْسَنَ تَأْدِيبِى

「私をアッラーがしつけられた。私のしつけを素晴らしく行われた」(スユーティ、「ジャミーウッサギール」、I、12)というハディースの神秘に至るのです。つまりアッラーの道徳によって徳を身に着けるのであり、これ以上に誉れ高く、徳のあることは何もあり得ないのです。

全ての過ち、忘却、ゆらぎはズィクルに対して不注意であった時、つまりアッラーを忘れた瞬間に生じています。ズィクルの精神的な状態を継続させる者には、この世界の悩み、悲しみ、さらには必要以上の世俗的な喜びも存在しないのです。常に安らぎ、気前の良さ、そして被造物に慈悲を抱いていることは、その空いた隙間を満たします。つまり愛情、恒常的な愛情なのです。アッラーはご自身を愛

するしもべを、愛情の海に入れます。もはやその人はアッラーが愛させられる割合に応じ、愛されるのにふさわしい対象を愛するのです。

賢明な人は、アッラーの神性の偉大さと自分に恵まれた現世的、来世的恵みを考えるごとに、その謙虚さ、つつましさが増します。皆をその位階に応じて愛します。自分が正しい場合も、誰とも言い争いは行いません。

また一方で賢明な人は、この世界が一過性であることを知っています。そして、アッラーのご満悦を考えます。この為にまだこの世界にいる間に、その心にある抑圧や苦悩は安らぎと喜びに変容します。要するに、現世にいる間に天国の生に入ったことになるのです。

人は、自分が属する信者集団に対し、アッラーのご満悦の為に立派に奉仕することが、非常に尊い価値であると知るべきです。ある信者集団の生活、秩序、発展の為に奉仕を行う人は、その集団にとって非常に重要な存在であるということです。その結果として、その報償、対価もそれに応じて大きいものとなります。

聖ハディースでは、

「人々に奉仕する人は（その報償と対価を得るということから）彼らのうちで最も偉大なものである」とされています。

多くの人は、イバーダや従順さに意欲を示すのに、アッラーの特性でもある「セッタール・ル・ウユーブ」すなわち恥を覆い、過ちを許すという特性には無関心でいます。その為に、完全に求められている形では発展することができずにいます。しかし、許すこと、過ちを覆うことは美徳の中でも最も重要なものの一つです。アッラーがわたしたちしもべの無数の欠点や過ちを覆い、許してくださってい

るように、私たちも許す者であるべきです。なぜならアッラーの愛情を持つ者は、許すことを知っているからです。許しましょう、インシャッラー、許されるように。

楽であること、快くあることの唯一の鍵は、服従です。つまりアッラーの割り当てに満足し、合法なもの、禁じられたものに注意することです。

この道を行く者は、それぞれに異なっています。一部は、習慣という状態にしているズィクルを行い、その対価として疑いもなく報償が与えられます。別の一部は、ズィクルと行うと共に、常にアッラーの御前にいることを認識しています。クルアーンの判断に従い、カダーやカダルの判断を前にしてアッラーに服従を示します。彼の全ての行動はアッラーのご満悦にかなったものになります。彼の心と魂の世界も、それにより評価されます。しかしこの人々は少数派です。少数派の中の少数派です。

全ての能力は、この世界の喧騒や無数の種類のやるべきことの中でアッラーと共にいられることです。これは非常に素晴らしい状態であり、アッラーの、しもべへの一つの贈り物です。この崇高な任務を十分に考えることができれば、この世界のはかない玩具に騙されることからも救われるでしょう。

アッラーの、しもべへの最大の恵みの一つは、そのしもべに彼の無力さを知らされることです。この精神的な道において私が得たおそらく最大の恵みは、自分の過ちを目にしたことです。アッラーに対し、自分が破綻していることを認識しました。これによって、他者の過ちを目にしたり、それに関わったりする力は残らなかったのです。私はこれらすべてへの感謝の中にいます」

これら全ての愛情、慈悲、そして方向性に満ちた警告や忠言は、彼の「イフサーン」の状態に達していた生涯から、私たちにももたらされていた豊かさのしずくなのです。

彼の上に、アッラーの慈悲がありますように。

「信仰からイフサーンへ
イスラーム神秘主義」という書物に関して

これは、心のひとしずくです…

神秘主義は、啓典やスンナに含まれている事柄の範疇で、自己の点検やイフサーンの気持ちと共にしもべとしてのあり方を最善の形で実践することです。神秘主義は、しもべとしてのあり方を妨げる障害物を取り除き、しもべであることへの媒介となる可能性を確保することに他ならないのです。

「信仰からイフサーンへイスラーム神秘主義」という書物に関して[30]
これは、心のひとしずくです…

アルトゥンオルク:「信仰からイフサーンへイスラーム神秘主義」という本を書かれました。今日まで、神秘主義に関する非常に多くの本が書かれてきましたが、ここで新しい本を書くことの必要性はどこから感じられたのですか？

ーその通りで、神秘主義に関する非常に多くの本が書かれてきました。しかし、ダイナミックな生活の流れの中で起こる出来事、つまり社会が物質的なものに従い、社会的な平安や平穏さが損なわれた時代というものは、人々の前に毎日新しいニーズを作り出します。諸問題の本髄は同じであっても、時と共に新しい見解や要求が生まれます。これらを評価し、このようなニーズに応じる為、法学に関する本や歴史に関する作品においてそうであるように、神秘主義に関する問題も、それぞれの時代の求めるもの、ニーズに応じた精神の鍛錬の為の必須条件として、新たに本として書かれる必要性があるのです。つまり、神秘主義の真実、事実がいつでも正しい形で書かれ、表現されること、誤った見解や行き過ぎである部分を修正することは非常に重要なニーズです。もちろん、このニーズだけではなく、神秘主義が含む深遠な素晴らしさも、時代や場所の条件に

30. この文章は、アルトゥンオルック誌が著者と行った対談である。

応じて全ての心に分け与えられる為に、神秘主義の分野はあたかも、作品でできた海のようになっているのです。

私たちもこの大海で、同じ目的を持った無力な心のひとしずくを与えようと努力しました。ひとしずくです。なぜなら神秘主義とは言葉以上に「状態」であり、私たちの作品が心を崇高な御前に方向づける為の橋という役割を果たすことができれば、自分たちを幸福だと見なします。つまりこの作品を、今まで書かれたものよりもいいものにするという主張の中で書いたのではないのです。そのような状態には恥を感じます。私たちが行ったことは、今まで書かれた神秘主義に関する作品と、アッラーの友たちの豊かな生き方を始点とし、神秘主義をこの時代の条件にあわせて、概説として、その意図に適った形で改めて言及したということです。そもそもこの作品は、アッラーの友たちの神秘主義の遺産から滴り、今日の人々に差し出された一瓶の水なのです。

アッラーの友たちは昇った太陽を、光線が日没の際に描く色とりどりの光景を、驚嘆のうちに眺めます。あらゆる機会に、アッラーを知るという地平線へと翼を羽ばたかせます。彼らはへびですら慈悲のまなざしで見つける為、他の者が感じる嫌悪感の代わりに、この動物の皮の模様や足がないのにも関わらずその動きの素早さを賞賛します。つまりこの純粋なしもべたちは、全ての被造物を愛情と英知のまなざしで見つめる為、凶暴な動物の威嚇に対しても穏やかでいるのです。

またこの作品は、神秘主義をイスラームとは異なる規律、スタイルであるかのように見る見解が正しくないことを示すことで、イスラームが外面的、内面的に一つの完全体として豊かさと安らぎの中で実践されることの必要性をはっきりと示すという目的によって書かれました。この目

的を乱しとして強調する為に、この本には「信仰からイフサーンへイスラーム神秘主義」という名が付けられたのです。

この作品が書かれた目的は、信仰とイスラームを「イフサーン」によってさらに高めること、つまりアッラーがご覧になっているという感覚を、心に意識として定着させるよう、支えることです。

なぜなら真の神秘主義は、啓典やスンナの感覚の深みにおける神秘や英知から、得るべきものを得て実践することだからです。**啓典やスンナの内容からはみ出している全ての状態、言葉、行為は逸脱です。**この真実を示す為に、「コンパスの固定された足は、イスラーム法である」と言われてきたのです。メヴラーナは次のように語っています。

「私たちはコンパスのようである。固定された足はイスラーム法にあり、もう一方の足で72の民族へと動く」

「イスラーム法はろうそくに似ている。光を灯し、道を示す。ろうそくを手にしたからといって、その道を制覇したことにはならない。しかしそれを手にすることなくその道を行こうとすることもできない。イスラーム法の光の中でこの道を行きはじめたのであれば、その行程が神秘主義である」

また一方でしもべが、アッラーをあらゆる瞬間に見ているかのように自らに秩序を与え、その道でその人生をただすこと、アッラーがご覧になっているということを心に定着させ、意識という形にすることを意味する**イフサーン**は、アッラーに近いしもべたちの魂の遺産です。それは精神の、魂の、神秘的な、そして神性な真実です。神秘主義者の目標はこの真実に到達することです。これもアッラーとしもべの間に築かれた魂の、心の結びつきを意味します。

健やかな形でこの結びつきを築いた人は、アッラーの友であるしもべとなります。このようにして彼は、アッラーの徳によって徳を身につけます。

この状態は、アッラーに最良の形でしもべとして振る舞うことであり、永遠の世界への重大な準備となります。つまり神秘主義は、しもべとして最も良い形で生きることです。なぜならアッラーは人を、ご自身にしもべとして振る舞う為に創造されたからです。従って神秘主義は、しもべとして振る舞うことを妨げるものを取り除き、またしもべとして振る舞うことへの媒介となるものを確保することに他ならないのです。彼は多くの傷を包み込み、また不毛の土地を緑色の、豊かな庭園と変えます。そして多くの荒廃した心を、活気づいた宮殿とします。要するに神秘主義はこの異邦の世界から限りのない出会いの世界へと向かうしもべたちを、アッラーの位階において« نِعْمَ الْعَبْدُ »「何と素晴らしいしもべであることか」[31]という地位と報償へと至らせる、輝かしい道なのです。これも、疑いもなく、信仰をイフサーンの状態にすることで可能となるのです。

アルトゥンオルック：あなたがお話になられたことは、同時に本の内容や範囲をも反映するものでしょうね？この観点から、今回の本では全体としてどのようなことに言及されていますか？特にどのようなことが取り上げられていますか？

-この作品では、神秘主義について全体的な内容を示した後、その主な項目を構成するアッラーへの智、アッラーへの愛情、我欲を清めること、心を清めること、神秘主義の方法といった点を説き明かそうと努力しました。預言者ムハンマドを始めとして、その素晴らしい存在の後継者で

31. Bkz. Sâd, 30, 44.参照：サアド章第44節

あるイスラームの偉人の行動からの例を示しました。ところどころで、神秘主義の深みや細やかさに関する一部の不安視する、もしくは反発する意見への返答として、-個人を標的にするのではなく、ただ考え方として－知識を提供しました。

さらにこの作品では、神秘主義の示している精神的な鍛練から遠い一部の人々が良い意志で、しかし無知なゆえに、あるいは不注意さゆえに行っている不十分で不備のある、不適切な実践が、この崇高な道とは何の関係もないという点にも触れています。なぜなら神秘主義は、クルアーンやハディースで特に言及されている、我欲を清めるという形で人を成熟させること、それによって永遠の幸福に至らせることを目的とするのです。この点はアッラーが何度も誓いを行われ、注意をひかれている真実です。太陽章では次のように語られています。

「太陽とその輝きにおいて、それに従う月において、（太陽を）輝き現わす昼において、それを覆う夜において、天と、それを打ち建てた御方において、大地と、それを広げた御方において、魂と、それを釣合い秩序付けた御方において、邪悪と信心に就いて、それ（魂）に示唆した御方において（誓う）。本当にそれ（魂）を清める者は成功し、それを汚す者は滅びる」（太陽章、第91章、第1－10節）

アッラーが誓われることは、誓いをかけられた存在の価値と誉れを知らせることと同時に、そもそもその誓いの後で述べられる神の意図ともお望みの崇高さ、偉大さ、重要性を示す為のものです。この章における誓冑においてもそれは同様です。しかし次の違いがあります。

アッラーはこの章で、次々と合計7回、誓いを行われ、その後でもその意味をよりいつ読める為に “قَدْ”「本当に」と

いう前置詞を用いられています。この力強い強調や確認の後で、次のように告げられています。

「魂を清める者は必ず救いに至る。逆にそれを罪や不服従で汚すものは、必ず滅びる」

注意をひくのは、クルアーンでアッラーは魂を清めること以外のどの項目についても、このように重ねて7度も誓いをされていない、という点です。この事実は、人の救いの為に魂を清めることがいかに重要で、不可欠であるかの説明の為に十分なものでしょう。

「信仰からイフサーンへイスラーム神秘主義」という名で執筆したこの作品は、アッラーの友たちのこの真実、すなわち我欲を清めるということを、言葉、状態、行動の素晴らしさによって説き明かすことで構成されています。

アルトゥンオルック：これらすべては、疑いもなく「どのような神秘主義か」という問いへの答えでもあります。それによるなら、個人、集団、外部について精神的な形で、神秘主義においてはどのように説明するべきでしょうか？この問いを先人の「神秘主義の定義もしくはそこにおける評価」という形で考えていただいても結構です。

-神秘主義は、実践するに連れて味わうことができ、理解され得る学問である為に、それについて皆が一般的に味わい、理解している面や項目を取り上げました。その結果として、当然ですが多くの定義が現れました。この道において前を行く人々は、ちょうとあらゆる断面から様々な光を反射するクリスタルが、ただ彼ら自身に対して反射している部分を取り上げるという道を選んでいた、ということができるでしょう。

アッラーの友たちが到達していた魂の顕現によって彼らが行った無数の神秘主義の定義のうちの一部は以下のようなものです。

-神秘主義とは、良い徳、良識である

-神秘主義とは、我欲を清め、心を美しくすることである

-神秘主義とは、停戦のない、心の戦いである

-神秘主義とは、イフラースである

-神秘主義とは、方向性である

-神秘主義とは、甘受と服従である

-神秘主義とは、皆を助け、重荷とならないことである。つまり、皆の荷を負うこと、それに対して誰の重荷にもならないことである

これら様々な定義の共通する面をとたえるなら、神秘主義とは、信者の内面世界を整え、彼らを精神的に完成させ、しもべを賞賛されるべき道徳に至らせ、アッラーへと近づけ、それによってアッラーの智にも到達させる学問である、ということができるでしょう。

アクサライ・オランラル修行場のシャイフ・イブラヒム師の有名な「神秘主義の詩」は、最初から最後まで非常に素晴らしい神秘主義の定義で満ちています。その一部はこのようなものです。

「神秘主義の始点は、物質的な存在から離れ、自身で何かの存在を見ることのない、つまりその意志をアッラーに従わせるスーフィー（神秘主義者）となることである。その終点は、神性な美の全てを獲得して心の玉座の王となることである」

「神秘主義は、アッラーが人に負わせられた神性の信託であるクルアーンとそれがもたらす責任を、全身で担うことである。神秘主義は、神の許しを吉報として伝えるクルアーンの章句の顕現となることである」

「神秘主義は、万物を『アッラーの美名』によって用いることである。また神秘主義は、クルアーンの判断をその心に集約すること、すなわち生きたクルアーンとなることである」

これらの表現によると神秘主義は、心が物質的、精神的な汚れから清められ、良い徳と性質を獲得し、教えをその本質に適した形でイフラースと豊かさのうちに実践する為の努力です。従って神秘主義は、ただ理性では解決するのに十分ではない物質的、精神的な出来事の神秘的な成り立ち、英知、そして崇高な意味を包括するものの見方の成熟度に到達することです。心が、無限の魂の喜びに夢中になるという形で、その前にあるあたかも足枷のような我欲の妨げを取り除こうと努力することです。つまり神秘主義は、まず魂が閉じ込められている肉体の、我欲的な傾きを超越することです。それから全ての事象の本髄にある秘められた真実と、その真実の背後に現れる教訓と英知の位相に、賢明な手段によって触れることを可能にする一部の知識であり、精神的な状態であり、心の感覚であり、心にもたらされるものであり、その顕れなのです。

従って神秘主義は、預言者ムハンマドのしんせいな生き方に外面的にも内面的にも一体化し、深いその愛情と融合することです。なぜならそれは、預言者ムハンマドの外面、内面であり、外面的、内面的な顕現、すなわちその状態であるからです。だからこそ、預言者ムハンマドの魂から何かを得ること、魂という形でそのお方に交じることであるのです。

言い換えるなら神秘主義は、愛情と一体化した信仰、喜びによって実行されるイバーダ、そして行為の素晴らしさです。つまり神秘主義は、アーダムに魂が吹き込まれたことによって始まるこの崇高な取り分を、預言者ムハンマドの完全な顕示から、愛情に満ちた心に反射される恵みの露なのです。

アルトゥンオルック: 歴史を通して、神秘主義の分野に向けられている深い関心は、私たちが行った定義に従って実践された誠実な信仰と叡智による生き方によって実現化した者であると考えることはできますか？実際に、過去にそうであったように今日においても神秘主義は、-時に意図的な非難の為に軽視されることがあったとしても-日が経つにつれてより関心を持たれるイスラームの分野となっています。ムスリムの間から、あるいはイスラームの外部から「イスラームの精神的な次元」と呼ぶことのできるこの分野には深い関心が寄せられているのが見られます。この関心の理由にはどのようなものがあるでしょうか。

-神秘主義は、人を魂へと方向づけます。魂に、個人の能力に応じた精神的な充足への道を拓きます。その為に、人の我欲と魂を関連付けるあらゆる点に関わりを持ちます。つまりしもべは、精神的な旅において進んだ全ての距離、関わりを持っているあらゆる世界、体験する無数の状態、そしてついに諸世界の主であるアッラーを見出すこと、心で知ることができること、アッラーにしもべとして振る舞うことができることといった、無数の項目に関わりを持ちます。

このようになっている為に、社会のあらゆる階層に呼びかける神秘主義は、一方で経済的、社会的に安定している時代の無気力さ、気の緩みを防ぎ、精神的な活力を維持させ、また一方で侵略、占領や抑圧といったもので満ちた

時代、その騒乱と嫌気の中で苦しめられる心に崇高な窓を開き、豊かさを体現させる息をつかせ、傷ついた心への軟膏、疲れた脳、乾いた魂の為の命の水となってきました。それは一方で素晴らしい徳とイバーダにおいて極められた謙虚さやつつましいさを示唆し、うぬぼれ、思い上がり、自らへの過信からの保護を助け、また一方で罪の穴で窒息しているしもべたちに深い許し、寛容、慈悲、慈愛といった救命浮き輪を差し出したのです。実際、モンゴル軍の進攻の後、全アナトリアを包み込んだ騒乱が生み出した不穏さ、苦しみを抑え、癒すものとして、その時代には神秘主義の流れが力を得たこと、多くの偉大な神秘主義者が現れたことは歴史上の一つの事実なのです。

なぜなら神秘主義は、理性では十分ではない問題において、心をそこに介入させつつ、服従によって道を進み続けるからです。諸問題を、クルアーンやスンナに適った発見やひらめきと言った心における顕現によって明白にしていきます。これによって個人は、最期には充足に至ります。過ぎ去った世紀において有力なイスラーム学者であるムハンマド・ハミドゥッラーの次の表現は、非常に意味深く、教訓を含むものです。

「私の成長方法は合理的である。法的な学びや研究は私に、信頼できる形で定義できず、証明できないすべてのものを否定させる。確実に私は、礼拝、断食といったイスラームの義務を、神秘主義的な理由ではなく、法的な理由で実行しているのである。私はこう自問する。

『アッラーは私の主である。私の所有者である。アッラーが私に、これらを行うことを命じられたのである。だから私はそれをやらなければならない。これ以外に権利と義務は互いに結びついている。アッラーはこれらを、私が益

を得る為に命じられたのである。従って私はアッラーに感謝しなければならない』

西洋社会で、パリのような街で住むようになって以来、私は驚いて見ているのだが、キリスト教徒をイスラームに導くものは、法やイスラーム神学の学者たちの見解ではなく、イブニ・アラビーやメヴラーナのような神秘主義者なのである。この点において私自身が目にした事実もある。イスラームに関する事柄で説明が求められた時、私が与える論理的な根拠に基づいた答えは、質問した人を満足させていなかった。しかし神秘主義は、その説明の果実を遅れることなく実らせていた。この点で私は次第に影響力を失った。今私は信じているが、モンゴルのフレグの、焼きつくし破壊しつくす進攻の後、ガザン・ハンの時代にもあったように、今日少なくともヨーロッパとアフリカでイスラームの為に奉仕を行っているのは、剣でも論理でもなく、心である。すなわち神秘主義である。

この観察の後、神秘主義に関して書かれたいくつかの作品を読み始めた。これは私の心の目を開いた。預言者ムハンマドの時代の神秘主義や偉大なイスラーム神秘主義者の道は、言葉に関してこだわることでもなく、無意味なことに従事することでもない。人間とアッラーの間の最も短い道を歩くことであり、人が発展の為の道を求めることであると私は理解した。

人は自分に負わせられた任務の理由を求める。精神的な分野での物質的な説明は、私たちを目標から遠ざける。ただ、精神的な説明が、人を満足させるのである」[32]

32. M・アズィズ・ラフバーブ「イスラーム個人主義」訳：I・ハック・アクンp114-115　脚注8イスタンブール、1972この脚注はムハンマド・ハミドゥッラーが翻訳者に書いた1967年9月27日付の手紙の文章であ

この言葉が示しているように神秘主義は、重工業や科学の発展が頂点を極め、一方で社会的、経済的な憂鬱さが増し、また一方で人間を機械の歯車としているこの時代において大きな重要性を示しているのです。

る。（ムスタファ・カラ「テキストによる今日の神秘主義運動p542-543から」

神秘主義はなくてはならないものか？

神秘主義を不要であると見なすことは、イフラース、篤信、叡智、我欲を清めること、心を美しくすること、つまりアッラーに対しイフサーンの位階でしもべとして振る舞うことを不要であると見なすことです。

神秘主義はなくてはならないものか？

アルトゥンオルック：これらお話されたことからは、神秘主義のあり方がイスラームの布教においてどのような重要性を持っているかということが明らかに理解されます。神秘主義のあり方がイスラームの布教において、それと並行する人間の導きと成熟において非常に肯定的な結果を出していることの秘密とは何でしょうか。

－神秘主義の今日における重要性のまた別の側面は、それが人間の発展という点で追及しているメソッドとスタイルです。輝かしいイスラーム法の判断は、来世や現世での報償や懲罰によって人を方向づけるという目的を追求します。その内面的な判断ともいえる神秘主義はこれらに加えて、愛情、慈悲、親愛の情を用います。今日の人々は多くの場合、我欲に従って宗教から遠ざかること、そして大きな罪を犯したことによる精神的な憂鬱さの中にいます。このような人々に改善や救いの機会を提供することが、許しや寛容、慈悲の道においてより容易であり、より可能であることを誰も否定できません。この観点から現代は、神秘主義の真実と同様に、そのあり方やあり方に関わる基盤がより大きな重要性を持つ時代なのです。実際、許し、寛容、慈悲を伴ったものの見方をする人々は、この国でと同様、西洋社会においても精神的な勝利をより獲得し、成功していることが見られています。理性と我欲の圧力に苦しんでいる魂に、イスラームの神性の顕現をそよ風のように与える為には、彼らに罰を与える意識を持って怒りと共に

接するのではなく、慈悲と慈愛に満ちた態度を示すことは、いつでもより恵みのあるメソッドです。

なぜなら人は、本来の意図からどれほど離れていようと、「人」であるという尊厳により、やはり崇高な誉れの持ち主なのです。彼がその本髄にある輝石の崇高さを知らないまま、罪の沼にはまってしまうことは、ちょうと崇高なカーバの壁にある「黒い石」がそこから地面に落ちて土まみれになるようなものです。この状態に無関心なままであり、沸き立たない信者の心があることは全く考えられません。この状態であっても信者は、黒い石に敬意を示すことをやめないでしょう。それがそのような状態に陥ったことは、信者のまなざしにおいてその価値を損なうものではありません。逆に信者は、すぐにそれを拾い、涙の中で清め、敬意を示しつつ元の崇高な位置に戻す為に互いに競い合うでしょう。それが天国から出て来た者であることを考え、目の前にあるその崇高な価値に敬意を示すのです。しかし人間はアッラーが「魂を吹き込まれた」、すなわちアッラーの崇高な力の多くの櫛比を持ち、それによって被造物の中でも特に大切なものとなった存在です。従って彼の力や価値が彼が起こした罪によってどのような段階に落ちていたとしても、その本質における尊さは不滅なのです。

メヴラーナが語っているように、人間の魂は透明な水のようです。しかし悪事や罪によって汚れると、何も見えなくなります。この状態で精神的な真珠や真実の光を見る為には、その水を清めることが必要なのです。従って神秘主義の目的は、自己中心主義で我欲的な勘定を鍛錬し、個人、そして結果として社会を、平穏さと安らぎに到達させることです。だから教えの否定、多神崇拝、罪においてどれほど進んでいたとしても、決してどの人であれ、導きへの招きの対象から外されることはないのです。このこと

の、幸福の時代における無数の例の一つが、次のようなものです。

アッラーの使徒は、伯父の聖ハムザを殉死させ、彼自身をも深い悲しみに沈めたワフシーをイスラームへと招く為、サハーバの一人を派遣しました。ワフシーは預言者ムハンマドに応えて、

「ムハンマドよ！あなたは『正当な理由がない限り、アッラーが禁じられた殺生を犯すことなく、また姦婬しない者である。だが凡そそんなことをする者は、懲罰される。復活の日には懲罰は（罪に応じ）倍加され、その（地獄で）屈辱の中に永遠に住むであろう』（識別章、第25章、第68－69節）というアッラーの判断を示しているのに、どうして私をイスラームへと招くのか。私はこの悪行の全てを行った。どこに、私の為の救いの道があろうか」と言いました。

アッラーは、

قُلْ يَا عِبَادِيَ الَّذِينَ أَسْرَفُوا عَلَى أَنْفُسِهِمْ لاَ تَقْنَطُوا مِنْ رَحْمَةِ اللّٰهِ إِنَّ اللّٰهَ يَغْفِرُ الذُّنُوبَ جَمِيعًا إِنَّهُ هُوَ الْغَفُورُ الرَّحِيمُ

「自分の魂に背いて過ちを犯したわがしもべたちに言え、「それでもアッラーの慈悲に対して絶望してはならない」アッラーは、本当に凡ての罪を赦される。かれは寛容にして慈悲深くあられる」（集団章、第39章、第53節）という節を下されました。

ついにワフシーは章句に吉報に気持ちが楽になり、

「あなたの慈悲は何と大きいのでしょう、わが主よ！」と言い、純粋な悔悟を行い、友人たちと共にムスリムとなったのでした。

この、あるいは類似する事実から閃きを得た神秘主義のスタイルの最も重要な特性は、人間への見方です。神秘主義によるとにとは、アッラーの呼びかけを受ける存在であり、アッラーの特性の完全な顕現に至り、アッラーの代理人となる能力を持って創造されています。この観点から人は、この世界の瞳としてアッラーのある神秘を負っています。従って先にも述べたように、犯した罪の為にその力や価値がどれほど落ちていたとしても、その本髄における尊さは永遠なのです。ただし神秘主義がこれを延べる時、当然何の基準も持たない訳ではありません。それが行うことは要約するなら、

「罪人に対する寛容を、罪に対しては示さないこと、罪に対する敵意を、罪人に対しては向けないこと」なのです。

この面において神秘主義は今日、イスラームの布教において最も恵みのある要因を形成します。なぜなら人々は常に、アブドゥルカディル・ゲイラーニ、アジズ・マフムード・フダーイ、ユヌス・エムレ、バハエッディン・ナクシュベンディやメヴラーナのようなアッラーの友たちの愛の胸を慕っているからです。

アルトゥンオルック：あなたが示された知識により、神秘主義が人を未熟な人格から完成された人格へどのように到達させるかを示されました。この真実を基にすると、神秘主義の、ムスリムの生涯における位置とはどのようであるべきでしょうか？言い換えると、神秘主義なしではいけないのでしょうか？

－とても重要な質問をされました。

神秘主義は、広い精神的な行動とその内容により、信仰者の手において断念されることのないイスラームの顕現であり、豊かさと成熟差の恵みです。この観点から、それは

ムスリムが完全となることへの、そしてムスリムでない人の導きへの要因となり、彼らにイスラームを正しい形で反映させる為に、非常に大きな重要性を示しているのです。

なぜなら全ての書物からの知識は、実際においては種に似ているからです。種が土に埋められず、ただ納屋に置かれていれば、何年も経ったとしてもそれらはやはり種以外の何ものにもなれないように、本による知識もただ文章の行の中、あるいは本棚の中にとどまるのであれば、状態は同じです。これに対し、土に埋められた種は、その特性に応じて成長し、広がり、その一部は巨大なプラタナスとなります。ちょうどこのような心の土壌に植えられる知識の種も、心を精神的な庭園という状態にします。知識と叡智の真の果実である神秘と英知はその時、得られるのです。

この観点から、宗教上のファトワ—（イスラーム法学に基づいて出される見解、勧告）の側面は1つの建物の基本となる柱であり、篤信の側面はその柱の周囲の補完的な部分と、美や優美さの要素です。一方でこの二つの特性を一つにまとめる神秘主義は、また一方で善行や道徳の完全さに加え、人が、クルアーンと世界を説き明かす上でその責任をより広い英知で認識し、実行することを可能とさせます。従って神秘主義は、アッラーへの愛情とアッラーへの知という項目で、しもべたちの為にその心からミラージュへと開かれた精神的な窓という本質を持つのです。

その為神秘主義は、魂と心にとって不可欠なニーズです。だから全てのムスリムの生涯において多かれ少なかれ存在すべき真実です。もっと正確に言うなら、ある場所に人がいるのなら、そこでは神秘主義もあるべきなのです。

この真実を端に追いやり、「神秘主義なしではいけないのか」ということは、「イスラームの基本であるクルアーンの解釈、ハディース、カラーム（イスラーム神学）、イ

スラーム法といった学問なしではいけないのか」という種類の質問をすることです。神秘主義を不要であると見なすことは、イフラース、篤信、叡智、我欲を清めること、心を美しくすること、つまりアッラーに対しイフサーンの位階でしもべとして振る舞うことを不要であると見なすことです。なぜなら神秘主義によってこの真実が意図されるからです。だから、この真実を実践する人は、仮に神秘主義という名称を受け入れなかったとしても、私たちの見解では、彼も神秘主義を実践しているということなのです。なぜなら篤信、禁欲主義、イフサーン、そして神秘主義は、その真実とそこに含まれるものにより、本来は同じ意味と意図を示すものであり、互いに近い用語なのです。ネーミングは単に一つの行為です。これらすべての実行の中心に、人類すべての最も崇高な、完成された導き者としての唯一の模範、最も素晴らしい見本である預言者ムハンマドとその精神的な鍛練で育った、それぞれが崇高な人格を持ち、精神的な星であるサハーバたちが存在するのです。

また一方で心が信仰に至ること、安らぎ、平穏、幸福に至ることは、精神的な意味で到達している段階に結びついています。この為、しもべが精神的な鍛練を受けることが必要なのです。なぜなら心が知識や英知で満たされること、教えの崇高な真実を知ること、しもべが精神的に発展することは、ただいくつかのプロセスの結果、可能となるのです。

実際、人類への模範として遣わされた預言者たちすら、啓示を受ける前には準備期間を経ているのです。なぜなら心が、細やかな精神的顕示を受け取れる状態になる為には、その密度から離れ、細やかさを得ること、一定の状態に達することが必要であるからです。預言者ムハンマドはまだ預言者としての任務を与えられる前に、ヒラーの洞

窟でおこもり[33]をしていました。ムーサーはアッラーと対話する前に、シナイ山で40日間、一種の修行を行っていました。ユースフはエジプトの王となる前に、12年牢で過ごしました。そこで苦難、試練、労苦の全ての段階を体験しました。このようにして神聖な心は、アッラー以外の全ての信頼を寄せていたもの、関わりを持っていたものから遠ざかったのです。

預言者ムハンマドはミラージュの前に「夜の旅章」の神秘に至ることとなりました。胸が開かれ、その神聖な心が洗われました。知識や英知の精神性によって満たされました。なぜなら彼はミラージュにおいて奇妙で驚くべき出来事に直面し、人間の濃密さでは見ることのできない神の秘密や、様々な、秘められた光景を見ることになっていたからです。

アッラーの選ばれたしもべたちである預言者たちですら、心の美化を受けるのであれば、他の人々が心を清められることがどれだけ必要かはあきらかです。なぜなら重い心には、優美なものは近づかないのです。鼻が利かなくなった人はバラの、カーネーションの香りから何も得ることができません。曇ったガラスからははっきりした光景を見ることはできません。また一方で、合法なものにごくわずかでも禁じられたもの、疑わしいものが交ざることは、一瓶の泉の水に一滴の汚水が混ざることのようであり、その純粋さ、効力、豊かさが絶たれます。

だから心の精神的な細やかさを極め、アッラーの神秘と英知を受け取ることのできる状態にする為に、汚れから清

33. おこもり：ある場所に閉じこもり、崇拝行為で時間を過ごすこと。特にラマダーン月の最後の10日間にモスクに滞在し、自らをイバーダに捧げること。

められ、優美さに包まれることは不可欠なのです。なぜならアッラーは、

يَوْمَ لاَ يَنْفَعُ مَالٌ وَلاَ بَنُونَ إِلاَّ مَنْ أَتَى اللهَ بِقَلْبٍ سَلِيمٍ

「その日には、財宝も息子たちも、役立ちません。ただ汚れのない心を、アッラーに捧げる者だけは別ですが。」（詩人たち章、第26章、第88－89節）と仰せられています。

心が汚れのない状態になることは、ただ精神的な鍛錬によって純粋さを獲得することに結びついています。

なぜなら精神的な鍛錬を受ける前には、心は冷たい鉄のようです。それが望まれる形を取る為には、まず炎であぶられ、打たれることが必要です。ただしこの段階の後で、望まれた形を取ることができます。ちょうどこのように、この全てのプロセスを実行せずに、心の成熟は実現しません。心の成熟が実現された後、頭の目では見ることのできない、理性では把握できない真実の世界が心地よさとして感じられ、心で感じられます。この為、心の強さと能力を成熟させることが必要なのです。

この成熟さの重要性の解説の為、メヴラーナ・ジェラーレッディン・ルーミーはセルジューク朝の神学校で、外面的な知識の頂点にある教授である時に、その立場を「未熟であった」と、アッラーの知の顕示で満たされた世界が一冊の書物となり、そこに秘められた神秘が自身に明らかにされ始めた時の状態を「煮えた」と、アッラーへの愛情に溶け込んだ状態を「焼かれた」と表現しています。

これも、次のことを示しています。しもべがアッラーの位階において承認されることは、心の発展により結びついており、心が完全さに到達する為には、それ自体精神的な鍛錬を必要とするのです。この事実の無数の具体的な例

を、サハーバたちが示しています。彼らの多くは、娘を生きたまま土に埋めた、石のような存在であったのに、預言者ムハンマドの精神的な鍛錬のもと、それぞれが目や心が涙にぬれた慈悲と慈愛の記念碑という状態になりました。生命や財産をアッラーとその使徒の為に捧げたのです。

まとめとして私たちが言いたいことは；

神秘主義のないイスラームもあり得るかもしれません。しかしこれは、イフサーンの状態に達していないイスラームとなります。つまり精神的な鍛練である神秘主義から絶縁されているイスラームの生き方は、人を「アッラーを見ているかのような、しもべとしての在り方」には到達させないのです。

アルトゥンオルック：「アルトゥンオルック」誌の読者は、偉大な先人の心の友です。あなた方と心で出会えることを幸福と見なす人々です。彼らに神秘主義について最後に何と言いたいですか。

－ここまで語ってきたことに加え、アッラーの友である人たちが繰り返し主張してきた忠告、忠言の一部をお伝えしたいと思います。

神秘主義は、預言者ムハンマドの徳を身に着けることで成り立つ、一つの精神的な鍛錬です。イバーダにおける喜び、振る舞いにおける美徳という状態です。これも万物の創造主アッラーとその使徒へ、愛情と共に方向づけられることです。だから、心からの愛情による方向づけと友情の中心にアッラーとその使徒を定着させるアッラーの使徒たちは永遠に全ての人々の親友となったのです。

誠実な人々と共にいること、語り合うことは信者を誠実な人とします。なぜなら活力的な性格には、広まるという特性があるからです。魂に秩序と精神性を接種する誠実

な人々は、自我を清め、この世界の虚飾を放棄した人々です。彼らの心の空間は、アッラーによる豊かさで満たされています。彼らとの友情はしもべを、その手、言葉からあらゆる被造物が益を得るような状態にします。

愛情は二つの心の間に出現するラインです。人は心を捧げた者を賞賛し、驚嘆します。彼を模倣します。それに酔て信者は、あらゆる機会を通し、あらゆる分野における努力において「愛情」という薬を用いなければならないのです。

知識が人格の獲得によって叡智と変化することは、アッラーが心で知られることへの要因となります。この世界は英知と神秘の謎でできています。知ることとは眺めることではなく、英知とその秘密を把握することです。

心の密度から救われ、優美さに包まれることは、アッラーへの近しさの度合いによります。心が蘇った信者は、永遠に至ります。その逆に、我執に包まれた人は、その包まれ具合に応じて人間としての特性を失います。

イスラームの道徳の基盤は、アッラーに愛情とイフラースで向かうことです。この方向付けの唯一のしるしは、疑いもなく「奉仕」です。

愛情は、苦労を慈悲に変容させる、最も不思議な媒介です。愛情によって行われる奉仕は、どれほど重いものであろうと、容易さと安らぎの中で取り組まれます。同時に奉仕の価値はその実行の為に示された献身の大きさと、イバーダの喜びの中で実行されたかということに結びついています。心からの、真の奉仕は、心の成熟による素晴らしい作品です。この完全さに到達した心は、「アッラーの示される場所」となるのです。

アッラーがクルアーンで言及されている「慈悲あまねく慈愛深き」という美名は、その慈悲を示す美名です。信者においても慈悲と慈愛は本来の性質となるべきなのです。

慈悲が欠如し、労わることを知らない人は、最大の宝庫、あらゆる幸福の扉を開くカギを損なってしまったのです。労わることを知らない慈悲の欠如した人こそ、最も憐れまれるべきなのです。

迫害の理由は、愛情の欠如です。愛さない人は、いつでも野獣化する残酷な存在になり得ます。真実の愛情の果実は慈悲と慈愛です。地上において、慈悲と慈愛によって獲得されない心が存在することは考えられません。なぜなら太陽にとって暖めないことが不可能であるように、強い魂にとっても、被造物を憐れまないことは不可能なのです。

愛に満ちた心の中でも特別な位置を占めるハッラージュは石を投げられる際、

「アッラーよ！私より先に、私に石を投げる人々をお許しください！」と懇願し、大きな心の利他主義の模範を示したのです。

精神的な道での私たちのレベルを知りたいのであれば、状態や行動を分析することが必要となります。

「エゴ」と「主張」は精神的な道におけるガンです。イブリースはかつて高い位階の持ち主であったのに、この理由で悲しい結果に陥ったのです。

メヴラーナは次のように語っています。

「重要なのはバラの本質を持つことである。つまり、現世という庭園でとげを見て、それに傷つきとげを持つのではなく、そこに冬のような苦難が訪れたとしても、それら

を春の空気のなかで包むことのできる全世界の為のバラとなることである」

　アブドゥルハールク・グジュデヴァーニ師の魂の状態と振る舞いの素晴らしさに関する次の尊い忠言も、神秘主義の道における重要な心の基準です。

　「息子よ、あなたに遺言として遺そう。あらゆる状態において学問、徳、篤信に基づいていなさい。過去の人々の作品を読みなさい。預言者ムハンマドの家族、スンナや信者集団に従う人たちの道を行きなさい。イスラーム法とハディースを学び、無知な哲学者からは遠ざかりなさい。礼拝は必ず集団で行いなさい。心に名声への傾きがあるのであれば、イマームやムアッズィン（アザーンを唱える人）にはなってはいけない。名声からはできる限り遠ざかりなさい。名声には災いがある。地位に目をつけてはいけない。常に自分を低くしていなさい。責任が果たせないのであれば保証人にはなるな。他人の、あなたには関係のない物事に関わるな。罪深い支配者と共にいるな。あらゆる事柄において均衡を保ちなさい。羽目を外して美しい声を聴くことに夢中になってはいけない。魂がけがされ、最後には偽善が生まれる。しかし美しい声を否定はしてはいけない。その声で唱えられるアザーンやクルアーンは、魂を蘇らせる。少なく食べ、少なく話し、少なく眠りなさい。不注意さから、愚かであることから、ライオンから逃げるように逃げなさい。扇動が起こっている時には孤独を選びなさい。利益の為に宗教的な宣言や勧告を出す者から、宗教が軽視される要因となる者から、傲慢な金持ちから、無知な者たちから遠ざかっていなさい。合法なものを食べ、疑わしいものを避け、結婚する時には篤信に注意を払いなさい。そうでなければこの世界に固執し、その為に教えを損なうことになる。あまり笑ってはいけない。ましてや大笑いすることには注意しなさい。笑いすることは心を殺す。

しかし微笑を失ってもいけない。なぜなら微笑はサダカであるからである。皆を慈悲の目で見なさい。誰のことも蔑視してはいけない。自分の外見を過度に飾り立ててはいけない。上品で素朴な服を着なさい。言い争いをしてはいけない。誰からも、何も求めてはいけない。足るを知り、満足することで豊かになりなさい。真剣さを維持しなさい。あなたの為に努力した人、あなたを教えた人に対し忠義を持ちなさい。あなたの財産と命で彼らに奉仕しなさい。彼らの状態を自分も身に着けるようにしなさい。彼らを非難する不注意な者は安らぎを得ることはない。現世や、現世に固執する不注意な人に心を傾けるな。心は常に悲しく、体はしもべとしての奉仕の為に強く、目は涙にぬれ、心は柔らかくあるべきである。あなたの仕事は純粋であり、ドゥアーは懇願であり、身なりは謙虚であり、仲間は誠実であり、あなたの資産が外面的、内面的な知識であり、あなたの家は礼拝所であり、あなたの近しい人はアッラーの友であるように。

アーミーン！

参考文献

Abdurrahmân Câmî,
Nefahâtü'l-Üns, (sâdeleştiren, Abdülkadir Akçiçek), İstanbul, 1981.

Abdurrahman Güzel, Mustafa Tatçı,
Yunus Emre, Ankara, 1991.

Abdülkâdir-i Geylânî,
Fethu'r-Rabbânî, (tercüme, Yaman Arıkan), İstanbul, 1987.

Aclûnî, İsmâil bin Muhammed,
Keşfü'l-Hafâ, Beyrut.

Ahmed bin Hanbel,
Müsned, İstanbul, 1992.

Ahmed Cevdet Paşa,
Kısas-ı Enbiyâ ve Tevârîh-i Hulefâ, İstanbul, 1976.

Ali el-Müttakî,
Kenzü'l-Ummâl, Beyrut, 1985.

Ali Özek, Hayrettin Karaman, A. Turgut, M. Çağrıcı, İ. Kâfî Dönmez, S. Gümüş,
Kur'ân-ı Kerîm ve Türkçe Açıklamalı Meâli, Suudî Arabistan, 1992.

Azîzî,
es-Sirâcü'l-Münîr Şerhu Câmii's-Sağîr fî Hadîsi'l-Beşîri'n-Nezîr, Mısır,1894.

Belâzurî,
Ensâbu'l-Eşrâf, Mısır, 1959.

Buhârî, Ebû Abdillâh Muhammed bin İsmâil,
el-Câmiu's-Sahîh, İstanbul, 1992.

Dârimî, Ebû Muhammed Abdullah bin Abdirrahman,
Sünenü'd-Dârimî, İstanbul, 1992.

Deylemî, Ebû Şücâ' Şîrûye bin Şehridâr,
el-Firdevs bi-Me'sûri'l-Hitâb, Beyrut, 1986.

Ebû Dâvud, Süleyman bin Eş'as es-Sicistânî,
Sünenü Ebî Dâvud, İstanbul, 1992.

Ebû'l-Hasan en-Nedevî,
İslâm Önderleri Târihi, İstanbul, 1992.

Ferit Devellioğlu,
Osmanlıca-Türkçe Ansiklopedik Lûgat, Ankara, 1997.

Hâkim, Ebû Abdillâh Muhammed bin Abdillâh en-Neysâbûrî,
Müstedrek ale's-Sahîhayn, Beyrut, 1990.

Hasan Basri Çantay,
Kur'ân-ı Hakîm ve Meâl-i Kerîm, İstan-bul 1996.

İbn-i Abdilber, Ebû Ömer Yûsuf bin Abdullâh bin Muhammed,
el-İstîâb fî Mârifeti'l-Ashâb, Kâhire.

İbn-i Esîr,
el-Kâmil fi't-Târih, Beyrut, 1965.

İbn-i Hacer el-Askalânî, Şihâbüddîn Ahmed bin Ali,
Fethü'l-Bârî Şerhu Sahîhi'l-Buhârî, (Dâru'l-Fikr, Fuat Abdülbâkî neşri.)

İbn-i Hibbân, Ebû Hâtim el-Bustî,
Sahîhu İbn-i Hibbân, Beyrut, 1993.

İbn-i Hişâm,
es-Sîretü'n-Nebeviyye, Beyrut, 1992.

İbn-i Kesîr, İmâdüddin Ebû'l-Fidâ,
Tefsîru Kur'âni'l-Azîm, Beyrut, 1988.

İbn-i Mâce, Ebû Abdillâh Muhammed bin Yezid el-Kazvinî,
Sünenü İbn-i Mâce, İstanbul, 1992.

İbn-i Sa'd,
et-Tabakâtü'l-Kübrâ, Beyrut.

İbrâhim Cânan,
Hadis Ansiklopedisi, Kütüb-i Sitte, İstanbul.

İmâm Gazâlî,
Kimyâ-yı Saâdet, İstanbul, 1989.

İmâm Gazâlî,
İhyâu Ulûmiddîn, (tercüme, Ahmed Serdaroğlu), İstanbul, 1987.

İmâm Nevevî,
Hadislerle İslâm, (Dr. Mustafa el-Buğa, Muhyiddin Mistu; tercüme: Ahmed Âlim), İstanbul.

İmâm Nevevî,
Riyâzu's-Sâlihîn, (tercüme ve şerh: Yaşar Kandemir, İ. Lütfi Çakan, Raşit Küçük), İstanbul, 1998.

İsmâil Hakkı Bursevî,
Kenz-i Mahfî, İstanbul, 1727.

Mahmud Sâmi Ramazanoğlu,
Külliyât, Erkam Yayınları, İstanbul.

Mehmed Âkif Ersoy,
Safahat, (neşre hazırlayan, M. Ertuğ-rul Düzdağ), İstanbul, 1993.

Mehmed Doğan,
Büyük Türkçe Sözlük, İstanbul, 1994.

Mustafa Kara,
Metinleriyle Günümüz Tasavvuf Hare-ketleri, İstanbul, 2002.

Münâvî, Muhammed Abdürraûf,
Feyzü'l-Kadîr Şerhu'l-Câmii's-Sağîr, Beyrut, 1994.

Münzirî, Abdülazîm bin Abdülkavî,
et-Terğîb ve't-Terhîb, Kâhire, 1934.

Müslim, Ebû'l-Hüseyn bin Haccâc el-Kuşeyrî,
el-Câmiu's-Sahîh (tahkik, M. Fuad Abdülbâkî) İstanbul, 1992.

N. Fâzıl Kısakürek,
Bir Adam Yaratmak, İstanbul, 1998.

N. Fâzıl Kısakürek,
Çile, İstanbul, 1999.

Rudânî,
Büyük Hadis Külliyâtı, (Cem'u'l-Fevâid), İstanbul.

Sâdık Dânâ,
Altınoluk Sohbetleri, Erkam Yayınları, İstanbul.

Selçuk Eraydın,
Tasavvuf ve Tarikatler, İstanbul, 1994.

Suat Yıldırım,
Kur'ân-ı Hakîm ve Açıklamalı Meâli, İstanbul, 2001

Süyûtî, Ebû'l-Fazl Celâleddîn Abdurrahmân bin Ebû Bekr,
el-Câmiu's-Sağîr, Mısır, 1888.

Şefik Can,
Konularına Göre Açıklamalı Mesnevî Tercümesi, İstanbul, 1997.

Şehbenderzâde Ahmed Hilmi,
Târih-i İslâm, İstanbul, h. 1326.

Taberânî, el-Hâfız Ebû'l-Kâsım Süleyman bin Ahmed,
Mu'cemu'l-Kebîr, 1983.

Taberî, Ebû Câfer Muhammed bin Cerîr,
Câmiu'l-Beyân an Te'vîli Âyi'l-Kur'ân, Beyrut, 1995.

Tirmizî, Ebû İsâ, Muhammed bin İsâ,
Sünenü't-Tirmizî, İstanbul, 1992.

Vâkıdî,
Meğâzî, Mısır, 1948.

Yahya Kemal Beyatlı,
Kendi Gök Kubbemiz, İstanbul, 1999.

用語集

あ

アズラーイール：4大天使の一人であるアズラーイールは、イスラームの信条によるとその任務が生命を取り去ることである天使である。崇高なるアッラーの命令により、全てのしもべもしくは生命体はいつかは必ず死を迎える。この任務を行うのが死の天使、アズラーイールである。

アンサール：辞書的な意味では援助者、援助を行う人々という意味である。イスラーム用語としては、預言者ムハンマドがマッカからマディーナに移住した際、マッカから移住したイスラーム教徒を受け入れ、彼らを助けた人々を指す。

イバーダ：しもべがアッラーに対し賞賛や感謝と言った務めを、アッラーが命じられた形で行うこと。崇拝行為。

イフサーン：イスラーム神秘主義において、アッラーを見ているかのように生きるしもべとしての在り方とその心の状態。

イフラース：イフラースは言葉としては、精製すること、純粋にすること、区別すること、不純物を取り除くことという意味である。イフラースは、人がイバーダと服従によってアッラーの命令、望み、恵み以外の全てに対し閉じられることである。

イブリース: シャイターンの名称の一つ。聖アーダムが天国から出る要因となり、人を地獄へ落そうとする存在。クルアーンで伝えられているところによると、アッラーが天使たちに「私は土から人間を創造する。彼を創造し、私の魂を吹き込んだら、すぐに彼にサジュダしなさい」と言われた。イブリース以外の天使はすぐにサジュダをした。イブリースはサジュダを行う者と共にあることを避けた。

ウンマ: イスラーム社会の全体を示す概念である。イスラームの信仰の最も重要な源であるクルアーンにおいても、多く用いられている。「これは過ぎ去った民〔ウンマ〕のことである。かれらにはその稼いだことに対し、またあなたがたにもその稼いだことに対し（応報があろう）。かれらの行ったことに就いて、あなたがたが問われることはないのである」（雌牛章、第2章、第134節）

か

カダー: アッラーが前もって命じられ、定められた事象が、その時が来るとアッラーの意志や承認により実際に生じること、形成されることである。

カダル: アッラーが最初から最後まであらゆる事象の時間、特性、場所を前もってご存じであり、それを認められていること。カダルはアッラーの一定の基準に基づいて設けられた神の法則である。

キブラ: イスラーム教徒はどこにいたとしても、礼拝を行う際にそちらを向かなければいけない、サウジアラビアのマッカの町にあるカーバがある方向。

さ

ザカート： ザカートとは辞書的な意味では増えること、増やすこと、豊かさ、賞賛という意味になる。イスラーム用語としては、イスラームの5つの条件の一つであり、所有している財産、お金の40分の1を毎年、支援を必要とする人に差し出すことである。

サジュダ： サジュダは辞書的な意味では「従順、服従、謙虚さのうちに身をかがめること、地に伏すこと、顔を地につけること」という意味である。礼拝において、額、鼻、手、足、膝、そして足の指を地につけることであり、礼拝の義務の一つである。

サダカ： アッラーのご満悦の為に貧困者や困窮者に、見返りなく与えられるもの、行われる支援、あらゆる種類の善行。アッラーの道における支出である。

サハーバ： イスラーム用語として、預言者ムハンマドを目にし、彼と話し、友となり、彼を信じた信者を指す言葉。

ジブラーイール： ジブラーイールはアッラーの命令を天使たち、預言者たちに伝える啓示の天使である。4大天使の一人であり、最も崇高なものである。ジブラーイールはユダヤ教、キリスト教においても偉大な天使として啓典で名が出てくる3人の天使のうちの一人である。

しもべ： （アブドゥ）辞書的には「どれい」「下僕」という意味になるこの言葉は、イスラーム用語としてはアッラーに従い、イバーダ（崇拝行為）を行う人という意味で用いられる。イスラームは服従、無条件に従うこと、称えることをただ諸世界の主であるアッラーにのみ行われることであるとしており、それがしもべとしての奉仕（イバーダ・崇拝行為）という意味になること、人の創造の理由も

この形での「しもべとしての奉仕」であることを示している。

シャーバン月： ヒジュラ歴によると第8月であり、イスラームにおいてラジャブ月、ラマダーン月と共に3つの神聖な月の一つとされる。

ジャーヒリーヤ： アラビア社会の、イスラーム以前の時代に与えられた名称。ジャーヒリーヤという語は、クルアーンやハディースで、アラブ人のイスラーム以前の信仰、態度、振る舞いをイスラーム時代と区別する為に用いられている。

ズィクル： 概念としてズィクルは、アッラーを念じつつ口にすること、及び行うことが奨励されている、言葉と行動の実践を伴う行為の総称である。

1．言葉によるズィクル：アッラーをその美名と共に念じ、感謝し、賛美すること。クルアーンを読誦すること、クルアーンを聞くこと、ドゥアーをすること。言葉で行われるズィクルは、心のズィクルにつながるものであるべきである。

2．心によるズィクル：心によるズィクルは、体のズィクル、つまり言葉によるズィクルの基盤を構成するものであるべきである。行動によるズィクルとは、アッラーが行うことを求められているしもべとしての任務、すなわちイバーダ（崇拝行為）である。

ズフド： 禁欲主義。あらゆる世俗的なもの、自我の快楽を拒み、自らをイバーダに捧げること。

スンナ： 預言者ムハンマドの言葉、行動、認めておられていたこと。

た

タクビール：アッラーの偉大さ、崇高さを明らかにする為に唱えられる、アラビア語の「アッラーフ・アクバル（アッラーは偉大なり）」という言葉。

タスビーフ：アッラーの、何の不足も欠点もないという特性を讃え、賛美すること。アッラーに一連のイバーダを行い、「スブハーナッラー」と唱えること。この概念はクルアーンでは「天にあり地にある凡てのものは、アッラーを讃える。本当にかれは偉力ならびなく英明であられる。（鉄章、第57章第1節）という形で示されている。

ドゥアー：言葉の意味としては、呼びかけること、声をかけること、求めること、救いを求めることである。イスラームにおいてドゥアーは、アッラーの崇高さの前に、しもべがその無力さを訴え、愛情と敬意の中で恵みや救いを求めることを示す。

な

は

ハディース：宗教用語としてハディースは、預言者ムハンマドの言葉、行動を意味する。クルアーンでは預言者ムハンマドの人格が信者の模範として示されており、その道を行くことはアッラーの愛情と許しを得ることの前提条件とされている。これにより、ムスリムの中で信仰、道徳、イバーダといった項目でクルアーンに次ぐ第二の源として受け入れられている。

ハラーム：アッラーが確実に「行ってはいけない」と命じられたものである。ハラームはイスラームにおいて行う

こと、飲み食いすることが絶対に禁じられたものであり、アッラーがクルアーンで明らかにされている飲酒、賭博、窃盗、利子等の行為である。

ハラール：合法であるもの。宗教上の規律に反しない、宗教的に禁止されていないもののことである。宗教上合法とされているもの。アッラーと預言者ムハンマドがハラールであることを教えられたもしくは罪ではないことを教えられたということはその行為がハラールであることを示すが、その行為もしくはものが禁じられていたという証拠が存在しないものも、ハラールとされる。

ヒジュラ：預言者ムハンマドやその他のイスラーム教徒が弾圧を避ける為に622年にマッカからマディーナへ行った移住。

フィルアウン：ファラオ。古代エジプトの支配者に与えられた名称。エジプトを統治していた26の王朝が存在する。それぞれの王朝において様々なファラオが何世紀にもわたり統治を行った。その多くが自らを崇拝させていた。預言者ムーサーの時代のファラオの名称はクルアーンの74か所で登場している。

ベラートの夜：許しという意味になるベラートの夜は、イスラームにおいて神聖であると見なされる夜の一つである。シャーバン月の14日から15日にかけての夜が、ベラートの夜である。

ま

ミラージュ：単語としての意味は「階段、はしご」「昇天」「昇る場所」「最上の場」であるミラージュは、アッラーの命令によって預言者ムハンマドがその魂と肉体と共に、ブラークと呼ばれる乗り物に乗ってジブラーイール

と共にマッカのハラム・モスクからエルサレムのアルアクサ・モスクまで行った夜の旅のことである。

ムアッズィン：モスクでアザーンを唱え、礼拝において賛美のドゥアーを読み上げる人。ムアッズィンという地位は預言者ムハンマドの時代から存在し、最初のムアッズィはビラール・ハベシーである。

や

ら

ラガイブ：ラガイブとは、需要のあるもの、求められたもの、要求されたものという意味である。ラジャブ月の最初の金曜日の夜がラガイブの夜である。

ラジャブ月：ラジャブとは、高めること、敬意という意味になる。ラジャブ月はヒジュラ歴によると第7月であり、3つの聖なる月の始まりの月である。

ラマダーン月：ラマダーン月はヒジュラ歴によると第9番目の月であり、イスラームにおいて預言者ムハンマドにクルアーンが啓示され始めた、また預言者ムハンマドが断食を始めた月である。この月に断食を行うことはイスラームの5つの条件の1つである。

わ

しもべ：（アブドゥ）辞書的には「どれい」「下僕」という意味になるこの言葉は、イスラーム用語としてはアッラーに従い、イバーダ（崇拝行為）を行う人という意味で用いられる。イスラームは服従、無条件に従うこと、称え

ることをただ諸世界の主であるアッラーにのみ行われることであるとしており、それがしもべとしての奉仕（イバーダ・崇拝行為）という意味になること、人の創造の理由もこの形での「しもべとしての奉仕」であることを示している。

ハディース: 宗教用語としてハディースは、預言者ムハンマドの言葉、行動を意味する。クルアーンでは預言者ムハンマドの人格が信者の模範として示されており、その道を行くことはアッラーの愛情と許しを得ることの前提条件とされている。これにより、ムスリムの中で信仰、道徳、イバーダといった項目でクルアーンに次ぐ第二の源として受け入れられている。

アズラーイール: 4大天使の一人であるアズラーイールは、イスラームの信条によるとその任務が生命を取り去ることである天使である。崇高なるアッラーの命令により、全てのしもべもしくは生命体はいつかは必ず死を迎える。この任務を行うのが死の天使、アズラーイールである。

ズィクル: 概念としてズィクルは、アッラーを念じつつ口にすること、及び行うことが奨励されている、言葉と行動の実践を伴う行為の総称である。

目次

教育における 101 のステップ

著者: オスマン・ヌーリ・トプバシュ
翻訳者: ヌールッラー・サット
チェッカー: サット・佐紀
グラフィックデザイン: ラーシム・シャーキルオール
ISBN: 978-605-302-425-5

住所: Ikitelli Organize Sanayi Bölgesi Mah. Atatürk Bulvarı, Haseyad
1. Kısım No: 60/3-C Başakşehir, Istanbul, Turkey
電話番号: (+90-212) 671-0700 pbx ファックス: (+90-212) 671-0748
ホームページ: info@islamicpublishing.org ウェブサイト: www.islamicpublishing.org